

恋愛感情ゼロの幼馴染 と召喚獣

黒ハム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神白崇彰と黒田由梨乃は生まれた時からの幼馴染である。

家は隣同士で二人は、保育園、小学校、中学校を共に過ごし、卒業する。そして、高校も文月学園に二人そろって入学する。しかし、この二人の間には存在してもいいはずの感情がなかった。

これは、幼馴染という距離感を間違えすぎている二人が吉井明久を筆頭とするバカたちとの交流を通し、成長(?)していく(?)はずの物語……

目次

プロローグ

1

試験召喚戦争編

Fクラスと書いて物置きと読む

7

観察処分者と書いてオチ要員と読む

23

屋上と書いて作戦会議場所と読む

35

Dクラス戦と書いて前哨戦と読む

46

船越先生と書いて明久の恋人と読む

60

姫路の弁当と書いて生物兵器と読む

77

Bクラス戦と書いて心理戦と読む

① 100

Bクラス戦と書いて心理戦と読む

② 114

Bクラス戦と書いて心理戦と読む

③ 126

怪我人と書いて保健室行きと読む

146

大化の改新と書いて切り札と読む

156

Aクラス戦と書いて命懸けと読む ①

清涼祭編

清涼祭準備と書いてサボりと読む

Aクラス戦と書いて命懸けと読む ②

261

Fクラスと書いて問題点の宝庫と読む

Aクラス戦と書いて命懸けと読む ③

281

妖怪ババアと書いて学園長と読む

Aクラス戦と書いて命懸けと読む 終

299

清涼祭開始と書いて悲劇再びと読む

一人と書いて心細いと読む |

315

一回戦と書いて圧勝と読む |

228 お出掛けと書いてデートと読む

248 ラブレターと書いて事件の火種と読む

読む | 342

敵情視察と書いてメイド喫茶と読む

悪党成敗と書いてアキちゃん出陣と読

む

379

四回戦と書いて必要犠牲と読む

400

人質と書いて暴走と読む

419

清涼祭の夜と書いて想う心と読む

440

清涼祭二日目と書いて責任者代理と読

む

455

決勝戦と書いて成敗と読む

466

終幕と書いて奔走と読む

487

打ち上げと書いて酒は強いと読む

間話編

デートと書いてただでは終わらないと

読む

①

514

デートと書いてただでは終わらないと

読む

②

528

デートと書いてただでは終わらないと

読む

③

540

プロローグ

一つの質問をここに提示しよう。

『幼馴染は必ず恋愛感情が存在するか否か』

この質問の答えは至ってシンプル。

『ケースバイケースである』

当然だ。世の中の全幼馴染が結びつくとは限らない。だから、この答えが的確であろう。

では、彼と彼女の場合はどうなのか。答えは……今は不明だ。

これは、彼と彼女の物語……真実の愛を見つける（？）物語……。

☆☆☆

四月。春は出会いと別れの季節とも言うらしい。

オレたちがこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。去年、三年生だった先輩は卒業をし、今年には下級生が入学してくる。そんな時期だ。

桜舞い散る校門へと続く坂道。舞い散る花びらの美しさに心を惹かれながらオレは坂道を一步一步踏みしめて――

「ねえ、タカ。回想シーンのところ悪いのですけど」

――いたところで隣を歩く彼女に遮られた。

「……何だユリ。せつかく人がこの景色の美しさに、心を惹かれていたところなのに……」

「それは、どっちでもいいですよ。そんなことより、あれを見てください」

そう言つてユリが指さす方を見てみる。校門？いや、彼女が指しているのは違う。あれは……

「おはよう。黒~~田~~に神白」

「おはようございます。西村先生」

「……はあ。何故こんな美しい景色に、アンタみたいなむき苦しいおっさんが立つてるんですか？そこはせめて、この景色に合う女性が立つべきでしょうが。ということ、チエンジを所望します」

「ふむふむ。それって、私みたいなの？」

「お前は論外だ」

「ふーん。そんなこと言っちゃうのですかー」

そう言つて頬を思い切り引つ張つてくるユリ。痛いからやめてほしい。

「……神白。何故お前は挨拶すらまともにできないんだ？」

「……おはようございます。鉄人」

「……お前。堂々と鉄人と言つたな？」

「はい、言いました」

この目の前に立つむき苦しい男。この男はこの文月学園の生活指導部の鬼である。本名、西村宗一であだ名は鉄人である。余談だが、この男はオレとユリの去年の担任でもある。

「……まあいい。二人とも受け取れ」

そうやってオレとユリに差し出してくる茶封筒。なるほど、ここに自分の所属するクラスの書かれた紙が入っているのか。

「本当に面倒な方法を取っていますね」

「仕方ないだろう。ウチは世界的にも注目されている最先端の試験システムを導入した試験校だからな。変わったやり方だろうが仕方ない」

「あーそうですか」

そうやって封筒の口を適当に破く。隣でわざわざハサミをカバンから取り出そうとしているユリとは大違いだ。というかお前、学校にハサミを持ってきていたんだな。

そして、折り畳まれた紙にはこう書かれていた。

『かみしろたかあき神白崇彰……Fクラス』

この学園ではクラスをAからFの六つに分けている。そして、クラス分けのやり方だが、春休みに行われる振り分け試験。そこでの点数順にAクラス、Bクラス……とクラス五十人ずつ割り振られる。まあ、二年生は一学年三百人だからな。三百人って今思うと多い気がするな。

「全く……最後の教科で保健室に行つて途中退席しなければ上のクラスに上がれただろ

うに……」

「まさか、タカ。本当にやったのですか……?」

「ふあくあ。まあ、どうせアイツらがFクラスに来るからな。楽しんで行こうぜ」

「やれやれ、タカはバカですね」

「そんなことを言うならユリ。お前のも開けてみたら?」

「はあ……。まあ、タカより上のクラスというのは分かっていますが……つてあれ?」

ハサミを使い、ご丁寧に開けた茶封筒。その中に折り畳まれていた紙には……

『黒^{くろやなぎ}由梨^{ゆり}乃……Fクラス』

「……西村先生。同姓同名の別の人のを間違ってしまったようです。私のをもらえますか?」

「……この学校にお前の同姓同名の別人はいない」

「……はい?」

現実を受け入れられないユリ。やれやれ、これだからオレの幼馴染は……

「神白。黒^{くろ}を連れて行ってくれ」

「へーい。ほら、行くぞ」

そう言つて首根っこを掴み、ズルズルと引きずつていく。

「ま、待つてください先生！再審を！再審を要求します！」

「はいはい。再審しても結果は変わらないからな」

「そ、そんなことないはずです！はっ！もはや、これは誰かの陰謀なので……」

「さあ、楽しんでいこうぜー」

そのまま下駄箱で靴を履き替え、自分の教室に向かって歩いていく。

さあ、どんな生活が待っているのだろうか。実に楽しみだ。

試験召喚戦争編

Fクラスと書いて物置きと読む

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を一つあげなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけありませんでしたね。

神白崇彰の答え

『問題点……知識のないバカに鍋を作らせた点。

合金の例……ジュラルミン（ユリが凄く強い合金とか書いても無視して下さい）』

教師のコメント

製作者に対する問題点ではなく、『マグネシウム』を用いたことによる問題点を書いてください。後、○の内容は流石にあり得ないと思いますが……

黒☒由梨乃の答え

『問題点……マグネシウムの鍋が溶けちゃったこと。

合金の例……凄く強い合金（↑熱に凄く強い！）』

教師のコメント

マグネシウムは融点が600度以上ですから、調理中には溶けるより別の問題が発生しますね。後、神白君には、敬服しました……。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

☆☆☆

ユリを引きずって三階。二年F組と書かれたプレートのある教室の前にオレたちは立っていた。

「なあ、ユリ。ここは物置きじゃないのか？」

「奇遇ですねタカ。私もここは教室ではないと思いますよ」

ふむ。これは、見かけによらず中は綺麗でしたってオチかな。そうだな。そうに違いない。

そう思い扉を開けるとそこには……！

かび臭い教室。

薄く汚れた黒板。

ひび割れた窓。

朽ち果てた畳。

今にも崩れそうな教卓などなど、挙げたらキリがない。そして、

「崇彰に黒☒か。まあ、予想通りの面子か」

教壇(?)に立つ赤ゴリラ。やれやれ、動物園の職員は何をやってるんだ?こんなゴリラを野放しにしておくなんて。

「おはようございます。坂本さん」

「うーっす、雄二」

「おはよう二人とも」

にしてもパツとしないなあ……

「そーいや雄二。お前がこのクラスの代表か？」

「そうだな」

「凄いですね」

「まあそれでもねえよ。でも、これでお前らを含めた全員が俺の兵隊だな」

この男が指揮官か……まあいいか。

「んじや、オレは寝る。席は？」

「ああ、自由席だ」

「……あつそ」

というか、Fクラスというのは席すら決まってるのかよ。

そう思いながらオレは横になり、寝ることにした。



「なあ、黒☒。一ついいか」

「何かな坂本さん」

「……お前ら、それで付き合っていないんだよな？」

坂本さんがおかしな質問を私にぶつけてきます。

「当然じゃないですか。私がタカと付き合うなんてありえませんよ」

全く……何故みんな揃いもそろってそういう質問ばかりするのでしょうか。不思議で仕方がないですね。

「その割には膝枕をして耳かきまで……お前ら夫婦かよ」

「いえ、幼馴染です。幼馴染なら、当然でしょう」

「……なわけあるかっての」

「それにしても耳かきのしがいがありませんね」

そう言えば一昨日の夜にしてあげたばかりでした。それは綺麗なはずですね。

キーンコーンカーンコーン

気付けばチャイムがなりました。ということとは、朝のHRの時間ですね。その割には担任の先生も来てないですし、席が二つ分空いているので、二名程遅れている人もいます。先生の代わりに坂本さんが教壇の上に立ってクラスの人たちを見下ろしています。彼は何を考えているのでしょうか。

ガラツ

「すみません、ちよつと遅れちゃいましたっ♪」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

入って来た男子生徒を罵倒する坂本さん。

「聞こえないのか？ ああ？」

はあ。何故こんなおバカさんばかりなのでしょう。タカの所為ではぐらかされまし

だが、私は自分がFクラス所属なのが納得いきません。十問に一間は解けた自信がありますのに……。

「……雄二、何やってんの？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

それにしても、座布団ぐらいはまともな奴が欲しかったですね。しみじみ思いますよ……そもそも今の時代で椅子ではなく、座布団支給の時点で疑問を感じますが。

「席に着いてもらえますか？HRを始めますので」

「はい、分かりました」

「うーっす」

気付けば担任の先生が教壇の上に……よかった。西村先生のようなちよつと見た目が怖い先生じゃなくてよかったです。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

先生は黒板に名前を書こうとしてやめました。どうやらチョークがないようです。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出て下さい」
うーん……一年生の時から噂には聞いていましたけど、この設備は酷すぎですね。机と椅子すらなく、代わりに卓袱台と座布団ってあたり、酷さを感じます。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「窓が割れていて風が寒いですけど」

「わかりました。後でビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

……不備を申し出て返されちゃいますね。ふむ……私のような美少女が申し出れば通るのではないのでしょうか？

「……むにゃ……それはない……」

私の膝の上に頭を乗せている男が何か寝言で言いましたね。思い切り頬を抓って差し上げます。寝言だからって何でも言っただけ良いわけではありませんよ？

「では、自己紹介でも始めましょうか」

そう言っただけ指差された男子生徒はその場で立ち上がり、自己紹介をする。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

あ、木下さんも居たんだ。独特の言葉遣いと男子の中でも小柄な体。入学当初は彼を女子と間違えていたのも仕方がないと思えてしまう。

「……………土屋康太」

相変わらず土屋さんは口数が少ないなあ。小柄だけど運動神経はある程度いいって、タカが言っていましたね。

それはそうと、見渡す限り私以外の女子がいませんね。もしかして私って、このFクラスというむさ苦しい教室に咲く一輪の花って奴ですか？

「島田美波です。海外育ちで、日本語での会話は出来るけど読み書きが苦手です」

おっと、これまた知り合いですね。半分予想通りと言いますか、彼女がいるという事はまあ、想像通りですね。だって、ドイツ育ちで、まだ日本語にそこまで慣れておらず英語もイマイチだったんですからね。

「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

特定の相手に対し、恐ろしく危険な趣味を持っていますね。まあ、私に被害はなさそうなのでいいですが。

「——コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね♪」

『ダアアーリーーン!!』

野太い声の大合唱ですね。私はもちろん叫んでいません。ただ、タカを起こさないよ

うそつと、耳を手で塞いであげたくらいです。私って、もしかしなくともできる女つてやつですかね？

「——失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願い致します」

席に着く吉井さん。まあ、彼も去年同じクラスだったわけですが……多くないですか？ 去年のクラスの人たち……何だか関わりが多かった人たちが集まっている……つと。気付けば私の番のようですね。

「私は黒田由梨乃と言います。勉強はちよつと苦手ですが頑張つていきたいです」

……何故でしょう。先ほどまで興味なさそうに聞いていた人たちも、私の自己紹介は真面目に聞いてくれていた気がします。

「あ、この寝ているのは神白崇彰です。私の生まれながらの幼馴染ですね。皆さん。私たち共々お願い致しますね」

このままでは、タカが自己紹介をスルーされてしまいますね。さりげなく気付ける私って偉いかもしれません。

ちなみに、タカとは生まれながらの幼馴染と言っていますが、彼とは生まれた病院どころか病室も一緒に生まれた日も一緒です。さすがに、生まれた時間に数時間ほどのズレはありますが。一応、私の方が早く生まれたそうなので私の方がお姉さんですね。その後……というか、私たちが生まれる前から私の両親とタカの両親はある程度仲がよ

かったそうなので、私たち自身もずっと一緒に育ってきました。だから、タカのことならある程度分かります。どうですか、凄いですよね。

ガラツ

そんなことを考えていると教室の扉が開きます。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『え?』

教室全体から疑問の声が上がります。入ってきたのは一人の少女。誰でしたっけ?
彼女。

「丁度よかったです。今自己紹介しているところなので姫路さんをお願いします」

「は、はい!あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

姫路さん……ああ、彼女ですか。聞いたことありますね。でも、何でこのクラスのいるのでしょうか?

「はいっ!質問です!」

男子生徒の一人が右手を高くあげる。

「な、なんですか?」

ふむ。質問の内容か……スリーサイズでも聞くのでしょうか。でも、それはセクハラですよ？まあ、私のスリーサイズはタカが完全に把握していると思いますが……。

「なんでここにいますか？」

えーっと、私の記憶が正しければ、姫路瑞希さんは可憐な容姿は言うまでもなく人目を引きませんが、何より成績が凄かったはずです。入学して最初のテストで学年二位を記録していて、その後も上位一桁以内に常に名を残すほどですね。タカも確か常に学年一桁を記録していましたね。おかしいです。何故一緒に育ったはずなのにここまで差が生まれてしまったのか。

そっか、それなら疑問があっても不思議ではないですね。Aクラスにいると誰もが思っていたはずの彼女が最下層のFクラスにいますからね。タカは……ああ、アレですね。ほんのちよつと不真面目な部分といえますか、ちよつと性格がアレなんでFクラスにいても不思議には思われないですね。やれやれ、頭脳で私に勝てても性格面では彼に負ける気がしませんね。

「そ、その……振り分け試験中に高熱を出してしまいました……」

かわいそうに……途中退席で0点扱いだなんて……。まあ、ワザと途中退席した男が私の膝の上で気持ちよさそうに寝ています。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでこのクラスに……』

『ああ、化学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったって聞いて心配で実力が出しきれなくてな』

『黙れ一人っ子』

『前の晩彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

おっと、このクラスは想像以上にダメかもしれない。

「で、ではっ、一年間よろしくお願ひしますっ！」

彼女は数少ない女子だ。仲良くしたいなあ……。

その後も淡々と自己紹介は進んでいった。途中ちよつとうるさくしていた吉井さんや坂本さんを叱ろうとして、先生が教卓を叩いたところ一瞬で塵と化しました。……大丈夫かなあ……色々と。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人です」

「了解」

気付けば自己紹介も最後の一人である坂本さんの番まで回っていました。

そして、ゆつくりと教壇に向かっています。その姿に吉井さんやタカといる時のようなふざけた雰囲気はない。そのまま、教壇に立って、こちらに振り向きません。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

普段であれば、ここでふざけた発言をする者が居てもおかしくありません（例えばタカとか）。しかし、彼の姿を纏う雰囲気を感じ口を開く者は誰もいなかった……。

「さて、皆に一つ問いたい」

私たちFクラスの代表さんは、ゆつくりと全員の間を見つめるように告げます。

間の取り方が上手いせいでしょうか。全員の視線は坂本さんに誘導されました。

みんなの様子を坂本さんは確認し、そのうえで、教室内の各所に視線を散らします。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

私も彼につられるようにしてそれらの備品を眺めます。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが——」

一呼吸おいて、静かに告げます。

「——不満はないか？」

『大ありじゃあつ!!』

二年F組の魂の叫び。この叫びは耳を塞いであげたタカにも届いたでしょう。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」
『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからってあんまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？』

そうです。最低限の設備を要求します。

「みんなの意見はもつともだ。そこでこれは代表としての提案なのだ——」
野性味満点の八重歯を私たちに見せて告げます。

「——FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

こうして、私たちの代表は戦争の引き金をひいたのでした。

観察処分者と書いて才子要員と読む

バカテスト 国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい

『(1) 得意な事でも失敗してしまうこと』

『(2) 悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『(1) 弘法も筆の誤り』

『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

神白崇彰の答え

『(1) 竜馬の躓き』

『(2) Misfortunes never come singly』

教師のコメント

(1) は文句なしの正解です。寧ろこんなことわざを知っていることに驚きです。
(2) は訳すと『不幸は単独では決してやってこない』ですか。意味合いは確かにあつていますが、このテストが国語と言う点から？にさせて貰いますね。

黒☒由梨乃の答え

『(1) 豚も木から落ちる』

『(2) 踏んだり殴ったり』

教師のコメント

惜しいですが違います。ことわざをしつかりと覚えましょう。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君は鬼ですか。



坂本さんによる、Aクラスへの宣戦布告。これにはFクラスの皆さんも……

『勝てるわけがない』

『これ以上設備が落とされるのは嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

『そうだ。黒☒さんが居れば何もいらぬ』

否定の言葉がでてきます。まあ、当然でしょう。というか、最後の一人。ごめんなさい。気持ち悪いので出直してきて下さい。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

反対意見が多い中坂本さんは宣言します。その表情には確固たる自信が溢れています。

ここ文月学園に点数の上限がないテストが採用されてから数年が経っています。

このテストには一時間という時間制限と無制限の問題数が用意されています。そのため、テストの点数に上限はない。本人の実力次第で点数はいくらでも取ることができます。

そして、この学園には科学とオカルトと偶然によつて完成された『試験召喚システム』というものがあります。これはテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を喚び出して戦うことのできるシステムです。教師の立会いの下使えるシステムです。

この召喚獣を用いてクラス単位で戦うシステム。それが『試召戦争』です。ここで重要となる点数ですが、AクラスとFクラスの点数は桁が違います。いや、文字通り桁が本当に違うんですよ。だから、Aクラスレベルの生徒一人に対してはFクラスレベルの

生徒が三人でも勝てるかどうかです。いえ、相手次第では四、五人でも厳しいかもしれません。

ですから、Aクラスに試召戦争で勝とうと思つたらFクラスは250人ぐらい必要なんです。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃つてゐる」

勝つことのできる要素……ですか？ 私たち学年最下位のクラスですよ？

「なら、今から説明してやる」

でも、坂本さんがこう断言する時は何か裏がある……そうタカが言つてましたね。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………!! (ブンブン)」

「は、はわっ」

必死になつて顔と手を左右に振つて否定のポーズを取る土屋さん。堂々と恥も外聞もなく女子のスカートの中を覗く人間がここに存在しています。……まあ、私たちがから見たら軽蔑以外何もないですけど。

「土屋康太、こいつがあゝの有名な、寡黙^{ムツ}なる性識^{リーニ}者だ」

「……………!! (ブンブン)」

土屋さんの名前はそこまで有名ではないです。ただ、ムッツリーニという名前はこの学年なら私でも知っているぐらい有名。男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以って挙げられています。

『ムッツリーニ……だと?』

『馬鹿な、あんなヤツが……?』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』

『ああ。これもそのままにムッツリの名に恥じない姿だ』

さすがは土屋さん。自分の下心丸出し行動を未だ隠そうとしていますね。

「??」

姫路さんの頭には疑問符が浮かんでいるみたいですね。優しく教えて上げた方がいいかな……?」

「姫路と崇彰は説明するまでもない。皆もその力は良く知っているはずだ。うちの二大主戦力だ。期待している」

二大主戦力……いいなあ。そういう評価をしてもらって。羨ましい。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいる』

『彼女ならAクラスにも負けていない』

『ああ。姫路さんさえいれば何もいらぬ』

うん。完全にタカが存在が消えましたね。ざまあみろです。

「木下秀吉だっている」

木下さんは学力では名前を聞かないです。でもまあ、他のことで有名だったりしますね。演劇部のホープだとか双子のお姉さんのこととか。

『おお……！』

『アイツ確か、木下優子の……』

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうだな』

『あいつって、確か小学校の頃は神童とか呼ばれてなかったか？』

『もしや、振り分け試験の時は姫路さんや神白のように体調不良だったのか』

『うちのクラスにはAクラスレベルの実力者が三人も……！』

気付けばこのクラスの士気はかなり上がっていました。

「それに吉井明久だっている」

そして、士気は一気に下がりました。

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！」

『誰だ？』

『さあ？』

「ホラ！せっかく上がって来た士気なのに！僕は雄二や崇彰たちと違って普通の人間だから普通の扱いを——って、なんで僕を睨むのさ！明らかに士気が下がったの僕のせいじゃないでしょ！」

いや、吉井さんがオチ要員だから悪いと思う。

「知らねえなら教えてやる。こいつの肩書きは文月学園初の《観察処分者》だ」

一瞬静寂に包まれる教室。

『……それってバカの代名詞じゃねえのか？』

誰かが致命的なことを口にします。

「その通り、バカの代名詞だ」

「肯定するなバカ雄二！」

《観察処分者》

成績不良、学習意欲に欠け、学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分の事です。ある意味タカにも当てはまりそうですが彼の成績はAクラストップレベルなので、観察処分者にはなり得ません。

仕事というのは教師の雑用係で、主に力仕事関係の雑用を行います。普通の召喚獣は物に触れる事は出来ません。しかし、観察処分者の召喚獣は特例として物に触れる権限

のある特別製だそうです。

ただ、この特別製の召喚獣。召喚獣の負担の一部が操る本人にフィードバックするそうです。

私たちの召喚獣は痛みや疲れがフィードバックしませんが、吉井さんのは違います。

まあ、召喚獣は教師の立会いのいないところでは使えませんので、私利私欲の為には使えない上に疲労や痛みを感じる。罰にはふさわしいですね。

『おいおい。《観察処分者》って事は、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいって事だろ?』

『だよな、それならおいそれと召喚出来ないヤツが一人いるってことだよな』

『気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ』

『雄二、そこは僕をフォロウする台詞を言うべきところだよな?』

『とにかくくだ。俺たちの力の証明として、まずDクラスを征服してみようと思う』

大胆にスルーされた吉井さん。まあ、彼ですから仕方ありませんね。

『皆、この境遇は大いに不満だろう?』

『当然だ!』

『ならば全員筆ペンを執れ! 出陣の準備だ!』

『おおーっ!!』

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない! Aクラスのシステムデスクだ!」

『うおおーっ!!』

「お、おー……」

クラスが一丸となって何かをなそうとする。青春ってやつですね。まあ、私の幼馴染は寝ているわけですが。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者へとなって貰う。無事大役を果たせ!」

坂本さんのありがたいお言葉。しかし、吉井さんは……

「下位勢力の宣戦布告の使者って大抵酷い目に遭うよね?」

すんなりと引き受けてくれません。

「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加える事はない。騙されたと思って逝ってみろ」

「本当に?」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

力強く断言する坂本さん。

「大丈夫だ。俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

そんな坂本さんを見て、

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

快く吉井さんは引き受けてくれました。

「ああ、頼んだぞ」

坂本さんがそう言うのと吉井さんはどこか誇らしげな表情のまま、Fクラスのクラスの人たちの歓声と拍手に送りだされ、教室を出て行きました。

「さて、明久がボロボロで帰って来たら屋上で作戦会議をするぞ。メンバーはムツリーニと秀吉と島田に姫路、もちろん崇彰に黒箱もだ。分かったな」

というか、吉井さんがボロボロで帰って来るのは確定なんですね。

「というわけで、黒箱。崇彰を起こしてくれ」

「分かりました。ほら、タカ起きて下さい」

ゆさゆさと彼を揺ると、

「……起きた」

一言だけ言って起き上がりました。なんて可愛げのない幼馴染でしょう。

「崇彰。状況説明必要か？」

「ん？あー、死傷戦争やろうぜー！明久お前Dクラスに宣戦布告に逝ってこーいって感じか？」

「何かイントネーションが違う気がするがその通りだ。これから、屋上で作戦会議だ」

「りよーかい。ふああ〜」

「……自棄に眠そうだな。昨日何かあったのか？」

「あー彼女とデートしてた」

「彼女って……黒×とか？」

「違いますよ。ここにはいない、他校にいる彼女さんですよ」

「ああ、お陰で寝不足だぞこの野郎……ふああああ」

「全く、20時には帰った方がいいですよ？」

「ん。善処する」

やれやれ、タカはアレですからね。もの凄くとまでは言いませんがかなりモテます。現に今の彼女は……何人目でしたっけ？もう両手で数えられなくなってからはカウントをやめました。だって、この男。見た目はカツコイイです。ただ、性格が残念なのであまり、どの彼女とも長続きはしませんでした。

「……お前。さっきの光景を彼女に見られたら刺されるだろ……」

「知るかそんなの。ユリは幼馴染だ」

「そうですよ坂本さん。タカは幼馴染です」

「……幼馴染ってなんだろうな」

え？こーいうものですよね。

屋上と書いて作戦会議場所と読む

バカテスト 英語

問 以下の英文を訳しなさい。

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』

神白崇彰の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』

教師のコメント

正解です。二人ともきちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは

』

教師のコメント

訳せたのはT h i sだけですか

黒☒由梨乃の答え

『それは

教師のコメント

T h i sの訳は『これは』です。

吉井明久の答え

『☆●◆▽』♪*×

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

』

』

明久が予想通りポロポロで帰って来たところで、オレ、雄二、明久、秀吉、ムツツリーニ、ユリ、姫路、島田の八人は屋上にやってきた。

「明久。ちゃんと宣戦布告してきたな？」

「一応今日の午後の開戦予定と告げてきたきたけど」

代表である雄二が腰を下ろしたので、オレたちも腰を下ろすことにした。

「で？何でユリ。お前はオレの上に乗ってるんだ？」

「いいじゃないですかタカ。いつものことですよ」

「……はあ。まあ、いいか」

ただし、オレの上にはユリが乗ってるが。

「ということは、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久。今日の昼ぐらいはまともな物食べろよ？」

「そうだそうだ。食わねえと力でねえぞ」

「二人とも、そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

去年のこいつの食生活を見せてもらったが……絶句したな。

「いや。一応食べてるよ」

「……あれは食べてると言えるのか？」

「……食事にカウントしていいのか？あれを」

「何が言いたいのか」

「いや、お前の主食って……なあ」

「ああ。お前の主食って……水と塩だろ？」

「きちんと砂糖も食べてるよ！」

阿保だ。そこは問題にしてない。

「あの吉井さん。水と塩と砂糖って……」

「それは食べるとは言いませんよ……」

「………舐めるが表現として適切」

「もしくは飲むじゃろうか」

これには、オレたちも優しい目で見ることしかできなかつた。

「まっ、飯代を遊びに使い込むお前が悪いな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

そう。明久の両親は実は海外に仕事に行っていて、コイツは一人暮らしをしていたりする。うちもユリのところも割と両親は仕事で忙しかったりするが、別に一人暮らしでは無いし、あまり羨ましいと思つたこともない。まあ、門限とかなないから自由でいいけど。

「……あの、もしよかつたら私がお弁当作つてきましようか？」

「あ？」

へえ、明久にも春があゝ

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお昼でよければ」

……今何て言つた？塩と砂糖以外のものを食べるのが久し振り？……お前。春休み
にサバイバル生活でもしていたのか？まあ、気にしたら負けだな。うん。

「良かったな明久。手作り弁当だぞ？」

「おめでどう。しかも女子からの」

「うん！」

「……ふーん。瑞希つて随分優しいんだね。吉井だけに作つてくるなんて」

なんだか面白くなさそうな島田。

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

「俺たちにも？いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったらですけど……」

ふーん。姫路は優しい……ねえ。

「それは楽しみじやのう」

「……………（こくり）」

「……お手並み拝見ね」

「へえ〜タカより上手いのでしょうか？」

「さあ？知らね」

「神白君……ですか？」

「うん。実は私が持つてきてる弁当も朝食もタカが毎朝作ってくれます。鼻真目な

しでかなりの腕前ですよ」

「……お前が朝が弱いせいだろ。というか、お前の方が料理上手いだろうが」

「私的にはタカの作る料理の方が好きですよ」

「オレはユリの作る料理の方が好きだな」

つたく。コイツ。勉強はできねえのに料理はオレより出来るからムカつく。

（（何なんだこの幼馴染……））

「お二人は付き合っていないのですか？」

「はあ（はい）？誰がコイツ（こんな人）と？」

「もう付き合っちゃまえよ」

「コイツ（これ）だけはない（です）」

思考の一致。やはり、お互いの考えていることは同じようだ。というか、雄二。さつき言つてただろ？オレには一応今彼女がいるつて。

（……何なんだこのバカたちは……）

「とりあえず、話は逸れたが、試召戦争の話に戻ろう」

「雄二。一つ気になったんじやがどうしてDクラスなんじや？」

「そうですね。段階を踏むのでしたらEクラス。最初から勝負するならAクラスではないのですか？」

「色々理由はあるんだが、Eクラスを攻めない理由は簡単だ。あのクラスは相手じやないからだ」

「でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

まあ、確かにクラスは上で、学力もFクラスの大半よりは高いだろう。まあ、それでも試召戦争をやらせたら、オレたちの練習相手にしかならないだろうがな。

「そうだな。振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、実

際は違う。明久、お前の周りにいる面子を見てみる」

雄二が明久に集まったメンバーを見ると言い、明久は全員の顔を見回し言う……

「美少女が三人、馬鹿が三人。後、ムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だ?!」

「どうして、雄二が美少女に反応するの!?!」

「……………(ポツ)」

「ムツツリーニまで!?!どうしよう!?!僕だけじゃツツコミ切れないよ!?!」

「誰がムツツリだこの野郎」

「そうですよ吉井さん。タカはオープンなエロですよ」

「…………ユリには言われたくねえ。昼飯抜きな」

「わわっ、ごめんなさい。ほっぺにチューしてあげるから昼食だけはご勘弁を!」

「…………たたく。分かったよ」

「さすがタカです。愛してますよ。(ちゅっ)」

「はいはい。オレも愛してる」

「…………ツチ」

若干二名程から強烈な殺気が放たれたがいつものことなのでスルーしておく。ただ、何故か女性陣が頬を染めたが、気にせず置く。きつと、自分が好きな人に同じ行為を

するところを想像したのだろう。まあ、あの二人の好きな人が誰とかはあまり興味ないけど。

「要するにだ」

「ホンと咳払いして雄二が説明を再開する。誰だ話を逸らした奴は。あ、明久か。

「姫路と崇彰に問題のない今、正面からやりあつてもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上、Eクラスなんかと戦つても意味がないつてことだ」

「?それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

「まあ、100%勝てるとは言いい切れないからな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

明久がそう言うが、正直言つて現状。Aクラスにはどんな作戦を用いても勝てやしない。それは雄二でも分かつてるはずだ。

「初陣だからな。派手にやつて今後の景気づけにしたいだろ?それに、さつき言いかけた打倒Aクラスの作戦における必要なプロセスだしな」

「あ、あの!」

すると、姫路が大きな声を上げる。

「ん?どうした姫路」

「えっと、その。さつき言いかけたつて……吉井君と坂本君は前から試召戦争について

話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にとって明久に相談されて——」

「それはそうと！」

「やれやれ。普通に聞こえたんだけど。というか、想像通り過ぎてつまらないくらいな
んだけど。」

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「そりゃそうだ。」

「負けるわけないさ」

「明久の心配を笑い飛ばす雄二。」

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

「へえく言ってくれるねえ……。」

「いいか、お前ら。ウチのクラスは——最強だ」

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………(グツ)」

「全力を尽くします」

「が、頑張りますっ」

「やってやるか」

打倒Aクラス。

他のクラスの連中が、いや、同じクラスの奴らですら聞いたら鼻で笑う夢かもしれない。

だが、ここにいる八人は違う。本気でAクラスに勝とうとしている。

去年から何だかんだで縁のあるやつらがこうして同じクラスに集まったんだ。こういうのも悪くはないな。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

そして、オレたちは雄二の作戦に耳を傾けた。

Dクラス戦と書いて前哨戦と読む

バカテスト 数学

問 以下の問いに答えなさい

『(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X \parallel 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、①〜④の中から選びなさい。

① $\sin A + \cos B$

② $\sin A - \cos B$

③ $\sin A \cos B$

④ $\sin A \cos B + \cos A \sin B$ 』

姫路瑞希の答え

『(1) $X \parallel \pi / 6$

(2) ④』

神白崇彰の答え

『(1) $X \parallel \pi / 6$

(2) ④ (すみません。珍解答が思いつきませんでした)』

教師のコメント

そうですね。角度を『』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です。ただ、神白くん。無理に珍解答を思いつこうとしなくて大丈夫です。

黒 \boxtimes 由梨乃の答え

『(1) 第一象限って何ですか？

(2) ①か②のどちらかだと思えます』

教師のコメント

問題に質問で返さないで下さい。後、(2)はどちらも不正解です。今回の問題は答案用紙に可笑しなことを書いた神白君に解説してもらうので、教えてもらってください。

土屋康太の答え

『(1) X || およそ3』

教師のコメント

およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(2) およそ③』

教師のコメント

先生は今までたくさん生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

★★★

Dクラスとの試召戦争が始まりました。私は木下さん率いる先攻部隊に所属しています。タカはって？タカは途中退席で0点扱いなので姫路さんと共に回復テストと呼ばれる、召喚獣の点数を補充するための試験を戦争開始と同時に受けています。

「やれやれ、こういう時に限ってタカは使い物になりませんね」

仕方ありません。使えない幼馴染に代わって使える私がDクラスのお相手をしてしまおう。

『いたぞ！Fクラスだ！』

声を上げながら走ってくるのはDクラスの部隊でしょうか。そして引き連れている先生は三人。五十嵐先生と布施先生は化学、学年主任の高橋先生は総合科目を承認できる先生です。どうしましょうか。私はお世辞にも化学が得意とはいえません。ですが、隊長に命じられた時は諦めましょう。

「黒×よ」

「何でしょう木下さん」

「お主。化学は得意かのう」

「いいえ。お世辞にも出来るとは言いがたいです」

「そうか……なら、お主は総合科目の方へ行つてほしいのじゃ。ワシは化学を引き受ける」

「分かりました」

「ただ、先攻部隊が全滅しても困るのじゃ。じゃから、お主は戦死しそうになったら誰かと交代してほしいのじゃ」

「了解です」

確かに化学はダメかもしれない。でも、総合科目ならまだ戦える気がします。そうです。私ならやれます。

先攻部隊の中の第一陣がDクラスの部隊と衝突しました。Dクラスとはいえ、私たちより格上です。というか、姫路さんとタカ以外にとつてはどのクラスも格上なのです。が……まあいいです。まずは、ここで第一陣の戦いを観察しましょう。

『Fクラスのような雑魚に負けるかよ！』

『クツ……戦死しちまう！誰か助けてくれ！』

『俺が助太刀する！』

『雑魚が二人に増えたところで俺には敵わないぞ！』

『つ、強い……これがDクラス……！』

『だが俺は諦めないぞ！』

……ふむ。白熱してますね。これは私の出番はなさそうですね。

『も、もうダメだ……戦死しちまう』

『あ、諦めるな！ここで引いたら……！』

『隙アリ！』

『ぎゃあああああ！』

『ナイスだ！これで一人減った！』

『戦死者は補習〜』

『お前の犠牲無駄にしない！誰か交代してくれ！』

あれから時間は経って、総合科目の勝負はDクラス二人とFクラス二人で行われていましたが、Fクラスの一人がやられ、Fクラスのもう一人は戦死寸前です。仕方ありませんね。私が交代しましょう。幸い戦ってくれていてDクラスの方の点数も減っていないはずですしね。

「Fクラス、黒~~箱~~由梨乃が代わります。試^サ獣^モ召^ン喚」

私の喚ぶ声に応じて足元に幾何学的な魔法陣が現れます。現れたソレは、聖騎士のよいうな姿で純白の鎧を着て、片手に剣、もう片方の手に盾を持っています。しかし、それ以外の髪の色やら目やら顔つきは私にそっくりです。まあ、身長は80センチほどですが。この姿を一言で表すとすれば『デフォルメされた黒~~箱~~由梨乃』って、感じですね。

『Fクラス 黒~~箱~~由梨乃

総合科目 782点

V S

Dクラス モブ男&モブ男

総合科目 1084点&1106点』

……どうしましょう。お相手のお二人。普通に私より格上なんですけど。え？彼ら二人に私一人で戦えと？無茶にもほどがありません？

『悪いな。女子だからって容赦はしない』

そう言つて剣を構えるモブ。あの子容赦して欲しいんですが……

「だ、誰か点数の残つてる人はいないのですか!？」

Fクラス陣に問い掛けても答えは帰ってきません。よくみたら生き残つてるFクラスの人たちは化学の方に集まっていますね。つまり、援護は期待できない。そのうえ戦死したらここを突破されて不利になる……と。無理ゲーですね。

「仕方ありません。私の真の力を解放しましょう」

『真の力……だと』

「ええ……行きますよ!」

十数分後……

『Fクラス 黒☒由梨乃』

総合科目 42点

VS

Dクラス モブ男&モブ男

総合科目 1075点&1098点』

『これで終わりだ』

あれから、逃げたり盾でガードし続けましたがどうやら、ここまでのようです。

『一思いに切り裂いてやる』

相手の召喚獣の剣が私の召喚獣の首元に迫ります。ここまで頑張ってくれた盾も今は私の召喚獣の手元にはありません。理由は簡単です。死闘の最中に叩き落とされ私は今剣も持っていない無防備なのです。ああ、補習は嫌でしたのに……仕方ありませんね。これが私の運命なら受け入れましょう。ただ、デフォルメされた私が首を斬られるなんて、残酷なところを私は見ていられません。目を閉じて西村先生の『戦死者は補習』』というのを待ちます。

パンツ

一発の銃声。あれ？銃を使う召喚獣なんてここに居ましたっけ？

「つたく。世話の焼ける幼馴染だ」

そして、普段から飽きるぐらいに聞いている声。

私はそつと目を開けると……そこには。

「タカ！」

「戦死は免れたな。ユリ」

私の召喚獣の前には、私の召喚獣を守るようにして立つタカの召喚獣が。

私本人の横には、私と肩を並べて立つタカの姿がありました。

『Fクラス 黒箱由梨乃&神白崇彰』

総合科目 42点&1427点

VS

Dクラス モブ男&モブ男

総合科目 1075点&813点』

あれ？不思議ですね。

「タカにしては点数低くないですか？」

「こっちは、全科目を満遍なく受けてきたんだよ。この短時間でな」

なるほど。全科目ということは13科目をトータル2時間もないぐらいで私の約二倍の点数と。なるほどなるほど。

「タカ」

「なんだ？」

「一回死んで下さい」

何ですかこの男！私が一時間ずつ頑張つて全教科受けてこの点数なのに！ムカつきます！

「あっそ。なら、一回死ぬ？」

そう言つて私の召喚獣のこめかみに銃を当ててきます。こ、この男本気です！本気で味方である私を殺す気です！

「ご、ごめんささい！冗談が過ぎましたから！」

そう言つてタカの腕に抱き着きます。え？軽そうな女に見えるつて？そんなことありませんよ。こんなのタカにしかやりません。

「まあ、いいや。……今はコイツらを倒すか」

タカの召喚獣は細めの片手剣に片手銃。後は黒を基調としたローブですね。何か、中近距離タイプみたいですね。

『こ、こいつがああの有名な……第六天魔王か!』

『ああ、間違いない。「神白崇彰」と召喚獣にもあつた……奴がそうなのか……!』

だいろくてんまおう? 何ですかそのカツコイイというか、厨二病くさいあだ名。そんな風と呼ばれていたんですねタカつて。坂本さん。聞いてませんよ? そんなあだ名があつただなんて。

「へえ君たちそうやってオレのこと呼んでいたんだ〜」

まあ、当の本人はある程度納得した様子。というか、初めて呼ばれてたのを知つたみたいですね。というか、タカが魔王つて……クスツ。

「デメエら……処刑だね」

そう呟いた瞬間。タカの召喚獣は銃を一発放ち、片方の召喚獣の眉間に当てます。

『なっ……いきなり攻撃を仕掛けるなんて卑怯だぞ!』

「卑怯? 勝負においてはな……!」

そのまま、戦死していない方の召喚獣に急接近。剣で首をはね、弾丸を撃ちこみます。オーバーキルですね。

『Fクラス 黒☒由梨乃&神白崇彰

総合科目 42点&1427点

Dクラス モブ男&モブ男

総合科目 DEAD&DEAD 』

「……敗者の戯言に重みはねえんだよ」

冷たい眼光がDクラスの二人を貫きます。怖いですよ？タカ。……まあ、今回のタカが卑怯というよりかは、勝負の最中に勝手に油断していた相手の落ち度だと思いますが。

「さあ、楽しい補習の時間だ！」

すると、西村先生がやってきました。こちらにも相変わらずの威圧感です。

「て、鉄人!？」

「い、嫌だ！補習室は嫌なんだっ！」

今にも逃げださんとするDクラスの二人。

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷり指導してやるからな」

「た、頼む！見逃してくれ！」

「あんな拷問耐え切れる気がしない！」

「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう」

「お、鬼だ！」

「誰か、助けっ——！」

そのまま連れてかれ、何処かの部屋に入れられたDクラスの二人。……あ、後少して私もあんな目に……！タカが助けに来てくれてよかったです。

「いいかもな……」

タカが何かを呟きました。あまりに小さくて聞きとれませんでしたでしたが次の瞬間。

パンツ

「……………へ？」

一発の銃声。そして、

『Fクラス 黒~~田~~由梨乃

総合科目 DEAD

VS

Fクラス 神白崇彰

総合科目 1427点』

私の召喚獣は……戦死していました。

「戦死者は補習……つて、お前か」

「た、タカあつ!? アンタ何考えてるんですかつ!?」

「あー手が滑ったなー」

「このおバカあ! ワザとですよね!? ねえ、ワザとですよねえっ!?」

「西村先生。後、よろしくお願いしますね」

私の言葉を無視して、爽やかな笑顔で西村先生に託すタカ。そして、クールに去っていきます。あの男には人情というものが無いのですかあ!?

「あーなんだ。黒☒」

「……何ですか?」

「特例として——」

「特例? まさか、補習免除……?」

「——みっちり指導をしてやろう」

「いいいいいいやあああつ!!」

私の叫びも虚しく、補習室に入れさせられました……。

船越先生と書いて明久の恋人と読む

「雄二、すまない！」

Fクラスの本陣に戻ってきたオレはそうそうに雄二に頭を下げる。

「どうしたんだ？ お前が謝るなんて珍しいが、何かやったのか？」

「オレは……ユリを助けられず、補習室に送ってしまった……すまない」

「過ぎたことを気にしても仕方がない。お前が無事で何よりだ」

「ありがとうな。雄二」

……まあ、ユリを補習室に送り込んだのオレだけだな。あいつには勉強が必要だ。少なくともこんなDクラス戦よりもな。だったら、戦死させて、補習室に送り込んだ方がいい。……本当は混戦の中殺るつもりだが、予想以上にワンサイドゲームで終わってしまったからな。

「とりあえず、作戦を考えたい。崇彰。この後どういうプランがベストだと思う？」

「そうだな。姫路を使うのが一番いいだろ」

「同感だ。タイミングは他クラスも下校する時。下校する生徒に紛れ込ませて奇襲させるつもりだ」

「なら、オレはあえて目立って囷をやるか。必要だろ？そういう役をする奴が」

「確かに、お前に気をとられてくれれば、姫路なんて、存在を認識すらしないかもな」
「だったら……」

雄二とオレが最終的にどういうプランでDクラスの代表の首を取るか、プランを話し合ってた時、

「坂本。それに神白も」

「なんだ須川？何かあったのか？」

明久率いる中堅部隊に所属しているはずの須川が本陣にやってきた。

「時間稼ぎの為に偽情報を流したい。先生たちに向けて」

「なるほどな……おい崇彰」

「なんだよ」

「お前が放送を流せ」

「はあ……オーケーだ」

「なら、俺は本陣に戻ってるぞ」

そう言うのと走って戻る須川。

「で？誰に向けてどんな内容でだ？」

「そうだなあ……ターゲットは船越先生。内容は……まあ、明久が告白するために体育

館裏で待っているとかでいいな」

「了解だ。ちよつと行つてくる」

そう言い残し、放送室へ向かう。

放送室の機材を適当に動かして、放送出来るようにする。……よし。

ピンポンパンポーン 《連絡致します》

さあ、始めようか。

《船越先生、船越先生》

明久。悪く思うなよ。

《二年F組の吉井明久君が体育館裏で、船越先生を待っています》

さよならだ。明久。

《生徒と教師の垣根を超えた一人の男と一人の女としての大事な話があるそうです》

あ、でもすぐに向かつてもらわないと困るか。

《すぐに体育館裏に向かつてほしいとのこと。以上二年F組神白崇彰からでした》

船越先生。

四十五歳。女。独身で数学の教師。

婚期を逃して、ついに生徒たちに単位を盾に交際を迫るようになった。

まあ、明久はすぐに向かえないが待たせた時間の分だけ奴の貞操は大変なことになるだろう。というか、貞操を45歳のオバさんに奪われるのか……おえつ。まあ、オレは既に奪われた後だけど。

『崇彰いいいいいいいいいいっ！』

どこからか声が聞こえてくるな……。……。オレ知らね。

☆☆☆

一旦教室に戻って二教科ぐらいテストを真面目に受け終えた後、雄二と教室で時を待っていた。

「明久、よくやった」

明久が戻ってくると雄二がらしくないことを言っていた。それも、無茶苦茶晴れやかな笑顔で。

「校内放送……聞こえてた？」

「ああ。バツチリな」

「しつかりと、全校に響かせたぞ」

「シャアアアアツ！」

オレの存在に気付くと左手で包丁を持ち、避けにくく致命傷になりやすい肝臓を。右手の靴下……いや、靴下に砂を詰め込んだ即席のブラックジャックだな。それをオレの頭目指して振り下ろす。

やれやれ……。

「あの放送の指示を出したの雄二だぞ」

バックステップで、凶器の当たるまでの時間を稼ぎ淡々と真実を告げる。

「お前のせいかああっ！」

明久は左足を軸にして反転。雄二に凶器を向け、そのまま――

「あ、船越先生」

――そのまま卓袱台を勢いよく蹴散らし、掃除用具入れの中に隠れた。

「バカだろあいつ」

「さて、そんなバカは放っておいて、そろそろ決着をつけるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合いじやろう」

「……………（コクコク）」

「おっしや！Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おうっ！』

そして、教室を出ていったところで雄二が声を出した。

「あー、明久。船越先生が来たってのは嘘だ」

さあ、Dクラス狩りを始めようか！

☆☆☆

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ!』

叫ぶFクラス。項垂れるDクラス。作戦は無事成功し、姫路が代表平賀の首を獲った。オレはあたかもDクラスの大將を狙っているふりをして近衛部隊の排除に徹していた。まあ、明久も結果的に排除に貢献してくれたからよしとしよう。

「坂本! 握手してくれ!」

「俺も!」

雄二を見るともはや英雄扱い。Fクラスの人たちに囲まれてしきりに握手を求められていた。

「雄二!」

「ん? 明久か」

「僕も雄二と握手を!」

明久も英雄の雄二に握手を求め、手を突き出した。

「ぬおおっ！」

ガシイッ

「雄二……！どうして握手なのに手首を押さえるのかな……！」

「押さえるに……決まっているだろうが……！フンッ！」

「ぐあっ！」

握手を求めた明久は手首を捻りあげられていた。そして、

ゴトツ

明久の握り込んでいた包丁が床に落ちた。

「……………」

「……………」

二人の間に流れる沈黙。

「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

バカだろ。こんな状況でごまかせると思ってるのか？

「僕、仲間との達成感がこんなにいいものだなんて、今まで知らな関節が折れるように痛いっ！」

「今、何をしようとした」

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほどに痛いっ！」

「おーい。誰かペンチを持ってきてくれー」

「す、ストップ！僕が悪かった」

やれやれ。阿保らしい。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

Dクラス代表の平賀がヨタヨタとこちらにやってくる。

「あ、その、さつきはすいません……」

「いや、謝る事は無い。Fクラスだと侮っていた俺たちが悪いんだ」

姫路は謝ったが、別に謝る必要はない。これは勝負だからな。

「第六天魔王がFクラスにいた時点で、もつと警戒すべきだったかもな」

何で第六天魔王なんて、本能寺で焼き討ちされそうなあだ名で呼ばれているのだろう

か。

「ルールに則って教室を明け渡そう。ただ、今日はもう遅いから、作業は明日で良いか？」

「もちろん明日でいいよね、雄二？」

「そんな必要ねえよ。明久」

「え？ どういうこと？ 崇彰」

「我らがリーダーはDクラスの設備を奪う気はない、だろ？」

「ああ。その通りだ」

「雄二、それはどういう事？」

「忘れたか？ 俺たちの目標はあくまでもAクラスのはずだろう？」

まあ個人的にはここでも充分設備はいいと思うが。

「でもそれなら、何で標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

「少しは自分で考えろ。そんなだからお前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称を付けられるんだよ」

「なっ！ そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」

「そうだぞ雄二。近所の幼稚園児だったはずだ」

「違う！ 近所の小学生に……ハッ！」

「……………小学生に……だと」

嘘だろコイツ。冗談が冗談じゃなくなった……。

「と、とにかく。Dクラスの設備に一切手を出すつもりはない」

「それは俺たちにはありがたいが……。それでいいのか？」

「もちろん、条件がある」

「そりやそうだよ。これで解放したらこの戦争の意味を聞きなくなる。」

「一応聞かせてもらおうか」

「なに。そこまで大した事じゃないさ。俺が指示を出したら、窓の外にあるBクラスの室外機。それを動かなくしてもらいたい」

雄二が指す室外機はDクラスの窓についているがDクラスの物ではない。Dクラスの設備は平均より少し貧しい普通の高校レベルの設備だからエアコンはないのだ。アレはスペースの関係で間借りしているBクラスのもの。

「設備を壊すから当然教師にはある程度睨まれるかもしれない。だがそう悪くない話だろう？」

Dクラスからしたら悪くはない取引。オレや雄二、明久ならともかく。上手く事故に見せかければ嚴重注意で済むはずだ。それだけであのFクラスに少なくとも三ヶ月間、行かなくていいならいいはずだ。

「それはこつちとしては願ってもない提案だ。しかしなぜそのようなことを？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

「そうか。ではこちらはありがたいがたくその提案を吞ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行つていいぞ」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願つてるよ」

「ははっ、無理するなよ。勝てつこないと思つてるだろ？」

「それはそうだ。FクラスがAクラスに勝てるわけがない。ま、社交辞令つてやつだ」

平賀はそう言つて、去つて行つた。まあ、オレも勝てるとは思つてないけどさ。

「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰つて休んでくれ！解散！」

さてと、オレとユリの分の荷物をまとめて……

ガラッ

補習室の扉を開ける。

「おーいユリー帰るぞー」

「……………（ブツブツ）」

「ん？ユリ？」

「…………シユミハベンキョウ、ソッケイスルヒトハニノミヤキンジロウ」

「あ…………」

ユリだと思ったソレはもうユリではなかった。

「……シユミハベンキョウ、ソッケイスルヒトハニノミヤキンジロウ」

ただ、ひたすら問題を解くことしかできないモノに変わり果てていたのだ。

「さてと、コレを家まで持って帰るのか。なかなか面倒だけど仕方ねえか」

やれやれ、誰のせいだよ。あ、鉄人のせいかな。

☆☆☆

ユリの家についたオレは、放心状態（どちらかという洗濯状態[？]）のユリをリビングの椅子に座らせ、エプロンを身につけて料理を始めた。

ユリとオレは近所……というか隣人だ。え？予想通りだつて？まあ、そんなことはおいて、ウチとユリの両親が話し合った結果中学入学くらいから、特別な日（例えば誕生日とか）を除き、朝昼晩のご飯はオレたち二人が勝手に作つて勝手に食べることになっている。放任主義つてやつかな。まあ、二人とも自炊できるし問題ない。

オレにとってはユリの家は第二の我が家だし、ユリにとつてもオレの家は第二の我が家だろう。お互いの部屋は二階の窓を開けたらすぐのところにある。お互いの部屋の窓を開ければ会話も出来るし、オレは窓を伝つて互いの部屋を行き来できる。電気がついているかも普通に分かるため、いつ寝たかとか帰つてきたかもお互いにバレバレだ。まあ、だから昨日帰つてきた時間とかバレただけだ。

「ほら、ユリ。出来たぞ」

「……シユミハベンキョウソソンケイスルヒトハニノミヤキンジロウ」

「……まだこれかよ」

やれやれ、食べさせないといけないのかよ……というか、朝昼晩全部食べさせてねえか？今日。

そう思いながら風呂の準備。別に風呂には今でもよく一緒に入ってるから、そういう抵抗はない。まあ、互いに用事があつたり気分次第では一緒に入らないが。

服を脱がせ、ユリの歯を磨く。やれやれ。これだと、子どもを相手しているみたいだ。

「……………はっ！私は今まで何を……………」

湯船に浸からせるとどうやら正気に戻ったようだ。

「やっとお目覚めかよ。お姫様？」

シャワーで身体を洗いながら問う。

「つて誰のせいだと思ってるの！」

「鉄人」

「……………否定はしないけど」

そして、湯船に浸かる。いいね。少し広い風呂つて。高校生二人が入っても窮屈すぎることは無い。まあ、それでも少し手狭だがそれはオレたちの背とかが大きいからだろう。

「つたく。まずお前をここまで持ってきて夕食を作つて歯も磨き、身体も洗つてやったんだ。感謝しろよ？」

「いや、身体を洗つてから湯船に浸かるのは当然でしょ」

何言ってるの？つて感じで見てくるユリ。

「やれやれ、相変わらず面倒見がいいことで」

「うっせ。というか、夕食当番お前だろ。作つてやったから明日は自分で起きろ」

「嫌です。今思つたのですが、無防備な女子高校生の身体を隅々まで洗うということが

出来たのですよ?というわけで、明日の夕食も作って」

「……はあ? 断る」

「じゃあ、明日の昼にジュースおごって」

「嫌だ。というか、お前に夜ご飯まで食べさせたんだ。後、片付けもしたし。オレの方が働いただろ。だから、明日は自分で起きろ」

「……タカの眼つて綺麗ですよ。普段からカラコンなんて付けなくていいのに」
「うっせ。話を逸らすな」

「というか、オレがカラコンを付けている理由知ってるだろ?」

「……はあ。やれやれです」

「こつちが言いてえよバカユリ」

「分かりましたよ。でも、本当にいいんですか?」

「何がだ?」

「私に自分で起きさせて何が起きても知りませんよ?」

ユリは学力的にはバカな部類に入る。というか、明久と遜色ないレベルだ。断言出来る。

ただ、明久も含めバカなのは学力的にはってだけで、頭が悪すぎるわけでは無い。だから、まあ、ユリの場合は多少は頭も回るし、特にオレ相手にはよく回りやすい。つま

り何が言いたいかといわれると……

「……分かったよ。今回のはお互い差し引きゼロにしよう」

「わあーい」

オレはこう言うしかなくなるのだ。

「さて、私はあがりますか」

「そうか。なら、オレも」

「何言ってるんですか？タカは後十分ぐらい湯に顔を沈めててください」

「……はあ？」

「だって、私は着替えているところをタカに見られるのですよ？……恥ずかしいじゃないですか」

そう言いながら浴室を出ていくユリ。

一ついいことを教えてやろう。

お前それ全裸で言うセリフじゃないからな。

姫路の弁当と書いて生物兵器と読む

バカテスト 物理

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい

『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よく出来ました。

神白崇彰の答え

『正義（キリスト教世界の思想では）』

教師のコメント

このテストが物理なので物理学的に答えましょう。

黒☒由梨乃の答え

『神秘的なもの』

教師のコメント

欲しい解答と違います。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

☆☆☆

次の日の昼になった。朝は、明久が殴られたり、一時間目から船越先生が監督の先生と聞いて逃げたりしたが、いつもと大差ない朝だった。

「うあー……づがれだー」

明久は全て出し切ったのような声を出しながら机に突っ伏していた。まだ、四教科しか終わってないのにな。

「うあーもうダメー」

ちなみにユリも疲れてオレの背中にもたれかかっている。重いからもたれかかるな。

「今なんて思った？」

すると、背中を恐ろしい力で抓ってくる。痛いからやめてほしい。とりあえずスルーするが。

「うむ。疲れたのう」

いつの間にか明久の近くにいる秀吉が答える。今日の髪型は何故かポニーテール。まあ、髪型なんて人の自由か。

「……………（コクコク）」

そしてムッツリーニも近くにいた。相変わらず気配を消すのが上手い。

「よし！昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「そんなにも食うのかよ。お前人間か？」

時々コイツは人間か怪しく感じる。

「ん？吉井たちは食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらおうね」

「……………（コクコク）」

ムッツリーニが下心丸出しで頷く。

「オレはユリと屋上で食べるわ。弁当あるし」

「そうですね」

疲れを感じさせないように答える。復活早いな。

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを——」

「あ、あの。皆さん……」

すると姫路がオレたちに声を掛けてきた。

「うん？あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えつと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

昨日の約束？何だっけ？

「おお、もしや弁当かの？」

「そう言えばそうでしたね」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞ」

姫路は体の後ろに隠していたバッグを出してくる。

「迷惑なもんか！ね、雄二！崇彰！」

「ああ、そうだな。ありがとう」

「まあ、いいと思う。ありがとう」

「そうですか？良かったあ〜」

安堵する姫路。まあ、いいんじゃないか？たまにはユリ以外の女子が作ったご飯を食べるのも。

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね」

明久を親の敵のように睨む島田。

「それでは、折角のご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上に行こうかのう」

「そうだね」

「まあ、ここでは食べる気失せるしな」

「こんな腐った畳のある所で弁当を食べるのは衛生上よろしくない。それに、精神的にもここではあまり飲食をしたくない。」

「そうか。それならお前らは先に行っててくれ」

「ん？雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

島田が雄二と一緒に飲み物を買に行こうとする。どういう風の吹き回しだろうか？

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

まあ、いいか。何でも。

「きちんと俺たちの分をとっておけよ」

「大丈夫だつてば。あまり遅いと分からないけどね」

「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行つてくる」

雄二と島田は財布を持って教室を出て行つた。飲み物を買う為に一階の売店に向かつたんだろう。

「僕らも行こうか」

「そうですね」

「おおー」

明久はそう言いながら姫路が抱えていたバッグを持つて教室を出た。

「天気が良くてなによりじゃ」

「そうですねー」

「よかつたです」

爽やかな青空。絶好のお弁当日和だ。

「あ、シートもあるんですよ」

バックからビニールシートを出している。凄いな。準備万端じゃないか。

「気持ちいいねー」

「……………（コクコク）」

「最高だねー」

屋上は、意外と普通の人はこない。だから、絶好の穴場スポットだったりする。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

『おおっ！』

姫路が重箱の蓋を取るとそこには美味しそうな唐揚げやエビフライにおにぎりやアスパラ巻きなど、定番のメニューが詰まっていた。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に——」

「……………（ヒョイ）」

「あつ、ずるいぞムッツリーニ」

ムッツリーニが流れるように重箱の中からエビフライをつまみ取って口に運んで——

バタン ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

『……………』

姫路以外の三人と顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君!？」

姫路が慌てて、配ろうとしていた割り箸をシートの上に落としたり。

「……………（ムクリ）」

ムツツリーニが起き上がった。

「……………（グツ）」

そして、姫路に向けて親指を立てる。『凄く美味しかった』と伝えたかったのだろう。

「あ、お口に合いましたか？よかったですっ」

でも、ムツツリーニ。本当においしかったならなぜ足がガクガクと震えているんだい

？

「良かったらどんどん食べてくださいね」

姫路が、笑顔で勧めてくる。

これほどありがた迷惑という言葉をオレは知らない。

（……………三人とも。あれ、どう思う？）

姫路には聞こえないよう小さい声で話しかけてくる明久。

（……………どう考えても演技じゃねえだろ）

（うむ。演劇部のワシから見ても断言できる）

（だよな。あれ、ヤバイよね）

（吉井さんに木下さん。お二人共、身体は丈夫ですか？）

(正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化しているから)

あくまで笑顔のまま、姫路には悟らせないように会話をするオレたち四人。

(ワシは一応自信はあるのじゃが……)

(そうですね。ならここは——)

まさか、『ここは私が』と言うつもりなのか。今日ほどユリをカツコイイと思った日はないよ。

(——ここはタカに任せて下さい)

(おい。そこは『ここは私が』って言うところだろうが。丸投げすんな)

(まさかタカ。こんなかよわい美少女にあんな劇物を食べさせるつもりですか?)

(かよわい美少女? 笑わせてくれるな)

そんな会話をしていた時、

「待たせたな!」

雄二登場。

「あつ、雄二」

明久が止める間もなく素手で卵焼きを口の中に放り込み、

パク　　パタン——ガシヤガシヤン、ガタガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本!?!ちよつと、どうしたの!?!」

あ、これガチでヤバい奴だ。

すると、雄二は激しく震え倒れた状態でオレと明久の方を向き、目で訴えかけてきた。

『毒を盛ったな』と。

オレたちは優しく、

『毒じゃない(よ)。姫路(さん)の実力だ(よ)』

ここう目で返した。普段から仲良しのオレたちだから出来る技だ。本当に、ここういう時

は便利だな。

「あ、足が……攣つてな……」

優しい嘘でごまかす雄二。

「あはは、ダツシユで階段の昇り降りしたからじゃないかな」

「うむ、そうじゃな」

「全く、怪我には気をつけてくださいよ。坂本さん」

明久たち三人のフオローに島田は不思議そうな顔をする。……余計なことを言った

り、勘づかれたりする前に排除しよう。

「あー！」

「どうしたのよ神白」

「今、島田が手をついてるとこに虫の死骸があつたのにー！」

大嘘だが。

「ええっ！早く言つてよ！」

「早く手を洗つてきた方がいいよ」

「そうね。行つてくる」

明久の言葉に席を立つ島田。……すげえな。あんな棒読みで騙せるんだ……

「島田も災難じゃのう」

「あはは」

はっはっはつと笑う野郎四人と、フフツツて感じでお上品に笑う女子一人。

しかしその裏では必死に作戦会議を行つていた。

（明久、今度はお前が行け！）

（む、無理だよ！僕だったらきつと死んじやう！）

（知るか！屍ぐらい拾つてやる！）

（ワシも流石に、さっきの姿をみると……）

（私は嫌です。誰かが逝つてください）

(雄二が逝きなよ！きつと姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！)

(そうか?)

(おそらく、姫路は明久に食べてもらいたさそうじゃが)

(乙女心が分かってないね！)

(いえ、一番分かってないのは吉井さんですよ？乙女の勘ですが)

(そうだ。どっちかといえはお前の方が分かって——)

(ええい、往生際が悪い！)

「あつ！姫路さん、アレはなんだ!?!」

「えつ?なんでですか?」

明久が明後日の方を指差して姫路がそちらを見る。

(おらあつ!)

(くらえつ!)

(もごああつ!?)

その隙に雄二の口の中に弁当の中身を押し込む。

目が虚ろだったので、顎を掴んで咀嚼を手伝った。

「ふう、これでよし」

「一件落着だな」

「……お主ら、存外鬼畜じやな」

「いえ、タカは前から鬼畜ですよ」

「ユリ? (ニツコリ)」

「……昨日だってそうだったのに」

否定はしない。まあ、補習室に送り込んだのはある意味鬼畜だから為せる業かもしれない。

「ごめん、見間違いだったよ」

「あ、そうだったんですか?」

「そそつかしいな明久は。あ、弁当ありがとね」

「うん。美味しかったよ。ご馳走様」

「うむ、大変良い腕じゃ」

「そうですね。ありがとうございます」

雄二の大活躍によって、弁当は始末された。

今のオレたちはそう。この青空のように心が澄み渡って——

「あ、そうでした。実はデザートもあるんですよ」

——おかしいな? 聞き間違いかな? 澄み渡った心に暗雲が現れたのだけど。

「ああっ! 姫路さんアレはなんだ!?!」

「明久！次は俺でもきつと死ぬ！」

デザートと聞いた瞬間復活した雄二。……ツチ。反応の良いやつだ。

姫路さんがごそごそと、取り出したのは容器に入ったヨーグルトと果物のミックス（のように見えるもの）だ。うん。間違いなく死ぬな。コレ。

「あれ？姫路さん。これ、お箸では食べにくいのでは？」

明久と雄二が小声で言い争う中、ユリが提案する。

「あ、スプーンを教室に忘れちゃいました。取ってきますね」

スカートを翻して、階下へ消える姫路。

「コホン。……皆さん。そんなに言い争うのであれば、これは私が処理します」

「なっ……！やめとけ黒☒！」

「そうだよ！そんなことをしたら黒☒さんが死んじゃうよ！」

「考えなおすのじゃ！早まるでない！」

「いえ、もう争いを見たくありませんから」

そう言つて容器の蓋を開け、容器を口に持つていく。

「さようなら——」

容器を徐々に近づける………オレの口に。

「おい、ちよつと待て。何でオレのゴバアツ！」

「——タカ」

口を開けた一瞬を狙い、口の中に押し込む。喉を通ろうとする生物兵器を必死に押し出そうと抵抗するも虚しく。生物兵器はオレの体内に。ああ、死んだおばあちゃんが見えるよ……。

薄れゆく意識の中、最後に聞きとれた声は……

「……昨日の補習の恨みです」

それ……根に持ってたのかよ……この野郎。……………カクツ。

(())、この人も鬼畜だ……(())



「そういえば坂本、次の戦争の相手なんだけどBクラスなの?」

激しい昼食を済ませて、復活した皆でのんびりお茶をしていると島田さんがそう口にします。あれから、タカお手製の弁当を分けて、昼ごはんを済ませました。ありがとうございます。

「ああ、次はBクラスを獲りに行く」

タカによると、昨日DクラスにBクラスの室外機を壊せって命令をしていたそうです。ですから、次の相手はBクラスということは分かっていました。

「どうしてBクラスなの? 目標はAクラスなんでしょう?」

しかし、この一点は分かりません。何故でしょう?

「正直に言おう」

坂本さん急に神妙な面持ちになりましたね。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

五十人から成り立っているAクラス。四十人に關してはBクラスの少し上ぐらいの実力であくまで普通の生徒です。

しかし、残りの十人はマズイです。次元が違いますね。正々堂々と戦ってこの十人に

渡り合えるのは学年でも姫路さんかタカぐらいでしょう。まあ、本来ならその十人に二人も入るわけですから、正直助かった気持ちもあります。それでもとても勝てそうなのがAクラスですが。

「ということは坂本さん。私たちの最終目標はAクラスからBクラスに変更ですか？」

「いや、Aクラスをやる」

「雄二、さつきと言ってること違うじゃないか」

「そうですね。どんな作戦でも勝てないのにAクラスと戦おうとするなんて最初から負けが分かっている戦いじゃないですか。」

「ああ。だから、クラス単位での勝負はしない。一騎討ちに持ち込むつもりだ」

一騎打ち……ですか。

「一騎打ちに？どうやって？」

「Bクラスを使う。明久。試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるよな？」

「え？も、もちろん！」

「ど、どうしましょう。姫路さんが吉井さんに耳打ちをしていますが、私分かりませんよ。設備のランクを落とされるんだよ」

「……まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

「そうだね。常識だね」

ふむ、ふむ。一つ学習しました。

「では、上位クラスが負けた場合は？」

悔しい……でしようか。

「悔しい」

あ、吉井さんと一緒ですね。これは、不正解の予感です。でも、間違つてませんと思えますけど……ね。

「ムツツリーニ、ペンチ」

「ややっ。僕を爪切り要らずの身体にする動きがっ」

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

姫路さんのフォローが入る。

「つまり、私たちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられる。そういうことですね？」

「ああ。そして、そのシステムを利用して、交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むように交渉する。設備を入れ替えたならFクラスの設備だが、Aクラスに負けるだけならCクラス設

備で済むからな。まずうまくいくだろう」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどねー」

学年の二番手であるBクラスと戦った後に休む間もなくまた戦争は辛いでしよう。Fクラスには『現状の不満』という原動力があります。しかし、Aクラスには戦争に勝つても特に何かを得られる訳ではないです。モチベーションの差は歴然としてますね。

「でも、それって問題がありませんか？まず、Aクラスが一騎討ちを受けてくれる保証がないと思います」

「それにそもそも一騎討ちで勝てるじゃろうか。こちらに姫路と崇彰が居るのは既に知れ渡ってるはずじゃろう？」

そうです。タカはあの後大暴れで目立ったそうですし大将を倒した姫路さんも当然目立ちます。騙し打ちなんて出来ませんよ？

「そのへんに關しては色々考えてある。心配いらない」

自信満々にそう答える坂本さん。

「とにかくBクラス戦が終わったら教えてやる。細かいことはその後だ」

そうですね。まずは打倒Bクラスです！

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行つて宣戦布告をしてこい」

「断る。雄二か崇彰が行けばいいじゃないか」

「おいおい明久。俺はともかく……崇彰が行けると思うか？」

そう言つて私の正座しているところを指します。

「どうかしましたか坂本さん？それに皆さんも？」

（（どうしてそんな平然と崇彰の上で座れるんだこの人は……））

やれやれ。姫路さんと島田さんにはちよつと旅立っているタカのことを、食後の昼寝とか適当な理由をでつち上げて伝えましたが、寝ている方が悪いです。タカが寝ていると上に乗りたくなるじゃないですか。まあ、もう乗つてますけど。

「それなら俺とお前。ジャンケンで決めないか？負けたほうが宣戦布告に行く」

「ジャンケン？……うーん。OK。乗った」

「よし。ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいこう」

心理戦？あータカと心理戦アリでやると毎回負けるんですよね。……なぜでしょう

？

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ」

「そうか。それなら俺は——お前がグーを出さなかったらブチ殺す」

あれ？心理戦……ですか？

「行くぞ、ジャンケン」

「わああっ！」

パー（坂本さん）　グー（吉井さん）

吉井さんの負けですか。……正直、予想通りすぎますね。

「決まりだ。行つて来い」

「絶対に嫌だ！」

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

「それなら今度こそ大丈夫だ。俺が保障する」

あれ？信用ならない保障ですね。

「なぜならBクラスは美少年好きが多いらしい」

「そっか。それなら確かに大丈夫だね」

意味が分かりません。

「でもお前不細工だしな……」

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「5度もあつたんですね。よかつたじゃないですか！」

「三人なんて嫌いだよ！」

「とにかく、頼んだぞー」

「坂本さんの号令で昼食はお開きになり、またテスト漬けになるのでした。タカ？あ
あ、教室には連れてきて帰りのHRで復活しましたよ。」

Bクラス戦と書いて心理戦と読む ①

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『C6H6』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学を舐めていませんか。

吉井明久の答え

『B—E—N—Z—E—N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

黒☒由梨乃の答え。

『Be+N+Zn=ベンゼン』

教師のコメント

ベリリウムと窒素と亜鉛ではベンゼンは出来ません。後で神白くんに教えてもらってください。

神白崇彰の答え

『C6H6。』

製法としてはアセチレンを赤熱鉄管に通す。と高校では教えられている』

教師のコメント

流石の一言に尽きます。そのまま、黒☒さんに化学を教えてあげて下さい。



「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った坂本さんが机の上に手を置いて皆の方を見ます。今日は午前中はテストでした。そして、ついさっき全科目のテストが終わってタカお手製の昼食を頂きました。昨日は死にかけて今は亡きタカの祖母を始めとした色んな人と会っていたのですが料理の腕は落ちていませんでしたね。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

一向に下がらないモチベーション。これが私たちの唯一にして最大の武器です。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込む事が重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を執ってもらおう。野郎共、きつちり死んでこい！」
「が、頑張ります」

「きつちり死ぬ前提なんですネ。まあ、私は野郎じゃないので死ぬ必要はありませんが。」

『うおおーっ！』

前回とは違って姫路さんと一緒に戦える。その思いだけで前線部隊の士気は最高潮に達しようとしていました。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムが鳴り響きます。Bクラス戦開始ですね。

「よし行つてこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

私たちの作戦は廊下での戦闘を制すること。廊下での勝負に勝たないとお話にもならないようなので戦力も五十人中四十人という戦力を注ぎ込んでいます。そこには姫路さんや私も含まれていますが、タカは含まれていません。まあ、それでも勝てると思います。

後はこちらの主な武器は数学です。Bクラスは比較的文系が多いそうですね。後は英語に物理だそうです。どうしましょう。私の得意教科がありません。というか、何が私って得意なのでしょう？

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

正面からBクラスの生徒たちがゆっくりとした足取りで歩いてきます。数は十人です。あくまで様子見でしょうか。

「生かして帰すなーっ！」

そんな物騒な言葉が皮切りとなって、Bクラス戦が始まりました。

『Bクラス 野中長男

総合科目 1943点

VS

Fクラス 近藤吉宗
総合科目 764点
』

『Bクラス 金田一祐子

数学 159点

V S

Fクラス 武藤啓太

数学 69点
』

『Bクラス 里井真由子

物理 152点

V S

Fクラス 君島博

物理 77点
』

これが桁違いの強さって奴ですか。

圧倒的とも言える実力差によって第一陣がごとごとくやられていきます。

「お、遅れ、ま、した……。ごめ、んな、さい……」

息を切らして姫路さんがやってきました。きつと彼らの全力疾走に付いてこれなかったのでしょうか。私？私はタカのおかげで体力はありますからね。そこまで心配いりません。

「来たぞ！姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かが叫ぶと全員が目つきを変え、いつそう警戒を強めます。明らかに警戒していますね。姫路さんが前に行く二人の女子が現れ、数学担当の長谷川先生に数学の勝負の立会いをするように頼んでいます。あちらは十人しかいないのに、そのうち二人も使っていますね。なるほど。ここで姫路さんを倒してFクラスの士気を下げつつもりですか。

『Fクラス 姫路瑞希』

数学 412点

VS

Bクラス 岩下律子&菊入真由美

数学 189点&151点』

「あれ？姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるとんだね？」

「あ、はい。数学は結構解けたので……」

「？結構解けると、アクセサリーをしてるの？」

そう言っていたので見てみますと確かに姫路さんの召喚獣の左手首に綺麗な腕輪をしていました。ああ、確かアレですよ。一科目で400点を超えるともらえる特殊能力って奴ですよ。

「じゃ、いきまますね」

キュボツ！

姫路さんは腕輪を光らせ、熱線を放って、片一方の召喚獣を一瞬で灰にしました。

そして、大きく避けて、バランスを崩したもう片方の相手を大剣で一刀両断。凄い強いです。私も特殊能力欲しいなあ……。

「なっ！そんなバカな!？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

まだ生き残っているBクラスの八人からは驚愕の色が見えますね。無理もないでしょう。

「み、皆さん、頑張ってください！」

姫路さんが指揮官らしくない指示を出して、そのまま後ろに下がります。

あの腕輪の使用には点数をかなり消費するものもあると聞きます。姫路さんのはその代表例ともいえますね。なので戦死を避けるため後ろに下がるのは当然の行動です。まあ、向こうの士気は下がっていますし、この分なら姫路さん抜きでも渡り廊下での戦いは勝てますね。

「やったるでえーっ!」

「姫路さんサイコーッ!」

さっきの姫路さんの激励に味方の士気は大幅に上がって、信者は増えます。

「中堅部隊と入れ替わりながら後退!戦死だけはするな!」

Bクラスからそんな声が聞こえてきます。私たちの狙いは敵を教室に押し込むことです。今の所は順調ですね。第一目標を果たすべく、しっかりと向こうをBクラスの教室に押し込みたい所です。

木下さんと吉井さんが下がっていくのが見えました。関係ありません。

「あれ?なんででしょう……」

☆☆☆

「いやあ。すんなり協定の話は進んだなあ」

「ああ。最初に使用者が来た時には、どうなるかと思ったがな」

のんびり自分たちの教室に戻っていくオレたち。先ほどまで雄二とオレはBクラス代表の根本と協定を結びに行ってたのだ。

そして、教室に戻ったオレたちを迎え入れるのは、穴だらけになった卓袱台と折られたシャープペンや消しゴム、後は引き裂かれた座布団などだった。

「ふーん。何というか……予想通りだな」

「ああ。教室にFクラスの奴らを残しておかなくて正解だったな」

それを見たオレたちは、別に驚くこともなく淡々と話をしていた。

「……うわ、こりや酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「卑怯、だね」

すると何を思ったのか帰ってきた明久と秀吉。まあ、普通の反応だね。地味な嫌がらせだが、これでは補給がままならない。点数にも影響は出るという、地味に後に響きそうな感じだ。

「あまり気にするな」

「そうそう。修復には時間がかかるかもしれないけど作戦に支障はないさ」

「雄二と崇彰が言うならいいけど」

一応は納得してくれる明久。

「それはそうと、どうして雄二たちは教室がこんなになっているのに気付かなかったの？」

「協定を結びたいという申し出があつて、調印の為に教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「そ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越す。後は、その間は試召戦争に関する一切の行為を禁止する。という内容のな」

「承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負にした方がウチとしては有利じゃないの？」

「姫路以外は……な？」

そう。うちの主戦力の姫路が体力切れでは困る。

ちよつと隣の空き教室に荷物を取りに行っていたが、その間に雄二が説明してくれてたそう。

「そういうこと。この協定は俺たちにとってかなり都合がいい」

「なるほど……とここで崇彰。その二つの鞆は？」

「ん？オレとユリの。予め避難させといた」

「なら、ワシらのも避難させてもよかつたじやろうに……」

「悪い悪い。でも、避難させ過ぎると逆に勘づかれるしな」

そう。二人ぐらいの荷物が減つてもそう気にはならないが、十人分くらい減つてると流石に勘づかれるだろうな。

「だが、お前にも人の情はあつたんだな」

「ん？どういう意味？」

「自分のだけでなく黒☒の分まで避難させてたんだろ？幼馴染だからか？」

「そうだな。アイツ。自分の私物が傷つけられたら凄く悲しむから」

(「……何でこの二人は付き合わないのだろうか」)

「まあ、二人は戦線に……ん？」

「……ここでオレは気付く。教卓の上に何か書かれた紙が置いてあることに……」

「雄二。あんなところに紙なんて置いてったか？」

「いや、そんなはずはない」

「読んでみたら？」

「そうだな」

紙を取って文面を読む。

『黒~~田~~由梨乃を人質に取った。返して欲しくば神白崇彰一人で保健室まで来い』……
か』

「……罨だな」

「罨じゃな」

「罨だね」

「そーだなー」

ビリッ！

軽い調子の返答と共に紙を真ん中から引き裂く。

「雄二。行くところが出来た。しばらく帰ってこれないかもしれん」

「……お前。正気か？」

「悪いな。ただ——」

「ただ？」

オレは一息吸って何時になく低い声で告げる。

「——ユリはオレが守る。傷つける者は誰であろうと許さん」

そして、そのまま保健室に向かう。

「ねえ、雄二。何で崇彰って黒□さんと付き合わないんだろうね」

「ああ。というか、前の戦争で黒□を戦死させたのアイツだぞ」

「あの男はよく分からんのか……」

後ろの方でこんな声が聞こえていたがオレは無視した。

保健室についたオレ。そこで目にしたのは——！

Bクラス戦と書いて心理戦と読む ②

「タカ！」

「ユリ！」

保健室に着いたオレを待っていたのは捕まったユリ本人と召喚獣。そして、

「おっと、余計な動きを見せるなよ第六天魔王。さもないとコイツを戦死させるからな」

ユリの召喚獣の首元に剣とかを当てている二体の召喚獣。後は古典の竹中先生だ。

というか、何でそのあだ名が広まっているのか。不思議だなあ。

「あつそ。試験^サ召喚^{モン}」

『Fクラス 黒^ク由梨乃&神白崇彰

古典 13点&412点

VS

Bクラス モブA&モブB

古典 194点&207点』

「ま、待て！誰が召喚していいって言った」

狼狽するBクラスのモブA。まあ、仕方ないね。だってあの二人の点数を足してもオレには及ばないからな。

「よく考えろよ。お前らの目的は大方、Fクラスの主戦力であるオレを足止めすること。違うか？」

「あ、ああ」

「まあ、点数次第じゃ勝てるんでも思ってたこんな役を引き受けたんだろうがオレは腕輪持ち。君たちに勝ち目はなくなったね」

「だ、だがこつちには人質がいる」

「ふーん。で？」

「お、幼馴染なんだろ？」

「ふーん。で？」

「……ちよつと待て。お前。人質がどうなつてもいいのか？」

「まあ、人質の召喚獣なら煮るなり焼くなり好きにしたら？ただ——」

最大限の笑顔を作つて、続きを言う。

「——ユリ本人に手を出そうものならテメエら。無事に家に帰れるとは思ふなよ」

(「ハ、ハ」ええ……！)

萎縮するような様子を見せるBクラス二人。やれやれつて感じのユリ。いやいや、お前が捕まってることにオレは呆れているんだが？

「というか、オレが召喚した時点でお前らの目的は果たしたようなものだろう？」

「どういうことだ？」

「オレはユリが人質に取られているからお前らを倒せない。味方が近くにいないからこのまま戦場に戻ろうとすれば敵前逃亡とみなされ補習室送り」

床に座る。いかにもお手上げて感じを出しておく。どうせ、長期戦だ。立つのも面倒だしな。

「つまり、オレには今打つ手がない。分かった？」

「な、なるほど」

「なら交渉だ。オレは召喚獣の武器を捨てる。オレの武器は剣が一本に銃が一丁。銃はわざわざ弾丸を取り出してバラしてから捨ててやる。代わりにユリ本人を解放しろ。召喚獣を解放する必要はない。本人だけを解放しろ。どうだ？乗るか？反るか？」

「ちよ、ちよつと考えさせろ」

まあ、正直言つて、このまま奴らの召喚獣を撃ち抜けば問題はねえんだけどな。

そう言つてBクラスのモブAとBがこそこそ話し合うこと数分。

「わ、分かった。ただ、解放する前に先に武器を遠くに投げろ」

「オツケー」

宣言通り、弾丸を抜いて剣と銃を遠くに投げ捨てる。

「よし。人質本人を解放しよう」

解放されるユリ。

「タカあゝー！」

抱き着いてくるユリ。

「よしよし。なら次。場所を変えないか？こんな廊下のだ真ん中でこんなことしているのはただの邪魔。保健室の中に入らないか？そうすれば実質監禁状態にできる。完璧だろ？まあ、無理にとは言わないさ。考えるといい」

少し考えるBクラスの二人。

「……それもそうだな。よし、竹中先生。移動をお願いしますか」

「分かりました」

保健室の中に先ずオレとユリが入って次いで先生。最後にBクラスの二人が中に入り、出入り口の扉の前に仁王立ちする。まあ、オレはベッドの上で胡坐をかいているが。

というか、召喚フィールドを動かしたせいで投げ捨てた武器が召喚フィールドの端に行ってしまった。まあ、いいけど。

「で？お前は何でここにいるんだ？ユリ」

「そ、それは……」

「その女は『神白が姫路のパンツを見て鼻血が止まらなくなって保健室に居る』って書いた紙を見せたらのこのことやってきたぞ」

「……はあ？」

「ピュ〜ピュ〜♪」

するとそつぽを向いて口笛を吹くユリ。

「こつちを見ろ」

「はあ。私が本当に無策でやってきたとお思いですか？」

肩を竦めやれやれって感じを出すユリ。

「ああ、その通りだと思っう」

「まあ、その通りなのですが」

おい。予想通り過ぎるが……

「だって、タカですよ。やりかねないじゃないですか！」

「よし、表に出ろ。一発殴る」

「暴力反対です！ どうせなら殴られるよりキスされたいです」

意味が分かん。

「まあ、本当はタカを舐めたいのですが（ペロペロ）」

「いや、もう頬を舐められてるのだが」

「気のせいですよ（ペロペロペロ）」

「お前は犬か」

「わんわん」

「お手」

「わん（ポント）」

「おかわり」

「わん（ポント）」

「伏せ」

「わん」

「ありがとう」

「つて人の背中を枕にして寝るんじゃないです！」

やれやれ。昨日は人を椅子にしていたくせに。

「なあ、今なら第六天魔王の召喚獣を倒せるんじゃないやねえか？」

「奇遇だな。俺もそう思い始めた」

「どうか、いい加減我慢の限界だな」

「ああ。俺たちに彼女がいらないことをいいことに……！」

「よし、俺が殺りにいく」

「おう。任せた」

すると何やら小声で話す気配がする。

「あーBクラスのお二人。オレの腕輪の能力は『感覚共有』だ。つまり、オレの召喚獣が攻撃されればオレが分かるし、言ったら？共有って。だから、お前らが攻撃しようとするらばオレが分かる。やめといった方がいいぜ」

すると、歯ぎしりのようなものが聞こえたがまあ、いいだろう。二人は召喚獣を動かすことを諦めたようだ。

というか、これだとどっちが人質か分からないな。

「で？とりあえず四時まで後、一時間はあるな。暇だが仕方ないか……」
そういいながら一旦枕にするのをやめたユリの頭を撫でてやる。

「そうそこですくあくもうちよい左ですく」

「ここか？」

「さすがに私専属の撫で師ですく。帰ったらたくさん甘えてあげますからあくそこそこ」

やれやれ、コイツには呆れるよ。今が試召戦争中って分かってんのか？

そんなこんなで三時五十五分。頃合いと思ったオレは動き出した。

「もう、今日の戦争終わりかー何か寝てたら過ぎたな」

「そうですね。こんな楽とは思いませんでした」

あれからBクラスの二人は真面目に見張りをしている。いやー感心感心。

「さて、飽きた」

そう言ううと懐に隠していた弾丸を思い切り投げつける。

「なっ!？」

「お前弾丸を隠し持ってたのか!」

「正解」

その一瞬をについて三体の召喚獣に近づき、Bクラスの二人の召喚獣を回し蹴りの要領で蹴り飛ばす。

「あつ。解放された?」

「後ろに隠れとけ。今からこいつらをぶちのめす」

残り三分と少し。上等だ。

「テメエ不意打ちは卑怯……!」

「人質取った野郎に言われたくねえ!」

刀を振り下ろすもそれを半歩ずらし避けたうえでカウンターパンチをお見舞いする。

「素手なんかには負けるかよ!」

そう言って突撃してくるもう片方。

「素手も割と強いぜ?」

タイミングを合わせ、敵の召喚獣の顔面に裏拳を放つ。

「だったら、こつちを狙うまで!」

「えっ!?!私!?!」

「狙わせるかよ!」

裏拳をモロに喰らった召喚獣を蹴り飛ばし、ユリともう片方の召喚獣の間に割り込ませる。

「な、何て野郎だ。召喚獣を何だと思ってるやがる!」

「クソ、これが第六天魔王の力か……!どうする?一旦体勢を……!」

「おせえよ」

相手の召喚獣に接近。頭を掴んで床に沈める。

「まず一体!ユリ!」

「う、うん!」

盾を構えるユリ。その盾を足場にし、跳躍する。さながら弾丸のように飛んでった召喚獣は、そのまま敵の召喚獣の頭を掴み膝蹴りを喰らわす。これで二体目。

「そ、そんな……!」

「一瞬で……逆転された……」

『Fクラス 黒箱由梨乃&神白崇彰

古典 13点&400点

VS

Bクラス モブA&モブB

古典 Dead&Dead 』

キーンコーンカーンコーン

四時を告げるチャイムが鳴る。一旦休戦だな。

「やれやれ。油断禁物だ。後は、オレを抑え込む方法を間違えたな」

「間違えただと……？」

「ああ。確かにオレには脅迫の類は通用しない。だからユリを人質に取った。でもそれは間違いだ」

「確かに、人質を取ると言うのは人として間違ってたかもしれないな」

「そういうことじゃないんだな」

……お礼を言われるのも悪い気はしないな。

「お礼に私をおんぶして家まで帰ってもいいことにします」

……ん？おれ……いい？

「いいえ。おんぶして帰ってください」

……お礼じゃなくてそれ命令だよな？

「つたく。ほらよ」

「フツフツ。私に背中を向けましたね。あなたの首の後ろがガラ空きですよ」

「あーそうだな」

「では、このまま舐めてあげま……ひゃう!？」

奇声を上げるユリ。

「どうかしたか？」

「ふ、太ももを撫でるのは反則です！そういうのは家でやってください」

「なら、お前も家でのしろ」

「……分かりました」

本当に、この幼馴染は世話が焼けるな……まあ、いいけど。

Bクラス戦と書いて心理戦と読む ③

バカテスト 英語

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good | better | best

bad | worse | worst』

神白崇彰の答え

『good | better | best

bad | worse | worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good — gooder — goodest』

黒☒由梨乃の答え

『bad — bader — badest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。goodやbadの比較級と最上級は語尾に—erや—estを付けるだけではダメです。覚えておきましょう

土屋康太の答え

『bad — butter — bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

☆☆☆

次の日の朝になった。

昨日の放課後は教室に戻ってみると、何故か雄二を筆頭に主力メンバーがいなくなっていたが、特に気にすることなく帰った。

「これより、対Cクラスの作戦を開始する」

そして、昨日何が起きたのかを雄二から説明をオレとユリは受けた。

どうやら、Cクラスが漁夫の利狙っていると情報を掴み雄二たちは協定を結びにいったそう。しかし、それはBクラスの仕掛けた罠。Cクラスの中にBクラスが潜んでおり協定違反とされ攻撃されるも、須川や明久たちのお陰で昨日は生き延びたと。

「で？結局何するの？」

「秀吉にコイツを着てもらおう」

そう言って取り出したのは……うちの学校の女子の制服？え？嘘だろ？

「別に着るのは構わんのじゃが、ワシが女装してどうするんじや？」

いや、男としてはそこは構おう？

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

なるほどな。似ている双子だから為せる業ってことか。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

雄二から制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉。

「……………!! (パシャパシャパシャパシャ!)」

ムツツリーニは何故か凄い速さでカメラのシャッターを切っている。何してんだろ
うか?

「よし、着替え終わったぞい。ん?皆どうしたのか?」

するとオレと雄二を除くFクラスのメンバーが複雑な表情をしていた。

「さあな?俺にもよく分からん」

「おかしな連中じやのう」

「同感」

「んじゃ秀吉、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「崇彰も付いてくるか?」

「分かった」

雄二がオレらを連れて教室を出る。

「あ、僕も行くよ」

後ろから明久が追いかけてくる。まあ、いいか。

そして、少し歩いてCクラス教室前に到着。

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」

まあ、Aクラスの使者になりすますのに、Fクラスの三人がお供としてついてたら不自然だしな。オレたちは離れて様子を見よう。

「頑張ってあいづらを挑発してAクラスに敵意が向くようにするんだ。秀吉ならできるとよ」

「はあ……。あまり期待はせんでくれよ……」

溜息とともに力なくCクラスに向かう秀吉。

「雄二、崇彰。秀吉は大丈夫なの？」

「ああ、多分大丈夫だ」

「それより、静かにした方がいい。秀吉が入っていく」

ここからさすがに聞こえることはないと思うが念には念をだ。

ガラガラガラ、と秀吉がCクラスの扉を開ける音がして……

『静かにしなさい、この薄汚い豚ども！』

……うわあ。

「流石だな、秀吉」

「うん、これ以上はない挑発だね……」

「本当に凄い迫力……」

もうこのままでも勝手にCクラスの敵意はAクラスに向かっていくだろう。

『な、何よアンタ!』

この声は……小山だね。Cクラス代表だからだろうか。というか、伝わってくる声だけで彼女の怒りが分かるよ。

『話しかけないで!豚臭いわ!!』

おかしいな。君、自分から話しかけたよね?

『アンタ、Aクラスの木下ね?ちよつと点数が良いからって良い気になってんじやないわよ!何の用よ!』

勝手に誤解ありますがどうぞごさいます。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるってだけで我慢出来ないの!貴女たちなんて豚小屋で充分だわ!』

『なつ!言うに事欠いて、私たちにはFクラスがお似合いですって!』

おかしいな。別にFクラスとは言っていないんだけど。

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女たちを相応しい教室に送ってあげようと思うの』

本当にいつかFクラスに送ってやりたい。

『ちよつと試召戦争の準備もしてみたいだし、覚悟しておきなさい。近いうちに薄汚い貴女たちを始末してあげるから!』

靴音を立てながら帰ってきた秀吉。

「ふう、これで良かったかのう？」

「ああ、素晴らしい仕事だった」

「グツジョブ」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

Cクラスからヒステリックな叫び声が聞こえる。うん。作戦大成功。

「作戦も上手く行ったことだし、俺たちもBクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん」

「ほーい」

さあ、やろうか。

☆☆☆

「雄二っ！ 崇彰っ！」

あの後予定通り午前九時よりBクラス戦は再開された。オレはFクラスの本陣に向

かい、ユリは前線に送り込んだ。ただ、ユリには後方で待機して何もするなと言ってある。また、人質に取られる可能性が無きにしても非ずだからだ。

そして、オレが雄二と共に現状戦力の確認やDクラスへの指示出しのタイミングについて話し合っていたそんな中、明久がやってきた。

「うん？ どうした明久。脱走か？ チョキでシバくぞ」

「じゃあ、オレは蹴るよ」

「話があるんだ」

「……とりあえず、聞こうか」

「……………分かった」

どうやら今はジョークを言えるような雰囲気じゃないようだ。あのバカな明久が真面目な顔でこつちを見ているのだ。こつちも真面目な雰囲気で彼の話を聞こう。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

……………はい？

「……………お前に何があつたんだ？」

思わず聞き返すオレと雄二。

「ああ、いや、その。えーつと……………」

でも、明久にはそんな趣味があつても不思議じゃないか。

「まあいいだろう。勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやろう」

「で？それだけなの？」

呆れた感じで返すオレたち。いやねえ、だって真面目な顔で男の着ている制服が欲しいとか言い出すもん。呆れても不思議じゃない。

「姫路さんを今回の戦闘から外してほしい」

「理由は？」

「理由は……言えない」

なるほど。訳アリか。

「どうしても外さないとダメなのか？」

「うん。どうしても」

顎に手を当てて考えるオレと雄二。

正直に言うならオレの腕輪と姫路の腕輪。召喚獣の武器や性能から間違はなく姫路の方が今回の作戦には適任……いや、そもそもオレがこの作戦では役不足なんだ。

「頼む、雄二！崇彰！」

深く頭を下げる明久。はあ。

「分かったよ明久」

「本当に!？」

そこまでしたら断われないだろうが。

「ただ、条件がある」

「条件？」

「ああ、姫路が本来担うはずだった役割をお前がやれ。どんな方法でもいい。成功させる」

まあそりゃそうだな。

「もちろんやってみせる！絶対に成功させる！」

「良い返事だ」

「それで、僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃をしかける。科目は何でもいい」

「皆のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラスの教室の出入り口は今の状態のままだ」

「……難しいことを言ってくれるね」

まあ、仕方のないことだろう。現状、戦闘はBクラスの前後の扉の二ヶ所で行われているらしく、場所の条件から常に1VS1の状況になっている。そんな中、教室の奥にいる根本君に近付くには圧倒的な個人の火力が必要不可欠だ。オレにも無くはないが、あんまり使いたくないんだよなあ……オレの腕輪。

「もし、失敗したら?」

「失敗するな。必ず成功させろ」

雄二の口調は何時になく強かった。

「それじゃ、うまくやれよ」

「え?どこか行くの?」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

教室を出ていこうとする雄二。

「明久」

その雄二が明久に声をかける。

「確かに点数は低いが、秀吉やムツツリー二、崇彰のように、お前にも秀でている部分はある。だから俺はお前を信頼している」

「……雄二」

「うまくやれ。あと、その崇彰は好きに使ってもいい」

そう言い残し、教室を後にする。……やれやれ。勝手に言ってくれるよ全く。

「さて、明久。オレらはどうする?」

別に幾つか策はある。ただ、雄二は明久に託したんだ。なら、オレは何も言わず明久に従うのが筋だろう。

「……ねえ、崇彰。こういうのは……どう？」

明久が端的に作戦を伝えてくる。

「……………マジ？」

「うん」

あまりにバカげた作戦に思わず問い返してしまう。

「分かった。やろうか」

まさか雄二の奴。これを見越してオレを置いてったのか？

☆☆☆

「二人とも、本当にやるんですか？」

Dクラスに召喚獣勝負の立会人として呼ばれた英語の遠藤先生がオレたち二人に念を押す。

「はい。もちろんです」

「コイツとは一度決着をつけないといけないんです」

向かい合うのはオレと明久。

「でも、それならDクラスでやらなくても良いんじゃないですか？」

「仕方ないんですよ。コイツは《観察処分者》です。オンボロのFクラスで召喚したら、召喚獣の戦いの勢いで教室が崩れちゃう可能性があるのです」

「もう一度考え直しては」

「いえ。やりませぬ。崇彰には日頃の礼と日頃の恨みを晴らさないと気が済みませぬ」

有無を言わさぬ口調で言い切る明久。

「——わかりました。お互いを知る為に喧嘩をするというのも、教育としては重要かもしれませぬね」

大きく息をつき少し離れフィールドを展開してくれる。

「試獣^{サモシ}召喚！」

お馴染みの召喚獣。

「行けっ！」

オレの召喚獣目がけて駆け出す明久の召喚獣。木刀を強く握りしめ、壁を背にしたオレの召喚獣に対し、駆ける勢いを乗せて大きく拳を振るう。

ドンツ！

「ぐ——うっ！」

当然そんなモーシヨンの大きな攻撃はたやすくかわす。

「次はこっちの番だ！『感^リ覚^ン共^ク有^グ』！」

壁に攻撃した状態でいた明久の召喚獣めがけ、拳を振るう。当然だが、そんな大振りの攻撃は躲され……

ドンツ！

「くっ……っ！」

壁に直撃し、脳天から爪先まで激痛が走る。

何でオレは観察処分者では無いのに物理干渉が行えてフィードバックがあるのか。

オレの召喚獣の腕輪は、昨日言っていた能力とは違う。昨日のアレはブラフというか何と言うか。ともかく、本来の能力は『攻撃力と敏捷性を二倍にし、フィードバックと物理干渉を得る』というもの。コストは400点以上の時に400点に点数を合わせ

る。

要するに、今のオレの召喚獣は明久仕様の召喚獣と一緒にわけてだ。

「アキ、神白、時間がないわよ」

壁にかけてある時計を見上げながら一緒に来ていた島田が告げる。

現在の時刻は午後二時五十七分。作戦開始まであと三分。

『お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に集まりやがって、暑苦しいところの上ないっての』

『どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』

根本と雄二の声が聞こえる。姫路が参加できない分、雄二率いる本隊まで出動せざるを得なくなったのだろう。

「らあっ！」

大振りの明久の召喚獣の拳が再び壁に叩きつけられる。

『はア？ギブアップするのはそっちだろ？』

『無用な心配だな』

『そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

『……お前らじゃ役不足だからな。休ませておくさ』

『けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよお』

『負け組？それはお前のことになるだろうな』

「はああつ！」

二人合わせて四度目の攻撃。再び激痛がオレの身体を襲う。

よく見ると拳が既に紅く染まっている。

『……さつきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？』

『さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

『けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

『……態勢を立て直す！一旦下がるぞ！』

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！』

「二人とも、そろそろよ」

「うん。わかっている」

「おう。任せとけ」

周りにいる奇襲部隊の皆にも目配せをする。

皆は黙って頷いてくれた。

「吉井君、神白君。二人とも何をしようとしているのですか？」

困惑する遠藤先生がオレたち二人を交互に見る。

そう。問題はこの先生に召喚獣を戻される前に決着をつける必要があるということ。もし、決着が付かなければ直接殴って破壊しないといけなくなるから。

「「おおおおおおっ！」」

腹の底から力を込め、雄叫びを上げる。

これがオレたちの最後の一撃だ。

『あとは任せたぞ、明久！崇彰！』

敵の本隊を引き付けた雄二が、壁の向こう側からよく通る声で告げて来る。

ジャスト午後三時。作戦開始。

「「だああーっしやあーっ！」」

「くっ！近衛部隊か！」

オレたちと根本の距離は20メートル程度。広い教室のせいで随分と距離があるため近衛部隊はすぐさまカバーに入る。

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だったな！お前らの奇襲は失敗だ！」
取り繕うように笑う根本。

「お前から神白を最優先で警戒しろ。奴は姫路に次いで危険だ」

あーあ。ここまで警戒され、身を固められたら、確かにオレたちの奇襲は失敗だ。既に周りを近衛部隊全員に取り囲まれているしな。こうなった以上、オレたちにこの状況を打開はできない。

だがオレたちの役目はすでに達成した。

ダン、ダンッ！

出入口を人で埋め尽くされ、四月とは思えないほどの熱気がこもった教室。

そこに突如現れた生徒と教師、二人分の着地音が響き渡る。

エアコンが停止したので、涼を求める為に開け放たれた窓。そこから屋上よりロープを使って二人の人影が飛び込み、根本恭二の前に降り立った。そう。体育教師だからこ

そでできる荒業だ。

「……………Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ……………！」

「……………Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムツツリイニイーツ！」

オレたちが近衛部隊を引き付け丸裸になったので、根本にもう逃げ場はない。

「——試獣^{サモモン}召喚」

『Fクラス 土屋康太』

保健体育 441点

VS

Bクラス 根本恭二

保健体育 203点』

ムツツリーニの召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

これにて、Bクラス戦は終結。

怪我人と書いて保健室行きと読む

バカテスト 保健体育

問 以下の問いに答えなさい

『女性は（ ）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

黒☒由梨乃の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。黒☒さんにとってもコレは簡単でしたかね。

神白崇彰の答え

『誕生日』

教師のコメント

何回第二次成長期になるのですか？

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳しくすぎです。

☆☆☆

「明久に崇彰よ。随分と思いつた行動に出たのう」

終戦後、秀吉がBクラスにやって来るなり、そんなことを言い出す。

「うう……。痛いよう、痛いよう」

「……てか、血が止まらねえんだが」

ただ、そんなことより手が痛い。ついでに血も出て床に血だまりを作ってたし。まあでもそれは当然か。痛みが100%ではないが跳ね返ってくるというのに、召喚獣が素手で鉄筋コンクリートの壁を殴っていたんだ。その痛みは並大抵じゃない。

「なんとも……。お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もつと褒めても良いと思うよ？」

「後の事を何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「……遠回しに馬鹿って言ってない？」

「いや、ストレートにバカって言われてるぞ」

というか、学校の壁を破壊した以上、この後の放課後の予定は職員室でのハートフルコミュニケーションで埋まってしまうなあ……。はあ。巻き込まれただけなのに。

「タカツ！」

「ん？ユリじゃないか。どうした？」

血が出てない方の手を掴むユリ。

「ほら、行きますよ」

「……え？どこに？」

「保健室です」

「何しに？」

「その手の手当のためですよ！」

あーなるほど。でも、戦後対談が……

「あー崇彰。こっちは任せとけ」

「ん。じゃあ、行ってくる」

そしてそのまま連れてかれる。というか、少し歩くペース早くない？

「そこに座ってください」

とりあえず言われるままにベッドに腰掛ける。一つ思う。この学校に養護教諭の先生はいないのか？いやねえ、前もいなかったし、普段からあんまり見たことないし。

「全く、バカなことしましたね」

「アハハ……」

そう言いながら手早く処置していくユリ。あれ？

「これでよし」

「なあ、ユリ」

「何でしょう？」

「お前バカなのに、応急手当の方法知っていたんだ」

「そこは感謝するところですよね!？」

「いやいや、素朴な疑問だよ。だって……ねえ。」

「はあ。いいですか？あのタカがポロポロになった時から私がある程度は応急手当だけは出来るように頑張って勉強したんですよ」

「そうか」

「褒めてもいいですよ」

「調子に乗らない。もっと他のことも勉強しろ」

「全く……ささてと、」

「戦後対談もまだ途中だろ。行って来るか」

「タカ!」

ドンッ

急にベッドの上に押し倒し、上に乗ってくるユリ。

「やれやれ。今度は何だ？」

「絶対安静です」

……はい？

「だから絶対安静です」

いや、そんなの聞いたことないんだが？

「じよ、冗談は——」

「絶・対・安・静！」

「——分かったよ」

そしてそのまま抱き着いてくる。うん。一つ言わせてもらおう。

「……絶対安静って言葉知ってる？」

その言葉に顔を背け、返答しなかった幼馴染を見て、涙が出そうだった。



あの後、戦後対談が終わったタイミングで、吉井さんが自分の手当の為か、保健室にやっつけてきて、私がタカの上に馬乗りしている状態が見つかり、『死に晒せえええええ！』とか言っただけでタカに襲いかかっていました。私？私は吉井さんが襲う寸前にタカの上から避難したので絵図としては男子生徒二人が保健室のベッドの上で激しく絡みあっていましたね。なんともまあ、一部の人に需要の高いプレイを見せつけることで。私？私はノーマルですよ？

とまあ、激しい運動中に放送でタカと吉井さんが職員室に呼び出され、二人は行ってしまいました。お説教でしょうね。ドンマイ。

私は珍しく自分の家に一人で帰って、とりあえず、絶対安静という言葉を調べます。決して分らなかったわけじゃないですよ！ただ、度忘れしちゃっただけなのです！で、その後はタカの家で夕食を作ったりお風呂を沸かしたり、洗濯物を畳んでおいたり……あれ？もしかしなくとも私って主婦スキル高い？

そんなことを考えているとタカがタカの家の方に帰ってきました。予想通りです。説教までされて、心身共に疲労を感じているであろうタカは自分の家に入ると踏んでい

ました。さすが私。

「おかえりなさいタカ。お風呂にする？ご飯にする？それとも——わ・た・し？」

「ただいま……おやすみ」

そのまま倒れ込むタカ。ギリギリ支えますが……ぐぬぬ。重いです。非力でかよい私にとつては重いです。というか、明らかにボロボロになつていませんか？保健室から二人仲良く（？）職員室に向かった時よりも。……まあ、西村先生のことですから言葉だけじゃなく拳でも語られたのでしよう。おかげでタカがボロ雑巾のようです。

「ほら、起きて下さい」

「あー悪い。寝かけてた」

私の支えなしで立ち上がるタカ。ですが、如何にも眠たそうな雰囲気です。やれやれ、世話のかかる幼馴染です。

「いただきます」

「いただきます」

手を合わせて今にも寝ようとするタカの隣で食べ始めます。まあ、仕方ないので食べさせてあげました。ここまで疲れているタカはレアです。この男、体力はある方ですから中学時代の部活でもそうそうここまで疲れることは無かったです。

食べさせた後は、一まず片付けをして、タカの部屋に鞆などの荷物を置いて代わりに

着替えを。あれ？ここまで出来る私ってやつぱり有能？

そのまま風呂に。今のタカだと一人で入れるには心配です。ということでも私も一緒に入ります。……まあ、心配というのは建前で本音は一緒に入りたいたいだけなんですけどね。何か、一人でお風呂に入ったことが少なすぎて未だ心細かったりします。特にアレですよ！髪洗ってる時とか後ろに誰か居ないか不安じゃないですか！幽霊とかお化けとかゴーストとか……うう。だからタカが一緒だと安心します。……というか、タカは万が一そういう類のものに会っても驚かないと思いますね。

「あーちよつとは目が覚めたわ」

風呂場の中でようやく少し目が覚めたらしいタカ。

「もう上がりますよ？」

「へいへい」

確かお風呂に浸かると血行促進作用？があるんですけどつけ？まあ、念には念をです。というか、タカが目覚めてくれて助かりました。だって、脱がすのは辛うじて本人にもやってもらいましたが、私ではタカのお着替えは普通に無理です。特に意識のない人って普段より重く感じるので尚更です。

「さて、寝るか」

「そうですね」

パジャマに着替えた私は布団に入ったタカと同じ布団に入ります。

「……ちよつと待て」

「何ですか？ トイレなら早く行ってきて下さい」

「……え？ お前と寝るの？ 俺疲れてんだけど」

意味が分かりませんが、タカは無理やり私を追い出したりせず最終的には折れてくれると信じています。というわけでおやすみなさい。

「……すやあ」

「……起きてるだろお前……はあ」

なんだかんだ言いながら頭を撫でてくれます。そうそう。タカは撫でるのが上手いです。だから思わず抱き着いちゃいますね。あ、いい感じに睡魔が……

次の日の朝。何故か疲れていたタカがいましたが気にしません！ 気にしたら負けです！

大化の改新と書いて切り札と読む

バカテスト 生物

問 以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希の答え

『①脂質 ②炭水化物 ③たんぱく質 ④ビタミン ⑤ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

神白崇彰の答え

『①ビタミンA ②ビタミンB ③ビタミンC ④ピクミンD ⑤ビタミンE』

教師のコメント

ビタミンシリーズと思いきや一つだけピクミンになっていますよ。

黒田由梨乃の答え

『①食事 ②睡眠 ③トイレ ④風呂 ⑤タカ』

教師のコメント

今は生物の時間ですよ？後、⑤は神白くんのことでしょうか？相変わらず仲は良好のよう。

吉井明久の答え

『①砂糖 ②塩 ③水道水 ④雨水 ⑤湧水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時は遅発月経、更に十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

☆☆☆

点数補給のテストも終えて二日後の朝。

残るはAクラス戦。Fクラスにて、最後の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周り連中には不可能だと言われていたのにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があつてのことだ。感謝している」

壇上にて素直に礼を言う雄二。

「ゆ、雄二。どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。何かヤバいものでも食べたか?」

「らしくないのは、自分でも思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

でも、Fクラスのオレたちがここまで来たんだなあつて思うと感慨深いものもある。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すれば良いつてもんじゃ無いと言う現実を、教師に突きつけるんだ!」

『おぉーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

最後の勝負の前に、Fクラス皆の心は一つになった気がした。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着を付けたいと考えている」

それは先日の昼食時にユリが聞いた話を聞いていたので驚くことはなかったけど。聞いていない他の人たちはかなり驚いていて、教室中がざわついている。

『どういふことだ?』

『誰と誰が一騎討ちをするんだ?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバンと机を叩いて周りを静かにさせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

翔子……あー、Aクラス代表の霧島翔子のことか。

「馬鹿の雄二が勝てる訳なああっ!?!」

明久が素直に思つた事を口走り、雄二はカッターを投げて明久の頬を掠めた。

「次は耳だ」

「この二人は友達なのだろうか?」

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目は無いかもし

れない」

それを認めているのなら何故カッターを投げつけたのだろうか。

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろうか？ まともにやりあえば俺たちに勝ち目は無かった」

しかし、オレたちFクラスは今こうして勝ち進んでいる。

「今回だつて同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない」

「そういや、コイツはどうやって勝つつもりなのだろうか。一騎打ちと言つてたのは知ってるが具体的にどうするつもりかは知らない。」

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」
『おおおーっ!!』

まあ、ここまで導いてきた雄二の言葉には重みがある。それを分かっているのでFクラスの全員はアイツの言葉を信じている。

「さて、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」
「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

秀吉の質問に雄二は自信満々に答える。でも、日本史？ 雄二の方が日本史は上なのか

「いや、そんなの聞いたことないが……。」

「ただし、内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

しかも、小学生程度のレベルで満点の上限あり。これは流石に想像外。

小学生レベルだから満点前提の上注意力勝負に持ち込むつもりか？それにしても随分リスクな賭けだ。

「でも、同点だったら、きつと延長戦だよ？そうだったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言うとおりじゃ」

明久と秀吉が聞き返す。延長戦云々以前に何故小学生レベルの問題で戦おうとするかが疑問だと思うけどなあ。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言う物か」

「??それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」

「いや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題も無いだろう」

そりゃそうだ。俺でもユリに邪魔されながら受けても満点取れる自信はある。

「雄二。いい加減に、タネ明かしをしたらどうだ？」

オレの言葉にうなづくFクラス一同。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

かぶりを振って、雄二は改めて口を開く。

「俺がこのやり方採った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

ある問題？小学生レベルの日本史でだと？

「その問題は——『大化の改新』」

大化の……改新？

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もつと単純な問いだ」

「単純というと……何年に起きた、とかかのう？」

「おっピンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」
 よりよって年号かよ。雄二。いくら何でもそれは間違えないだろ。

「はあ。雄二。そんなのユリでも分かるよ。なあ？」

「そうですよ。『いいハゴ¹作¹ろう⁵、大化の改新』で1185年ですよ。全く。私でもこ

んな簡単な問題……あれ？タカ。何で泣きそうな感じで頭を抱えているのですか!？」

「はあ。違うよ黒箱さん」

「え？何がですか？」

『鳴くよウグイス、大化の改新』で794年だよ。やれやれ、崇彰も大へ……あれ？何で崇彰は更に頭を抱えているの!？僕どこか間違えた!？」

もうヤダ……このバカ二人。

「大化の改新は645年だ……バカたちが」

「ええっ!？」

「ユリ。明日の夜みっちり勉強を叩き込んでやる」

あー何故こんなに壊滅的なのだろうか。

「コホン。この問題は翔子も間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

しかし、現実は甘くなかった。……的なの？

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲がいいんですか？」

そういや、雄二は霧島のことかなり親し気と呼んでいたな。珍しい。

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

なるほど。

「総員、狙ええっ！」

「なっ!?なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える!？」

「黙れ、男の敵! Aクラスの前にキサマを殺す!」

「俺が一体何をしたと!？」

クラスの三人の男子を除いた残りの男子の意見は一致した。

「遺言はそれだけか? ……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえ付けた後で口に押し込む物だ」

「了解です隊長」

「皆も左足と右足で分けておくように。右足は雄二、左足は崇彰用にね」

『了解っ!』

明久。君はいつから、隊長になったんだい? 後、オレを巻き込むな。

「てか、明久。何でオレも処刑対象なんだ?」

「黙れえっ! この他校に彼女もいて、そこに綺麗な幼馴染もいるこの外道野郎が!」

「まあ、ユリが綺麗という事と他校に彼女がいる事は認めよう。ただ、外道というのは頂けんな」

「た、タカもカツコイイですよ！それはもうかなり！」

「よしよし。褒めても明日、勉強で地獄を見せる事は確定だけだな」

「いじわる……」

お前のためだ。この阿保が。

「あの、吉井君」

「ん？何、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「……………」

「え？何で姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの!?!それと美波、どうして君は僕に向かつて教卓なんて危険な物を投げようとしているの!?!」

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

パンパンと手を叩いて取り持つ秀吉。

「む。秀吉は雄二と崇彰が憎くないの?」

「冷静に考えてみるが良い。崇彰の相手はともかく、雄二の相手はあの霧島翔子じゃぞ?男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

秀吉の言葉に明久たちは思い出したかのような顔になる。あーそういうこと。

「むしろ、興味があるとすれば……」

「……そうだね」

明久たちは一斉にある少女の方を見る。

「な、何ですか？もしかして私、何かしましたか？」

慌てる姫路。視線は彼女に集中する。

噂だと霧島は女子が好きで男には一切興味が無いと言われてるが、まあデマかな。どっちかというと一途に思う誰かさんがいて振り続けた結果こんなデマが流されるようになったのだろう。予想だけど。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

「嘘を教えるとか最低のクソ野郎で幼馴染持ちの風上にも置けない外道野郎だな」

「言い過ぎだろ……」

だって、オレですら嘘を教えたことはないよ。

「アイツは一度覚えた事は忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

へえーそんなに記憶力がいいんだ。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は——」

『システムデスクだ！』

Aクラス戦と書いて命懸けと読む ①

バカテスト 国語

問 以下の意味を持つ四字熟語を答えなさい。

『手に何も持っていない、素手であること。』

神白崇彰の答え

『徒手空拳』

教師のコメント

正解です。他にも『資金・地位など頼るものがなく、自分の身一つであること』という意味もありますね。

黒田由梨乃の答え

『裸の王様』

教師のコメント

違います。手に何もないだけで服は着てるはずです。

吉井明久の答え

『縛りプレイ』

教師のコメント

RPGでの上級者のゲームスタイルですか？違うと言っておきましょう。

土屋康太の答え

『全裸装備』

教師のコメント

用紙に血の跡がついてますが君は何を想像しているんですか？

☆☆☆

時刻は十時。一騎打ちの会場はAクラス。

「では、両名共準備はよろしいですか？」

オレが昨日の疲れから寝ている間に、雄二、明久、秀吉、ムツツリーニ、姫路の五人が宣戦布告に行っていた。まあ、ユリのお陰で寝ていてもオレに危害はなかったが。

「ああ」

「……問題ない」

宣戦布告からの交渉の結果。一騎打ちを五回行い三回勝った側のクラスの勝ち。オレたちは三回、Aクラスには二回、一騎打ちで使用する科目の選択権が与えられ、負けた方は勝った方の命令を何でも一つ聞くらしい。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよ」

Aクラスからは秀吉の姉が。

「崇彰。任せた」

「ふあゝい」

Fクラスからはオレがでる。

「科目はどうしますか?」

「何でもどうぞ」

「アタシも何でもいいわ」

「それでは、ランダムで」

Aクラスにある巨大なディスプレイ。そこに出された教科は……

「科目は数学です」

「試験召喚」

少ししてから再びディスプレイに表示される点数。わぁーディスプレイって便利だね。

『Fクラス 神白崇彰』

数学 405点

VS

Aクラス 木下優子

数学 341点』

『おぉーっ！』

点数差約60点。

「『感覚共有』」

さて、始ますかふぁあぁあぁあ。

☆☆☆

戦いが始まって数分後。

『Fクラス 神白崇彰

数学 306点

VS

Aクラス 木下優子

数学 341点』

点数が逆転していた。

「ね、ねえ。雄二。崇彰ってあんなに召喚獣の操作下手だっけ？」

「そんなことはないはずだ。しかも腕輪の能力的にもこの状況はおかしい」

後ろで会話する明久と雄二。

「まさか、崇彰のやつ。ワザと負けるつもりか？」

「ええっ!？」

「あー多分違いますよ」

「どういふことだ。黒☒」

「タカは昨日いろいろあつてちよつと疲れたらしいんです」

「そう言えば宣戦布告に行く時寝てたね」

「はい。体力温存とか体力回復とか言つて」

「だが、それと今の状況に何の関連がある」

「要するに、今のタカはやる気スイッチがオフの腑抜け状態なのです」

お、ユリ正解。まだ回復が中途半端な状態で叩き起こされて、正直頭は回んねえし、眠いし急いし……あ。

『Fクラス 神白崇彰 306↓273点』

腕いたいなあ……おまけにフィードバックで痛いし。散々だな。

「ど、どうするのさ!？」

「クソ、何とかして崇彰にやる気を出させる方法はないのか!」

後ろで騒ぐ二人。

「ねえ、神白くん。それ本気?」

「まあ、今のオレが出せる全力ではあるかな」

「そう。点数はアタシよりあっても、所詮Fクラスなのね。総合的な実力ではアタシに及ばない」

そう言うのと、オレの武器を弾き、遠くに飛ばす。

「武器も無い。もう、降参したら？アタシ。弱いもの虐めは好きじゃないの」

まあ、正直降参してもいいかもしれないけどなあ……

「降参はしないさ」

さすがにそれは……ねえ。

「そう。なら一撃で葬ってあげる」

ランスを構え突撃してくる木下の召喚獣。

「わわっ。どうしよう雄二。このままじゃ負けちゃうよ」

「クソ。どうすれば……」

「ここは私に任せて下さい」

「黒×さん！そうか、黒×さんなら……」

「何でもいい。とにかく任せただぞ」

「ええ。タカッ！」

「何だ？ユリ」

バックステップで木下さんの召喚獣の突撃が当たる時間を稼ぐ。一応、ユリの言葉を聞いておきたいしな。そうは言っても後数秒で当たりそうだが。

するとユリは息を吸って告げた。

「タカが勝つたら私のスカートを捲らせてあげます!」

『『何いつ?!』』

A、Fクラス男子による大合唱。ふっ。

「どうせ、スパッツを履いてるんだろ?」

「え?履いてませんよ」

「……………」

バシッ

「なっ……………」

左手で木下の召喚獣のランスを受け流し、

「悪いな木下」

ガンッ

木下の召喚獣の顔面に右足で蹴りを放つ。

『Fクラス 神白崇彰 273↓269点

Aクラス 木下優子 341↓317点』

お互いの召喚獣の点数に修正が入る。完璧に受け流したつもりだったが、少しダメー
ジが入ったか。

木下は自身の召喚獣に距離を取らせ、オレの召喚獣と向き合う形になる。

「ここから先は本気だっ！」

駆け出すオレの召喚獣。さつきまでのやる気なしの空気は既に感じない。

「ナイスだ黒」

「く、黒さん。さ、さつきの本気？」

「え？私嘘はつきませんよ？」

「これで、崇彰のやる気は出たが、この点数差をどうするかだな」

「クソオ。崇彰め……無残に負ければいいのに……！」

「おいおい。アイツに負けられるとこっちもキツイんだよ」

「この思殺意いだけで崇彰を殺せたら……！」

「殺すなつての」

「でも、もう少しやる気を出させたら強くなるのでは？」

「まあ、アイツが意外に単純って事は分かったし、好きにしたらどうだ」

「分かりました」

後ろが何を言ってるかはよく分からないが、

「くっ、さつきまでとは動きが全然違うじゃない！武器も持っていない丸腰なのに」

「悪いね。オレは武器より素手の方が強いから」

武器より素手での戦闘の方がしつくりくる。やっぱ、召喚獣と感覚を共有してるからか？

『Aクラス 木下優子 317↓206点』

よし、大分削った。ここは一丁やりますか。

「行くぜっ！」

一旦距離を取って助走をつけて殴りかかる。

「タカツ！」

助走によるスピード。このスピードによって生じた運動エネルギーを拳から相手の召喚獣に伝えれば、ある程度はダメージになるはず。さあ、この勢いをつけたオレのパンチを喰らいやが——

「タカが勝つたら一緒に寝てあげます！」

『『何いつ!?!』』

ゴンツ

オレの拳は命中した……床に。あまりの衝撃にコケてしまったのだ。平坦な場所なのに。

「えー……。寝るのはちよつと……」

（（あからさまにやる気が下がったあ!?!））

いや、だつてねえ。ユリ。寝相悪いもん。この前だつて寝てる最中、ユリにオレはベツトから蹴落とされたし。本人無自覚だけど。うん。それに寝起きも悪いから一緒に寝てあげるといふのはぶつちやけオレが言うことだと思う。

「余所見厳禁よ!」

ザクツ

「ああつ!?!肩が凄い痛いんですけどお!?!」

見ると、木下さんの召喚獣のランスが肩に刺さっていた。

『Fクラス 神白崇彰 269↓207↓36点』

気付けば二桁突入。まだランスがそこまで深く刺さってなかったから戦死は免れた

が……。軽く5倍以上差があるしなあ。あれ、これって、勝ち目なくね？

「お、おい黒☒！崇彰のやる気が元に戻ってるぞ！」

「あ、あれえー？おかしいですね。何故やる気が下がってるのでしょうか？」

「崇彰が妬ましい……………」

「な、何とかしてくれ！」

「わ、分かりました」

ランスを強引に抜いてその辺に捨てる。クソ、肩がいてえぞ。

「タカッ！」

三度目の呼び掛け。いい加減にしてほしいと思い始めた。

「今度は何？」

「タカが勝つたら……………今度裸エプロンをしてあげます！」

『『『何いっ!?!』』』

ブシヤツ

あまりの一言に鼻血を出す生徒が数名。

『た、大変だ！ムツツリーニの鼻血が止まらねえ！』

『誰か救護班を！ムツツリーニの血を止めるんだ！』

『誰か！こつちも数名被害者が！』

『ええい！生き残ってるものの半分は救護班を編成！半分は神白崇彰の処刑準備だ！』
『『了解っ！』』

後ろが騒がしいが関係ねえ！

「さ、さつきより動きが速くて複雑に!?どうなってるの!？」

「オラオラオラア！」

「ほ、防御が間に合わないっ！」

「こうなりや手数勝負だ。」

「たとえ、一発で一点しか減らないとしても、200発殴って蹴れば関係ねえ！」
数分後。

『Fクラス 神白崇彰』

数学 36点

VS

Aクラス 木下優子

数学 DEAD』

「アタシが……負けたの？」

そこには、地に伏した木下の召喚獣と、それを見下ろすオレの召喚獣が残っていた。

「しよ、勝者。Fクラス」

あまりの事に高橋女史も驚きを隠せない。

「オレの勝ちだ！」

Aクラス戦第一回戦。

Aクラス、木下優子VSFクラス、神白崇彰。

勝者Fクラス、神白崇彰。

Aクラス戦と書いて命懸けと読む ②

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

高橋先生が二回戦のコールをすると、Aクラスから佐藤美穂が出る。え？オレの処刑？既に処刑に来た奴はAクラスの床にキスしているが何か。

Fクラスからは……

「よし。頼んだぞ、明久」

「え!?!僕!?!」

明久出陣。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

「安心しろ。オレも信じている」

自信たっぷりにおれたちは明久に告げる。

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出させてこと?」

「ああ。もう皆に隠さなくても良いだろ」

「この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

『おい、吉井って実は凄い奴なのか？』

『いや、そんな話は聞いた事は無いが』

『いつものジョークだろ？』

Fクラスの救護班からは信じていないような感じで言っている。ちなみに処刑犯は始末したが救護班は始末していない。だって、齒向かったやつしか倒してないもん。

「吉井君、でしたか？あなた、まさか……」

対戦相手の佐藤は明久を見て戦く。

「あれ、気付いた？」ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちやいない」

袖をまくって手首を振ってる明久。そんな動き召喚獣同士の戦いには全く関係ないが。

「それじゃ、あなたは……」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕——」

明久が大きく息を吸って、この場にいる全員に告げる。

「——左利きなんだ」

『Fクラス 吉井明久』

物理 62点

VS

Aクラス 佐藤美穂

物理 389点』

明久の召喚獣は瞬殺されて敗北した。

「勝者、Aクラス」

高橋女史の淡々とした勝者宣言。先ほどとは大違いで冷静だ。

「このバカー！テストの点数に利き腕は関係無いでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで痛んでいるのに、更に殴るのは勘弁して！」

まあ、明久の召喚獣の操作能力がオレより上だとしても、六倍以上の点数差があったら勝ち目もゼロに近いよね。

「よし。勝負はここからだ」

「そうだね。これでイーブンだし」

「ちよつと待った雄二に崇彰！アンタら僕を全然信頼して無かったでしょう！」

「信頼？何それ？食えんの？」

「信頼？負ける方に信頼してたよ」

「……………本気を出した左腕でお前らを殴りたい!!」

まあ、明久なら1%ぐらいの確率で勝てると思ったよ。というか、Aクラスに勝てる可能性があるのはオレと姫路の単騎としての力。ムッツリーニの保健体育と雄二の作戦しかないんだ。ここで明久は出ざる得なかったんだよなあ。

「では、三人目の方どうぞ」

「……………(スック)」

三回戦のコールに血だらけのムッツリーニが立ち上がる。

ここで科目選択権が効いてくる。ムッツリーニの得意科目である保健体育。その単発勝負ならAクラスにも負けていない。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは…………誰かよく分からない人が出てくる。転校生か？

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

やっぱり。

「教科は何にしますか？」

工藤が自己紹介を終えると同時に高橋先生がムッツリーニに尋ねる。

「……………保健体育」

ムッツリーニの唯一にして最強の武器が選択される。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

「工藤が余裕な顔をしてムツツリーニに話しかける。うーん。そんな余裕でいいのかな？」

「でも、ボクだつてかなり得意なんだよ?……君と違って、実技で、ね♪」

ブシヤア

ムツツリーニの鼻から血が出てきた。

「そつちのキミ、吉井君だっけ? 勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか? 勿論実技で」

今度は明久に誘いをかけて来た。

「フツ。望むところ——」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ!」
「そうです! 永遠に必要ありません!」

「……………」

「島田に姫路、明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」
「その辺でやめてあげて」

今の彼を見ると凄く悲しくなってくる。

「つ、土屋君!?! 大丈夫ですか!?!」

すると、高橋女史が血だらけで倒れるムツツリーニに声をかける。

「ムツツリーニ!?大丈夫か!」

慌ててオレ、雄二、明久の三人も駆け寄る。

「……………すまない」

「そんな!ムツツリーニ!」

「畜生!さつきまでの出血に加え、今ので限界が来たのかよ!」

「……………先に……………逝く(カクツ)」

「ムツツリーニイー!」

「秀吉!輸血パックを!大至急だ!」

「分かったのじゃ!」

「明久!ムツツリーニを安全なところまで運べ!」

「わ、分かった!」

明久がムツツリーニを運び、急ぎ秀吉が輸血の準備に取り掛かる。

「どうする雄二。科目が指定されちまつてる」

「ああ、姫路をここで出すわけにもいかないな……………」

そう。相手の実力が未知数な以上、ここで無闇に姫路を出したくない。

「どうする?降参するか?」

「いや、今後のためにも戦力は把握したい。誰かぶつけた方がいい」

確かに、それもそうか。

「なら、ユリを出すか」

「そうだな」

「高橋女史。ムツツリーニの代わりにユリを出していいですか？」

「ええ。異例の事態ですので」

「黒☒！代理で行ってこい」

「分かりました」

オレたちが下がり、代わりにユリが出る。

「思い切り行ってこい」

「分かっています」

ユリにそう告げた後、下がるオレと雄二。隣ではムツツリーニの輸血が開始されていた。

「へえーキミはさつきの」

「黒☒由梨乃です。よろしくお願ひします工藤さん」

「黒☒さんかあ。見た目は清楚系なのに中々のこと言ってたね」

「中々のこと？」

自覚がないのかあのバカは……。

「別にタカには普通ですよ？」

平然と言つてのけた。おーい。工藤がちよつと固まつたぞー

「キミたちは付き合つてるの？」

「いいえ？ただの幼馴染です」

うんうん。激しく同意しよう。

「あれ？そうなの？」

「はい。まあ、私のファーストキスもあげた普通の関係ですよ」

一つ疑問。普通の幼馴染つてキスをするものなのか？いや、普通というには少し、仲がいいと思う。

「へえーちなみに、その先の事は？まあ、神白君だったかな？彼、肉食系に見えるけど実は草食系男子だと思うからその先の事なんてしてないと思うけど——」

「え？（ピーー）の事ですよね。もちろん。したに決まつてるじゃないですか」

何故か胸を張つて言うユリ。

驚愕を隠しきれないAクラスの面々。

鼻からの出血が増えるムツツリーニ。

武器を構え、処刑の準備を始めるFクラス救護班。

「アハハ。ということとは、黒×さんって処女じゃないの？」

「そりやタカと性行為をしましたからね。当たり前です」

コンコン

『これより、異端審問会を始める。会長に代わり今回は横溝が会を進める。罪人神白崇彰——』

「ちなみに、どつちから？」

「私ですね。タカにしましよと言つて返答を待たずに。タカも童貞をその時卒業しましたからね。幼馴染ですから卒業するのも一緒です」

「実はこつちが肉食系か……」

「はい？」

実は両方とも肉食系ですが。何か？

『——判決。とつとと死刑！』

『『異議なしっ！』』

襲いかかるFクラス。先ほど沈めたやつらも復活し、一斉に武器で攻撃を始める。

「へ、へえー。そうなんだー」

顔を逸らして言う工藤。こいつあれか。性行為の実践豊富に見えるが実は未経験っ

ていうタイプか。見栄を張るのは良くないよ。工藤が話してる相手はただのバカだから。

「コホン。試合を開始して下さい」

「はい。試験召喚」

「試験召喚です」

『Fクラス 黒箱由梨乃

保健体育 63点

VS

Aクラス 工藤愛子

保健体育 446点』

雷光を纏った斧で一閃。ユリの召喚獣は一撃で戦死した。

「勝者、Aクラス」

Aクラス戦第二回戦。

Aクラス、佐藤美穂VS Fクラス、吉井明久。

勝者、Aクラス、佐藤美穂。

Aクラス戦第三回戦。

Aクラス、工藤愛子VS Fクラス、黒田由梨乃。

勝者、Aクラス、工藤愛子。

Aクラス戦場外戦。

Fクラス、神白崇彰VS FFF団。

勝者、Fクラス、神白崇彰。

Fクラスはこれで一勝二敗。ふむ。Fクラスには後が無くなったな。

Aクラス戦と書いて命懸けと読む ③

「これで二対一ですね。次の方は？」

高橋先生は淡々と作業を進めている。最初は自分のクラスが負けたと言うことで少し焦りを見せていたが、今は落ち着き、最初の一戦は余り気にしてない様子だ。

「うう……タカ。負けてしまいました」

「大丈夫だ。予想通り過ぎる」

「ちよつと待つて下さい！そこは私を慰めるところでしょ！」

「慰める？何で？」

「負けてクラスに迷惑をかけてしまったと心を病んでる幼馴染を慰めるのがタカの仕事でしょ！」

……そういうものなのか？

「そういうものです！」

あ、さらつと心読まれた。

「よしよし。次は三桁目指して勉強しような」

手をユリの頭の上に置いて撫でる。

「うん……」

「もし、お前が次のテスト、一科目でも三桁取れなかったたら」

「取れなかったら？」

「三日三晩寝せねえから」

「それって……!」

顔を紅くするユリ。うん。彼女の考えてることとは違うけど、

「——地獄を見せてやるよ。勉強で」

「た、タカ? 冗談ですよね? 三日も寝なかったら、か弱い私は死んでしまいますよ?」

「安心しろ。何のために栄養ドリンクとかそういうものがあると思ってたんだ?」

「安心できないですよね! 後、それは地獄を生き延びる便利アイテムじゃありません!」

「……全く。半分冗談だバカ」

「何だ……え? 残りの半分は?」

「ん? 本当は一週間にするつもりだ」

「延びてません!?! 期間が延びてません!?!」

気のせいだろ。

「おい、そのバカッブル。次の試合が始まるぞ」

「ん? あー久保利光と姫路瑞希の勝負か。……一番の心配所だなあ。しかも、総合科目

でか……」

総合科目勝負だと、学年順位がそのまま召喚獣の初期の強さに反映されてしまう。向こうは学年次席。姫路でも勝てるかは、点数次第だ。

「とうるか、坂本さん。私たちはバカアップルじゃありません。幼馴染です」

「……幼馴染でそこまでベツタリしてるのは割とレアだと思っただが？」

「そうなのか？」

「そうなんですか？」

きよんとするオレとユリ。呆れた感じで頭を押さえる雄二。

「それでは……」

高橋先生が操作を行うと、姫路と久保の召喚獣が呼び出され……一瞬で決着が付いた。

『Fクラス 姫路瑞希』

総合科目 4409点

V S

Aクラス 久保利光

総合科目 3997点』

『ま、マジか!?!』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!?!』

敵から驚きの声が上がっている。味方? あーほぼ全員寝ているけど何か?

でも、これは凄い。姫路が4000点オーバーしていたのは普通に驚いたし、学年次席様との点数差も400点を超えている。何が彼女をそうさせたのか。

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……?」

相手の久保もここまでの実力差があったとは考えてもいなかっただろう。

「……私、Fクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き?」

「はい。だから、頑張れるんです」

ふーん。まあ、Fクラスというより、その中の特定の誰か。明久が一番大きいと思うけどね。

Aクラス戦四回戦。

Aクラス、久保利光VS Fクラス、姫路瑞希。

勝者、Fクラス、姫路瑞希。

「これで二対二です」

高橋先生の表情も若干の変化があったみたい。姫路の急成長に驚いているのか、それともFクラスがAクラスと此処まで渡り合っている事に戸惑っているのか。まあ、その両方かもしれないな。

「最後の一人、どうぞで」

「……はい」

最終戦は言うまでもなく、相手はAクラス代表の霧島翔子。

そして、Fクラスからは……。

「俺の出番だな」

この男、坂本雄二出陣だ。

「教科はどうしますか？」

Aクラスの人たちは霧島が負けるわけが無いと思つて静かに見ている。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……！

雄二の宣言により、のAクラスにざわめきが生まれた。

『上限ありだつて?』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

まあ、Fクラスに勝利の可能性があると思えばAクラスからざわめきが生まれているみたいだが……はつきり言つて負けるだろ。

「分かりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待つて下さい」

高橋先生は一度ノートパソコンを閉じて教室を出て行く。小学生レベルのテストを用意する為に職員室へと向かったのだらう。

そんな先生の背中を見送つた明久は、雄二に近づく。

「雄二、あとは任せたまよ」

グツと雄二の手を握る。

「ああ。任せられた」

明久に答えるよう雄二は力強く握り返す。

「……………(ビツ)」

「しつかりやるのじゃぞ」

雄二は輸血中のムッツリーニと秀吉の方に歩み寄り、ムッツリーニはピースサインを

雄二に向ける。

「お前らの力には随分助けられた。感謝している」

「……………（フツ）」

「そう言われると照れくさいのう」

ムツツリーニは口の端を軽く持ち上げ、秀吉は少し照れるような感じになる。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ。明久のことか。気にするな。後は頑張れよ」

言い方からして雄二は姫路と何か話していたらしいな。明久関連で。

「はいっ」

姫路は元気な返事をして、雄二は楽しそうにやんわりとした笑みを浮かべた。

そして雄二はオレらに近づくと、

「お前らにも助けられた。感謝している」

ムツツリーニや秀吉の方にわざわざ行ったのも礼を言うためか。律儀な奴だな。

「頑張ってくださいね」

「雄二。この作戦。要はお前だ」

「ん？ そうだな」

「まあ、ここにいる散った同胞たちの分まで頑張ってください」

「ああ。任せろ……………というか、散らせたのお前だよな」
大いに肯定してやろう。

「抜かるなよ」

「ああ」

そう言うのと雄二はオレに背を向ける。

そして、何分かした後。先生の準備が出来たらしく雄二と霧島は別室に向かった。
「ねえ、タカ。…………タカはこの勝負勝てると思ってるのですか？」

ユリがオレの瞳を見て言ってくる。へえ、

「勝てないだろうな。…………絶対に」

「…………坂本さんのこと信じてないんですか？」

「…………はあ。ユリ。油断大敵って言葉知ってるか？」

「さすがに分かります。バカにしないで下さい」

「ならない。いいか？アイツは言っていた。大化の改新の問題が出れば勝てる。でも、オレはそうは思わない。何故か？少なくとも中学から勉強をサボってきた元神童様が小学生の日本史とは言え満点獲れる保障がないからだ」

「…………なるほど」

納得した様子のユリ。

「そうだユリ」

「何でしょう？」

「問題がスクリーンを通してみられるからお前も解いてみる」

「ええー」

「仕方ない奴だ。1点取ることにオレからご褒美にキスしてやるよ」

「タカ。私頑張ります。満点取って100回キスしてもらいます」

ちよロイ。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です』

霧島と雄二は視聴覚室におり、Aクラスにいる俺たちはその様子をスクリーンを通して見ていた。

画面の向こうでは、日本史担当の飯田先生が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置く。

『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『わかってるさ』

『では、始めて下さい』

先生の合図に、二人は裏返しになってる問題用紙を表にした。

「吉井君、いよいよですね……」

「そうだね。いよいよだね」

「これで、あの問題が無かつたら坂本君は……」

「集中力や注意力に劣る以上、延長戦で負けるだろうね。でも」

「はい。もし出ていたら」

「うん」

明久と姫路、そしてAクラス全員が固唾を呑んで見守っている。

そんな中、問題が映しだされ、オレは全て問題を暗記。ユリに問題を紙に書いて教える。さすがに、ユリに問題を全部覚えて解けというのは酷な話だ。出来るならオレが解かせたりしない。

画面の向こうでは霧島と雄二が解いている。

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい》

- () 年 平城京に遷都
- () 年 平安京に遷都

流石は小学生レベル。こんな簡単な解ける。この様子なら出ていても不思議ではない。

- () 年 鎌倉幕府設立

()年 大化の改新

「あ……………」

明久が声を漏らす。

「よ、吉井君っ」

「うん」

「これで、私たちっ……………」

「うん！これで僕らの卓袱台が」

「システムデスクに！」

明久と姫路の揃った言葉。

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ」

『うおおおっ!!』

教室を揺るがすような歓喜の声。いつの間にかFクラスの面々が復活していた。

Fクラスの皆が試験が終了するのを楽しみにしながら待っている間。必死に解くユリを見ながらオレはあることを考えていた。雄二に聞かせてだ。

坂本雄二という存在は小学校の頃から認知していた。別に水無月小学校出身というわけでは無いが坂本雄二という人間の噂ぐらいは聞いたことがある。そして、オレと同じく霜月大付属中学の推薦を取り消された人間。雄二は推薦を取り消されたことを笑

いながら教えてくれたが、理由だけは教えてくれなかった。そのことから、オレと同じで何らかの事件が起きた、あるいは巻き込まれたからだと考える。それが原因かは知らないがアイツは中学時代に荒れ、悪鬼羅列と呼ばれるようになった。今では元不良っただけで別に怖くもない。明久たちと同じでオレの大切な友人だ。

だからこそ、オレは残念に思う。アイツには能力がある。きつと、アイツが油断してなければAクラスぐらいあの穴だらけの作戦で落とせただろう。まあ、後はユリに伝えただけか。

「で、出来ました……!」

「そうか採点するから待ってろ」

「は」

すると、丁度画面の向こうの雄二たちは試験が終了。採点も終わったみたいだ。

結果は……

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

なるほど。こりや、油断し過ぎだ阿保雄二。ちなみに、ユリの点数は26点だった。
……はあ。

Aクラス戦五回戦。

Aクラス、霧島翔子VS Fクラス、坂本雄二。

勝者、Aクラス、霧島翔子。

最終結果Aクラス勝利。

そしてオレたちFクラスの設備は卓袱台から蜜柑箱へと変わった。

Aクラス戦と書いて命懸けと読む 終

バカテスト 歴史

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです。

黒田由梨乃の答え

『1549年』

教師のコメント

それではかなり未来の話になってしまいますよ？

神白崇彰の答え

『絶望の淵で、君が手を差し伸べてくれた1549 B. C.』

教師のコメント

まだその時代にはイエス・キリストは産まれてませんよ？

☆☆☆

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだオレたちに対する高橋女史の締め言葉。

はい。オレたちの完璧な負けです。

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島が歩み寄る。

「……殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

姫路が明久を後ろから抱きしめて必死に止める。てか、お前もAクラス戦負けてただろ。……まあ、捨て駒にしたのオレたちだけど。

「だいたい、53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと——」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

オレも否定しないよ。ついでにユリも。というか、島田も30点取れないんじゃないのか？

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！なぜ止めるんだ姫路さんに美波！この馬鹿には喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

姫路が身体を張って明久を止める。見ていてほのぼのしますなあ。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学生の問題だと油断していなければ負けてた」
「言い訳はしねえ」

予想通りだ。

「……ところで、約束」

あーそう言えばあつたらしいね。そんなの。

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

まだ完全復活していないムツツリーニと明久が撮影の準備をしている。え？雄二が告白されるのがそんなにカメラに収める価値がある？

「わかつている。何でも言え」

潔いな……。

「……それじゃ——」

霧島は一度姫路に視線を送ってから、再び雄二に視線を戻す。

そして、小さく息を吸って、

「……雄二、私と付き合って」

言い放った。

ほーストレートな告白だな。何も余計な枕詞を付けない。うんうん。こう言う告白も受けてみたいものだ。いい加減、毎回似たり寄ったりな告白で正直、君たちオレのそこしか見てないの？とツツコみたくなってるからな。言わないけどさ。

そして、明久を始めこの場にいる多くの人は、脳の処理が追いつかないご様子だ。まあ、告白された当事者である雄二はわかっていたようで表情を変えてないが。

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない」

いい関係だなあ。こういう幼馴染が最終的に結ばれるハッピーエンドもいいよね。見てる側としては。

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあつ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに——」

ぐいつ　つかつかつか

霧島は雄二の首根っこを掴み、教室を出て行った。ん？ハッピー……エンド？

「……………」

「……………」

「……………」

教室にしばしの沈黙が訪れる。あ、あれ？霧島って大胆だなー

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

呆然としているオレたちの耳に野太い声が聞こえてきた。声のする方へと振り向くと、そこには生活指導の鬼、鉄人が仁王立ちしていた。

「あれ？西村先生。僕らになんか用ですか？」

「そうですよ。今ごろ何の用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスの補習について説明をしようと思つてな」

……はあ？我がFクラス？

「おめでとう。今回の戦争に負けたことよつて福原先生から俺に担任が変わるそうだがこれから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ?!』

オレたちFクラスの男子全員から悲鳴が上がる。

「ちよ、ちよっと待てくれ。え？『鬼』の補習をする鉄人が担任!?あのユリを一時勉強で洗脳させたあの鉄人が!」

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても人生を渡っていく上では強力な武器の一つだ。全てではないとは言え、ないがしろにしていいものじゃない」

「そこは肯定しよう。」

「吉井。神白。お前らと坂本は念入りに監視してやる。開校以来初の《観察処分者》と第六天魔王。それにA級戦犯だからな」

「アンタもそれを知ってたのかよ!一体誰だ!言い出したクソ野郎は!」

「そうはいきませんよ!なんとしても監視の目をかいくぐり、今まで通りの楽しい学園生活を過ごすとして見せます!」

「甘いな鉄人!オレたちがその程度で止まると思ったら大間違いなんだよ!」

「……お前らには悔い改めるといふ発想はないのか」

「鉄人が呆れたようにため息を吐く。」

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

「まあ、いいか。それなら。」

「じゃあ、ユリ。今日はお留守番よろしくな」

「ふふん。任せて下さい。私ぐらいになればお留守番ぐらい余裕です」
「……しつかり勉強しろよ？」

「……前向きに検討させていただきます」

「後、荷物よろしく。明日は直接学校に向かうつもりだから」

「分かつてますって」

さてと、行こうかな。

『に、西村先生！明日からと言わず補習は今日からやりましょう！思い立ったが仏滅ですー！』

『「吉日」だ、バカ』

『そんなことどうでもいいですから！』

『うーん、お前にやる気が出たのは嬉しいが——無理することは無い。今日だけは存分に遊ぶといい』

『おのれ鉄人！僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待つ！』

『斬新な告白だな、オイ』

バカな会話が聞こえてきたが……無視する方向で。

一人と書いて心細いと読む

バカテスト 特別問題

問 以下の質問にあなたの思うことをそのまま書いてください。

『あなたにとって幼馴染とは何ですか？』

神白崇彰の答え

『無くてはならないこの世で一人しかいないかけがえのない大切な存在』

教師のコメント

君からそんな素晴らしい解答が来るとは思いませんでした。

黒☒由梨乃の答え

『口も性格も悪いけど私の傍にずっといてくれる唯一無二のパートナー』

教師のコメント

お二人の互いを思う気持ちが凄く伝わってきます。この先も良い関係が続けて下さいね。

霧島翔子の答え

『婚約者』

教師のコメント

霧島さんと坂本君は婚約していたのですね。それは、知りませんでした。

須川亮の答え

『美少女幼馴染持ちは処刑対象じゃゴラアアアアアアアアアアッ！』

教師のコメント

先ほど、神白君と坂本君が襲われていた理由はそれですか。

坂本雄二の答え

教師のコメント

空白は良くないですね。何か書きましょう。



Aクラス戦も終わり私は一人で二人分の荷物を持って帰ります。タカは、まあ行っちゃいましたね。うん。

「ただいま……」

誰もいない家。別に珍しくはなく、普段通りです。ただ、いつもは隣にタカが居てくれるので一人だと寂しくはありますが。あれ？そう言えば、一昨日と昨日は両親が珍しく居ましたけど、また仕事でしょうか？大変ですね。私も大人になったらあんな風に

……

「そ、それよりタご飯です」

でもどうしましょう。いつもはタカの分もと思い張り切って作っていますが正直一人だと作る気になれません。カップラーメンでいいですかね。

「とりあえず、冷蔵庫を見て……ん？」

冷蔵庫の中にはラップで包まれた一食分の食事とメモが。

『ユリへ。』

お前のことだから自分の分だけは作る気になれないとか言ってカツプラーメンとかで済まされても困るので作っておいた。しっかり食べるよ。あ、洗い物と洗濯物よろしく。

崇彰』

ふむふむ。

「バカ。口で言ってくださいよ」

時刻はまだ早いです。仕方ありません。タカの部屋に洗濯物をしまっておきますか

……ん？

「そうです！久しぶりに宝探しをしましょう！」

思春期の男子がエロ本の一冊すら持っていないなんてあり得ません！（偏見）タカめ。今まで発見には至りませんでした。今日こそ発見してやります！ふっふっふっ。

「お、お邪魔します」

変なものです。タカのいない部屋ってどうも不思議です。私とは違って、ぬいぐるみの一つも置いてない、本棚には漫画では無く難しそうな参考書がずらり。まあ、この参考書、タカが小学校の頃からあるんですけどね。本当に小学生が読むものじゃありませんよ。というか、今の私ですらほとんどわからないですよ。

サツサと洗濯物をしまつていきます。タカつてああいうズボラというか適当に見えて割と几帳面ですからね。部屋も綺麗です。

「とりあえず、調べますか」

とある情報によれば、不自然な分厚い紙の辞書や参考書、二重底の引き出し、ベッドの下などが怪しいそうです。ふむ。問題は不自然な分厚い辞書や参考書はざらりとそこに並んでることですね。どうしましょう。一冊ずつ丁寧に確認していたら朝日が昇ります。よし、後回しですね。

まずはベターなところ、ベッドの下を見ますか……

「う、これは……」

さ、早速ベッドの下から一冊本が出てきました!? ご丁寧にカバーがされてます。どどどどうしましょう! 最初からアタリを引きました!

「……………(ゴクリ)」

意を決して中を開きます! そこには……!

『残念くハズレ』

何枚か白紙の紙が続いた後にデカデカと書かれています。凄いムカつきます！

「あのタカめ！まさか私が探しに来ることを読んでいましたね……！」

「こうなれば意地でも探してやりますよ！ええ！」



あれから夕食を済ませ、風呂の中で一人反省します。結局発見には至りませんでした。怪しい本とかがありました、何書いているのかさっぱりわからない参考書だったり、真っ白なノートだったりでした。

「全く……私ですら持つてるといふのに……！」

あの男は健全な男子高校生では無いのですか？まあ、きっと私に見られたくないようなら内容がハードだったりマニアックだったりするのでしょう。何か、それはそれで困るってのが私の感じですが。いやねえ、タカがそんな特殊性癖に目覚めていて、私

で実践しようと考えられたら、私が何されるかわかりませんか？私の嫌いなことは怖いこと、苦手なことは痛いことです。まあ、痛いことが好きな人ってDMですよ。私、タカがDSというのは知ってますが、自分までそっち系に堕ちる気はありません。ノーマルです。……とまあ、婉曲というかこんな遠回りにでもタカのことを考えてるのは単純な理由です。先ほどまで髪を洗ってしまいましたからね。いやあ、何が起きるか分からないって本当に怖いですよ。そういう怖いことを考えないためにもタカのことを考えていました……

「というか、タカは冷たいです」

風呂のところまで水を鉄砲のように発射しながら遊びながら思います。今日、タカは例の他校の彼女さんのところへお泊まりに行きました。まあ、今頃何してるかは想像に難くないですが、アレです。心細いので早く帰ってきてほしいです……まあ、今日明日と帰ってこないのですが。というか、タカにこの前、心細いことを言ったら『さっさと彼氏作って一緒に居てもらえ』とか宣ってきました。ムカつきますね。本当に。自分がモテて彼女をコロコロ変えてるゲス野郎の癖に。どうせ、その性格の悪さのせいで長続きしないんですよ。いい気味です。……まあ、私が身も心も全て許してるのはそんなゲスな幼馴染さんだけです。これまででもそしてこれからも。タカだけは最初からずっと味方でいてくれました。こんな私なんか結構してくれて、ずっと傍にいてくれま

した。感謝しかないですね。

「さてと、出ますか」

風呂場から出て、身体を拭いて、タカのパジャマを着ます。サイズは私とそう変わらなにか少し大きい感じですが。いつも一人で心細い時はこうしています。タカには無論内緒です。……まあ、バレてるとは思いますが。そのまま、自分の部屋に行きます。とりあえず、秘密の場所に隠してたエロ本を何となく眺めます。何でタカはこういうの持っていないでしょうか？

すると、本の中から一枚の紙が落ちました。拾い上げて紙に書かれた文字を見ます。

『お前そういう趣味だったんだ』

「な……っ!？」

どどどういうことですか？え？隠し場所がばれた？それ以前にタカにこういう本を持つてることがバレた？え？あの男、自分の本を隠すことは完璧で人を見つけるとか……最低です！あれ？もしかしなくとも私って幼馴染から変態って思われています？あれ？どうしましょう。こんな本を持つてると知られたらタカの中の私の長年積み上げられたイメージが崩れてしまいます。あああ、どうしましょう。

「………閃きました」

そうです。こう言えばいいのです。『私のエロ本を見たのだからタカのを見せて』と。

完璧です。さすが私。こういうところでタカとは頭の回転の速さが違いますね。

「……何か安心したら眠くなりました」

とりあえず、ぬいぐるみを持って、タカの部屋に行きます。

「早めに寝ましよう。おやすみなさい」

タカの普段使ってるベッドで寝ます。おやすみ……

☆☆☆

翌朝。

「起きろユリ」

バカな幼馴染を起こそうとする。全く、普段は次の日休日とか親が休みとかにしか泊まりの誘い受けないのに、色々ミスって次の日学校なのに受けちまった。心配になつて帰つて来てみればこれか。予想通りだが。

「……むにゃ……」

気持ちよさそうな寝顔。というか、オレのパジャマを着て、オレのベッドで寝てやがる。……そんなに寂しかったのか？

「ほら、起きろって」

一つ言っておくとコイツは目覚めも悪い。朝が凄く弱いのだ。……まあ、これもコイツと一緒に寝たくない一つの要因ではあるが。

「……おはよ〜」

まだ目が開いてなく、凄く眠そうだ。意識はまだ半分以上寝てるだろう。てか、髪ボサボサだ阿保。

「ほら、階段降りるぞ。……暴れるなよ」

「おーけー」

うっわ。信用ならねえ。

とりあえず、無事に洗面台のところへ連れてきた。

「ほら、口を開けろ」

「あー」

そして歯を磨かせる。全く、毎朝のこととは言えいい加減自分で磨くようにならねえかな。まあ、一度実験で起こした後放置してみたら、洗顔と歯磨き粉を間違えて大惨事になりかけるわ、歯ブラシで髪セットしようとするわ、服を脱ぐのはいいが着れずに

ずっと部屋でいたとか、箸が上手く使えずこぼすわ、グラス以外のところに飲料をぶちまけるわ、本当にコイツは寝起きが悪い。というか酷い。しかも本人ほぼ無意識のため、そう言うことがあった後に意識を戻すとももの凄くうるせえ。

「ほら終わったぞ。うがいはできるよな」

「もち〜」

不安だ。

「ほら」

コップに水を取って渡す。すると……

「何で顔に思い切りかけてんの!? バカなの!？」

あろうことか口に含まず顔にかけていた。前は頭にかぶったし、何故か肩にかけてた時もあった。かけ湯改めかけ水か! ……ここは温泉じゃねえよ!

「あーもう! 床も顔も身体も濡れてんじゃねえか! 床拭いとくから服を脱げ!」

「こーう?」

「そうじゃない! 何でオレの服を脱がそうとしてんだ!」

何とかコイツを着替えさせ、椅子に座らせ朝食を食べさせる。咀嚼も手伝わんといかんあたり、コイツは一人暮らしをさせたら危険だと思う。いろんな意味で。

「……はっ! あ、おはよタカ」

食事も終わり片付けてる最中、椅子に座ったユリが唐突に目覚める。極めつけはいつ目覚めるかが分からないことだ、早い時もあれば遅い時もある。本当に手のかかる幼馴染だ。

「ん？タカ？あれ？何でいるんですか？」

「今頃お目覚めかよ。お前が心配だったから帰って来たんだバカ」

「それはそれは。ありがとうございます」

全く。手のかかる幼馴染だ。

「そうだ！タカに言いたいことがあったんです」

「なんだ？」

どうせ録でもないことだろうけど一応聞いておいてやろう。

「私のエロ本を見たのだからタカのをを見せて」

うわあ。録でもねえ。

「そもそもエロ本をオレは持ってないぞ」

「なっ?!?そんなの嘘です！」

「嘘じゃねえよ」

というか、そんなもの必要ねえし。そんなの買うより準備の品買った方がいいし。

「でも、一度だけタカの部屋で見たことがあります！その本があるはずですよ！」

「ん？あー明久が異様に勧めてきて借りていたものだな。一両日中に返したけど。中身も見ず」

なんてタイミングのいい幼馴染だろう。

「……そう言うことにしておきましょう」

もう何でもいいや。

「くんくん。タカ、他の女の匂いがします」

「テメエは何処嗅いでんだよ」

「あう」

肩にチョップする。なぜ頭じゃなく肩か？これ以上バカになられた日にはオレの体力が持たん。というか、しっかり帰ってから風呂に入ってシャワーも浴びたぞ？綺麗に洗ったつもりなんだけど。

「んじゃ、そういう事だからオレは学校休む。徹夜だし、疲れたし」

「ダメです。疲れたのも徹夜も自業自得でしょ」

「へいへい冗談だ。準備してくるから待ってろ」

「はーい」

……たく。寝なかつたのは寝たらお前を起こしにこれねえ可能性があつたからだと言うのに……まあいいか。そんなこと言わなくて。……後はもう今の彼女もダメだろ

うな。やっぱり長続きしない。原因は分かり切ってるが。今のところお前だけだよ。だからお前だけは――

「遅いですよ！」

「悪い悪い。コンタクトが入らなくてさ」

「ほら、行きますよ。今日から西村先生が担任ですからね」

「やっべ、遅刻できねえじゃん」

「もとからしちやダメです！」

「えー」

「えーじゃありません！あ」

すると何を思ったのかキスをしてくるユリ。

「えへへ。おはようといつてきますのチューです」

「そうかよ」

「なっ!?! 反応雑ですね」

「ほら行くぞ」

「あ、待ってくださいよ！」

やれやれ。こうして今日も一日が始まるのか……。

お出掛けと書いてデートと読む

「タカ〜お出掛けしよ〜」

そんなこんなで休日の朝。いつも通りユリのお陰で朝から一悶着あった後、お目覚めのユリが何か言ってきた。

「はあ？今日はお前に勉強させるつもりだが？」

この前のAクラス戦。コイツが小学生レベルの日本史の悲惨な点数を見た後、他の科目も軽く小学生から中学生レベルのところを聞いてみたところ、ちよつと涙が出そうになったので今日は一日勉強させるつもりだった。

「……ほ、ほら。タカが彼女とのデートもバイトも無いじゃないですか。た、偶には二人でお出掛けしましよ？ね？ね？」

ちなみに、今日勉強させることは予め言っていたりする。

「……あんま金使いたくないけどな……」

「ね？お出掛けしましよ？」

でも最近はそのままで支出が減ったからいいか。まあ、減ったのは彼女に使う金だが。

「……はあ。午前中だけだぞ」

「はい！あ、準備してきますね」

「へいへい」

ちなみに、オレもユリもお小遣いは貰ってる。オレはそれに加えバイトもしているが、ユリにはさせてない。何故か？お忘れかもしれませんが皆さん。ユリはただのバカじゃないですよ？

「準備完了です！」

銀髪に碧眼と、明らかに普通の日本人とは思えない。うん。先祖返りというか、完全に祖母の血が見た目に色濃く出ているんだ。しかも、普通に美少女というか美人というかだから、コイツに、バイトさせたら変な虫男が寄ってくる。だから、バイトさせない。その分、オレの稼ぎの半分をコイツに与える。まあ、本人は申し訳ないとか言いながら自分の懐にしつかり入れてるが。

「んじゃ、行くか」

「あ、タカ。コンタクト忘れてますよ」

「あ、そうだったな」

オレはオレでこのオッドアイだからな……というか、視力は全然悪くないから時々忘れそうになることもあるんだよな。特に休日。

コンタクトを入れて仕切り直し。よしっと、

「じゃあ、行くか」

「おー！」

こうして、オレたちは軽く出掛けることにした。

★★★

ふうー何とか勉強時間を減らすことに成功しました。まあ、出掛けたかったのは本音ですが。

「で？何処行くんだ？」

「そうですね……ゲームが買いたいです！」

「あ、そう」

私とタカのお金の使い道は違います。私はどちらかというと、ゲームとか本とか娯楽系。タカはまあ、性行為をするためのものだったり、難しそうな参考書だったり……なぜでしょう。幼馴染と言ってもここまで使い道に差が出るとは……あ、でも食材とか生

活必需品の分はお小遣いとは別で親たちからお金を貰つてるので安心です。

というか、アレです。私的には親からお小遣いを、タカにはバイト代の半分を貰つてますが、タカにはバイトをあまりして欲しくありません。まあ、私との時間が減るといふのももちろんですが、タカに変な虫メが寄ります。というか、寄っています。タカは性格は最低ですが見た目はカッコイイです。それは彼女がたくさん出来た事例からも裏付けされますね。高校になってバイトし始めたタカですが、まあ、高校入つてからの彼女つて大概バイトつながりなんですけどねこれが。短期然り長期然りですが。全く……タカがバイトしても私にお金以外のメリットが無いです。

「あれ？明久か？」

歩いてシヨツピングモールに向かう途中で吉井さんたちを見つけました。

「あ、崇彰に黒田さん。おはよう」

「おはようございます。島田さん。姫路さん。吉井さん」

何してるんでしょう？あ、デートでしょうか。なら納得です。

「おはようございます。お二人はデートですか？」

「いや（いいえ）、お出掛け（です）」

「……アンタたちみたいなお出掛けを世間一般ではデートと言うのよ」

そうなのですか？私たちは何の変哲もないただの幼馴染だから違いますよ。

「ぐぬぬ……！崇彰ばかり何故そんな可愛い女子とデートを……！」

「世間一般から見りや、両手に美少女を携えるお前の方が羨ましがられると思うが？」
「そうですよ。そういうえば、なんでお三方は手を繋がないのですか？」

私たちは普通に繋いでいますよ？当然じゃないですか。

「そ、それは……その……は、恥ずかしいと言いますか……！」

「というか、アンタたちの方こそ、よく平然と恋人つなぎが出来るわね」

「え？これが一番落ち着く！」

ずっと昔からこうやって手を繋いでますからね。一番これが落ち着きますよ。

まあ、本当は腕を組んだり、横から抱き着いたりしたいのですがタカに『歩きにくい』
と言われたので我慢我慢です。

「ああでも。明久を真ん中に繋いだらアレか。面白いかもしれん。絵面的に」

「あれですよ。両手を掴まれ連行される宇宙人にも見えますよ。精神的に」

きつと、吉井さんは、二人に今月の食費を使われるのでしょうか。合掌。

「行くか。邪魔しても悪いし」

「そうですね。行きましょう」

さすがタカは手慣れてますね。そんな感じで再び歩くと、

「あ、赤ゴリラ」

次は坂本さんと霧島さんです。何でしょう。今日は皆お出掛けする日なんですかね。

「誰が赤ゴリラだ第六天魔王」

「誰が第六天魔王だコラ」

二人して、仲いいんですから。

「……おはよう。神白。黒☒」

「あれ？オレたちの名前覚えていたんだ」

「……うん。一度見たから忘れない」

な、なんて羨ましい能力なんでしょう。私にも分けてほしいです！

「で？二人はデートか？」

「……うん」

「そうか。雄二。仲良くな」

「待て待て。俺の置かれている状況分かって言ってるだろ」

状況？あ、坂本さんの手首に手錠がついてそこから鎖が伸びてますね。……これが彼氏と彼女の正しいデートってやつでしょうか？

「違うからなユリ。お前の今考えてること」

「え？違うの？」

「アレは雄二の趣味だ。性癖だ」

「……………うわあ。坂本さんって……………」

「おい崇彰！何出鱈目なこと言ってるんだ！」

「……………そうだったの？」

「翔子！大体お前が無理やりやって来たんだからうが！」

え？あの霧島さんが？

「坂本さん。嘘は上手につきましようよ。きっと吉井さんでも騙せないですよ？」

(嘘じゃないだろうがな……………)

「あはは。さあ、行くか」

「はいです」

人は見かけによらないんですね。一つ学習しました。

☆☆☆

ユリのゲームとついでにオレの本を見て回り、時間もお昼前。昼食は家で食べると決

めて帰り道の人がない小さな公園で、

「ほら、ユリ」

「わあーい」

喉が乾いたとか言い出したバカにジューズを奢った。……まあ、途中で倒れられても困るしな。ベンチに二人仲良く腰掛ける。

「やー生き返りますね」

「そうかよ。なら、生き返った後は勉強な」

「ええ……あ、昼食を今日は腕によりをかけて作りますね」

「結構だ。オレが作る。その分お前は勉強しろ」

やれやれ。魂胆が見え見えだバカ。

「あ、タカも飲みますか？」

「オレが買ったからな。それ」

ユリから飲み物を受け取り、一口。飲んだ後に返す。

「あ……間接キス……しちやいましたね」

「なに初々しいカップルな感じを出してるんだよ。全く、微塵も心に響かんぞ」

「むうーそういう事を言ってみたくなっただけですよ」

本当に話題を逸らすためなら何でもするなコイツ。やれやれ、前のAクラス戦のお陰

でユリがどこまで勉強が出来ていなかったのかが分かったしな。……………ん？Aクラ
ス戦？何だろう。何か大切なことを忘れている気がする。そうとても大切な…………

「……………あ。なあ、ユリ」

「何ですか？」

「オレまだお前のスカートを捲らせてもらってない」

「うわぁーそれは流石にドン引きですよ」

あからさまに引いた様子であからさまにオレとの距離を開けるユリ。

「お前が言ったんだろ？Aクラスの木下との勝負の最中に」

「……………はあ。タカの妄想もここまで来るとこの長い付き合いの私でもドン引きですね。

そんな訳の分からないこと私が言うわけじゃないじゃないですか」

「えーっと、確か『タカが勝ったら私のスカートを捲らせてあげます！』だったか？」

「何で一言一句完璧に覚えてるんですかあ?!……………あ」

簡単に引つかかるユリ。コイツは駆け引きに向いてないタイプだと本当に思う。

「そーいや、お前。今日スカート履いてるな……………狙ってたのか？」

「あ……………いや、これは…………」

「そうかあ……………今日のお出掛けの真の目的はそう言うことか」

「そ、そんなの全然狙っん?!」

ユリの唇を強引に塞ぐ。これで一回……と。

「そんなにお外でそう言うことがしたかったのか……」

「そ、そんなわけん?!?」

これでトータル三回。

「そうだなあ。捲つても面白いが……自分でたくし上げる」

「あ、あの外でそんなことするのは流石にん!?!」

四回目。

「それともあれか? 学校でオレに捲られたいか? ……あんな多くの人たちが見てる最中で」

「そ、それは——」

「さあ、選ぶといい。ここで自分からたくし上げるか、学校で捲られたいか」

「わ、分かりました……」

すると、ユリは俺の前に立ちスカートの裾を手で掴む。目には微かに涙を浮かべていて、震えている。普段とは違い、外だからな。羞恥心が出てきたのだろう。

「では、行きまん?!?」

スカートをたくし上げようとする手を抑えながら、キスを二回。

「冗談だ。ほら、帰るぞ」

「あ、あれ。でも……」

「こんな誰が見てるかわからない場所でそんなことやらせるかっての」
「……うう」

この後、本格的に泣きだしそうになったユリをなだめるのに苦勞し、腕に抱き着いて離れなかった。まあ、泣かせかけた原因オレですね。……ちよつと冗談が過ぎたかな。でも、アレは……まあいいか。

☆☆☆

「つかれたあゝ」

あれから家に帰って、軽い昼食を取り、ユリの部屋で勉強をさせていた。

「もう疲れたのか？」

「うんゝ」

「じゃあ、ゲームでもするか？」

「やったあ〜」

張り切つて下に行き、準備にかかるユリ。……実は疲れてないだろお前。

「準備出来ました」

「そう」

わざわざ二階まで来てオレを呼ぶ。

「で？何やるの？」

「コレです」

画面には『熱血・Ping-Pong』とタイトルが表示される。要するに卓球か。

「で？ユリ。操作方法はどうやるんだ？」

「適当にやつてればタカのことだから何とかできますよ。はい、どうぞ」

そう言われて渡される2Pのコントローラー。既に試合はユリのサーブで始まろうとしていた。

「ふっふっふっ。タカ。負けたほうが罰ゲームですよ」

「はあ？ちよつと待て。それはいいが、罰ゲーム以前に操作方法を……」

既にサーブは決まり、ユリ側に1点が入る。ちなみに、11点先取ということは分か
かった。

「これならタカに負けないはずです！」

続くサーブも決まりスコアは2―0……やれやれ。

「つたく、操作方法ぐらい教えろっての」

見よう見まねでサーブを打つも、鋭く返され、3―0。

「これなら、私のストレート勝ちも夢じゃないですね！」

『PLAYER 1 (ユリ) VS PLAYER 2 (オレ)』

0点 VS 11点 『

あれから、第一ゲーム。オレはユリの操作方法を真似して9―11と逆転勝利。その後ユリが三ゲーム先取にしましょうとか言い出し、二ゲーム目は5―11。そして、三ゲーム目にしてオレのストレート勝ちという結果で終わった。

「な、何かがおかしいです……」

肩で息をし、膝を床につけてるユリ。

「まあ、こんなものか」

「むうータカはずるいです……タカばつか何で頭もよくてこういうことも出来るのですか」

オレはゲームの類をあまりしない。だが、それでも明久や雄二と数回やれば遜色ないレベルでやれる。ユリが言うにはオレはゲームにおいても天才らしい。例えば常人が格ゲーで一人のキャラを完全に極めるのに一週間かかるとしたらオレは数試合ぐらいで完全に極めてしまうらしい。まあ、イマイチピンと来ない例えだが。

「……仕方ないです。私が料理を作るのでタカは買い物をしていてください」

「いやいや、前からお前が夕食作る担当だからな。で？何を買って来ればいいんだ？」

「エロほ——」

「そうか。医学書か。お前も勉強に目覚めたんだな（ニツコリ）」

「——冗談です。このメモに纏めてあるので行ってきたください」

えーっと？日用雑貨に明日の分の食材か……

「分かった。行ってくる」

「気をつけてね」

☆☆☆

さて、食材も買ったし日用雑貨でも……

「むう。崇彰かのう?」

「あ、秀吉。それにムッツリーニもか」

「……………珍しい」

買おうと店に入るとムッツリーニと秀吉が話しているのが見えた。……………これでコンプリートしたんじゃないか? オレの文月学園での友人関係。……………友達が少なくないかって? いや、気のせいだろうん。

「二人もおつかいか?」

「うむ」

「……………崇彰も?」

「ああ。ちよつと補充して来いつてな」

「お主に買い出しを頼めるなんて」

「……………黒~~い~~しかない」

……………あれ? というか、何でアイツの言う通りに来たんだろう? まあ、いつものことか。

「オレの買い物は……つと」

メモの通りに手早く商品を購入し物かごに入れていく。

「お主は選ぶのが早いほう」

「そうか？」

「……………値段とか見て買ってる？」

「ああ。一瞬で全部把握して、どれが一番いいか最適なのを選んでる」

「……………能力の使い方を間違えておらぬか」

「……………無駄に高スペック」

なんか散々ないようだなあ。

「まあ、無駄に高スペックで悪かったな……つと、悪い。早く帰れって催促が来た。帰るわ」

「あーお主らは半同棲生活を送ってるのじゃったな」

「……………妬ましい」

「同棲ってほどでもねえよ。ただ、幼馴染が協力して生活してるだけだ」

そのまま会計を終わらせさっさと帰る。

「やれやれ、あれで互いに恋愛感情がないのじゃから不思議じゃのう」

「……………それでも妬ましいものに変わりはない」

というわけで、家に到着。

「ただいま……!?!」

「お帰りなさいタカ」

出迎えてくれるユリ。エプロン姿にお玉をもつて、少し昔の新妻感が漂っているが、驚いたのはそこじゃない。

「もうすぐできるからね」

「なあ、ユリ。その格好……」

「はい? 裸エプロンですが何か?」

そう。エプロンの下に何も着てない裸エプロンと呼ばれる姿だった。

「……ユリ」

「わわっ。いきなり抱き着いてどうしたのですか?」

「……お前を襲いたい」

「……ふふっ。いいですよ。でも、先に夕ご飯です」

「……分かった」



食事の後、私たちは行為を済ませた後、休憩をはさんでお風呂でお互いの体を洗います。……まあ、明日普通に学校ですからね私たち。

「ふにゃー」

「風呂で寝るなよ。運ぶの面倒だから」

疲れた私に対し、タカの冷たい一言。

「むうーいつもより激しくやってきたのはどこの誰ですか？」

「……………」

そつぽを向くタカ。いつもは私から襲ったり仕掛けたり襲ったりしますが偶にタカからこうやってやるときがあります。私から仕掛ける時も何だかんだタカは凄いのですが、こうして、自分から仕掛けた時のタカはいつもよりもヤバいです。まあ、それも私が仕掛ける時よりタカから仕掛ける時というのは、タカが完全に興奮というか性欲を暴走させてるときですからね。

「まあいいですけど」

タカはアレです。前にネットで調べましたがタカの息子さんは一般成人男性より大きいそうです。それに加えて精力？と呼ばれる奴が人より優れています。おまけにタカの学習能力は尋常じゃありません。ゲームもですがこれも例外ではないです。いやータカってそう思うと本気を出せば女性ぐらい何人も同時に相手できそうですね。というか、相手したことあるんじゃないですか？だって、クズ野郎ですから。

「全く、昼間のスカート捲り未遂といい今日のタカは性欲を発散させましたね。こんないたいけな少女に」

「……ベッドの下」

「はい？」

「ベッドの下の隅に隠されている本。そこに書かれていた内容を実行した。ああいうプレイに憧れていたんだろ？」

「なっ……!」

え？あの本の存在もばれてた!?!……はっ！そういえば、内容というかシチュエーションが今日の公園でのことと酷似していました！スカートを捲らせるようなことをちらつかせ羞恥心を高めさせそのまま……

「あれ？その割には、スカートを捲られてませんか？後その先も」

「うっせ。外でそんなことさせるかよ」

再びそっぽを向くタカ。あれ？何故でしょう。今日のタカはかわいく見えますね。

「さてと、勉強でもするか」

「え……これ……から？」

「ああ、そうだ」

「……私……もう……疲れた」

「さっきまで普通に話していただろうが、ほら行くぞ」

「や、やめるのです！タカは私のことが嫌いなのですか！」

「ああ嫌いだ」

「うわああああん！そんなこと言わないで下さいよお」

「……冗談だ。バカ」

「じゃあ、彼女と私どちらが好きですか！」

「ユリ」

「……そこは彼女って言ってあげましょ？さすがに……ね？」

そんなこんなでいつもの休日が終わっていきました。

ラブレターと書いて事件の火種と読む

「う〜ん……あり得ない登校時間だ」

晴れ渡る空。澄んだ空気。暖かな日差し。

珍しく早起きをした僕はいつもよりもかなり早く家を出ていた。早起きは三文の徳と言うし、今日は何か良いことがありそうだ。

「ん？あれは——崇彰？」

何時もより早すぎた僕は少し回り道をしていこうと思い、公園にやって来た。誰もいないと思われたその公園には、崇彰がいた。

「おーい、崇」

崇彰の名を呼ぼうとした時、もう一人の姿が見えた。女子である。しかも黒×さんじゃない。いや、制服から察するにそもそもうちの高校の生徒でもない。なら、あの子は一体誰だろう？

「崇彰さん！」

その女子生徒。普通に可愛い部類に入るのではないだろうか。まさか、あんな美少女に告白をされるとかあ!?!ただえさえ、黒×さんと四六時中イチャついて羨ましいのに

加えてあんな美少女から告白!?!万死に値する。よし、告白が終わって油断したタイミン
グで蹴りかかろう。そうすれば、いつもは無敗を誇るあの崇彰にも勝て――

「最後に聞きます。私とその幼馴染さんどちらが大切ですか?」

激しい剣幕で詰め寄る少女。……ってこれ修羅場じゃないの!?!黒☒さんがいないか
ら流血沙汰にはなつてないけど明らかに修羅場だよね!?!た、崇彰!?!これ答え方間違える
とゲームで言うなら確実にBADENDルート突入だよ!?!

「え?・幼馴染」

そ、即答!?!悩む素振りすら見せなかったよあの野郎!

パンツ

そして響く乾いた音。え?あの子が崇彰を平手打ちしたあ!?!

「もう知りません!・別れましょう!」

ちよ、崇彰!・彼女を止めなくてもいいの!?!

「分かった。別れるか」

「までも即答!?!」

「……………っ!」

そして目に涙を浮かべながら走り出す崇彰の元彼女。ああそうか、きつと彼女は『幼
馴染よりお前の方が大切だ』とか言っただけでほしかつたんだろう。

僕は見事に破局した崇彰の肩に手を置いて、

「まあ、次の出会いがあるよ」

でも、ここは寛大な心を持つて慰めてあげよう。だって、僕たち友達だもんね。

「そうだな」

そう言うのと、携帯電話を取り出して何処かに電話をかける崇彰。

「もしもし。——か？あーオレだ。崇彰だ。先日の件オツケーすることになった」

名前的に僕の知らない女子に電話をかけたみたいだけど……え？先日の件？

「おう。じゃあ、明日の放課後、場所はあそこだな」

少しの世間話の後、そう言い残し電話を切る。

「今の誰？」

「ん？あー新しい彼女」

「……はい？」

新しい………彼女？え？今別れたばっかだよ？しかも名前的に黒×さんじゃな

いし……。

「簡単に説明するとだな。今の電話の相手から少し前……さっきの女子がまだ彼女だった時に告白されてな。『今は彼女がいるから君とは付き合えない』って答えて振ったつもりだったんだけど相手が引き下がらなくてさ。そしたら『なら、その彼女と別れたら

私と付き合いましたよ。それなら構いませんよね』つて。まあ、そんなわけで新しい彼女を……っ!？」

僕の怨嗟を込めたパンチを躲す崇彰。

「オマエヲコロス」

「モテない男の嫉妬は醜いぞ」

グハア! く、くそお! 自分ばつかあんな綺麗な幼馴染に加えて彼女持ちだからつて調子に乗りやがつて! しかも、既に何人もの人とヤツてる非童貞野郎だからつて調子に乗って!

「まあ、お前も姫路あたりに告白すりゃいいのに」

何か言ったが聞こえない! この女たらしのゲス野郎にはFF F団の制裁が必要だ! その前に、僕の恨みと殺意と妬みとその他諸々を込めた拳をくらえ!

「今日という日はお前を許さない!」

「来いよ童貞野郎」

「何を! ついさつき破局したクズ野郎に言われたくないよ!」

この後、公園で崇彰と青春を過ごしていると巡查中のお巡りさんに見つかった。ヤバいと思った僕らは、話を聞かれる前に文月学園まで逃走した。

☆☆☆

明久のせいで朝から厄介事に巻き込まれた。まあ、明久は校門を通過したタイミングで鉄人に捕まって雑用に狩りだされた。ざまあ。

「工藤」「はい」「久保」「はい」

チャイムと同時に明久が教室に駆け込むと、間髪容れずに鉄人が来て出席を取り始めた。分かったことだが、この人は必ず決まった時間に来る。真面目な教師だな……顔と体型に似合わず。

「近藤」「はい」「斉藤」「はい」

眠そうな返事だなあ……人のこと言え無いけど……ふああああ。淡々と進んでいく毎朝の出席確認。今日も平和な朝を迎えようとする。そんな静かな教室を……

「坂本」「……………明久がラブレターを貰ったようだ」

『殺せええつ!!』

雄二の一言が見事にぶち壊してくれた。

「ゆ、雄二！いきなりなんて事を言い出すのさ！」

凄いな。雄二は明らかに小声で言つてたのに誰一人聞き逃さないなんて。人のこと言え無いけどさ。

『どう言う事だ!?吉井がそんな物を貰うなんて!』

『それなら俺たちだつて貰つてもおかしくないはずだ!自分の席の近くを探してみろ!』

『ダメだ!腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない!』

『もつとよく探せ!』

『……出てきたつ!未開封のパンだ!』

『お前は何を探しているんだ!』

怒号が飛び交い、クラスのほぼ全員が明久に妬みの視線を送りながら怒り狂っている。関係なさそうにしてるのは、オレとユリ、後は秀吉だ。

「お前等つ!静かにしろつ!」

——シン

鉄人の一喝ですぐに教室が静かになった。便利だねえ。

「それでは出欠確認を続けるぞ」

再び出欠確認が開始された。

「手塚」「吉井コロス」「藤堂」「吉井コロス」「戸沢」「吉井コロス」

「皆落ち着くんだ！何故だか返事が『吉井コロス』に変わっているよ！」

斬新な返事だ。こんな返事を認められるとかここは本当に学校か？

「吉井、静かにしろ！」

「先生、ここで注意するべきなのは僕じゃないでしょう!?!このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

「新田」「吉井コロス」「布田」「吉井マジ殺す」「根岸」「吉井ブチ殺す」

それで済めば可愛いものだろう。まあ、でも。これも朝の報いだな。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉強に励むように」

「待つて先生！行かないで！可愛い生徒を見殺しにしないで！」

明久は保身の為、必死になって鉄人を呼び止める。

「吉井、間違えるな」

扉に手をかけながら答える鉄人。……………間違える？

「お前は不細工だ」

「アハハハハハハ！」

大爆笑。

「不細工とは言われるとは思わなかったよバカ！」

「授業は真面目に受けるように」

「先生待つて！せんせーい！」

西村先生は教室を出て行った。明久。君は見捨てられた可哀想で憐れな奴だ。

あとこれは、一時間目が始まる前にFFF団の暴走が起きるな。確実に。

「アキ、ちよくつと話を聞かせて貰える？」

島田が明久の肩をグワシツと関節が外れてしまいそうな勢いで掴んでいた。どうや

ら島田が最初に仕掛けたようだな。

「あ、あはは……。美波、顔が怖いよ？」

「手紙を貰ったの？誰からなの？どんな手紙なの？」

島田。いつもより顔怖いよ？後、何故だかポニーテールが角みたいに見えるし。

「あー、えつと、そのー」

もし明久が正直にラブレターを貰ったなんて言ったら、島田に飛ばされ周りのクラスメートにやられるだろう。

「いいからおとなしく指の骨を——じゃなくて、手紙を見せなさい」

明久の指に何が起きるのだろうか？

「あの、吉井君」

「ん？なに？」

今度は姫路が明久に話しかける。さあ、姫路はなんて言うのだろうか。

「その……できれば、ですけど……私にも手紙を見せて欲しいです……」

おお。ストレートだ。さあ、これに明久はどう返す？

「その……ごめん」

明久は誠意を込めながら断る。

「でも、でも……」

しかし、食い下がる姫路。

「いくら姫路さんの頼みでも、コレばかりは」

「でも、私は吉井君に酷いことをしたくないんです！」

「ちよつと待って！姫路さんまで僕に暴力を加えることが前提なの!」

どうやら姫路はFクラスに馴染んだみたい。うん。ついにこのクラスの常識人はオレ一人。ふむ、これが最後の砦ってやつか。

「皆、ちよつと落ち着け」

そんな中、パンパンと手を叩く音が教卓の方から聞こえた。発生源はこの騒ぎを起こ

した張本人である雄二。

「今問題なのは明久の手紙を見ることじゃない」

「そうなのか？」

「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ」

「本当に明久と雄二は友達なのだろうか？オレが言えたことでもないが。」

「前提条件が間違ってたんだよ畜生！」

荷物を持って明久はすぐに教室から逃走。

「逃がすなあつ！追撃隊を組織しろ！」

「手紙を奪え！吉井を殺せ！」

「サーチ&デス！」

『そこはせめてデストロイで！』

「追いかけるようにしてFFF団の人たちも出払い教室にはオレ、ユリ、秀吉の三人が残った。」

「さて、一時間目の先生にはなんて説明しようか」

「そうですね、どうしましょう」

「お主らは落ち着いてるのう」

「いや、焦る必要ないですし。」

「そう言えばタカ。その頬に出来た紅葉……どうしたんですか？」

「ん？あー今朝元カノにビンタされた」

「お主はお主で何やつとるんじゃ……」

「そして別れることになった」

「お気の毒様です」

ユリは手を合わせ、合掌をする。でもまあ、

ガラッ！

『異端者神白崇彰！今朝方、新しい彼女を作った疑惑について処刑しに来た！』

ぞろぞろと数人のFクラス生徒がやってくる。というか、話を聞く前に処刑かよ。しかも疑惑だし。これは不当だとか言えば受け入れてくれるだろうか？

『罪人神白崇彰。汝の首を貫い受ける』

シユツシユツシユツ（飛来する数本のカッターナイフ）

サツサツサツ（全てを綺麗にキヤツチする）

『往生際の悪いやつだ!』

いや、無抵抗の人間に何かツターナイフを投げつけてんだよ。全部獲ったけど。

「そーいえばーオレの元カノを明久が口説いていたつけー。傷ついた心に付け込んであわよくばを狙っていたみたいだよー」

『『『何いつ!?!』』』

「うんうん。ほんとだよー」

『やはり奴は生かしておけん!』』

『目標吉井明久に変更!』』

『行くぞお!』』

「いつてらつしやい〜」

すげえ。あんな棒読みのあからさまな嘘で騙せるんだ。

「あれ? タカつてもう新しい彼女作つたんですか?」

「まあ、そうなるなあ」

「お主というやつは……未練とかないのかのう?」

「無いね。未練なら断ち切った」

「相変わらず割り切ってますね〜せつかく傷ついた心に優しさをあげようと思ったの

こ」

「あいにく傷つく心を持ち合わせてなくてね」

「はいはい。もちろん知ってますよ」

まあ、向こうはどうか知らんが興味ねえ。でも女性はそう言う立ち直りが早いと、どこかで聞いたことがあるけど本当かどうかはさしたる興味もなし。

この後、一時間目の先生がやってきて、授業開始。少しした後、ムツツリーニが明久陣営に付いたとかで教室に戻ってきた。結局残りのメンバーは帰ってこなかったけど……まあ、どうなったのかは知らない。明久のラブレター？あー後で聞くと姫路に細切れにされ、雄二に燃やされたと。

清涼祭編

清涼祭準備と書いてサボりと読む

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『あなたが今欲しいものはなんですか?』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

黒☒由梨乃の答え

『タカとの思い出』

教師のコメント

二人にとって、この清涼祭がいい思い出になることを先生は願っていますよ。

神白崇彰の答え

『休暇』

教師のコメント

そうですね。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの本』

教師のコメント

訂正の意味があるのでしょいか。

吉井明久の答え

『カローリー』

教師のコメント

この回答に、君の生命の危機が感じられます。

☆☆☆

桜色の花びらたちが坂道から姿を消し、新緑が目を吹き始めた今日この頃。

オレたちの通う文月学園では、『清涼祭』と呼ばれる学園祭の準備が始まりつつあった。

学園祭準備の為、LHRの時間は清涼祭の準備に当てられていて、どのクラス、どの教室でもやる気や活気にあふれている。

そんな中、我らが二年Fクラスというと……

「吉井……いっ！」

「勝負だ、須川君！」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

準備なんてそつちのけで校庭で野球をしていた。ちなみに、出し物すら決まっていな

い。

「言ったな?! こうなれば意地でも打たせるもんか!」

ピッチャーは明久。キャッチャーは雄二の問題児コンビ。現在のバッターは須川だ。

「えい」

可愛らしい声で投げられたボール。無論明久の声では無い。

「おー今回は上手くいったな」

ユリである。オレとユリは明久たちが野球をする傍らでキャッチボールをしていた。

「ふふん。私も成長するんですよ」

「確かにそうみたいだな。……………胸と知能以外」

「何かいいました?」

「何でもねえよ」

ゆっくり取りやすいボールで投げ返す。さすがに本気で投げるようなことはしない。

ああ、でも、個人的には知力はもう少しあった方がいいと思うけど、胸はそのままで

いいかな。だって、それくらいの貧しい胸の方がオレは好みだし。

「それ反則じゃないの!?!」

キャッチャー雄二の指示に反論するピッチャー明久。位置的に雄二の指示は見えたが……反則? バッターの頭を狙う事は厳密には反則では無いと思うけど?・

「えい」

「おーだいぶコントロールが良くなったな」

最初の暴投に比べたらだいぶ進歩したなあ。

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか!」

そう思っていると鉄人の怒声が聞こえ、こちらにやってきた。とりあえず、ボールを鉄人に見られないよう背中に隠しておく。

「吉井! 貴様がサボりの主犯か!」

「ち、違います! どうしていつも僕を目の仇にするんですか!?!」

そう言う宿命に生まれてきたからだろう。

「雄二です! クラス代表の坂本雄二が野球を提案したんです!」

まあ、確かにそうだな。その通りだ。……ん?

『フオークを 鉄人の 股間に』

なるほど。ボールを人差し指と中指の間に挟んで……

「えい」

「違う! 今は球種やコースを求めているんじゃない! しかも、それをやったら——」

ゴスッ

「誰だ……! 俺の尻にボールを投げ込んだ馬鹿者は……!」

ビシッ（男子全員が明久を指差す音）

「吉井貴様……!」

「ま、待つて下さい!明らかに僕が投げたわけじゃないですよね!」

「吉井明久が投げました!」

「崇彰!?どう考えても君だよね!」

「冤罪です鉄人!オレがそんな鉄人の尻目^{ケツ}掛けて本気のフオークボールを投げ込むわけがないじゃないですか!」

「ま、まさか貴様!雄二の指示に従ったのか!」

「やれやれ何を言ってるんだ明久。俺はお前の指示通りにしただけだぞ」

「雄二もちやつかり僕に全責任を押し付けるんじゃない!」

「ええい!全員教室へ戻れ!この時期になっても出し物が決まっていらないなんて、うちのクラスだけで!」

こうして渋々教室に戻るようになったオレたちFクラス男子全員+αだった。



「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物についてきめなくちゃならないのだが――」

教室に戻った私たちFクラスの面々。ごぎに座る私たちを見ながら代表である坂本さんは……

「とりあえず議事進行並びに実行委員に誰かを任命する。そいつに全権を委ねるから後は任せた」

面倒くさそうな感じで答えていました。なるほど、野球を提案していたのはそのためですか。要するに誰かがやってくれるだろうと。

「由梨乃ちゃん」

「何でしょう？瑞希さん」

Fクラスには女子が3、5人しかいません。そのため、このクラスになってからよく話すうちに名前前で呼ぶことになりました。

「神白君も学園祭って楽しみじゃないんですか？」

私の膝を枕に気持ちよさそうに寝ている男を指差しながら瑞希さんが聞いてきます。

「うーん。楽しめか楽しめじゃないかじゃなくてタカの場合はやる気が起きないだけだ
と思います」

「やる気……ですか」

「タカは面白そうなことには楽しもうとしますが、それ以外は……」

「そうですか……」

この幼馴染。実を言うと、祭りというものが好きじゃないそうです。理由を聞くとお前には関係ないとか言われました。確かに昔から淡泊というか何と云うかで、祭りとかでも興味なさそうでしたが、中学に入ってから顕著です。うーん……何ででしょう？
「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということいいな？」

おっと、坂本さんの話が進んでいました。どうやら実行委員は美波さんのようです。理由として、瑞希さんは全員の話を丁寧に聞いてるうちにタイムアップ。私は全員の話を理解する役が寝ているため戦力外とのこと。……あれ？戦力外って酷くないですか？

しかし、美波さんは『試験召喚大会』に出るため時間的余裕がないです。私もタカと組んでエントリーしました（タカには隠れてで本人は知りませんが）。瑞希さんが家でFクラスをバカにされたから優勝して鼻を明かそうというわけです。本当なら瑞希さ

んとタカが組めば、学年でも最強になれそうですが生憎タカはやる気ゼロです。そのため、私がタカと組んで出ることになりました。

「なら、副実行委員を選出しよう。というわけで、皆には候補を挙げてもらいたい。その候補の中から島田が二人を選んで決選投票をする。これでいいだろう」

さらに話は進んで実行委員の補佐を作ります。すると、ちらほらと推薦の聲が上がりま

『吉井が適任だと思う』

『やはり坂本がやるべきじゃないか?』

『いやいや神白の方がいいだろ』

『姫路さんと結婚したい』

『ここは須川にやつてもらいたい』

なるほど。声が上がったのはこの五人ですか。あれ? 私は?

「むにや……ユリにはむりむり〜」

寝言で何か言いましたね。……否定してやりたいですが否定できません。ここはグツとこらえて今日の夕食はタカの嫌いなものを混ぜましょう。ええ、そうしましょう。

「よし。じゃあ島田。今挙がった連中から二人を選んでくれ」

「そうね。それじゃ……」

「そう言う和美波さんは黒板に決選投票候補者の名前を書き連ねます。」

『候補①……吉井』

『候補②……明久』

「ふむふむ。吉井さんと明久さんですか……」

「され。この二人のどちらかが良いか、選んでくれ」

「ねえ雄二。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない？」

「どうしましょう。どちらが良いと思うか悩み始めました。正直どちらも大差ないですが……うーん。」

「坂本さん。私は明久さんより吉井さんの方がいいと思います」

「あの、黒~~ク~~さん。それはどういう意味かな？」

「え？そのままの意味ですが」

「何か問題あったのでしょうか？」

「吉井さんと明久さんの二人が候補ですので吉井さんの方がいいかと……」

「諦めろ吉井さん。頭脳担当が仕事してないんだ。きつと吉井さんと明久さんが別人だと思われている」

「そ、そんな……」

え？まさか吉井さんと明久さんって………同一人物だったんですか？

「ほらほら、アキつてば。そんなことより、ウチとアンタでやることに決まったんだから、前に出て議事をやらないと」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされている気がするよ……」

「んじゃ、あとは任せたぞ。ふあ〜……」

怠そうな坂本さんと入れ替わるように吉井さんが教卓のところまで立ちます。おっと、坂本さん」

「なんだ黒☒。清涼祭関係は明久たちに言えよ」

ここちらに来た坂本さんに声をかけると眠そうな感じで返してきました。

「いいえ。そんなことよりもっと重要なことです」

「ふーん。手短にな」

横になり今にも寝そうな体勢で私の話を聞こうとします。

「ズバリ、どうしたらタカを辱められると思いますか？」

「諦めろ」

即答でした。

「坂本さん。私は些細な仕返しをしたいのです。今一度、タカに『調子に乗ると痛い目を見る』と教えてやりたいのです」

思い出されるのは少し前のお買い物。公園でのアレは凄く恥ずかしかったんですかね。いくら温厚な私でもあんなことをされれば些細な仕返しをしたくなると思うものです。……まあ、その一日でタカからのキスしてもらう権利を全部使ってしまったのも今思えば惜しかったです。

「でも、私の頭脳では到底タカに仕返しをするような策が『タカの嫌いなものを夕食に混ぜる』しか思いつきません。どうしたらいいですか？」

「諦めろ」

「何ですか？」

「この崇彰バカに仕返しをしようとしてもどうせ破られるからな。無駄な事はしない方がいいだろ」

「うーん。じゃあ、坂本さんが霧島さんにやられたくないことを教えてください」

「断る」

「何ですか？」

「俺らを基準に考えても無駄だ。お前らの関係はこっちから見れば異常だからな」

「え？普通ですよ？」

「何を言ってるのでしょうか。私たちが異常？どちらかというとなら坂本さんの方が異常ですよ。」

「まあいい。今言えることは『崇彰^{天オ}を出し抜くには相当な策がいる』ってことだ」

……そんな天災が私の膝を枕に気持ちよさそうに寝ていますが。

「仕方ありません。顔に落書きでもしておきましょう」

とりあえず、水性のマジックを取り出して……

ガラッ

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

気付けば、西村先生がやってきました。あ、落書きしているところが見つかると厄介です。タカめ、命拾いましたね……つと、そう言えば出し物はどうなったのでしょうか？

【候補① 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補② ウェディング喫茶『人生の墓場』】

【候補③ 中華喫茶『ヨーロッパアン』】

ふむふむ。候補はこの三つですか。中々に斬新なネーミングセンスですね。これは吉井さんが名付けたのでしょうか。私は悪くないと思いますよ。奇抜で斬新でなんだからカッコイイです。

「……補習の時間を倍にしたほうが良いかもしれんな」

あれえ？おかしいですね。もしかしくとも私たちがバカだと思われてますか？

『せ、先生！それは違うんです！』

『そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

クラスの皆さんが吉井さんをバカ扱いして自分だけ逃れようとしています。まあ、私は関係ありませんね。だって、バカじゃありませんし。

「馬鹿者！みつともない言い訳をするな！」

西村先生の一喝で、思わず背筋が伸びる皆さん。

なるほど。そうですもんね。教師ですからクラスメートを売ってその場を逃れようとする根性が気に入らないのでしょうか。

「先生は、バカな吉井を選んだ事自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

それは盲点でした。

「まったくお前たちは……少しは真面目にやったらどうだ稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういうった気持ちすらないのか？」

溜息まじりの西村先生の台詞。そんなことが出来るのですか？

『そうか！その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

先ほどから一転。一気に活気づく教室内。そりやそうですよ。設備に不満を感じて試召戦争を始めたのに、最初より更に低い設備では我慢ならないのも当然です。設備改善を要求します。

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

これは瑞希さんの声です。見ると、彼女は立ち上がって胸の前で手を握ってやる気を見せています。そう言えば、瑞希さん。彼女には改善しないといけない理由がありましたね。

『出し物はどうする？利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が』

『けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ』

『中華喫茶ならはずれはないだろう』

『それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命傷じゃないか？』

『ウエディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が高すぎる。たった二日の清涼祭じゃ儲けは出ないんじゃないか』

『リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ』

クラスの皆はやる気になりましたが、意見が多く飛び交って、まとまりそうに無いで

す。

「はいはい！ちよつと静かにして！」

美波さんがパンパンと手を叩いて注意しますが、効果はあまりないようです。皆が次から次へと自分の意見を口にしていきます。

『お化け屋敷なんかの方が受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きとうもろこしを作ろう』

ど、ど、ど、ど、ど意見がバラバラになつていきますね……。この前の試召戦争のときは比べ物にならないほどのまとまりの無さですよ。坂本さんはこんなクラスをまとめたいたのですか……。彼のクラス代表としての手腕は相当なものだと思ひ知らされませぬ。

「もうっ。とにかく静かにして！決まりそうにないから、店はさっきの挙がつた候補から選ぶからね！」

業を煮やした美波さんが無理矢理話をまとめた。強引ですね……。とても私には無理です。

「ほらっ！ブーブー言わないの！この三つの中から一つだけ選んで手を挙げる事いいわね！」

反論を眼力で押さえ、決を採りにかかる美波さん。

なるほど。坂本さんが美波さんを議事に推薦したのはこういうことですか。適当ではなかったのですね。

「それじゃ、写真館に賛成の人！——はい、次はウエディング喫茶！——最後、中華喫茶！」

美波さんの声が教室に響きます。しかし、喧騒は収まる気配がありません。

こんな騒がしい中、美波さんが挙げられた手の本数をカウントし始めました。ちなみに私は無難な中華喫茶に一票です。

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」

結果、接戦だったようですが僅差で中華喫茶が勝利となりました。良かったです。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

すると須川さんが立ち上がる。そう言えば彼がこの中華喫茶を提案していましたね。

「……………（スクツ）」

そして土屋さんも立ち上がりました。

「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

「……………紳士の嗜み」

中華料理が紳士の嗜みなんですか？そんな話聞いたことありません。今度タカに聞

いてみますか。

「まずは厨房班とホール班に分かれてねもらうからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところを集まって！」

吉井さんはホール班のトップにされていました。私は料理も出来ませし、どうしましようか？

「それじゃ、私は厨房班に——」

「ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないと！」

平然と厨房班に入ろうとした瑞希さんを吉井さんが止める。

『明久、グツジョブじゃ』

『……………！（コクコク）』

彼女の料理の破壊能力を知っている木下さんと土屋さんが、吉井さんにアイコンタクトを送ります。内容はよくわかりませんが『よくやった』的なことでしょう。

最大の犠牲者であった坂本さんとタカは寝ている為気付いていない——はずですが、見ると小刻みに震えていました。夢の中で、瑞希さんの料理が出て来たのでしょうか？仕方ありません。

「タカ。震えなくても私が傍にいますから。安心してください」

そつと震えるタカの肩の上に手を置きます。

タカが夢の中とはいえ恐怖するとは瑞希さんの料理はやバいですね。……………あれ？ 思い返せば瑞希さんの料理を無理やりタカに食べさせたのって私ですね。まあ、そこは触れない方向で。

「え？ 吉井君、どうして私はホール班じゃないとダメなんですか？」

自覚のない無自覚瑞全自動生物兵器製造マシーン希が首を傾げます。

吉井さん曰く、本当のことを話すと彼女が傷つくから言わないそうです。私なんてただ料理が苦手だったころタカに『マズッ。お前料理下手だな』とドストレートに言われたので泣きながら頑張ったんですよ。本当にタカは人の心を持ち合わせていませんね。……………まあ、何だかんだで料理の練習に付き合ってくれましたし、残さず完食してくれましたが。

「あ、えーと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客様さんに接したほうがお店として利益が痛あつ！ み、美波！ 僕の背中ではサンドバックじゃないよ！」

「か、可愛いだなんて……………吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ♪」
「ごめんなさい。ホールだけで頑張つてほしいです。」

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

「うん。適任だと思う」

「……………」

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「じゃあ、私も厨房にしますね」

「秀吉に黒_クさん。何を馬鹿なことを言ってるのさ。二人ともそんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎやああつ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」

「……ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……それが、いいと、思います……」

こんなスタートから波乱が起きそうな学園祭は幕を開けました。

Fクラスと書いて問題点の宝庫と読む

バカテスト 地理

以下の問いに答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア、エストニア、ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

神白崇彰の答え

『エストニア（タリン）、ラトビア（リガ）、リトアニア（ビリニユス）』

教師のコメント

正解です。首都まで書く必要はなかったですが完璧です。

黒☒由梨乃の答え

『エンジニア、ラザニア、リニアカー』

教師のコメント

言葉は近いですが全て違います。国名は正しく覚えましょう。

土屋康太の答え

『アジア、ヨーロッパ、浦安』

教師のコメント

土屋君にとつての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『香川、徳島、愛媛、高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう。



帰りのHRも終わって放課後になりました。

「アキ、由梨乃。ちよつといい?」

未だ寝ているタカを起こそうとした矢先、美波さんから呼び止められます。

「ん?何か用?」

「どうかしましたか?」

「用って言うか相談なんだけど」

「相談?僕らで良ければ聞かせてもらおうよ?ね。黒~~田~~さん」

「はい。そうですよ」

「うん。まあ、由梨乃にはあのことに關するって伝わるよね」

「あーそのことに關してですか」

「で、アキと由梨乃がそれぞれに言うのがベストだと思うんだけど——やっぱり、坂本と神白をなんとか学園祭に引つ張り出せないかな?」

うーん。やはり、あのことが原因ですね。学園祭を絶対に成功させるには坂本さんの統率力とタカの頭脳が必要です。せめて、片方だけでも本気を出させればよいのですが……。

「うくん。それは難しいかなあ……。さつきも言ったけど、雄二は興味の無い事に徹底的に無関心だからね」

「はい。タカも自由人というか気分屋というかで、協力してくれるか怪しいです」

「というか、坂本さんもタカもそもそもうちのクラスの出し物を知りませんよね？」

「でも、それぞれが頼めばきつと動いてくれるよね？」

「うくん。どうでしょう。」

「崇彰はともかく雄二はなあ……。僕が頼んだところで、アイツの返事は変わらないと思うよ」

「ううん。坂本はアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だって——」

「そりゃあ、いつもつるんではいるけど、だからと言って別に」

「だってアンタと坂本って、愛し合ってるんでしょ？」

「ええっ!？」

「もう僕お婿にいけないっ!」

「しよ、衝撃発言です。まさか、坂本さんと吉井さんが愛し合っていたんだなんて……。ま、まさか二人はそんな関係だったのですか!？」

「黒×さん!?!今の話は嘘だからね!?!」

「え?.....う?.....そ?」

「とういか誰が雄二なんかと！だったら僕は、断然秀吉の方がいいよ！」
「……あ、明久？」

すると、偶然私たちの会話を聞いていた木下さんの動きが止まります。

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われても、ワシらには色々障害があると思うのじゃ。その、ホラ。歳の差とか……」

「あれ？木下さんと吉井さんって同じ歳ですよね……？ま、まさか吉井さん！留年していたのですか!？」

「違うよ黒柳さん！それに秀吉！僕らの間にある壁は決して歳の差じゃないと思う！」

じゃあ、何が障害なのでしょう……？

「それじゃ、坂本と神白は動いてくれないってこと？」

「え？あ、うん。そういうことになるかな」

「まあ、そうですね」

「なんとかできないの？せめて片方でも参加してくれば……このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような……」

「そういえばそうです。私たちには絶対にこの喫茶店を成功させなくてはならない理由があります。」

「ところで、お主らは何の話をしておるのじゃ？島田も黒☒もそんなに思いつめた顔を

して、随分と深刻な話のようじゃが」

どうしましょう。タカは私が何とかできても坂本さんは私ではどうにもなりません。

「深刻って程じゃないんだけど、喫茶店の経営とクラスの話で——」

「アキ、そうじゃないの。本当に深刻なのよ……」

「はい。かなり深刻な話です」

「え？ どういうこと？」

「本人には誰にも言わないで欲しいって言われたんだけど、事情が事情だし……けど、一

応秘密の話だからね？」

「う、うん。わかった」

美波さんの真剣な顔に気圧される吉井さん。

「実は瑞希さんだけだ」

「姫路さん？ 姫路さんがどうしたの？」

「あの子、転校するかもしれないの」

「ほえ？」

美波さんの言葉に吉井さんがおかしな反応をします。

「む。マズイ。明久が処理落ちしかけておるぞ」

「このバカ！ 不測の事態に弱いんだから！」

「明久、目を覚ますのじゃ！」

木下さんが吉井さんの肩を揺すって起こそうとします。

「秀吉……モヒカンになった僕でも、好きになつてくれるかい……？」

「……どういふ処理をしたら、瑞希の転校からこつという反応が得られるのかしら」

「ある意味、稀有な才能かもしれんのか」

「私にはもう理解出来ません」

どうしたら、こんな反応を得られるのでしょうか？

「美波！黒田さん！姫路さんが転校つてどういふこと？」

「どうもこつも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このままだと……？」

「二人とも、その姫路の転校と、さっきの話が全然繋がらんのか」

「いいえ。瑞希さん転校の理由が『Fクラスの環境』なんです」

「つてコトは、転校の理由は両親の仕事の都合とかじゃなくて——」

「そうね。純粹に設備の問題つてことになるわ」

はつきり言つて、このクラスの環境は瑞希さんにとつてよいものではありません。それは私でも分かります。だから転校という話は当然でしょう。

「それに瑞希は身体も弱いから……」

「そうだよね。それが一番マズイよね……」

美波さんの言うとおり、この劣悪な教室の環境は瑞希さんの健康を害する可能性も十分あります。もし、このまま冬になろうものなら私たちは体調を崩すでしょう。

「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたのじゃな」

「そうです。瑞希さんも抵抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう』と考えているみたいですが、やはり設備をどうにかしないと」

それにこのFクラスがバカの集まりだからというのも転校を勧められる一因になっていると思います。ただ、それ以上に彼女の健康の方が問題になるのは分かっています。

「……アキはその……瑞希が転校したりとか嫌だよね……？」

「もちろん嫌に決まってる！ 姫路さんに限らず、それが美波や秀吉、黒~~田~~さんであっても！」

「そっか……。うん、アンタはそうだよね！」

やっぱり私も瑞希さんが転校するのは嫌です！ よし。

「そういうことなら、なんとしても雄二を焚きつけるさ！」

「私もタカを頑張って説得します！」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

「それじゃ、まずは雄二に連絡を取らないとね」

吉井さんは気を取り直し、坂本さんに電話をかけます。すると、呼び出し音が受信器から聞こえてきます。

「もしもし、あ、雄二。ちよつと話が」

吉井さんが坂本さんに話をしようとしています。

「え？雄二。今何をしてるの？」

しかし、雲行きが怪しいです。

「雄二!?もしもし!もしもーし!」

そして、こちらの用件を伝える前に切られたようです。

「坂本はなんて言ってた？」

「えつと『見つかつちまつた』とか『鞆を頼む』とか言ってた」

「……なにそれ？」

本当に何ですかそれ。

「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじゃろう。アレはああ見えて異性には滅法弱いからのう」

木下さんが腕を組んでうんうんと頷いています。何を分かったのでしょうか。

「そうすると、坂本と連絡取るのは難しいわね」

「そうですね」

「いや、これはチャンスだ」

私たちが坂本さんを諦めようとする、吉井さんがいきなり声を出します。

「え？どういうこと？」

「雄二を喫茶店に引つ張り出すには丁度いい状況なんだよ。うん。ちよつと三人とも聞いてくれるかな？」

「それはいいけど……坂本の居場所はわかつているの？」

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない」

「何か考えがあるようじゃな」

「まあね」

「じゃあ、坂本さんの方は任せました」

「うん。崇彰の方はよろしくね」

そして、二人を引き連れて吉井さんは教室をあとにしました。教室に残ったのは私とタカの二人だけです。

「ねえ、タカ。起きて下さい」

彼を揺すつて起こします。

「……ん？もう授業は終わったのか？」

「……それどころか、HRも終わりましたよ。今は放課後です」
「ふーん。じゃあ、帰るかユリ」

鞆を持って立ち上がるタカ。私はそんなタカに抱き着いて、耳元で甘い感じの声色で囁きます。

「ねえ。タカ。私はあなたのことが大好きです。愛してます」

「そうか。オレもお前のことが好きだぞ」

「でも、何かを一生懸命にやっているタカの方がもっと好きです」

「……………」

「クラスのために動けるあなたはもっと好きです」

「……………」

「私はそんなかつこいいタカをもっとみたいです」

「……………」

「見せて……くれますか？」

「……………」

すると、タカは教室を一瞥した後、

「で？何が狙いだ？」

淡々と話を進めようとしています。

「だから、清涼祭のクラス企画に参加して下さい」

「え？面倒」

……あれえ？

「さ、さっきの話聞いてましたよね？心に響きませんでした？」

「ん？あーどうでもよくて聞き流してた」

酷くないですか？それはさすがに傷付きますよ。

「で？何が狙いだ？」

「そ、それはタカにクラス企画を手伝ってもらおうと」

「ユリ。オレの眼を見ろ」

言われたとおりタカの眼を見ます。すると、

「……んんっ!？」

そのまま顔を近付けて来て私にキスをします。しかも、舌が入って来るいわゆる
ディープキスつてやつです。え？ええっ!？こ、こんなところではダメですよ！

「んー!？んー……!？」

強引に私の後頭部を抑えつけ逃さないようにしています。だ、ダメですよタカ！ここは
学校です！しかも保健室じゃなくて普通のクラスの教室です！

「……………ぷはあ」

そして、体感にして数分、恐らく実際は一分にも満たなかったでしょうが、タカが私を解放してくれました。

「……ふうん。大体分かった」

「はあ……はあ……え？今ので何が分かったのですか？」

『姫路がFクラスの環境の悪さのせいで転校する』だから『設備改善の為に中華喫茶の成功が必要不可欠』であり、『姫路の親を見返すため、姫路と島田、オレとユリがペアを組んで試験召喚大会に出場する』……ざっと、こんなもんか？」

おかしいですね。全部合ってます。

「な、何でそこまで分かったのですか？」

「キスの味」

「……うわぁ」

さすがにドン引きです。キスの味で普通そこまでわかります？キスっていうか私の唾液ですよ？まさか、考えを読むために舌をいれて来たのですか？

「冗談だ」

「なんだ冗談ですか……」

良かったです。タカにそんな異能の力が宿ってたと知ったら私……あ、特に何もしませんね。

「お前の眼を見りや分かった」

それはそれで凄いと思います。

「あれ？じゃあ、キスした理由って……」

「何となく。……嫌だったか？」

「……嫌ではないです」

……寧ろ嬉しいぐらいです。と、口元に手を当てながら思います。

「さてと、茶番はこれぐらいにして」

「茶番って酷くないですかあっ!？」

これが上げて落とすって奴ですか!？」

「とりあえず、オレに隠れて強制的にペアを組んで試験召喚大会に出場をした件について詳しく聞きますか」

「あ……っ」

☆☆☆

「そうか。姫路の転校か……」

ユリへの尋問を終わらせ今度オシオキをすると決めた後、ユリを夕食を作らせるために帰らせ、Fクラスの教室に戻った雄二たちと話を進める。

「そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だ」

「ああ。そうだ」

雄二は教室内を見渡し、オレと同じ結論に至った。

「不十分? どうして?」

「姫路が転校を勧められた要因は恐らく三つ」

そう言うのと、雄二は指を三本立てて見せた。

「まず一つ目。ごごとみかん箱という貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面だな。これは喫茶店が成功した利益でなんとかなるだろう」

そう言いながら指を一本引っ込める。

「二つ目は、老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境という面だ」

「一つ目は道具で、二つ目は教室自体ってこと?」

「そういうことだ。この問題は学園祭の喫茶店の利益程度で何とかなるものでもない。しかも、教室自体の改善なんだ。学校側の協力が必要不可欠」

教室に関してはオレたちだけでは対処できない問題だ。

「そして最後の三つ目。レベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促すことのできない学習環境という面だ」

部活動とかでもそうだが、能力を伸ばすためには実力の近い競争相手という存在は大きい。しかしこのFクラスではそんな相手は望めないからな。

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「そうじゃな。一つ目だけならともかく、二つ目と三つ目は難しいのう」

「細かく言うときリがないがまだ解決の糸口は残ってる」

「ああ。三つ目の方は女性陣が対策を練ってるはずだ」

そう。召喚大会なら解決は出来るはずだ。

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見せ物にされるだけみたいで嫌だけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね?」

「翔子が参加するようなら優勝は難しいが、アイツはこういった行事には無関心だしな。姫路と島田の優勝は充分ありえるだろう」

まあ、霧島が参加するとなるとパートナーもAクラスの生徒だろう。そうなるとオレたちもだが、教科によっては姫路たちの勝てる見込みはゼロに近くなる。

「本当なら姫路抜きでFクラスの生徒が優勝するのが望ましいけどな」

それを含めてオレとユリも出るのだが……まあ言うタイミング逃したし後でいつか。
「さすがに、そんな贅沢は言えねえだろ」

「まあまあ。姫路と島田が優勝したら、喫茶店の宣伝にもなるし一石二鳥じゃな」

そう。我らがFクラスは古臭くて汚れた旧校舎にあるからな。これによる宣伝の効果は見込めるはずだ。

「で、坂本。それはそうと、二つ目の問題は どうするの?」

二つ目の問題の教室の改修。これはオレたちだけでどうにかなる問題じゃない。まあ、だからこそ、

「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ?」

「まあ、当然のことだな」

「それだけ? 僕らが学園長に言っただけで何とかしてくれるかな?」

「あのな。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ? いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

「いくらクラス間に設備の差があるといえども、この教室は改善する必要があるだろう」
健康に害をきたすレベルならこちらが言う権利もある筈だ。

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

「オーケー。オレも一緒に行くわ」

「そうだな。三人で学園長室に乗り込むか。秀吉と島田は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。それと、鉄人が来たら俺たちは帰ったと伝えてくれ」

「うむ。了解じゃ。鉄人と、ついでに霧島翔子にも見かけたらそう伝えておこう」

さてと、行きますか

「アキ、しつかりやってきなさいよ」

「オツケー。任せといてよ」

島田の声援も受け、オレたち三人は教室をあとにする。

妖怪ババアと書いて学園長と読む

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

新校舎の一角にある学園長室。その部屋の前に着くと、扉の向こうから言い争っている声が聞こえてきた。

「どうした、明久」

「早く入らないのか？」

「いや、中で何か話しているみたいなんだけど」

「そうか。つまり中には学園長がいると言う訳だな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」

本当に取り込み中かは向こうが判断すること。オレたちには関係ない。

「失礼しまーす！」

学園長室のドアをノックし、返事を待たずにオレたち三人はずんずんと中に入っていった。

「本当に失礼なガキ共だねえ。普通は返事を待つもんだよ」

学園長室に入ると、目の前に長い白髪が特徴の藤堂カオル学園長が椅子に座っているのが分かった。確か、この人は学園長であると同時に試験召喚システム開発の中心人物。研究者だからか、多少普通の人とは違うみたいだ。第一声で可愛い生徒のことをガキ呼ばわりしてきたし……自分たちで可愛い生徒っていうのも気持ち悪いな。

「やれやれ、取り込み中だと言うのに、とんだ来客ですね。これでは話を続ける事も出来ません。……まさか、貴方の差し金ですか？」

眼鏡を弄りながら学園長を睨み付けるのは教頭の竹原先生である。鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒に人気が高いらしい。正直興味ないが、オレ個人はあまり好きなタイプとは言い難い人だ。

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるとと言う訳でもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

この学園長と教頭はオレたち三人のことをお構いなしにまた言い争い始めている。

「さつきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見間違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるなら、この場はそう言う事におきましよう」

教頭はそう告げると、部屋の隅に一瞬視線を送り。

「それでは、この場は失礼させて頂きます」

踵を返して学園長室を出て行った。何かを確認していた？うーん。確認するモノか……盗聴器。なんてな。

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

教頭との会話を中断された事に大して気にしていないのか、オレたちに話を振ってくる学園長。

「今日は学園長にお話があつて来ました」

我らが代表雄二が学園長の前に立つて話を切り出す。へえーこいつ敬語を知っていたんだ。意外だ。

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関する事なら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えておきな」

学園長はオレたちに礼儀を説いてきた。なんか癪だ。

「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二。そしてこの二人が——」
オレたちを示して紹介する。

「——二年生を代表するバカと第六天魔王です」

「ほう……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と吉井に神白かい」

「ちよつと待つて学園長！僕らはまだ名前を名乗っていませんよね!？」

「学園長にまで広まってるのか……。誰だよこのあだ名を付けたやつ……」

畜生誰だよ一体……

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

「気が変わった……か。」

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があつたらさつきと話しな、ウスノロ」

「分かりました」

……この人は本当に学園長なのだろうか？

「俺たちはFクラスの設備について改善を要求しに来ました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけ朽ち果てており、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

あ、言動が綻び始めた。よし、オーケーだ。

「学園長のように縄文時代から生きている老いぼれなら問題はないでしょう。しかし、今のオレたちのような、何処にでもいそうな普通のか弱い高校生にはこの状態は危険と判断、健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

これがオレたちの言い分だ。要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくる可能性がある。そう言いたいのだ。

「とりあえず早急に直しやがれクソババア、というワケです」

しかし不思議だ。自分で言うのもアレだが学園長はオレたちの慇懃無礼な説明を受けてもさほど言い方は気にしていない、何故か思案顔となつて黙り込んでいた。

「あの、学園長……?」

明久が黙り込んでる学園長を見て声を掛ける。

「……ふむ。丁度良いタイミングさね……」

何か呟いていたな。まあ、はつきり聞きとれたが。

「よしよし、お前たちの言いたい事は良く分かった」

「え?それじゃ、直してもらえるんですね!」

「却下だね」

だらうな。

「雄二、崇彰。このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「いや、とりあえず鮫を釣るための生餌にしよう」

「……明久に崇彰。もう少し態度に気を遣え」

さつきまで最低なことを学園長に言っていた雄二には言われたくない。

「まったく、このバカたちが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「そうですね。教えてください、ババア」

「正当な理由がもちろんありますよね、ババア」

「……お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

ババアはなんでそんな呆れ顔になってオレたちを見ているのだろうか？不思議だ。

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちょろいガキ共」

……ふーん。

「それは困ります！そうなると、僕ははともかく体の弱い子が倒れて」

「——と、いつもなら言っているんだけどね」

明久の台詞を遮り、学園長が顎に手を当て続きを話し始める。

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みを聞くな、相談に乗ってやろうじゃないか」

……交換条件を出してきたか。……怪しいな。

「……………」

雄二もオレと同じく、口元に手を当てて何か考えている。

「その条件って何ですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、まあ」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「え？優勝賞品？」

優勝賞品だと？

「学校から送られる正賞には、賞状とトロフィーと『白金の腕輪』、副賞には『如月ハイランド、プレオープンプレミアムチケット』が用意してあるのさ」

ユリの狙いはそのペアチケットも含まれているのか？まあどうでもいいけど雄二。君は何故ペアチケットという単語に反応を示したんだい？霧島関連かい？

「はあ……。それと交換条件に何の関係が」

「話は最後まで聞きな。慌てるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

「知らないです」

「知らないって……いいか明久？それは『慌てる乞食は貰いが少ない』だ。ちなみに英語で似た意味なのは『He goes a—gleaming before the cart has carried.』だな」

「ほう。流石、神白は頭がいいさね。噂に違わず」

噂……ねえ。

「どうでもいいので早く進めて下さい」

「この副賞のペアチケットなんだけど、ちよつと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ」

「回収？それなら、賞品に出さなければ良いじゃないですか」

「そう出来るならしているさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆す訳には行かないんだよ」

「そういう前に『学園長は召喚システムの開発に手一杯で、経営に関しては教頭に一任している』と聞いたことがあったな。噂でなく真実だったのか。」

「契約する前に気付いて下さいよ。学園長なんだから」

珍しく正論を言う明久。

「五月蠅いガキだね。白金の腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

「それで、悪い噂ってのは何ですか？」

「つまらない内容なんだがね、と前置きを言って学園長は噂の内容を伝える。

「如月グループは如月ハイランドに一つのジnkクスを作ろうとしているのさ。『此処を訪れたカップルは幸せになれる』っていうジnkクスをね」

「？そのどこが悪い噂なんです？良い話じゃないですか」

「そのジnkクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやって来たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、なんだと!？」

なるほど。雄二が慌てる理由がよく分かった。

「どうしたのさ、雄二。そんな慌てて」

「リラククスリラククス」

「慌てるに決まってるだろう！今ババアが言った事は『プレオープンプレミアムペアチケットでやって来たカップルを如月グループで強引に結婚させる』ってことだぞ!!」

「うん。言い直さなくても分かってるけど」

あの明久でも理解出来ている。それだけ内容はシンプルだということか。

「そのカップルを出す候補が、我が文月学園って訳さ」

「くそつ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムと言う話題性もたっぷりだからな。学生から結婚まで行けばジंकスまで申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然って事か」

悔しげに唇を噛む雄二。ふーん、スポンサーに如月グループがいたんだ。

「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるさね。頭の回転はまずまずじゃないか」

さつきもだが意外にこの学園長。生徒をガキ呼ばわりするわりに生徒の情報を把握している。

「雄二、取り敢えず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪い事でもないし、第一僕らはその話を知っているんだから、行かなければ済む話じゃないか」

「……絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる……。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚……。俺の……将来は……!」

目が虚ろになって言葉が途切れ途切れになっていたが、

「どうせお前の将来なんて最初から決まってるだろ?」

というか、どうせ、チケツトを手に入れられたら一緒に行ってやるとでも安請け合いましたんだろ雄二も相変わらずバカなことしている。

「テメエ崇彰!自分は既に結婚相手が決まってるからこんな計画乗ってもいいから……!」

「はあ?ふざけんなよ?こんな計画に乗せられるなんて嫌に決まってるだろうが」

「え?そもそも黒~~ク~~さんと崇彰が行けばこんな計画、意味をなくすんじゃない?」

「はっ。そんなのごめんだな。ユリには本当に好きな奴と結婚して欲しい。こんな強制的に結婚させるイベントなんてクソくれえだ」

オレが気に食わないのは何かをオレに強制させること。テメエは何様だと言いたくなる。

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

というか、ババアはババアで何が可愛い生徒だ。さつきまでガキ呼ばわりだったろう

が。

「つまり交換条件つてのは——」

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それが出来るなら、教室の改修くらいしてやろうじゃないか」

優勝できたなら……ねえ。

「無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもらうのも不可だ。私はお前たちに召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだからね」

「……僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね?」

「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

「だろうな。こんな取引一つで新しい設備を導入なんてしたら、他のクラスに示しがつかない。」

「ただし、清涼祭で得た利益でなんとかしようって言ってるなら話は別だよ。特別に今回だけは勝手に設備を変更する事に目を瞑ってやってもいい」

「そこを何とかオマケして設備の向上をお願い出来ませんか?僕らにとっては教室の改修と同じくらい設備の向上も重要なんです」

「それで?」

「もしも喫茶店が上手く行かずに設備の向上が危うかったら、そっちが気になって集中出来ずに僕らも学園長も困った事に……」

「なんだ、それだけかい。ダメだね。そこは譲れないよ」

「でも！設備の向上を約束してくれたら大会だけに——」

「明久、無駄だ。ババアに譲る気が無いのは明白だ。この取引に応じるしか方法はない」

「そうだ。オレらに残された選択肢はいかYESしかない」

まあ、このままオレたちに有利な条件で交渉に持ち込んでもいいが……お腹すいたし。ユリを一人待たせるのも忍びないし。

「ということ、この話は引き受けるが、こちらから提案がある」

「なんだい？言ってみな」

「召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制。一回戦は数学だと二回戦は化学、と言った具合に進めて行くと聞いている」

勝ち上がる度に教科が変わるのは、補充が面倒だからだろう。後は、全科目を満遍なく出来た方がいいしな。だって、もし保健体育でずっと、トーナメントなんてしようものならムツツリー二の独壇場だぜ？それ以外の科目壊滅的なのに。それじゃ面白くないからだろう。

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定をオレもしくは雄二にやらせてもらいたい」
「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力してやろうじゃないか」

「……ありがとうございます」

オーケー。もう疑念が確信に変わった。

「雄二。ところでペアの方はどうするつもりなの？ 召喚大会は二人一組で出る事になっているから……」

「ああ。それについては俺と崇彰が組めば確実だな。それでいいか？」

「悪い。言い忘れていたがオレはユリと組んで出ることになってる。お前ら二人で頑張ってくれ」

こればかりは仕方ない。

「さて、ここまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝出来るんだろうね？」

学園長が念を押してくる。……ペアチケットなんてどうでもいいらしいな。勘だが優勝することに意義がありそうだ。

「無論だ。俺たちを誰だと思ってる？」

不敵な笑みを浮かべて言う雄二。あれは試召戦争の時に見た、やる気全開の表情だ。

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」

明久の方もやる気全開で、絶対に優勝しようと思気込んでいる。

「メインはこいつらだがサブでぐらい働いてやるさ」

まあ、いっちょ頑張りますか。

「それじゃ、ボウズ共。任せたよ」

「おうよっ！」

「へいへい」

こうして、文月学園最低コンビが誕生したのだった。



清涼祭初日の前日の夜。

「今日の分は終わりな」

「つ、疲れたあ……」

召喚獣の大会に出ると分かった日からこうして勉強を本格的に教えてもらっています。放課後は吉井さんのところでも勉強を教えているそうですね。タカが自分の彼女

とかより吉井さんを優先しています。要するに、裏で何か起きたのでしよう。どうしても吉井さんの学力を少しでも上げておいて、召喚獣の大会に勝たせなくてはならない何かが。でもまあ、深くは聞かないでおいてあげましょう。

「じゃあ、寝るか。オレは部屋に戻る」

そう言つて窓を開けて出ていこうとするタカ。

「待つて」

私は腕を掴んでタカを止めます。

「タカが……いえ、タカたちが何かに巻き込まれたのは分かります」

「そうか」

「内容は問いません。どうせはぐらかされてしまいます」

そうです。この男は、ほんの少しでも私を巻き込んだときに私に害を及ぼす可能性がある。ある時はどんなに聞いても答えてくれません。

「大丈夫だ。オレたちに任せておけ。お前が心配することじゃない」

……変まりましたね。中学までのタカなら自分一人で解決しようとしていたはずなのに、今の彼には仲間がいます。頼りになるかは分からないけど戦力にはなる仲間が。

「……………」

「……………たく。電気を消せ」

「え？」

「今日は一緒に寝てやる。別にお前が寂しそうだっただからじゃない」

素直じゃないですね。素直に言ってくればいいのに。

そのまま私たちは一緒にベッドで入ります。

「どうしたんですか？腕枕なんて珍しいですね」

「……別に。こういう気分だった」

そのまま寝ようとするタカ。私はそんな彼に抱き着いて寝ようとしています。

ああなんて温かいのでしょうか。ねえタカ。あなたは優しいです。あなたには何でも解決できる頭があつて力も能力もある。そして、私を危険から遠ざけてくれます。でも、タカ。私も少しくらいタカの役に立ちたいのですよ？

清涼祭開始と書いて悲劇再びと読む

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートに御協力ください。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか?』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位のものを用意し、裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを……』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

黒☒由梨乃の答え

『■エプロン』

教師のコメント

なるほど。でも、どんなエプロンか具体的に書いても良かったと思いますよ。それにしても、何故神白君が用紙を持ってきてくれたのでしょうか。後、塗りつぶしたような跡は一体……。

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

☆☆☆

そして清涼祭初日の朝。

「……………」

オレはかなり重要なことに気付いてしまった。

「どうしたんですか?」

学校に行く支度が出来たユリから声がかかる。

「……………カラコン補充するの忘れてた……………」

「あれ? 珍しいですね。タカがそんな失敗するなんて」

昨日で使用期限が切れるから捨てたのは良かったが、補充するのを完全に忘れてた。しかも、普段ならサボるなり、遅刻で行けばいいが生憎今日は清涼祭だ。その上オレは召喚獣のタッグトーナメントに出場する必要がある。

「……………さて。どうするか」

「片眼に眼帯していったらどうですか?」

「阿保。それでも、見えてる方の目の色が違うことぐらいバれるだろ」

それに眼帯を外されたら終わりだ。

「じゃあ、両眼に」

「それ一番意味ないやつ」

ただ眼を見られた場合、学園祭でテンション上がってカラコンまで入れてはっちやける奴と思われる可能性がある。それが中二病発動中か。ただ両眼を隠すと言う点ではアリだが見えなくては意味ない。

「うーん。じゃあ、眼のところを包帯でぐるぐる巻きに」

「オレにミイラ男になれと？嫌だよ」

「……むう。注文が多いです。じゃあ、サングラスでもかければいいと思いますよ」

「……そうだな」

「やれやれ、サングラスで行くのか……まあ、致し方なしか。」

☆☆☆

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

そして、Fクラス。オレたちの普段使つてる教室はいつもの小汚い感じから、中華風の喫茶店に姿を変えていた。

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」

教室内のいたるところに設置した一見綺麗そうなテーブル。このテーブルは、実はオレたちの教室にあつたみかん箱だったりする。巧く積み重ね、綺麗なクロスをかけることにより、汚い箱から立派なテーブルに変身したのだ。

「あ、それは木下君が作つてくれたんですよ。どこからか綺麗なクロスを持って来て、こゝう手際よくテキパキと」

尊敬の眼差しで秀吉を見る姫路。

あのクロスはきつと演劇部の小道具を使つてるのだろうと予想する。

「ま、見かけはそれなりのものになったがの。じゃが、その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がクロスを捲ると、その先には普段オレらが見慣れてるみかん箱が。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

確かにそうだ。こんなみすぼらしい箱が机に使われているのを見られてしまった日には、この店のイメージダウン。下手すると他の店どころか学校にすら迷惑がかかるかもしれない。

「きつと大丈夫だよ。こんな所まで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内には
まっつておいて貰えるさ」

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人はいませんよ、きつと」
もしそんな事をする奴がいたなら、それは営業妨害が目的でやってるとしか思えない。
い。

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

まあ、ここまではきりや上等だろ。

「ねえ、アキ。今朝からずーっと、疑問に思ってたこと言っていない？」

「ごめん美波。何となく想像がたくし僕もずっと疑問に思ってた」

「やはり、二人も疑問に思ってたんですね……」

何かを疑問に持っているご様子の三人。さあ？彼ら彼女らか何を疑問に思っているのかオレには分からない。

「ねえ、崇彰。何でそんなサングラス掛けているの？というか、見えてる？」

「ん？気分だから心配すんな」

しかも濃い色のサングラスだ。だって、アレだよ。相手からオレの眼を見られたら意味ないもん。

「それに、眼鏡屋で買ったのだから安心だ」

何か色の濃いサングラスは危険って言うが、それはあくまで市販の物で諸々の対策が足りてない物が多いだけで、眼鏡屋さんとかのは危険性はない。……………そう信じてる。

「そういう問題じゃないくて！アンタは女性受けしそうだからホール担当に由梨乃が推していたのに！それだと怖さで誰も近づかなくなるでしょうが！」

なるほど。だからオレはホール担当だったのか。

「まあ気にするな。寧ろ普段よりダンディーというか、大人っぽさが増したと考えればいいさ」

「ポジティブですね…………」

そりやそうだ。オレの目的はあくまで眼を隠すこと。それだけだから、正直後は口から出まかせで何とでも言える。

「やれやれです。あ、吉井さんたち。こっちもオツケーです」

「お、ユリかそれと」

「……………飲茶も完璧」

「おわっ」

いきなり後ろからムツツリーニの声が聞こえると明久が驚いた。相変わらず存在感を消すのが巧い。なぜ消していたかは知らない。

「ムッツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「……………味見用」

ムッツリーニはそう答えながら、木のお盆を差し出す。その上には陶器のティーセットと胡麻団子が載っていた。

「わあ……………美味しそう……………」

「土屋、由梨乃。これウチ等が食べちゃって良いの？」

「……………（コクリ）」

「はい。どうぞ試食して下さい」

「では、遠慮なく頂くかの」

姫路、島田、秀吉の三人が手を伸ばし、作りたての温かい胡麻団子を勢いよく頬張る。ちなみにユリはホール班だが、別に料理は上手いので準備の時は胡麻団子作りを手

伝ってもらっていた。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないとこも良いのう」

「どうやら、大絶賛のようだ。」

「お茶も美味しいです。幸せ……………」

「本当ね〜……」

すると、姫路と島田の目がトロンと垂れていた。トリップ状態つてやつだ。そんなに旨いのか？

「それじゃ、僕も貰おうかな」

「ついでにオレも頂くよ」

「……………（コクコク）」

オレと明久に、ムツツリーニが残った胡麻団子を一つずつを差し出す。

楊枝がなかったので手でつまんで軽く一口頬張った。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつても——んゴパっ」

オレたちの口からありえない音が出た。

「あ、それはさつき姫路が作ったものじゃな」

「……………!!（グイグイ!）」

「…………犠牲になつてください」

ユリが残った胡麻団子をオレの口の中に押し込む。ヤバイ！これは人が簡単に走馬燈を見ることが出来るある意味存在しちやいけない代物だ。本気で抵抗しようと思えば殴る蹴るなどをすればいいが問題は相手がユリだということ。ユリ以外ならできる

が、ユリに対してそんなこと、オレは死んでもしない。だからせめてもの抵抗としての最悪の危険物。喉を通すわけには、

「…………お茶もどうぞで」

隣で明久がムツツリーニに抵抗する中、オレはユリによつて口の中に大量のお茶を注ぎこまれ、

ゴクツ

そして次の瞬間オレの目に映つたのは走馬燈と言われる、オレの十六年間の軌跡だった…………。

★★★

「うーっす。戻ってきたぞー」

何も知らない呑気な坂本さんの声が聞こえます。ですが、今の私には関係ありません

ん。

「あ、雄二。おかえり」

「ん？崇彰たちは何やってるんだ？」

今私は倒れているタカを抱きかかえています。うう……戻ってきて下さい……

「し、白雪姫ごっ……」

「はあ？というか、逆だろ。何で白雪姫役が崇彰で王子様役が黒 \boxtimes なんだよ」

「さ、さあー」

白雪姫？そんな口から出任せの嘘を………ああっ！そうです！白雪姫です！王子様のキスによって白雪姫にかけられた毒が解かれるというアレです！

「お、これは美味しそうだな。どれどれ？」

私がタカ蘇生法を思いつくその傍らで、坂本さんが吉井さんの食べかけであるパイオ兵器胡麻団子を口に運びます。間接キスとかそんなこと言ってる場合じゃありません！

「………たいした男じゃ」

「雄二。キミは今、最高に輝いているよ」

「？お前らが何を言ってるのかわからんが……。ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつても——んゴパっ」

すっごい既視感を感じる中、私はタカの唇へそつと口付けをします。

……あれ？　そういえば白雪姫へのキスってディープの方でしたっけ？　いや、さすがに童話ですし普通のキスですね。きつとそうです。むしろ、初対面の姫にディープのキスをする王子様ってやばそうですね。

「う、うう……」

お？　これは成功ですかね。やはり白雪姫タカの毒リンゴ胡麻団子による永遠の眠りを覚ますのは王子様のキスですね。

「なんだ崇彰もここに居たのか」

すると、倒れた坂本さんからタカの名前が出ます。……………あれ？

「雄二か？　オレは……」

「まあいい。一緒にあの川を渡ろうか」

もしやその川は三途の川と呼ばれるものでは？　……………あれれ？　蘇生失敗？

「雄二!?　崇彰!?　二人ともその川はダメだ！　渡ったら戻れなくなっちゃうー!」

どどどどうしましょうー!　早く蘇生しないと……………!　でも方法は……………あ!　そうです!　きつと、アレです!

「……………んん……………」

今度はキスしたうえでタカの口の中に私の舌を強引にねじ込みます。そうです!　きつと、白雪姫も王子様のディープキスで目覚めたんです!　お願いです戻ってきて下さ

い！

「六万だど？バカを言え。普通渡し賃は六文だと相場は決まって——はっ?!」

ポンポンという感じで背中が叩かれる気がしましたが、構わずキスを続けます！必ず戻らせますからねタカ！

「んんっ?!」

すると、今度はタカの舌が強引に私の舌を追い出そうとしてきます。あれ？コレって

……

「はあ……はあ……殺す気か……」

どうやら復活したみたいです。

「うう……無事でよかった……」

「トドメ刺そうとしたのも最初に殺しかけたのもお前だけだな……!」

さつと目を逸らします。え？私じゃありませんよ！

「今夜……覚えとけよ……!」

「え？それって……!」

も、もしかしてタカからのおさそ——

「勉強漬けな」

「——酷いです！期待させておいてあんまりです！」

「今の言い方で期待する方が間違ってるんだ阿保」

いや、どう考えても期待させるアレな言い方だったと思いますけど。

「てか、雄二。戻ってきてたんだな」

「ああ、ただ、これから俺と明久が一回戦を済ませてくるから、その間は頼んだぞ」

「おっけー」

「あれ？アンタたちも召喚大会出るの？」

美波さんが明久さんを見て確認します。

「え？あ、うん。色々あつてね」

言葉を濁す吉井さん。タカも隠していることからきつと裏で何かあるのでしょうか。

「もしかして、賞品が目的とか……？」

「うくん。一応そういうことになるかな」

「……誰と行くつもり？」

「ほえ？」

「吉井君。私も知りたいです」

瑞希さんと美波さんが問い詰めています。きつと、吉井さんと親しいお二人にとっては死活問題なんですな。

「明久は俺と行くつもりなんだ」

これは想定外です。私の想像を超えています。

「え？坂本とペアチケットで、『幸せになりに』行くの……？」

どどどうしましょう。これが確かびーえるって奴でしたっけ？

「た、タカ。しょ、衝撃の真実ですよ……」

「だろぅな……」

はわわ。気まずそうに目を逸らしてますよ。もしかして、こういう……

(おそらく、明久にとつても衝撃だっただろぅな……)

「俺は何度も断ってるんだがな」

「も、もしかして！吉井さんからの片思い……？」

「アキ。アンタやつぱり、木下より坂本の方が……」

「ちよつと待つて！その『やつぱり』って言葉凄い引つかかる！後、誤解しないで黒☒さ

んー！

「誤解……ですか？」

今の会話に誤解する余地はなかった気がします。断言します。

「今の雄二の話はう……」

「う？」

「……う、嘘かどうかは崇彰に聞いて」

「紛れもない真実だ」

「そこはフォローしろよバカ彰！」

「バカアキ!? タカアキだからバカアキですか! ……なるほど上手いです。座布団一枚です。」

「吉井君。男の子なんですから、できれば女の子に興味を持った方が……」

「それが出来れば明久だつて苦労はしてないさ」

「ああ、実に残念な話なんだがな」

「雄二に崇彰! もつともらしくそんなことを言わないで! 全然フォローになってないから!」

「つと、そろそろ時間だな」

「よし、さっさと行つてこい」

「……くつ! と、とにかく、誤解だからね! 「勘違いしないでよね!」つて崇彰!? それじゃただのツンデレじゃないか!」

「……………えーつと。」

「結局、何が真実なのでしょう……?」

「ま、明久と雄二が仲いいのは事実だな」

そんな感じで、波乱の清涼祭はスタートしました。

一回戦と書いて圧勝と読む

開店してFクラスの店は予想以上の賑わいを見せていた。そんな中、オレとユリの一回戦の時間が迫る。

「ところで、タカ」

「なんだ？ユリ」

「一回戦の相手って……誰でしたっけ？」

会場に向かって歩いている中、まさかの発言に耳を疑うオレ。いや、まさかって程でもないか。

「心配すんな。着いたら分かる」

トーナメント表を見ると、雄二&明久ペアと姫路&島田ペアはDブロック。オレたちはCブロック。だから決勝戦まで当たらないってのは分かっている。はあ、なるべく決勝まで駒を進め、そこでガチでやるふりをしながら負けるってのが理想か。

というか、特に一回戦から三回戦までは、一般公開無しでスケジュールもある程度詰めてるせいか……うっわ。凄いスピード。前の試合が終わったらすぐ次の試合って感じでどんどん進んでく。トーナメント表を見たが一回戦はパワーバランスの傾いた組

み合わせが多い。だから、ハイペースで進むところもあるし、逆に拮抗するところもある。

そして、何の因果かは知らないが、オレたち二年Fクラスからの三組は初戦からBクラスが相手にいる。

「あ、由梨乃ちゃんに神白君」

「瑞希さんに美波さん。終わったのですか？」

「はい。無事勝ちましたよ」

「アンタたちも頑張りなさいよ」

「ま、善処する」

負けられない理由はある。だから負けない。

「じゃ、戻ってるわね」

教室に向かう姫路と島田。

「じゃあ、行くぞ」

「ふふん。私とタカが組んだんです。最強のペアですよ」

「最強ねえ……」

ぶつちやけ弱そう。意思疎通だけは完璧だが。

「ほう。お前たちが相手か」

「まあ、俺たちが相手に運がなかったな」

相手は三年のBクラスペア。両方とも男だ。

「では召喚して下さい」

「「試験召喚！」」

一斉に召喚獣を召喚する。

「ああ、先輩方。今の台詞そのままそっくりお返ししますよ」

「は？」

現れた召喚獣。表示される点数。そこには……

『Fクラス 神白崇彰&黒田由梨乃』

数学 458点&49点

VS

Bクラス モブA&モブB

数学 178点&177点』

軽くAクラス上位レベルの点数が表示された。

「おいおい、Fクラスでこんなに取れるなんて聞いてないぞ……」

「嘘だろ……この点数」

「ねえ、タカ。もしかして、私って場違いですか？」

「気にすんな。そんなの見りや分かるだろ？」

「なっ!?!ここは、私を慰める言葉を——」

「あ、お前一人で勝つたら、今夜の勉強はなしでいいぞ」

「——そんな言葉はいりません! 私が欲しいのは勝利です! 行きますよ先輩方!」

剣を構え、突撃するユリ。そして、

「うう……やられちゃいました……」

呆気なく戦死した。

「これで二対一だ。格の違いを見せてやるよ後輩!」

槍を構え、突き進む先輩。

「格の違いですか……見せられるといいですね」

そのまま銃を構えて発射。さすが先輩。一年長く操作してるだけあってこの程度は避ける。

「背中がお留守だ——」

「何かおっしやいました?」

剣で切りかかってくるもう一人の先輩。その人の召喚獣の方を振り向かず、剣でガー

ドし、

「先輩はお腹がお留守ですね」

「回し蹴りをぶちかまし、飛んでく先輩の眉間に弾丸を当てる。これで一人。」

「なっ……」

「すみませんね。こつちにも負けられない事情がありまして——」

驚いてる槍を持った先輩に近づいて、

「——これで終わらせていただきます」

首元を剣で一閃。一瞬で終わらせた。

「勝者、神白・黒匣ペア」

とりあえず、一回戦突破。

「帰るぞ。ユリ」

「……はーい」

ちよつと不服そうなユリを引き連れて帰る。

☆☆☆

「たっだいまーん？雄二と明久は？」

「テーブル調達に行つたのじゃ」

「テーブル調達？何でだ？必要……あるけどないだろ？」

「それではどちらか分かりませんよ」

本来なら必要不可欠。だが、誤魔化せている現状では無用って感じ……あ、

「まさかバれたのか？」

「うむ……ちと迷惑客がいてのう。一瞬で広まってしまったのじゃ」

「なるほどね」

そのせいで客が少し減つたのか。

「ユリ。とりあえず、客引きよろしく」

「任せて下さい」

さて……と。

「奴らと合流するか。秀吉。何か聞いているか？」

「ワシは回収班として動いてるだけじゃから何とも」

なるほど。確かにテーブルを借りる盗む交渉組実行犯とそのテーブルを教室まで持つてくる

運び屋回取班は分けた方がいいか。どうせ、あの二人は交渉組として学校内を走り回っているのだろう。良くも悪くも学園内の教師陣で知らぬものがないさそう問題見な有名人だからな。

P r r r r r !

動こうとしたところで鳴り響く携帯。着信相手を見る前にさっさと出る。

「もしも——」

『応接室から職員室そばの休憩室』

プツッ

切れる電話。通話時間は驚異の2秒。……………はあ。

「秀吉。ちよつと行つてくるわ」

「う、うむ……………任せたぞ」

今の声は雄二だった。で、ドタドタと聞こえたところと電話の内容から察するに、応接室からパクったテーブルを背負いながら先生から逃げているのだろう。やれやれ

……

「なるほどな……………」

で、雄二が何であんな言い方をしたかは応接室を経由して職員室そばの休憩室へ向かう道中に理解した。

「たく。何で明久の上靴が廊下に落ちてんだよ」

走ってる最中に脱げたのか別の意図で使って落とされたのかは知らんが自分で回収しろよ。普通に考えて。

そして、明久の上靴を回収し、歩くと、

「来てくれたか」

「あ、僕の上靴」

「ほらよ。はあ。こいつらをテーブル泥棒として逮捕したら謝礼貰えるか?」

「安心しろ。今からお前も共犯だ」

何一つ安心できねえよ。

「で? 作戦は? 職員室近くは警戒が強いんじゃないのか?」

「明久生徒自作戦」

「よし。分かった」

「いやダメだよね!? 僕を犠牲にするつもり!」

「と、普段なら行きたかったがこいつはトーナメントでの俺の相棒。ここで死んでもらっては困る」

「ツチ。命拾いしたな」

「いや僕ら味方だよね? ね?」

そうだな。確かにオレたちは（利害が一致している間は）味方だな。

「で？結局作戦は？」

「強行突破」運任せ

「最高だな強行突破」勇敢な特攻

「それって、作戦ないのに等しいんじゃない……」

いや、決して作戦がないわけじゃない。強行突破も立派な作戦の一つだ。間違いない。

「よし。ここからはスピード勝負だ。一人のミスが命取りになると思え」

「オーケー」

「……絶対僕ら捕まるよ——」

「行くぞ！」

「おう！」

「——ね……って置いてかないでよ!?!」

騒ぐ明久を無視して突撃するオレと雄二。

以下ダイジェスト版でお送りします。

「なっ!?!カギがかかかってるだど!?!」

「どけ。蹴り壊す」

「いやいや壊すのは流石に——」

ドオン！

「本当に蹴り壊したあ!？」

「急げ！明久が扉を破壊したことがバレる前にずらかるぞ！」

「おう！明久が器物損壊で捕まる前に目的を果たすぞ！」

「ちやつかり僕に罪を着せようとしないでよ！」

時には明久のせいにして……

「次は文化部の部屋だ！」

「また扉を破壊するか？」

「いや、流石にそれはやめておこう」

「よかった。雄二にも常識があ——」

「代わりに壊すのは窓だ」

「——ると信じたかったんだけど!？」

「よし！明久がたまたま壊すんだな！」

「その通りだ！」

「違うから！僕は被害者だからね!？」

時には明久を盾にして……

「どうする！次は職員室か？」

「よし！明久とテーブルを交換するよう交渉するか！」

「等価交換だな！」

「全然等価じゃないからね!?!どうしたら僕がテーブルと同じ価値に……」

「おい明久。素晴らしいテーブルさんとお前の価値を一緒にしてやるって言ってるんだ」

「ああ。味のなくなったガム程度の価値のお前と違ってテーブルさんには無限の価値があるんだぞ」

「逆だよね!?!何で僕の価値がテーブル未満なのさ!後、僕の価値が味なくなったガムってどういうことさ!」

「真実だろ?」

「よし、貴様ら決闘だ!二人ともボコボコにしてやる!」

時には明久を売りに出そうとし、どうにか必要数のテーブルを確保したのだった。

そして二回戦開始の時は刻一刻と近づいてくるのだった……。

バカなお兄ちゃんと書いて予想通りと読む

バカテスト 現代社会

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『Peace-Keeping Operations (平和維持活動)の略。国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと』

神白崇彰の答え

『United Nations Peacekeeping Operations (国際連合平和維持活動)の略。説明は略』

教師のコメント

そうですね。神白君の言うとおり、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。ただ、神白君は説明を略したのはよくありませんね。説明も簡単でいいので答えてください。

土屋康太の答え

『Pants Koshitsuki Oppaiの略。世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』

教師のコメント

君は世界の平和をなんだと思っているのですか。

黒柳由梨乃の答え

『Panchi to Kick de Owari desuの略。相手を倒す一連の流れのこと（タカがやっているので間違いありません！）』

教師のコメント

平和とは程遠いですね……

吉井明久の答え

『パウエル、金本、岡田の略』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人たちです。

☆☆☆

二回戦。雄二たちは姑息な手で勝利を手にし、続くオレたちの試合。

「神白君と黒柳さんの勝利です！」

聞こえるのは勝者を告げる審判の宣言。え？どうやって勝ったか教えろって？まあ、かいつまんで話すなら、

ユリを挑発する。

←

特攻を仕掛け撃沈。

←

オレが相手二人を倒して勝利。

要するに一回戦と同じ流れってことだな。で、教室に戻ろうとすると、

「お、崇彰に黒柳じゃねえか。勝ったか」

「はい。もちろんです」

「なら、よかった」

やってきたのは雄二。ただ……

「どうした崇彰。携帯電話なんて取り出して」

「……もしもし警察ですか？ 誘拐事件です。野生の赤ゴリラが小学五年生くらいの女の子を誘拐しようとして……!?!」

次の瞬間、オレから携帯電話を奪おうとする雄二。

「テメエしやれにならねえだろうが！」

「こつちの台詞だバカ！ テーブル強奪の次は少女誘拐かよ！ 問題行動も大概にしやがれ！」

「誰が誘拐なんぞするか！ 俺はこのチビツ子が人を探してるって言うから手伝っているだけだ！」

「チビツ子じゃなくて葉月ですっ」

と、雄二に誘拐された少女、葉月はオレたちの方を向く。

「へえ、葉月ちゃんって言うんだね」

すると、ユリが恐怖心を与えないようにするためか、葉月と同じ目線に立つたためにしゃがむ。そういやこいつ、言動が幼くて時々忘れがちになるが背がそこそ高かったわ。というか女子の中では普通に高身長だし。

「はいです。シルバーのお姉ちゃん」

「うんうん。で、人を探しているって誰を探しているのかな？」

「お兄ちゃんを探してるんです……」

「うーん。家族のお兄ちゃんかな？名前は分かる？」

「……うう……名前は分からないです……」

はあ。雄二もユリも優しいねえ。人探しだなんて名前わかんなきや見つけるのは相当苦労するぞ？

「何か特徴はあるかな？」

優しく問い掛けるユリ。たぶん、子どもの扱いはオレより上手いだろうな。そして、オレより子どもに好かれそうだ。

「えっと、バカなお兄ちゃんでした」

「「……………」」

一瞬無言になるオレたち。そう来るか。そう来るのは流石に予想外だ。

「……おい。何だバカなお姉ちゃん。オレを見てもオレは違うからな」

「バカなお姉ちゃんって何!?!私バカじゃないですよ!?!」

「なあ、葉月。このバカなお姉ちゃんよりそいつはバカだったか？」

「はいですっ!」

即答か……なるほど。

「よし、オレたちのクラスFクラスに行くか」

「だな。黒柳のおかげで候補が絞れた」

「えーっと。喜んでいいやつですか？これって」

「ああ。ユリのおかげで尋ね人が文月学園全男子生徒からオレと雄二を除く二年Fクラス男子まで絞れたんだ。よくやった」

「わあーい……っておかしいな？褒められたはずなのに何故か涙が……」

それはオレが褒めてないからな。

そんな涙を隠しながら葉月の手をひくユリ。

後ろから見るその姿は、姉妹と言うより親子のようだった。

「……………てか、やつぱ子どもには好かれるんだな」

「それは精神年齢が近いからか？」

「正解」

「いや、もうちよいフオローしてやれよ」

フオロー？事実じゃないか。

と、阿呆なことを後ろで言っていると我が二年マFイクラスホに着く。……いや、ここがマ
イホームつてのはやつぱないな。

「あれ？黒柳さん。その子は妹？」

「可愛い子だなく。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない?」

「俺は寧ろ、今だからこそ付き合いたいなあ」

入ってそうそうにユリと葉月はクラスの男たちに囲まれてしまう。

店には客がゼロ。なるほどな。暇なんだろう。

「あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですつ」

「えーつと、皆さん。葉月ちゃんはお兄ちゃんを探してるそうです。我こそはそのお兄ちゃんって人はいませんか? いたら手をあげてください」

すると、何人かの馬鹿どもが手を挙げようとする。

「ちなみに、そいつの特徴は『バカなお兄ちゃん』らしいぞ」

オレがそれを言った瞬間、手を挙げようとした奴は全員手を降ろす。

そりやそうだ。ここで手を挙げたら、自分はバカですと公言しているに等しいからな。……ま、公言しなくともここにいるやつは全員バカだろうが。

「それだけじゃもう絞り込めないだろ……他には特徴があるか?」

雄二が葉月に問い掛ける。

「あ、あの、えーつと、その……すつごくバカなお兄ちゃんだったんです!」

「「吉井だな」」

一瞬だった。その大きすぎる特徴を聞いた瞬間、全員の思考が一致した。明久が泣き

そんな顔をしているが知らぬ。

「全く失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違い——」

「あつ！バカなお兄ちゃんだつ！」

明久がそんなの違うぞと抗議するように大声で叫ぶ。しかし、現実是非常なり。葉月は明久に駆け寄り、抱き付いた。

「絶対に人違い、がどうした？」

「人違いなら現状をどう説明する？」

「……人違いだと、いいなあ……」

雄二とオレの問いに、現実から逃れようとする明久。諦める。これが現実だ。

「つて、君は誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな知り合いはいないよ？」

明久はそう言うのと、葉月の顔を見るため（多分）に一旦葉月を引き剥がす。

「え？ お兄ちゃん……。知らないつて。ひどい……」

あーあ。やつちまつたかあ……。これは泣かせたか？

「バカなお兄ちゃんのパカあつ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』つて聞きながら来たのに！」

違った。明久が泣かせたと言うより明久が泣かされてる。

「明久——じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでゴメンな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう?」

「バカなお兄ちゃんは本当にバカなんです。ごめんね。葉月ちゃん」

「お前ら追い打ちをかけてやるなよ。バカなお兄ちゃんはバカだからそう呼ばれてるに決まってるのだろ? てわけで、葉月。こいつはバカだから君のこと覚えてなかつたんだよ。ごめんな」

雄二、秀吉、ユリにバカと呼ばれ、オレからはフォローすると見せかけてやつぱり落とす。この短時間で明久はバカと連呼されまくり本当に可哀想(笑)だ。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに——」

おっと。この子超巨大な爆弾を落としたぞ。と、その爆弾に反応したのは、

「瑞希!」

「美波ちゃん!」

「殺るわよ!」

「いぶあつ!」

島田アンド姫路である。明久は二人の急襲を受け、戸惑ってる。いや、ほんとに災難だな。お前。

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

そんな明久と違って、落ち着いて話し掛ける雄二。

「瑞希、そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向曲げるから」
「こ、こうですか？」

やべえ。3Dのスパッター映画か？リアルスパッターか？

「ちよつと待って！結婚の約束なんて、僕は全然——」

「ふえええんっ！酷いですっ！ファーストキスもあげたのに——っ！」

再び投下される爆弾。葉月はきつと無自覚爆弾魔だな（納得）。

「由梨乃！包丁を持ってきて。五本で多分足りるはず」

なるほど。首に両手首と両足首に一本ずつ刺すつもりか？

「え、えーつと……私はどうすれば……」

突然の指名に戸惑うユリ。姫路が明久の口を引つ張る中、オレはそつと、

「いいかユリ。包丁って言うのは食材をさばくものだ。残念ながら明久は食材じゃな

い」

「そうです！包丁は料理人の命です！人を刺すものではありません！」

「さすが崇彰！君は僕のみか——」

「だから、日本刀にしておけ」

「はい！」

「——たじやないよね!?ああ待って黒柳さん！日本刀でもしやれにならないから！」

と、日本刀を探しに何故か厨房に向かうユリ。そして、

「た、大変ですタカ！何故か日本刀がありません……どうしたのですかタカ!?頭を抱えて……まさか頭痛が痛いのですか?」

頭痛の種はお前だよバカ……。オレはバカな幼なじみに頭を抱えるしかなかった。あまりのことに他の皆も静かになる。

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ!」

と、このタイミングで葉月が島田にお姉ちゃんと言ってる……まさか姉妹か?おい、どっちでもいいがさっさと気付よお互い。

「ああつ!あのときのぬいぐるみの子か」

テメエ。思いきり知り合いじゃねえか。何が知らねえだこの野郎。

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

葉月が頬を膨らませる。怒ってるつもりだろうか?

「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった?」

「はいですっ!」

「うんうん。それは良かった。それにしても、よく僕の学校が分かったね」

「お兄ちゃん、この学校の制服着てましたから」

そう言いながら葉月は明久の制服を引っ張る。なるほどな。そりゃここだって分か

るわ。

「あれ？葉月とアキって知り合いなの？」

「うん。去年ちよつとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

「へ？」

うん。知ってたから……何でもつと早く気付かないんだよ。

「吉井君はずるいです……。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？私はまだ両親にも会っててもらってないのに……。もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になつてたり……」

ほう。これが姫路の本性か？なかなか面白そうだな。

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん！ぬいぐるみありがとうでしたっ！」

葉月は姫路を見てペこりとお辞儀をする……。ん？ちよつと待て。まさか……

「こんにちは、葉月ちゃん。あの子、可愛がつてくれてる？」

「はいですっ！ 毎日一緒に寝てます！」

……ふう。

「何でお前ら全員気付くのおせえんだよ！」

「こらタカ！いきなり大声出して葉月ちゃんが怖がつちやうでしょ？」

「そうだよ崇彰。それに大声出してもいいことないよ?」

ははつ。こつちも大声出したくて出してんじゃねえよ。馬鹿どもものせいで疲れてんだよ。

「ところで、この客の少なさはどう言う事だ?」

と、ここで雄二が教室内を見渡しながら言った。そういやこんな頭のおかしなやり方で忘れていたが今のFクラスに客はいない。何でだ?

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ?」

「ん?どんな話だ?」

雄二が屈んで葉月の目線に合わせる。オレとは違ってすっかり気遣いをしているようだ。

「えつとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、つて」

「……何?」

確かにこのFクラスはおんぼろだ。どれだけあがこうとその事実は覆らない。だが、飲食店を出す以上衛生面には注意を払った。それを汚いと言うつて事はつまり……

「誰かが意図的に流してる……か」

「おそらく、例の連中の妨害が続いてるんだらう。探し出してシバキ倒すか」

「例の連中……ですか」

「お前らは大会中で知らなかったな。お前らが一回戦に行つてる最中——」

と雄二が言つてくれたことを簡単に説明するなら、三年の常村モヒカンと夏川ハゲの二人がクロスを剥がして大声で文句を言い続けたらしい。で、雄二の交渉術『パンチから始まり、キックでつないで、プロレス技で締める交渉術』（それは交渉とは言わない）を受けてダツシユで逃げたそうだ。

「例の連中の妨害つて、あの常夏コンビ？まさか、そこまで暇じゃないでしょ」

常夏コンビ……なるほど。分かりやすくして良いな。

「そうだとしても。まずは様子を見に行く必要があるな」

「だな。それにもし、犯人が常夏コンビじゃなくても、潰す奴がそいつに変わるだけ。行くしかねえな」

「そうだね。少なくとも、噂がどこから流れてどこまで広がっているのかを確認しないと」

恐らくかなり広まっているだろう。葉月でも聞いたくらいだから。……そう考えると早急に対処からのフォローが必要だな。

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこつ」

葉月が明久の手をギュツと握つて言う。その事に明久は少し困った顔をしている。そりゃあ、常夏コンビの妨害がなく、平和な学園祭なら、明久は葉月と一緒に遊んでい

るだろう。だが、悪いが明久は必要な人材。遊ばせてる暇も余裕も今はない。

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

そのことを分かっているのか、明久は葉月の頭を撫でながら、答えた。

「むゝ。折角会いに来たのに」

しかし、葉月は不満気に頬を膨らませた。事の大きさを理解してくれない……はあ。

「……………ツチ。これだからガキはきら——」

「えい」

軽い声と共に後頭部に伝わる衝撃。おそらくチョップされたのだろう。誰が犯人かは分かりきっているの、そいつの方には身体を向けず背中越しに話す。

「何だよ」

「タカには分からないかと思いますが、これぐらいの女の子がバカ古なお兄井ちゃんを訪ねてはるばるやってきたのですよ?」

「んなことは分かってたんだよ」

「私は相手してほしいのにあしらわれる側の気持ちは痛いほど知っています。確かに、現状の私たちに彼女の存在はマイナスかもしれないかもしれません。でも……それでも……」

「……………はあ。あの頃のことを根に持つてるのか?」

「根に持つ？そんな資格が私にあると思ってるのですか？」
「さあな」

……少なくともオレは後悔してるが。

でも、まあおかげで頭は冷えた。葉月という存在をマイナスではなく、プラスに見よう。

「……ふう。明久。葉月を連れてけ」

「え？でも……」

「仮に風評被害の原因を絶てたとして、その後にはやはり、敵情視察は必要不可欠。誰も小学生連れて情報収集に来ただなんて思わねえだろ」

「そうだな。幸い、今はちょうど昼飯時だ。飲食店をやってる他のクラスを偵察するならタイミングとしちゃベストだ」

オレと雄二がフオローする。明久もほっとした様子だ。

「ん、そつか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」
「うんっ」

明久の問いに、先程までの膨れ顔から一転して満面の笑みになる葉月。単純だな。でもまあ、それでいい。変に気を遣ってもらっては困る。

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

妹に対しては優しい姉。島田の本性かもしれないな。

「ふむ。ならば姫路と雄二、崇彰に黒柳も一緒に行くといいじやろ。召喚大会もあるじやろうし、早めに昼を済ませてくると良い」

「そうか。悪いな、秀吉」

「いいんですか？ありがとうございます。木下君」

「常夏コンピのツラでも拜んでやるか」

「言ってることが悪人ですよー」

明久と島田姉妹だけでなく、オレたちも加わる事になった。結果総勢七名という大所帯になった。

「それでチビツ子、さっきの話はどの辺で聞いたのかを教えてくださいるか？」

「えつとですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店——」

「なんだって!?!雄二、それはすぐに向かわないと!」

「そうだな明久!我がクラスの成功の為に、低いアングルから綿密に調査しないとな!」

葉月の話の中で奴らにとって心躍るようなワードが聞こえた瞬間、明久と雄二は下心丸出しな顔をして全力でダッシュして教室を出た。

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃんのパカ！」

「あれ？葉月ちゃんがいなくてどここのクラスか分からないのでは……？」

女性陣の罵倒（二人ズレてる）もさほど気にしていない様子だ。……あほくせえ。

「あれ？タカはダツシユで行かなくていいんですか？」

「阿呆抜かせ。誰がそんなことぐらいで、走って行くかつての」

「ほらほら〜本当はあの二人のように走りたいのでしょうか？隠さなくていいのです！私
はしっかりと慈愛のこもったこの瞳で見届けてあげますから」

「阿呆なこと言つてないで行くぞ」

オレはユリの手を引くようにして歩き始める。

「後、手を放すなよ」

「ま、まさかタカ……私とデート気分を味わいたいから走らずに……」

「お前は手を放すとすぐ迷子になるからな。オレから絶対離れんなよ」

「……つて何歳児を相手にしているつもりですか!?!いくら私でも迷子になりませんよ
！」

とかなんとか言いつつ繋がれた手は目的地まで離れなかつたことを記す。

敵情視察と書いてメイド喫茶と読む

明久たちを追って目的地に着いたオレたち。

「明久、ここは止めよう」

「ここまで来て何を言ってるのさ！早く中に入るよ！」

「頼む！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

雄二が目的地であるAクラスの出し物、「メイド喫茶『ご主人様とお呼び！』」を前にして怖じ気づいていた。Aクラスでこのネーミングセンスだ。Fクラスのもそう大差ねえだろ。

「そっか。ここって坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

「そうですよ。それに店先で騒いでは迷惑です」

珍しくユリが正論を言ってる。どうしよう。涙が……

「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから——」

「おい、明久。そこ見てみろよ」

「……………!! (パシャパシャパシャパシャ！)」

オレが指差す方向を明久は見る。そこには指が擦り切れんばかりにシャツターを切っている男が一人いた。

「……ムツツリーニ？」

「……人違い」

そこにいる我がクラスの厨房責任者はカメラを片手に否定のポーズを取っている。騙されるわけないだろ。

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

「……敵情視察」

「いやいや、ローアングルから女子を撮影しても敵情視察にならねえからな？」

「そうだよ。ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんな事したら撮られている女の子が可哀想だと——」

「……一枚百円」

「2ダース貰おう——可哀想だと思わないのかい？」

どつからツツコミを入れようか。

ただえさえ金欠なのに写真を二ダースも注文したことか、言ってることとやってることが平然と矛盾していることか。

「えーっと、吉井さん。可哀想って言いつつ注文してますよ？」

「……………そろそろ当番だから戻る」

と、ムツツリー二は明久に写真を渡し、颯爽と教室へ帰る。いや、注文から商品受け取りが早くね？明久が注文すると分かって予めプリントアウトしておいたのか？賢いのかただのバカか分からん。

「まったく、ムツツリー二にも困ったもんだね」

「いや、一番はお前だけだな」

口でなんか言いながら平然とポケットに写真を入れるバカ。

「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」

「やだなく。もちろん処分するに決まってるじゃないか」

「なら、今処分しろよ。ほら？細切れにしてゴミ箱に捨てるぐらい造作もないだろ？」

「そ、それよりそろそろお店に入ろう？写真の処分なんていつでもできるしよ。もう凄

くお腹が減っちゃったよ」

いやいや、その程度の演技で騙されるやつなんて……

「あ、そうですね。入りませうか」

いたよ。ここに。

「うんうん。早く敵情視察も済ませないと——写ってるのは男の足ばかりじゃないか

畜生！」

そして写真を見て叫ぶバカ。なるほど。こいつカモにされてんな。

「やっぱり見てるじゃないですかっ！」

「ご、ごめんなひやい！くひをひっぱらないで！」

姫路は明久の頬を抓り、葉月も不機嫌顔になりながら明久の腿を抓っていた。あほくせえ。

「そろそろ入りましょうよ」

「そうね。それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

島田が一番手でドアをくぐる。

「…………お帰りなさいませ、お嬢様」

出迎えたのはメイド服を着たAクラス代表の霧島だった。

「わあ、綺麗…………」

「本当です…………」

姫路とユリが感嘆の声を漏らす。まあ、霧島が普段より綺麗になっているのは事実だな。

長い黒髪にエプロンドレスの白がよく映える。さらに、黒のストッキングが彼女の脚部を更際に際立たせている。やれやれ、ここは雄二がなんか言ってるべきなのだろうが生憎あのバカはまだここに入ること認めていない。

「それじゃ、僕らも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれ〜！」

「おじやましませ〜す」

「入るよ」

明久が姫路と葉月を連れて中に入ろうとし、続いてオレとユリも入る。すると、霧島が島田の時と同様に、

「……おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と、出迎えてくれた。

「……チツ」

雄二も渋々入店する。すると、霧島はオレたちと同様に、

「……おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

というとはなく、少しアレンジした出迎えだった。ある意味予想通りだな。

「霧島さん、大胆です……！」

「ウチも見習わないとね……」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

「今度私も言ってみようかな？」

上三人はともかくユリの場合は、今更過ぎるんだよな。

「お席にご案内します」

霧島が歩き出すので、その後ろ姿に付いて行く。

「ね、お兄ちゃん。凄いお客さんの数だね」

葉月がくいくいつと明久の袖を引つ張っている。

敵情視察という名目なので、Aクラスの広い教室を見てみる。なるほど、こんなバカでかい教室でやっているのに、お客で一杯になっていた。しかも、メイド喫茶と言うから男性客が多いかと思いきや、意外と女性客がかなり多いな。こりやあメニユーに工夫でもあるか？

「……では、メニユーをどうぞ」

霧島がメニユー表を渡してくる……。うん。凄いな、このメニユー表。立派に装丁されていて、うちとは大違い。どうやら、最優秀クラスは学園祭でも一切手は抜かないみたいだ。

「た、タカ。どうしましょ。すごい迷いますね……」

「そうだな」

確かに普通の喫茶店に負けてない。もう学園祭のレベルじゃねえだろ……。これ。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月も!!」

メニュー表を見た三人は揃ってシフォンケーキを頼む。

「じゃあ、私は『しつとりシヨートケーキ』で」

「『ほろ苦チョコレートケーキ』一つ」

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

続けてユリ、オレ、明久と注文するが、何かがおかしい。だが、あえてスルーさせてもらおう。こいつが何頼もうとオレには関係ないし。てか、よく写真を二ダース買ったな。絶対その分食費に回すべきだろ。

「んじゃ、俺は——」

「……………注文を繰り返します」

おかしい。雄二がまだ注文をしてない気がするが……ああ、幼馴染みであるあるの言葉に出さなくても伝わるってやつか。

「……………『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『しつとりシヨートケーキ』を一つ、『ほろ苦チョコレートケーキ』を一つ、『水』を一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。以上でよろしいですか?」

「全然よろしくねえぞっ!?!」

「霧島さん。坂本さんのメニュー表をちよつと見せてもらえますか？」

「……………どうぞ」

「……………ふむふむ……………」

と、雄二のメニュー表（何故か坂本雄二専用と書かれてる）を見るユリ。そして、勉強になりました。ありがとうございます」

「……………お役に立てたなら嬉しい」

やっぱり、何かがおかしい。お前は今何を学んだんだ？

「はあ。雄二。公の場って事を考えろよ。何婚姻届を注文してんだよ。明久の『水』以下だぞ？」

「俺が何も注文してなかったって知ってるだろ!？」

「どーせ。アイコンタクトとかで注文したんだろ？」

「しねえよ!？」

まあなんでもいい。こいつもまんざらでもなさそうだし。

「な訳あるか!？」

ついにオレの心の声地文にツツコミを入れやがったよこいつ。

「……………では食器をご用意致します」

とこんなやり取りをしている間に、霧島は女性陣とオレの所にフォークを、明久の前

に塩を、雄二の前には実印と朱肉をそれぞれ用意していた。

「しょ、翔子！コレ本当によちの実印だぞ！どうやって手に入れたんだ!」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下さい」

霧島は、優雅にお辞儀をしてキッチンと思しき方向へと歩いていった。雄二の実印の入手法……さてさて合法か非合法か。どっちだろうねえ。ま、どっちでもいいか。そこまで興味ねえや。

「……明久。俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ……!」

「あ、うん。それはもちろん僕もそうだけど」

「今更やる気出したのかよ……」

遅すぎだろ。こいつがやる気出すの。てか、やる気がやべえよ……引くぞ。マジで。

「んで、葉月ちゃん。君の言っていた場所ってここで良かった?」

「うんつ。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおつきな声でお話してたの!」

この確認も今更すぎだ。これで違うと言われても（主に雄二以外が）困る。

というか、嫌な感じのお兄さん二人がおつきな声でねえ……ワザとかな?ワザとだな。

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう。二人だ。中央付近の席は空いてるか?』

と、ここで新規の客が入ってきた様子だ。男の声でしかも二人……まさかな。オレは声のした方を見ると、

「なあ葉月。さっきの嫌な感じのお兄さん二人つてあのハゲとモヒカンか？」

「はいですつ。さっき大きな声で『中華喫茶は汚い』つて言つてたの」

なるほど。あれが常夏コンビ……ねえ。人相の悪さでは今のオレや雄二を軽く超えていそうだな。……つていうのはまあ、流石に冗談だが。ただ、どうにも子悪党臭がする。なんだろうね。

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな。さつき行つた2―Fの中華喫茶は酷かつたからな！』

『テーブルが腐つた箱だったし、虫も湧いていたもんな！』

なるほどねえ。……ああ、うつとうしい。目障りで耳障りだな。あれ？最悪じゃね？この組み合わせつて。

「待て、明久」

「ユリ、ストツプ」

と、ここで感情に流されやすいバカどもが常夏コンビの元に殴りこみに行こうとしたので雄二とオレが止めた。

「雄二に崇彰、どうして止めるのさ！あの連中を早く止めないと！」

「そうですね！ガツンと抗議してやらないと」

「落ち着け。こんなところで殴り倒しても文句を言っても、悪評は更に広まるだけだ」

「ああ。特にオレや明久、雄二の問題児コンビは良くも悪くも顔が割れてる。暴力に出ようものならすぐにクラス特定からのマイナスイメージを与えるだろうな」

そう。このまま無策で行き、殴り飛ばさうものなら、周りの人にとっては、奴らの言ったことの真偽はともかく奴らを大勢の目の前で、しかもよその店のことを考えずに暴力を振るうヤバい連中と思うだろう。文句を言いに行くというのも、それをよその店でやれば自分たちのことしか考えない傲慢と思われるてしまう。これじゃあ、喫茶店の経営に響くわ、姫路転校を確定させる要因になるだろう。

「でも……このまま黙って指をくわえて見ているなんて……」

「誰が指をくわえて見るだなんて言った？」

とりあえず、ユリの手をつかんで動かないようにさせておく。というか、あんな連中の元にお前を殴り込みに行かせるかよ。

「そう。やるなら頭を使えと言う事だ——おい、翔子おー！」

「……なに？」

今言うことじゃないが、霧島の登場早すぎじゃないか？乙女の勘ってやつ？それとも実は最初から近くに……

「あの連中が此処に來たのは初めてか？」

と、いけない。そんなのどうでもいい。今やるべき事をやらないとな。

雄二が顎で常夏コンビを示す。すると、霧島は小さく首を横に振る。

「……さつき出て行つてまた入つて來た。話の内容もずつと変わらない。同じような事を何度も言つてる」

端正な顔を少し歪めている霧島。なるほどな。どうやら彼女らAクラスにとつても不愉快な客みたいだな。はあ、迷惑かけるのはせいぜい一つにしろつての。ま、そんなことと言える立場ではないけど。

「そうか……よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」

メイド服……メイド喫茶……ああ。何となく察しがついた。

「……わかった」

霧島は肯定的な返事をする。さすが雄二の考えている事が分かつて意思疎通が……ちよつとまで。

「き、霧島さん！こんなところで脱ぎ始めちゃダメですっ！」

「そうよ！ここにはケダモノが沢山いるのよ!？」

「わあ。お姉さん、胸おつきいです」

「えーつと、着替えるなら更衣室の方がいいと思いますよ？」

何を考えてるのかは分からんが、その場で着ているメイド服を脱ごうとした霧島。それを、姫路と島田が慌てて止めにかかる。で、葉月とユリは何処かがズレてるのはいいが明久。お前、何で残念がつてんだ？

「……雄二が欲しいって言ったから」

二人によって止められた霧島は不思議そうな顔をしている。

「恋は盲目……か」

なるほど。霧島は雄二の頼みなら常識の枷を打ち破り、迷いなく実行するのだろう。まあ、雄二が最低のクズ野郎なら危ないかもしれないが、

「お、俺がいつお前の着ているメイド服が欲しいと言った!? 予備のヤツがあれば貸してくれって意味だ!」

怒鳴りながらそっぽを向いて首まで真っ赤にしている雄二を見る。こいつはこいつで霧島にそんな危ないことさせる度胸はねえだろうし。まあお似合いといや、お似合いだな。

「……今、持ってくる」

ものすごく残念そうな顔をしている霧島が服を着直して去って行くのを見る。やれやれ意思疎通はどうした……とこのわずかな間に少し不味い状況になっている。他の客がオレたちのテーブルを注目の的としている。はあ、騒ぎすぎだな。これでは常夏コ

ンビに対して正攻法では、制裁を与えられない。

『あの店、出している食い物もヤバいんじゃないか?』

『言えてるな。食中毒でも起こさなければ良いけどな!』

『二―Fには気をつけろって事だよな!』

はあ。いい加減黙らねえのかねえ。

「雄二! 崇彰! なんでもいいから早く連中を!」

「そうですよ! いくら温厚な私ももう我慢の限界です!」

「良いからもう少し待っている。姫路に島田、後黒柳も櫛を持っていないか?」

「? 持っていますけど……」

「ちよつと貸してくれ。他にも身だしなみ用の物があれば全部」

「はあ……」

姫路が上着のポケットをゴソゴソとあさり小さなポーチを取り出した。

「悪いな。後で必ず返す」

雄二は姫路のポーチを受け取る。

「……雄二、これ」

今度は霧島がメイド服を抱えて戻って来る。

「おう。すまないな」

「……貸し一つ」

「だ、そうだ。明久」

「わかったよ。お礼に今度雄二を一日自由にしていよいよ」

「……ありがとう。吉井は良い人」

「ちよつと待て！どうして俺が！」

「諦めろ」

明久によつて差し出された雄二の必死の抗議も虚しく、霧島は嬉しそうにその場を離れて行った。

「で、これをどうするの？」

こちらの手元にあるのはポーチとメイド服。これらを考えるとどうやら予想通りらしい。

「……着るんだ」

恨みがましく明久を見て言う雄二。

しかし……。

「だつてさ、姫路さん」

「え？わ、私が着るんですか？」

明久は勘違いをし、姫路にふる。一方、いきなりの事に目を丸くしている姫路。

「バカを言うな。姫路が着ても攻撃なんて出来ないだろうが」

「なら、私が」

「お前も攻撃できないだろ。おとなしくしてろ」

「……………はい」

「うーん。それじゃ、美波？でも、胸が余っちゃうとぶべらあつ！」

「ツギハ、ホンキデ、ウツ」

「凄いい殺気だ。この殺気で常夏コンピを黙らせられないものか。」

「島田でもない。それなら面が割れてしまうだろうが」

「……………まさか」

「明久はようやく気付いたみたいだ。」

「着るのはお前だ、明久」

「いやあああああつ！」

「叫び声をあげるが一言言おう。おせえよ。」

「やれやれ。わがままを言う奴だな。それなら、あっち向いてホイで決めないか？」

「雄二が提案をする。まあ、こう言うつて事は、また明久を騙すつもりだな。流石に明久もこの展開は読んでいるみたい（読んでなかつたら学習能力ゼロ）で、裏を掻いてやろうと思いい切り顔に出ている。一言言うなら、お前じゃ無理だ。」

「よし、その提案受けるよ」

「それなら行くぞ、ジャンケン」

「ポンッ」

明久はパー。雄二はチョキで、明久の負け。まあ、あっちむいてホイなので、これからが本番。

「あっち——」

雄二が勢いよく人差し指を出してきた。

なるほど。相変わらず汚い戦略というか何とというか。

「その手に乗るかっ！」

そう言うとも明久は目を逸らさずに雄二の指をじつと見ていた。おい。それはあまりにも愚策だぞー

「向いて——」

ブスッ

「ぎいやああっ！目が、目があっ！」

雄二は明久の目を刺し、明久は目を抑えてのた打ち回っていた。

「ホイ！……ふっ。俺の勝ちだな」

うん。予想通り。

「あの、吉井君。大丈夫ですか？」

姫路は倒れる明久にハンカチを差し出している。

「ありがとう。まったく、雄二の卑劣さには驚かされるよ」

お前本当に学習能力ゼロだな。それと、ハンカチに目を当てているのは良いが、匂いを嗅いでいるだろ。変態か？あ、変態だったな。

「やれやれ、次は僕と崇彰か……負けた方が女装か……」

「おい。何オレを巻き込んでやがる」

「え？シード枠だったんでしょ？」

世界で一番いらぬシード枠だな。

「さあ、勝負しようか。今度は負けないぞ」

「はあ。いくぞ。じゃんけん」

「ぼんっ」

明久はグー。オレはパー。再び明久の負けからスタート。

「あっち——」

雄二と同じく指を明久の目をめがけて突き刺そうとする。

「二度も同じ手を喰らうか！」

明久は先の戦いで学習したのだろう。バックステップでオレから距離をとろうとす

る。しかし……………

「向いて——」

ゴンっ

「あ、頭がああ!？」

「ホイ。はあ、阿呆だろお前」

そう。たまたま明久の真後ろに雄二の足があり、それに運悪く転んで後頭部を地面に打つ。当然その瞬間明久は顔は上をに向けており、俺の指も上を向いていたのでこの勝負はオレの勝ちである。

「うう……………崇彰め……………二人がかりで来るなんて……………」

「いや、お前がオレたちの予想通り距離をとろうと後ろに跳ばなければこうならなかったぞ?」

だって、手を汚したくないし。

「あ、あはは……………。でも、きつと大丈夫ですよ」

「そうだよね。こんな卑怯な勝負は無効——」

「吉井君ならきつと可愛いと思いますっ」

結論。明久の女装決定。慈悲はない。異論は認めない。

悪党成敗と書いてアキちゃん出陣と読む

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

【①可愛らしさ ②統率力 ③行動力 ④その他（ ）】

また、その時のリーダー候補も挙げてください。

土屋康太の答え

『【①可愛らしさ】 候補……姫路瑞希&島田美波&黒柳由梨乃』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【①可愛らしさ】 候補……姫路瑞希 黒柳由梨乃 木下秀吉 島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるところです。

神白崇彰の答え

『④その他（なんでもいい 信頼できる最高の幼馴染み） 候補……黒柳由梨乃』
教師のコメント

君のことだからどうでもいいと言っていました。訂正し、真面目に答えてくれてよかったです。ただ、黒柳さんが紙を持ってきてくれたのはなぜでしょう？

坂本雄二の答え

『④その他（結婚相手） 候補……霧島翔子』
教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが、用紙を持ってきてくれたのでしょうか？

☆☆☆

明久が雄二に男子トイレに連れ込まれた。……いや、変な想像されても困るし二人の名譽が毀損されても……困る？ので誤解のないように言っておくと、明久の女装のためだ。……あれ？この言い方だと色んな意味で危険だが……まあ、やつぱり、無理だったな。うん。

じゃあ、オレは何をしているのかと聞かれたら、常夏コンビの見張りと、
「おいしい……しあわせなあじだあ……」

だらしない表情をしているこいつの相手だ。

「たく……はい」

「あーん。……えへへ……」

オレはショートケーキを一口分刺してユリの口の中へ。

別にこれぐらい造作でもないが……

『いいなあ……羨ましい』

『ツチ。見せつけやがって……！』

『私もあんな彼氏がほしいなあ……』

と、主に明久と雄二馬鹿たちのせいで向いていた注目をさらに集め、オレたちはこの店での注目を一気にかつさらって行く。未だ常夏コンビのうるせえ会話は続いているが、誰一人気にならない様子だ。

「私からもお返し……はい」

「あーん。うん。おいしいよ」

と、傍目から見たらただのイチャつくバカップル（実際はカップルではなくただの幼馴染み）。そんな中であることを思いつく。

「……霧島。ちよつといいか？」

「……なに？」

オレは霧島を呼びつけ、思いついたことを伝える。すると、彼女はこくりと頷き、厨房の方へと去って行く。

「一口ちよーだい」

「いいよ。はい」

そう言つて次はチョコレートケーキを一口分ユリの口へと持つて行く。

「いいなあ……私も吉井君と……」

「アンタたち……相変わらずね……」

「ラブラブのカップルですっ」

三者三様な意見。一つ言うことがあればオレたちはカップルじゃない。幼なじみだ(一)(一)重要)。

「……お客様。ご注文いただいた。カップル専用メニュー『ラブラブパンケーキ』でございます」

霧島が持つてきたのはハート型のパンケーキ。上にかかっているソースもハートをイメージするような形だ。

「おお。これが噂のカップルで食べると愛が深まるという……」

「……はい。カップル専用に出しており、お二人で食べればなお一層二人の愛は強固になるでしょう」

「なるほどなあ。はいユリ。あーん」

「あーん。……んん……これまたおいしいです……幸せの味です……」

『ねえね。私たちもあのメニュー注文してみようよ』

『そ、そうだな……！よし』

『店員さん！私たちのところにもあそこと同じのを一つ！』

『お、俺たちのところにも……！』

『じゃ、じゃあ……私たちも……』

完全に空気がピンクに染まる。もう、常夏コンビの声は誰にも届いていないだろう。

時間稼ぎはほんと、疲れるなあ……

「……ありがとう神白。いい案をくれて」

「いいって。気にすんな」

現在進行形で至る所から追加注文が殺到する。まあ、お一人様が居づらくなるように見えるが、案外学園祭のノリでお一人様同士がつていい感じになってるところもある。まあ、そんな中で、男同士で、しかも食が目当てじゃないやつは浮くだろう。てか、すでに浮いてる。

「オレたちのせいじゃねえが、あいつらがいることのお詫びとこれからすることのリスクを考ええた結果だ。合わせてくれてありがとな」

「……これぐらい造作でもない」

「ただいま……つてなんだこの空気。甘ったるいんだが？」

とここで、雄二帰還。

「……神白のお陰」

「見りや分かる。この面子でこんな状況を作り出せんのはこいつしかいない」

今回はプラスのことをしたからな。うむ。いい働きをした。

「で、明久は？」

「ん」

完全に空気に侵食され、口を開けない常夏コンビ。そんな彼らのもとへと行くのは一人のメイド。誰あろう。明久である。

『お客様。ご注文はなさらないのですか?』

『ちゆ、注文か……』

『でしたら、あちらを食べるのはどうでしょう』

そうして、カップル専用メニューを指す明久（メイドver）。

『お二人ともお似合いのカップルですよ?』

『誰がこんな奴と!』

と、この甘い空気をぶち壊すように二人の野郎の野太い声が響く。一瞬にしていちゃついていたカップルやこの機に乗じてお一人様を狙って話しかける奴らの視線を集めた。

『ふふつ。冗談です。でしたら——私と食べませんか?』

そう言いながらハゲの腰に抱きつく明久。

『そそそうか。お前俺に惚れて』

動揺するハゲ。怨嗟を込めた眼差しで見えるモヒカン。そして、

『くたばれええつ!』

『ごばああつ!』

明久（女装）が坊主頭に綺麗にバックドロップをかました。

しかし、浅かったためにハゲはすぐ復活する。が、

『こ、この人、今私の胸を触りました！』

明久の悲鳴が聞こえる。その悲鳴で、

『なんて最低な野郎だ！』

『そうよ！自分に彼女がないからって！』

『そんな奴がモテるわけないじゃない！』

『男の片隅にもおけねえぞ！』

『この女の敵！』

周りにいた客は全員常夏コンピの敵に早変わり。そりやそうだな。ただえさえ、いちやついてる空気の中、雑音をぶち込み、挙げ句のセクハラ（実は嘘だが）。そりや怒るわ。

『ちよ、ちよと待て！バックドロップする為に当ててきたのはそっちだし、大体お前は男だと——ぐぶあつ！ごこふうつ！』

必死に弁明しようとする坊主。だが、

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

「彼女がないからってメイドに手えだしてんじやねえよ！このセクハラ野郎が！」

オレと雄二が成敗ということ、坊主に一撃ずつぶちかます。

「何を見ていたんだ!? 明らかに被害者はこつちだろ!」

「黙れ歩く社会のゴミ! 何被害者面してんだうつとうしい! どう考えても加害者だろ
うが!」

「そうだ! たった今、あのウエイトレスの胸を揉みしだいていただろうが! 俺たちの目
は節穴ではないぞ!」

正直言つて節穴だろう。

「ウエイトレス。そつちで倒れている男は任せたぞ」

「こつちは任せろ」

「え? あ、はい。分かりました」

オレたちは坊主を明久に任せる。すると、明久がブラと瞬間接着剤を出す。が、今は
何でもいい。

「さて、痴漢行為の取調べの為、ちよつと来てもらおうか」

「そうだな。さらに今流れてる虚偽の噂についても聞かせてもらおうか」

指を鳴らしながらモヒカンに近寄る雄二とオレ。さてさて、じつくり吐かせて鉄人
でも押しつけようか。この社会のゴミを。

「くっ! 行くぞ夏川!」

モヒカンはこれ以上は更に立場が悪くなると思つて逃げ出そうとする。もうすでに状況は最悪だが。

「こ、これ、外れねえじゃねえか！畜生！覚えてろ変態めっ！」

一方の坊主は明久によつて付けられたブラを付けたまま走り去つて行つた。いや、お前の方が変態だろ。

「逃がすかつ！追うぞアキちゃん！」

「了解！でもその呼び方は勘弁して！」

二人を追つて明久と雄二も飛び出す。やれやれ、すみません。皆様の大切な空気を壊してしまつて……」

一応迷惑をかけたので謝つておく。

『お前たちは悪くないぞ！』

『よくやつた！お前たちは男の鑑だ！』

『ありがとう！』

拍手喝采。そんな中、

「かつこよかつたですよ」

『ひゅ〜！』

ユリが頬にキスをしてくる。やれやれ、

「行きましょう」

「ああ」

会計を坂本雄二一人で済ませ華麗に去って行く。(ん？坂本雄二一人で済ませて金を払ってないのかって？いや、夏目漱石一枚か坂本雄二一人って言われたら当然坂本雄二一人でしょ)

余談だがこの後『Aクラスのカップル専用メニューを食べた二人は永遠に結ばれる』なんていうジンクスができて、カップルや両片想いの連中が押し寄せて大繁盛したそう
だ。

「やれやれ。少し目立ってしまったか」

「えへへ」

「そういや、敵情視察なはずなのに売り上げに貢献してしまったな。まあいいや。」

☆☆☆

続く三回戦。相手の不戦敗で終わった。今回はお相手が男女の組だったが……ああ。Aクラスの店に行つて時を忘れたのかな？ま、いいが。

そして、明久と雄二の組も不戦勝。こっちは食中毒。うん。何も言わねえ。で、現状の課題。一度失つた客を取り戻すかだ。

「で、何かもの凄いインパクトがあるやつやらねえと客は来ねえぞ」

「だな。流れた噂のせいもあるが、誰かさんがAクラスでとんでもないことしてくれたお陰でAクラスに客が殺到している」

はっはっはっ。

「とういうわけで裏切り者。案出せ」

裏切り者か……

「確かにオレのせいだな。ま、そこは認めてやるよ」

「で、タカ。アイデアはあるのですか？」

「まあな。ざつと何通りか浮かんだが、一番はこれだ」

そう言うつてあるものを取り出す。

「中華とコレで、安直すぎる発想だが効果は絶大なはず」

「チャイナドレスですか……ふむ。安直ですね」

「じゃが、インパクトがあるのは確かじやろう。これを宣伝用に——」

「ああ。コレを——明久と雄二が着る」

「……なるほど」

「ちよつと待て」

と、ここで明久と雄二からストップがかかる。

「……はあ。なんだ？このインパクト重視のオレの案にケチをつけんのか？」

「インパクトを重視しすぎていろいろアウトなんだよ！」

「おいおい想像してみろよ。明久と雄二がこのチャイナドレスを着て接客してる様子

……おえっ」

「だ、大丈夫ですか!？」

急に込み上げてくる吐き気のあまり口元を押さえ跪くオレ。それを見て心配するユ

り。

「……テメエ……雄二……明久……！お前ら……吐き気のするような想像をさせてんじゃねえぞ……！」

「責任転嫁が甚だすぎだこの野郎！」

「やっべ……マジで気持ち悪い……」

「自爆してやがる！」

クソ……！お前らのチャイナ姿なんて誰に需要あんだよ……！おえ……。

「誰だ……！こいつらにチャイナドレスを着せるって言ったやつ……！とりあえず処刑だこの野郎」

「それはタカですね。仕方ありません。私が代わりに処刑してあげます」

そう言うとおれを寝かせて、回復体位を取らせるヨリ。

「全く。そんなの想像したら気持ち悪いに決まってるじゃないですか。バカですね」
そして背中をさすられる。

「……よし。あの馬鹿どもは置いて話を進めるぞ」

「うーん。崇彰のアイデア自体はいいと思うんだけどなあ……」

「だな。これは、秀吉と姫路、島田、黒柳に着てもらおう」

「賛成。冗談でも僕らは着ちゃいけないよね」

「ワシが着るのはいいのかのう……?」

ああ、大分よくなってきた。

「たつだいまゝ!つて、なんだ。アキつてばメイド服脱いじやったんだ」

「あ……残念です。可愛かったのに……あれ?どうして神白君は倒れているのですか?」

「お兄ちゃん。葉月もう一回見たいなく」

と、ここで三人が戻って来た。

「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほど世の中甘く無いよ?」

明久がにこやかに笑って断った。笑顔だな……お前。

「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げの為に協力してもらおうぞ」

そう言った雄二と明久は逃さないよう、チャイナを片手に退路を断った。

二人の目には彼女らが獲物に見えているのだろう。

「な、なんだか二人とも、目が怖いですよ……?」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど……」

若干引き気味になる獲物……じゃなかった。姫路と島田の女子二名。

「やれ、明久!」

「オーケー!へっへっへ、大人しくこのチャイナ服に着替え痛あつ!マジすんませんし

た！自分チョーシくれてましたっ！」

「弱いな、お前……」

「あほくさ……」

一瞬にして島田が近づくと明久の腹と頬を殴り、腿を蹴る。あっさり、迎撃したところを見て雄二とオレは呆れるしかない。

「どうしてまた、急にそんな事を言いだすのよ？前に須川はチャイナドレスを着たりする事は無い、って言ってたと思うけど」

明久を迎撃した島田は渋い顔をする。そんなこと言ってたのか？ま、オレは知らないな。

「店の宣伝の為に、明久の趣味だ」

「明久はチャイナドレスが好きだから。な？」

「大好——愛してる」

「……お前は本当に嘘を吐けないヤツだな」

「バカだろ……お前」

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうですね！お店の為ですしね！」

島田と姫路が、了承する。店のためとかなんとか言ってるが本心は違うだろう。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？葉月ちゃんも手伝つてくれるの？」

「お手伝い……？あ、うん！手伝うから、あの服葉月にもちようだい！」

まじか。ある意味すげえな。

「けど、ごめんね。気持ち嬉しいんだけど、葉月ちゃんの分は数が——」

「……………!!（チクチクチクチク）」

「む、ムツツリーニ！どうしてそんな凄い勢いで裁縫を!? って言うかさつきまでいなかっただよね!？」

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

何故だろう。おかしいなあ。格好良い台詞のはずが、凄く格好悪く見える。

「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね」

姫路がそう言いながら腕時計を確認している。なるほど。姫路たちの試合はこれからだったか。

「いや、今着替えてもらいたい」

「「え？」」

雄二の言葉に二人の声がハモる。

「宣伝の為だ。そのまま召喚大会に出てくれ」

確か、どっかのタイミンクからか一般公開が始まるんだったな。大会には当然客が集まっているから宣伝には持って来いだな。

「こ、これを着て出場しろって言うの……?」

「流石に恥ずかしいです……」

まあこの二人がそう言うのも無理もない。観客には一般客だけでなくこの学校に注目しているメディアもあるだろう。それを含めると、かなり大勢の人の前でチャイナドレスを着て動き回ることになる。それは流石に恥ずかしいと思う。………てか、オレもそんな大勢の前でグラサンとかやばくね?

「二人とも、お願いだ」

明久はそう言う二人に対して頭を下げる。いつになくこの男は真剣な顔だ。そう、

真剣に女性陣にチャイナドレスを着てもらおうとお願いしている。やれやれ、

「明久……。お前は本当に——チャイナが好きなんだな……」

「メイドにチャイナ——本当にそういうのが好きなんだな……」

本当にこの男はそういうのが好きなのだろう。

「もしかして吉井君、私の事情を知って——」

「仕方ないわね。クラスの設定の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞希?」

姫路の言葉を遮った島田が色よい返事をする。

「あ。は、はいっ！これくらいお安い御用です！」

姫路も快諾した。残るは……

「由梨乃ももちろん着るわよね？」

「もちろんです。クラスのために私もやりますよ」

ユリだが、姫路の事情を知り尚且つ女性陣は全員着替えるという状況で断るわけもない。まあ、そんなの関係なしにこの程度のお願いなら快諾するだろうが。

「それなら二人はスグに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分たちの所属がFクラスである事を強調するんだぞ」

そうすれば喫茶店の宣伝とFクラスのレベルのPRになる。一挙両得。二つの目的を同時に果たすことができる。

「オツケー。任せておいて。行くわよ瑞希」

「はいっ」

チャイナドレスを抱えて教室を出て行く島田と姫路。

「じゃあ、行ってきますね」

「ああ。悪いな」

オレから離れユリも着替えに向かう。

「……………できた」

「わ、このお兄さん凄いですー！」

一方のムツツリーニ。神がかった技術とでも言うべきか、葉月用のチャイナドレスを完成させていた。

「ふむ。それでは着替えるとするかの」

「ちよ、ちよつと秀吉！ここで着替えるの!?!きちんと女子更衣室で着替えないとダメだよー！」

確かに今は客ゼロでもいつ客が来るか分からない現状。この場で着替えるのはあまりよろしくない選択だが……だからって女子更衣室で着替えるのはおかしくね？

「……最近、明久がワシの事を女として見ておるような気がするんじやが」

「気のせいだ。秀吉は秀吉だろう」

「そうそう。秀吉は秀吉。違わないだろ？」

「うんうん。雄二と崇彰の言うとおりだよ。秀吉は性別が『秀吉』で良いと思う。男とか女とかじゃないさ」

「……俺が言ったのはそういうことじゃない」

「……違うわこの大馬鹿野郎」

どうやら明久の思考回路は（やっぱり）逝かれているらしい。きつと世界最高峰の医者でもお手上げなレベルだろう。

「んしよ、んしよ……」

「……………!! (ボタボタ)」

「は、葉月ちゃん！君もこんな所で着替えちゃダメだよ！ムツツリーニが出血多量で死んじやうから！」

理由がおかしいからな？そこ。

四回戦と書いて必要犠牲と読む

『それでは、四回戦を始めたいと思います。出場者は前へどうぞ』

時は流れて四回戦。明久と雄二のコンビVS姫路と島田のコンビの時間がやってきた。

あれから客が少しずつ戻ってきて、チャイナドレス目的の奴らもいたが純粹に料理目的の客も増えている。まあ、どんなに店員が綺麗であっても、飯がくそマズかったらすぐに客は消えてしまうからその点、飯はうまいのだろう。

途中明久が倉庫スペースで不良数人に襲われかけたがたまたまオレと雄二がその場に遭遇。撃破することに成功した。

「ねえタカ。この勝負どちらが勝つと思いますか?」

そして現在、明久、雄二、姫路、島田の四人はステージ上に上がっており準備を始める。一方、オレとユリは試合がこいつらの二つ後なのでのんびり観客席の最前列から観戦することにした。まあ、一試合くらい見ときたかったのもあるしな。でも、これから店が混むと予想されるから準決勝前はこいつらの試合は見れないだろう。見てたら人手が足りなくなる。

「雄二が勝つだろうな」

と、オレはユリを見ながら答える。黒基調のチャイナドレスを着るユリ。ふむ。これかもし家なら襲いたいと思つてたところだ。いや、学校でも思つてるからアウトだが。てか、多分家でこんな格好されたら襲つてる。だつてこいつすげえ綺麗というか、ぶつちやけるならエロい。いや、妖艶と言つた方がすごい格好いいか？ まあいいや、何が言いたいかわられるととりあえず超可愛いということだ。

やれやれ。我ながら支離滅裂な思考をしてやがるな。ただ、一つ言えるのはこいつ本当にこういう系がよく似合う。チャイナに多分メイド服も似合うだろう。

「……おーい」

「んっ」

気付くとオレの目の前で手を振つてるユリ。壊れたか？

「今聞いてました？」

「わりい。考え事してた」

「全く人の話は聞くもの……はっ！もしかして私に見惚れてました？」

どうしてそうなるか分からないし、腹立たしいがその通りであるので否定しない。

「もう仕方ないなあ。そんなに気に入ってくれたなら家でも今度この格好してあげます

ねっ」

仕方ないといいながらノリノリだなおい。

「はいはい。で、何か言つてたか？」

「いやあ。どうして即答出来たのかなあつて。試合前にあんなやり取りしたから瑞希さんと美波さんの殺る気はマックスですよ？」

「明久に対してだろ？」

試合前。明久から離れようとしなかつた葉月に対し、雄二が「いい子にしてたらバカなお兄ちゃんがオトナのデートを教えてくれるからな？」と爆弾を落としその発言のせいで姫路と島田に火がついた。そして当たり前だが雄二と明久が素直に協力できるわけがない。隙あらば蹴落とし合う二人が爆弾を落とし尚味方であるとは言い切れない。

「大丈夫だ。雄二には策がある」

四人が召喚獣を召喚し、いざ試合が始まると言つたところで、審判の向井先生からマイクを強奪した雄二。強奪した理由は――

『清涼祭にご来場の皆様こんにちは』

――予想通り。敵も味方も二年Fクラス。そりやあ宣伝にはうつつけの状況だな。

『ここにゐる僕ら四人は、本格飲茶を提供する二―Fの中華喫茶で働いています。このように可愛らしい女子も一生懸命頑張つて働いていますので、よろしければどうぞお立

ち寄り下さい』

雄二が丁寧にお辞儀をする。それに合わせ、明久、島田、姫路も大きくお辞儀をした。

「よろしくお願ひします！」

ついでに召喚獣もペこり、と動きを揃えさせている。これで少しは印象に残るだろうな。てか、雄二がああやしやべり方すると違和感しかないな。すげえ笑える。ここが観客席じゃなきゃ腹を抱えて笑ってたところだ。

『——ということだそうですね。ご見学の皆様、お時間に余裕がありましたら、出場選手たちのいる二—Fに立ち寄って見て下さい』

マイクを返された先生。苦笑しながらも宣伝に協力してくれている。ありがたい話だ。

『さて、それではCMも終わりましたし、いよいよ召喚大会の始まりです。Fクラスの四人とも、良い試合をお願いします』

と、ここで四人から離れる。

「アキに坂本。ここまでよく勝ち残ってきたわね。でも、ウチらに勝てるとは流石に思っていないでしょ？」

一言で言うなら余裕。確かに強敵となるはずの三年生が受験勉強のためほとんど参加していない。この大会で、この二人は優勝候補と言われているだけあるな。ま、オレ

たちともう何組か優勝候補と言われているところがあるって……優勝候補多いな。ちなみに雄二たちは呼ばれてない。理由は察してくれ。

「甘いな島田。お前たちは確かに優勝候補……だが、それ故に勝ち上がってくる事は簡単に予想できた。それなら、対策はいくらでも打てるというものだ！」

雄二は大型ディスプレイを指差して自信満々に応えた。

『Fクラス 姫路瑞希&島田美波

古典 399点&6点 』

「こ、古典!? 四回戦は数学じゃなかったの!?!」

狼狽する島田。姫路はオールラウンド型。彼女には弱点らしい弱点な科目はない。だが、島田は極端である。数学ならBクラスレベルまで行くが古典はこんなレベル。悲しいねえ。ドイツ帰りだとしてもこれは悲しすぎる。

「ええっ?! 何で数学じゃないのですか!?!」

そしてここにも騙されている馬鹿が一人。

「お前らと崇彰たちに渡した対戦表だが——アレは俺の手作りだ」

「だ、騙したわねっ!?!」

そう。島田と姫路、オレとユリに渡してきた対戦表には細工がしてある。オレはその細工を普通に見抜いていたが内容としちや対戦科目に少し手を加えてある程度。確か、四回戦と決勝の科目がいじってあったな。

「どうしましよタカ！私古典なんて戦力外ですよ!？」

「安心しろ。全教科戦力外だ」

「うっ……」

「それに一回戦の科目で使われてんだ。二回も同じ科目を使うわけないだろ」

今回は戦死しても補習の義務はないし、補充試験の義務もない。そんな同じ科目を二回も使おうものなら、こいつみたいにならねえと戦死したやつがいると不公平となる。ま、戦死したやつが悪いのだからオレとしちや一向にかまわないのだが。

「くはははは！これで勝負はほとんど二対一！俺たちの勝ちは貰ったようなものだな、明久！」

「その通りだよ雄二！6点しか取れていない美波の召喚獣なんて、はつきり言っていないも同然さー！」

「くっ！なんて卑怯な連中なの！」

そんな呻きをよそに、ディスプレイには雄二と明久の点数も表示される。

『Fクラス 坂本雄二&吉井明久

古典 211点&9点 』

「……………明久」

「……………正直、悪かったと思ってる」

「……………」

「……………」

ダメだこいつら。何か卑怯だの言ってたが結局これってね。しかも、姫路のせいで雄二と明久の方が不利って言うね。……あほくせえ。

「よし、雄二……ここはそれぞれ個人戦で行こう！僕は美波を受け持つから、雄二は姫路さんを頼む！」

「待て！それでは俺の負担が大きすぎる！」

「わかってる！だからそこは、得意の頭脳プレイでカバーするんだ！」

「なんて無茶を言いやがる！」

実は連携する気ないだろうお前ら。協力という言葉が微塵も似合わねえぞ？

「……………はあ。仕方ない。こうなればお前の言う通り頭を使ってやろう。——島田に姫路」

「はい？」

「なによ？」

「明久が如月ハイランドのペアチケットを手に入れようとしている、と話をしていたよな？」

ん？そりゃあ烏頭でない限り覚えてるだろ。多分ユリも覚えてるだろうし。

「それがなにか？」

「一緒に行こうとしている相手が俺だと言う話だが——あれは嘘だ」
だろうな。

「えええっ!？」

なんでこいつらは心の底から驚いた表情をしているんだ？

「そ、それじゃ、一体誰を……?？」

「そんなの、決まっているだろう？明久が誘おうとしているのは、島田。お前——」

「ええっ!？あ、アキつてば、ウチと幸せに……」

「——の妹だ」

「殺すわ」

喜びから一転して殺気に変わる。真実だったらこれから明久のことをロリコンと言わなくちゃならん。

「待つんだ美波！僕は別に葉月ちゃんをどうこうしようなんて微塵も思っていない！」
思ってたらお前を鉄人に差し出してるわ。

「妙に仲が良いと思つたら……。まさか、そういうことだったなんてね」

「やっぱり吉井君にはお仕置きが必要みたいですね？」

「ひ、姫路さん……？」

明久の目の前にいるのは、妹の危機を救おうとする殺人鬼と、そこに並び立つ阿修羅像。さよなら明久。またな。

「瑞希！アキの召喚獣をボコにして！ウチはアキの本体をボコにするから！」

「わかりました！」

「わからない！二人の言っていることが僕にはさっぱりわからない！」

こりゃあ、フィードバックの痛みと現実の痛みでマジでやばいかもな。

「行きますっ！」

姫路の召喚獣が一瞬で明久の召喚獣の間合いに迫った。気のせいだろうか、攻撃速度がやたらと速く見える。

「わ、わ、わ！」

そして明久の召喚獣はギリギリのところで攻撃を避けていた。へえ。よく避けるなあいつ。

「アキ！おとなしく殴られなさい！」

「美波！それは反則行為だよ！」

で、明久本体に直接攻撃を仕掛ける島田。器用だなあいつ。二つの攻撃を同時に避けている。

『反則はありません』

あーあ。救いがないなあ。

「おおおおおっ!!」

とここで、明久がかわした姫路の大剣を抑えこむべく召喚獣を飛びつかせる。

「くうううっ!!雄二っ！」

なるほどな。これで雄二がトドメを刺すわけか。

「阿呆が。そんなことを考慮したら威力が落ちるだろうが」

ただ、明久を巻き込まないようには無理だろうな。

「き、キサマ、謀ったな雄二いっ！」

雄二の召喚獣。力を最大限に貯め放ったその拳の目標は姫路と明久の召喚獣。

「くたばれ姫路！明久と共に！」

二体を区別することなく叩き込まれる拳。

「え？あ、きやあっ！」

ろくに防御してない姫路の召喚獣は吹き飛ばされ戦闘不能。

「ダンプっ！」

点数がゴミな明久の召喚獣も戦闘不能。

「瑞希っ！」

「よそ見とは余裕だな」

姫路の召喚獣に注意が行ってしまった島田。当然、こんな隙を雄二は逃さない。

「しまっ……」

「これで決まりだ」

これにて島田の召喚獣も戦闘不能。

『あく……えくと……姦計をめぐらせ、味方もろとも相手を葬った坂本雄二君の勝利です！』

いいのかそれで……と思うが的を得ていて何も言えないな。

☆☆☆

ステージ裏に移動したオレたち。もうすぐ、オレたちの出番が来る。

「戦力外……………」

ただまあ、なんか知らんがこいつがいじけてる。いや、オレのせいだな。

「……………はあ」

オレはユリを壁際まで追いやって、

ドンっ！

壁ドンをした。

「な、何ですか！人がいじけてい——んんっ！」

そして無理矢理キスしてその口を塞ぐ。二十秒ほどしっかり口づけをして放す。

「落ち着いたか？バカ。テメエは点数的には戦力外だ」

「うっ……………」

「だが、お前はオレの最高の相棒だ。お前とならこの試合くらい勝てる」

「そ、それって……………！」

『では。第三試合！出場者は前へ！』

「行くぞ。ユリ」

「はい！」

オレたちは揃って入場……まあ、ユリが腕にしがみついているが気にするな。向こうから上がってきたのは、

「やっぱり君たちかあ」

「予想通りですね」

Aクラスの工藤愛子と佐藤美穂。間違いなく今までの奴らの中で一番強い。

「ユリ。今回は突撃するな」

「分かっていますよ。私が後方支援でタカが前線で行くんですよ」

「さすがだ」

「ふふん。今の私は機嫌がいいです。やる気に満ちていますよ」

と、自身の唇を指でなぞるユリ。何故だろう。このやる気が空回りする予感が……

『では、召喚してください』

「「「試験^サ召喚^モ」」」

呼び声とともに現れる四体の召喚獣。そして遅れてディスプレイに点数が表示される。

『Aクラス 工藤愛子&佐藤美穂

古典 337点&278点』

やはり、300点近かったかあ。でもまあ、それくらい予想通り。

『Fクラス 神白崇彰&黒柳由梨乃

古典 589点&12点 』

「「えええええつ!?!」」

そこに表示されたのは600点に近い点数とギリギリ二桁の点数。

「た、タカ……この前のBクラス戦より150点近く増えてません?」

「ん? ああ、対戦表を見たときから点数調整は済んでいる」

オレの腕輪の性質上、極論取るのは400点でいい。500点取ろうが600点を取ろうが腕輪を発動させたら400点にされる。だったら普段はそんなにとらなくてもいい。てか、面倒だし。

「だが、ミスったな。まさかこつちが足し算して勝てなかったとは思わなかった」

普通の相手なら合計点でも勝っているはずだが、なぜか勝てなかった。

「珍しい計算ミスですね。何かあったのですか？」

「ああ……お前がここまで点数がとれなかったことが計算ミスなんだわ」

「それぞれそんなことよりも勝ちに行きますよ！今回は力を合わせないと勝てませんからね！」

『そ、それでは試合を開始してください』

審判の向井先生の試合開始の合図。オレの召喚獣はその合図と共に左手に銃を構え、

——パァン！

発砲した。

「「……………え？」」

ゆつくりと倒れていくユリの召喚獣。

「た、タカア!? きよ、協力はどこに行ったのですかあ!？」

「知らね」

そして、オレの召喚獣は右手に片手剣を構え二人の召喚獣目掛け突撃する。

「へ、へえ〜いいの? 二対一だよ?」

「点数が高くともそれは舐めすぎなのでは?」

「さあな。計算ミスだったが作戦に支障はなかった。元々テメエらの相手はオレ一人で

するつもりだったからな」

そう。アイツの点数の低さには驚いたが支障は一切ない。

「だったらお望み通り」

「倒してあげますよ」

佐藤美穂が構えるは鎖鎌。工藤愛子は斧。片や手数片や一撃。武器のタイプというか毛色が違う二人の相手とかやつてらんねえな。

「でもなー」

オレは銃を構えて発砲しようとする。だが、

「やらせないよ」

「撃たせません」

点数に比例して召喚獣というのは強くなる。それはパワーもだし、もちろんスピードも。生憎というかオレはまだ全力で戦えない。流星に500点オーバーでの素のスピードになれていないからだ。

「ツチ」

突撃してきた二人の召喚獣を狙い撃ちしようとするも、銃を工藤の召喚獣によって吹き飛ばされ、近づいてきた佐藤の召喚獣に斬られる。

「点数が高くても連携すれば勝てます」

「銃を取りに行く暇は与えないよ」

今の攻防で銃は後方に吹き飛ばされる。こっちの武器は片手剣のみとなったため、必然的に近距離での戦いが要求される。取りに行こうとすれば後ろからやられるのは明白だ。

点数は削られたもののまだまだある。仕方なくはないが、

「上等だ」

剣と鎌がぶつかり合い、その間を割って入るように斧が振り下ろされる。剣を引いて代わりに回し蹴りを放つものの斧でガードされて、再び鎖鎌による連撃。

「やっぱ使うしかないか……『感^リ覚^ン共^ク有^ッ』」

そんな攻防が少し続き、オレの点数がもうすぐ400点を切りそうだったので腕輪を発動させる。

「いけっ」

敏捷性が上がった今、一瞬で最高スピードまで到達。その勢いで佐藤の召喚獣の懐に入り込み、

「なっ……」

召喚獣の顎の部分をバク転の要領で蹴り空へと飛ばす。

「でも、甘いよー」

が、その隙に工藤の召喚獣が斧を構えてなぎ払おうとする。当然、このままだったら確実にアウト。下手したら戦死だろう。しかも、今から回避行動をしたのでは間に合わない。

誰もが当たると思ったその時、斧と召喚獣の間に割って入る影が一つ。

「何で!?!」

割って入ったのは盾。

そのおかげでオレは盾ごと攻撃が当たりはしたものの、たいしたダメージはなく吹き飛ばされるだけで終わる。

「ベストタイミング!」

「貴女戦死したはずでは!?!」

続いてユリの召喚獣は空中にいる佐藤の召喚獣に銃口を向ける。

驚きつつもガードの体制に入る佐藤の召喚獣。だが、

「やらせねえよ!」

吹き飛ばされる中、オレは剣を佐藤の召喚獣目掛け投げつける。感覚が共有されている分狙いはシャープになってる。そのため、放った剣は佐藤の召喚獣に当たり空中でバランスを崩させることに成功する。

「いけえっ!」

パンパン！

放たれた二つの弾丸は佐藤の召喚獣の頭に当たり、点数がゼロになる。まず一人。
「でも、今なら！」

工藤は相方の戦死に驚くも瞬時に切り替えオレへと追撃する。

当然だ。仮にユリが点数があつてもゴミ並みな点数であることに変わりはない。だつたら武器も投げつけ丸腰な点数の高いオレを倒す方が先だろう。だが、

「そう来ると知っていた」

その程度は計算の範疇。オレは地面を強く蹴つて立ち上がり、そのまま工藤の召喚獣にタツクルを仕掛ける。

「これでトドメです！」

そして、工藤の召喚獣はタツクルをもろに受けどんどん押しされていく。工藤の召喚獣の背後からはユリの召喚獣が剣を構えて突撃。前と後ろ。押し潰された結果。

『勝者！神白、黒柳ペア！』

工藤の召喚獣は戦死した。

人質と書いて暴走と読む

バカテスト 化学

以下の文章の（ ）に入る正しい物質を答えなさい。

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である』

姫路瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

神白崇彰の答え

『Ca(OH)₂』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

黒柳由梨乃の答え

『ハーバー』

教師のコメント

ハーバー法のハーバーは用いられる物質の事ではありません。

土屋康太の答え

『塩化吸収材』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

☆☆☆

「やりましたね！タカ！」

四回戦を無事勝利で終わり、はしやぐユリ。

「やっぱり私たちは最強ですね！」

まあ、今回はユリのおかげで勝てたのは嘘じゃない。

最初の発砲はユリに当たらないギリギリを狙って撃った。当然当たってないからダメージはないが、それをユリの召喚獣が倒れ、いかにもオレが裏切った的な発言をする。当然だがこいつの点数上いてもいなくても変わらない。すぐに観客もあの二人もユリの戦死を確認することなく注意はオレに向く。そして銃を吹き飛ばさせユリが回収。後は頃合いを見て連携攻撃で倒す。

もちろん事前の打ち合わせなど一切ない。その場で思いついた作戦通りユリが動いてくれたただけだ。

「ふふん♪これなら優勝も夢じゃないですね♪」

まあ、決勝戦ではうまいこと負けないといけなのだが……また後で考えるか。

「これでタカからご褒美が……」

「ちよつと待て。誰がそんなこと言った」

「ほへえ？今活躍しましたよね？」

「そうだな」

「トドメも刺しましたよね？」

「そうだな」

「じゃあ、ご褒美を」

「おかしいよな」

「こいつは古典だけでなく現代国語もできないのではないか？」

「ぶう……」

「はあ。そうむくれるな。分かったわ」

「やった♪」

まあ、こいつがいて助かったのは事実。そこは評価すべきだろう。………こいつがもつと点が取れていれば作戦の幅が広がったのだから。

「お、崇彰に黒柳か。どうだった？」

「勝ってきた」

「そうか。なら、早速で悪いが二人とも頼んだぞ」

「へいへい。行くぞユリ」

「はい！」

☆☆☆

1時間ほどすると、そろそろ雄二たちの準決勝の時間が近づいてきた。

「それじゃ、準決勝に行ってくるね」

「はい。頑張ってくださいね」

「アキ、負けたら承知しないからね！」

「吉井さん。ファイトです」

「わかってるって」

と、明久が姫路、島田、ユリの三人から声援を受けている。この時点で異端者なのでFFF団が暴れそうなものだが生憎今は客の波がいったん収まっているので、休憩させている。

「崇彰。ちよつといいか？」

そんな中、オレは雄二に呼ばれる。

「なんだ？」

「お前のことだから分かってるだろうが……」

「次の相手……だろ？」

雄二と明久の次の相手は霧島と木下姉。つまり、二年生を代表する二人。一方のオレとユリの相手は三年Aクラスの常村と夏川。

そう。同姓の別人とかそういうオチかと思いきやバッチリあの常夏コンビである。奴らは一言で言えば敵側の人間だ。

「ああ」

今回ババアの刺客と言うとあれだがババア側としてオレたちは参戦している。ババアが示すは優勝。しかも、雄二と明久がだ。で、問題はそれを阻止しようとする者の存在。常夏コンビを操っている敵側の黒幕がいるはずだ。

推理という大袈裟だが、あいつらの動きは不自然すぎる。執拗にオレたちを狙っている嫌がらせに見えるが、果たしてそんなあほくさいことを目的もなしに本気でするだろうか？ わざわざ何度もAクラスで大声で騒ぐ必要があつただろうか？ 答えは単純明快。奴らはオレたちを邪魔する存在の差し金。

なら黒幕にとって今必要なのは、オレとユリの確実な敗退。

「だが、お前らが勝たないと結局意味がない。頼りにしてるぞ」

あくまでバックアップ。主はこの二人だ。

「任せろ。この試合は絶対に負けられないからな」

ただ、こいつの負けられない理由は多分ババア関連じゃない。別にあるだろう。

「俺の人生がかかっているからな……！」

そう。雄二としては霧島に優勝されると人生の墓場行きなのだ。いや、こいつの自業自得だがまあいい。ともかく、今のやる気に満ちているこいつが負けるわけがないだろう。………多分。

「行ってくる」

「おう」

そして雄二と明久はクラスを後にする。雄二が立てた作戦。そのために秀吉とムツツリー二もいない。ま、保健体育が対戦科目であることと木下優子が相手にいることから作戦は大体読める。

「おそらく、秀吉の方は失敗する」

向こうがこちらの動きをどこまで把握できているかは知らんが多分上手くは行かない。だが、それでも勝てはするだろう……雄二を犠牲にすれば。

「タカ? どうしたのです?」

「ん。ああ、人がいないなって」

今店にいるのはオレ、ユリ、姫路、島田、葉月の五人。

「大会の方が注目集めてますからね。ほとんどの人が向こうに行っちゃったんでしよう」

明日の午後から決勝戦。すなわち、準決勝は今日の最後の戦いの場。見に行く人が多くいても不思議じゃない。

「アンタたちも行ったら?」

「準決勝に遅れたらダメですからね」

二人からのありがたい提案。そうだな……

ガラッ

「あ、お客様です! いらっしやいませ!」

入ってきた男は、

「おう。ちよつとおとなしくしてくれや」

入ると同時に葉月を捕まえ首元にカッターナイフを当てた。

「お客様? …… どういう冗談だ」

すると、その男の後ろからさらに男どもが現れる。 …… ツチ。

「坂本雄二。吉井明久。神白崇彰ってのはいるか?」

「坂本雄二と吉井明久はいねえ」

「ツチ。一足遅かったか」

なるほどな。こいつらは送り込まれてきた刺客か。

「神白崇彰つてのはオレだ。何の用だ」

「そうか……最低限の目標は果たせそうだ」

「ああ？」

「抵抗するところの子がどうなるかなあ？」

ツチ。人質を取るとはきたねえ。

「やれ」

すると、一人の男がおもむろに近づき、

「オラッ！」

鳩尾に向かって膝を入れてきた。

「カハッ！」

たまらず膝をついてしまう。

「タカ！」

「やれ」

そして膝をついたところを蹴り飛ばされて机を巻き込み壁に激突してしまう。

「神白！」

「神白君！」

全身に痛みが走る。痛みをごまかそうと、サングラスがどつか飛んでったなあと場違いなことを考えてみるが……容赦ねえなクソ野郎ども。久々に感じたわ。気絶しそうになったところを舌を噛むことで何とか意識を保つ。

「お前たちこいつらも人質にするぞ。なあに、人質は多い方が楽しめるだろう？」
「へへっ。そういうこと」

「や、やめてください！」

「は、放して！」

「おっと抵抗するとこの子が無事では済まなくなるぜ？」

「お姉ちゃん！」

「は、葉月ちゃんを解放してください！」

「ははっ。嫌だね」

女性陣の悲鳴と男どものウザい声が聞こえる。

「な、何でこんなことするんですか!？」

「そういう依頼だからだよ。コイツを無事に返したいならおとなしくしやがれ！」

「うう……」

恐怖を感じているはずなのに涙をこらえ、耐えようとする葉月。

.....嫌なこと思い出させんよクソが。

「へえ。意外にしぶといなあ」

「.....放せよ.....クソ野郎」

「ああ？」

「タカ！落ち着いてむぐっ」

「黙ってろ女！」

ユリが叫ぼうとしたとき、その口元は男の手によつて押さえられる。

——その瞬間、オレの中の何かがトんだ。



「……ハナセ……」

タカが頭を押さえながら低くつぶやいている。

「……ハナセ……」

その声にいつものタカを感じられない。重く暗くそして……怖い。

「うるせえなあー！」

近くにいた男がタカを殴りに行く。が、

「……な、何だよその目は！」

その拳はタカによって受け止められる。そして、タカの両目は大きく見開かれ、

「……死ね」

威圧するとともに、男の腹を思い切り膝で蹴り沈めた。

「おい！テメエそれ以上うぐ……！」

葉月ちゃんを押さえていた男の言葉は続きませんでした。タカの目を見て恐怖している。恐怖で震え、カッターナイフを落としたその刹那。

「遅い」

タカがナイフに視線が行った男を葉月ちゃんから離れさせると同時に蹴り飛ばし、後ろの仲間たちのもとへ吹き飛ばす。

「あ、アンタ……その目……」

「オッドアイ……」

タカが隠してきたオッドアイ。サングラスはすでになく、そのあらわになった瞳。そこには普段感じない色が見える。怒り、殺意、冷たさ……そして、ほんのわずかな恐怖。いや、あれは恐怖だが恐怖ではない。最悪のシナリオを構築し、それを回避しようとしているだけ。だから、多分時間切れという恐怖。

ただ、その恐怖を持つ中、彼一人にこの空間は完全に支配される。

おそらく、オッドアイというのが大きな要因でしょう。どうしてもタカの両目にこの場にいる全員の視線が誘導されてしまう。その状況でタカは不良たちに殺気を放って威圧している。

「殺す」

一瞬で近づき、私を拘束していた男の首を掴み私を離すと同時に床に叩きつける。

普段の彼なら解放した私に何か言ったり、余裕そうな顔でへらへらするが、一切ない。ただ冷たく。ただ燃え上がる炎で暴走している。そんなタ力を見て、嫌な予感がよぎってしまふ。

「次」

続けざまに美波さんと瑞希さんを拘束していた男たちの顔に一撃ずつ叩き込み、二人が解放されると同時に地に沈める。

——ダメだ。早く止めないと。

「て、テメーごふっ!」

不良のやぶれかぶれの特攻。その特攻を足払いをかけ踵落として沈めた。

——止めたいのに。身体が動かない。

「く、来るなあ!」

「殺す」

私が金縛りにあったかのように動けないでいる間もタ力は逃げようとし始めた男たちを淡々と一人ずつたたきのめしていく。

「さて」

辺りには不良たちの屍が。一人ずつ投げ飛ばすように積み上げてゆき、そして、山積

みとなった不良の中から何かを探している様子。その何か——二人の男を引つ張り出して転がす。

——ダメ！それ以上は……！

「殺す」

その二人というのは葉月ちゃんにカッターナイフを突きつけていた男と私を捕らえていた男。既に意識はない男たちに向け、冷たく言い放つ。そして、

「死ね」

足を振り上げて、勢いよく振り下ろそうとする。

「止まって！」

その足が不良たちに当たる寸前。私はようやく声が出せた。私の声を聞いて動きを止めるタカ。

「私は大丈夫だよ？葉月ちゃんもあの時の私みたいに大丈夫」

足を動かしてタカの正面に回り、彼を優しく抱擁する。

「タカのお陰で大丈夫。だから、それ以上はダメ」

タカには人を殺して……壊してほしくない。きつと彼はこのままこの人たちを殺すつもりだった。殺すのが大袈裟でもきつと再起不能となるまで壊すつもりだった。理性なんてとうにとんでいただろう。

「ほら見て？無事でしょ？」

美波さんにしがみつく葉月ちゃんを指さす。タカはその方を向いて、
「よか………つた」

ドサッ

無事を確認すると同時に気絶し、倒れ込んだ。

「明久。今日という日はお前をクロス」

「あはは。やだなあ雄二。目が怖いよ？」

準決勝は雄二の犠牲もあり、僕らの勝利で終わった。

とりあえず、腹を殴り、葉を吐かせた後で冷水につけたら、なんとか雄二は正気に戻った。

「だいたい、雄二の作戦が読まれていたのがいけないんじゃないか。相手はあの霧島さんだよ？」

「ぐっ。それを言われると反論できん……」

全く。霧島さん相手なんだから……ってあれ？

「おい明久。崇彰と黒柳を見たか？あいつらは次の試合のはずだぞ？」

「見てないよ。おかしいなあ。忘れるとは思えないんだけど」

黒柳さんの記憶力は僕と同等らしいからおいといて、あの崇彰が忘れるとは思えない。かといってあの崇彰に何かあったとも、考えにくいし……

「た、大変じゃお主ら！」

と、ここで秀吉が息を切らして走ってきた。

「どうした。秀吉」

「う、うむ。Fクラスの教室が大変なことになっておる！」

「ええっ!？」

「とにかく走るぞ」

雄二を先頭に走り出す僕ら三人。

「秀吉。ひとまずウエイトレスは無事か？」

「崇彰以外は全員無事じゃ！」

「……ツチ。やっぱりかよ」

「やっぱり？」

「ああ。もう一度俺たちに何か仕掛けてくるか喫茶店を妨害するかっていうのは予想で
きた」

「凄い物騒な予想だね」

「引つかかることは随所あった。無論崇彰も同じ事を考えていただろうが」

思い返せばこいつと崇彰は何かを考え、妨害工作されても冷静に対処していた。違和
感は抱いていたのだろう。

と、そんなこと思ってるうちに教室に着いた。

「皆無事!？」

教室に着いて周りを見渡す。美波に抱きついてる葉月ちゃん。美波と姫路さんは
葉月ちゃんをなだめるようにしている。座り込む黒柳さん。その膝の上に頭を乗せ気

絶している崇彰。そして、

「な、何これ……」

そして、山のように積み上げられた不良たち。全員気絶しているようだ。

「……………雄二たちか」

「ムツツリー二……」

「ワシらが来た時には既に……」

「これから指示を出す。まずは崇彰を保健室に連れてく。次にこの山は俺が処理する。ムツツリー二は厨房、明久と秀吉はここを綺麗にしてくれ。流星にこのままじゃマズい」

迅速にかつ冷静に指示を出す雄二。

「で、でも何が起きたか……」

「状況把握は後でもできる。今はここをきれいにしておくことが先決だ」

「分かった」

「私も……ついて行きます」

「ああ。そうしてくれ」

崇彰を保健室まで僕と雄二で運ぶ。ただ、この男がなぜやられたのか。こいつは雄二と同等、あるいはそれ以上に強い。簡単にやられるはずがない……

その後はしつかりと片付けをし、Fクラスのクラスメート男を招集。店は彼らだけで再開させている。とりあえず、何かしらに巻き込まれかけた女子たちと僕ら準決勝に関わっていた組が保健室に集まった。

「大体推察はできるが……何があった？」

聞くと姫路さんと美波が話してくれた。不良乱入のこと。葉月ちゃんや皆が人質に取られたこと。そして、崇彰が暴走したこと。

一通りの事を聞いて、

「……いくつか疑問があるな」

と雄二が呟く。

「確かに……何で崇彰はオッドアイなの？普段は普通の感じなのに……」

「それはおそらくカラーコンタクトじゃな。大方、許可を取って身につけていたのじゃろう」

「そんなのはどうでもいい。ただ、今のを聞く限り崇彰がそこまで暴走した意味が分からん」

「え？黒柳さんが捕まっていたからじゃないの？」

「それだったら黒柳を解放した時点で戻ってるだろうし、遅くとも不良を全員気絶させたら戻ってるはず」

あ、確かに。その後には追い打ちをかけようとしていたのはやり過ぎというか無駄というか……崇彰らしくない。

「トラウマですよ」

「トラウマ……だと?」

「はい。今回の状況が彼の中にあるものを呼び起こしたんです」

真剣な口調で話す黒柳さん。

「私は彼によつて救われた。でも、彼は私を救った時に深い傷を負い。後悔をした」

彼女は淡々としていいると思つた。なんとなく目の前の文章をただ朗読しているみたいに感じた。でもそれは冷たいからじゃない。あまり思い出したくないことだから感情を入れたくないんだろう。

「彼は私が根に持つていいるのではと言つた。でも本当は逆。私は彼に恨まれている。本人は恨んでないといつてゐるが私は恨まれても仕方ない。だつて——」

崇彰が黒柳さんを……?」

「——私は彼から奪つてしまつたから」

清涼祭の夜と書いて想う心と読む

清涼祭一日目も終わり、二日目に向け準備をする人や帰宅する人がいる中、私はタカの傍についています。

皆が仕事に戻り、その後西村先生がやってきて、軽い事情聴取と現在の状況について話をしました。そして、清涼祭一日目が終わったタイミングで私とタカの分の鞆を吉井さんと瑞希さんが持つてきてくれました。これには感謝です。あ、ちなみに制服に着替えましたよ？流石にタカの目が覚めたらすぐに帰れるようにです。あれ？もしかして配慮ができてるって感じですかね？

「……はあ」

あの時以来でしょうか。ベッドの傍らで眠るタカのいつ起きるかを待つのは。よくも悪くも前とは状況が違います。違いますか……

「……………うっ」

「起きましたか!？」

「……………ユリ…………」

虚空に手を延ばすタカ。なるほど。寝言ですか……と思つてると、

「…………ごめんな……………」

手をボタンと降ろす…………というか、な、泣いてます!?あの人の心が実はないのでと専ら噂になつている（私の中だけです）あのタカが泣いている!?この男が泣いた事なんて片手で数えるほど…………あれ?そもそも泣いたことありましたっけ?…………じゃなかつた!ともかくほとんどありません!あわわ!こういうときはどうすればいいのでしょうか!ここはラマーズ呼吸法で落ち着きを…………じゃなくて!えと、えーつと!

「はっ!」

ここはあれです!久し振りに私の方が生まれた時間的にお姉さん（ただし数時間程）でしたから威厳を見せるために、

「よしよし。大丈夫ですよ。私がついてます」

撫でましょう。寝ているタカの頭をなでる。ふむふむ。普段というかやったことありませんでしたね。ほうほう。こんな感じですか。なんだかタカが可愛く思えてきました。

「そう言えば寝ているときにタカもよくなでてくれましたね」

私の寝相が悪いや寝起きが悪いなんて言つてはいますが、なんだかんだで一緒に寝てくれます。気分次第ではタカの方が自発的になでてくれたり抱きしめてくれたりキスは…………ほとんどないですね。悲しいことに。

「日頃の恩返しですね」

全く、これでタカに恩がまた一つ増えて……あれ？増えたと言うより返した？あー恩返して口で言っていましたね。建前じゃなくて事実だった？あれ？冷静に数えてみるとこの男には数え切れないほどの恩があるような。実はそんなにないような……。まあいいです！きつと幼馴染みの間で恩の数なんて数えるものじゃないです！恩とか貸し借りの関係じゃないです！……そうですよね？そうって言って下さい。そうじゃないと私はタカに一生頭が上がりません。あれ？それって今と変わらないよ
うな……

「……………ありがとな」

「へ？」

あれ？今何か声が……あ、寝言ですね。とか涙止まりましたね。ふふん。撫でた
かいたったというものです。

「ふあああああ……」

そういえばなんだか眠いです……。

☆☆☆

意識が覚醒した。頭をなでられる何ていう久しく味わってなかった感覚が最初にあった。次にあったのは目から液体が流れる感覚。血じゃないから涙だろう。血ならなでとるやつが発狂しないわけがない。

「日頃の恩返しですね」

だろうな。お前ぐらいしかいないだろう。……たく。別に恩義なんて感じる必要はないのにな。オレもお前に助けられ………ているよな？うーん。怪しいが助けられていると言うことにはしておこう。まあ、あれだ。オレはアイツを助けてるなんて恩着せがましいことを言うつもりはないってだけだ。だからま、

「……………ありがとうな」

「へ？」

あいつがただの寝言だと思ってスルーしてくれる。そう思って一応お礼は言ってお

こう。こいつの事だからオレが倒れてからずっとそばにいるだろうし。

「ふあああああ……」

さてどのタイミングで目覚めようかと考えていると急に腹部当たりに重さを感じた。こいつ。まさか……

「……………すー」

……………だと思ったよ。看病っていうか看ている奴が寝てどうする。しかも寝ているやつの上で。

とりあえず、目を開けて周囲を確認。ここは保健室。時刻は清涼祭一日目が終わって少したった頃。周囲にこいつ以外の人影なし。カバンはそこに二つ。ユリは着替え済み。……………なるほど。大体把握した。

「仕方ねえな」

さて、帰るか。サングラス……面倒だしいいか。とういかなくしたし。

「よつと」

ふう。寝起きにこれはきつい。後地味に腹部とかが痛い気がする。ま、気がするだけか。

と玄関まで鞆二つにユリを背負って歩いて行くと、

「あ、崇彰！」

「目覚め……なんだその状況」

「明久に雄二か。おはよ」

「運よく？この二人に玄関で出会った。」

「具合は？」

「見ての通りだ……というか、驚かないんだな」

「まあな」

そのまま一緒に並んで帰ることにする。まあ、途中までは一緒だし。

予想通りというか、ぶつ倒れている間にこの眼のことは話済みのようだ。ま、どうせ島田と姫路、葉月に見られていたんだ。ばれるのも時間の問題だったか。

「準決勝のことはすまなかった。不戦敗になっただろ？」

「ああ。決勝は俺たちと常夏コンビだ」

「でも、崇彰が謝ることじゃないよ。おかげで姫路さんたちは無事だったんだし」

「ところで明久。雄二。黒幕は分かったか？」

「ババア曰く教頭だとよ」

「そう……」

なるほどな。潰す相手はお前か。

「こりゃあ、たつぷりお礼しておかねえとな」

「はははっ。崇彰らしいね」

「だから、常夏コンビは任せたぞ。オレたちの分まで」

「任せておけ」

「うん。二人の分まで頑張るよ」

「じゃ、オレはこっちだから」

そう片手を挙げ、別れを告げようとする。

「言うまでもないがお前は明日黒柳と登校してこい。今日のような襲撃があったらかなわんからな」

「はいはい。ま、言われなくてもそのつもりだ」

「うんうん。清涼祭が終わったらFFF団による処刑だね」

「は？何で？」

全く会話の流れが読めなかった。は？マジでどうしたらそうなるんだ？

「何でって……うらやましいんだよこの野郎！こっちはむさいゴリラと一夜明かそうつてのにそっちは美少女と一晩をともにするなんて……！」

「どうやら、勉強漬けにしてほしいらしいな……！」

「お前ら相変わらずだな。ま、学校を存続させるためだ。それまでは協力するか」

今度こそ「また明日」と言つて去つて行く。利害が一致している間のこいつらは頼も

しい。一致しなくなった途端敵がな。

というか、友人同士でコロコロ敵と味方が入れ替わるのも珍しい話だな。ほんと。いや、多分ただのバカだな。親友以上知人以下の金箔並みの厚さの関係……言ってて意味分かんねえわ。なんだそれ。

☆☆☆

「……………むにや?……………はっ!」

「起きたか? バカ」

「こ、ここはどこ?! 今何時?! あ、タカ大丈夫ですか?! ……というかおなか減りましたね」

「はあ……………言いたいことを一個に絞れ」

「じゃあ、このおいしそうな匂いは何ですか? (タカ、大丈夫ですか!?)」

「本音と建前が逆だろ。とりあえず、夕飯を作つといた。もうできたから食うぞ」

「はーい……………つて大丈夫なんですか?! 寝てなくていいんですか?!」

「大袈裟すぎだ。もう治つたから心配すんな」

たく。目覚めたら目覚めたでうるせえ。てか、欲望に忠実すぎだろ。起きておなか減つたとか言う必要があるか?

「いいえ、心配です! 心配すぎて食事が喉を通りませんよ!」

「現在進行形で飯食つてるお前に言われてもな……………説得力皆無だろ」

「……………(さー)」

目をそらし、飯をパクリ。……………はあ。

「そ、そうです! 心配なので今日の夜は添い寝してあげますね!」

「昨日しただろ。後、もう心配してないことはよく伝わった」

「とういか、大変です！お昼寝をしすぎて夜眠れそうにありません！」
「ガキか！」

ただ、ドーセ、別で寝るって言っても「眠れません」とか言つて乗り込まれるんだろ
うなあ……面倒くせ。

ま、こいつも今日一日疲れてるだろうから、結局オレより先におちるだろうな。

と、阿呆な会話を繰り返しながら飯とその片付けも終わらせ、風呂も一緒に入った。
そして、現在オレの部屋にいる。

「今日くらいは勉強なしでいいぞ」

「おぉー！」

喜ぶユリ。ま、勉強嫌いのこいつにとつてはここまで苦痛だっただろうな。

「よーし、じゃあゲームしましょうよー！」

「バーカ。明日も出し物はあるんだ。さっさと寝るぞ」

「ええー少しだけ。ね？」

「オレは寝る」

どうせ、その少しが長引いて途中で寝落ち。ちよつと考えただけでこの後の展開が手
に取るように分かるな。

「ぶー。仕方ないですね」

すると、オレの布団に入るユリ。

「電気、消してくださいねー」

そして、オレの枕に頭を乗せ。寝る準備万端のようだ。

「……………はあ」

何というこの気持ち。やり切れなさというわけではないが。まあ、予想通り過ぎるんだよなあ。

電気を消して、オレも自分の布団。ユリの隣のスペースで横になる。

「ねえタカ」

すると、オレの上に覆い被さってくるユリ。寝るのに重いからどいてほしい…………とは口で言えるわけもなく、無駄だと分かりつつも目で訴えかけてみる。

「質問。いい?」

「改まってどうした?」

「最初に約束してね。聞かれたことには嘘をつかないって」

別にオレはこいつに対して嘘はつかない。真実を小出しにして騙すことはあるが。ただ、こんなことを言うって事は…………何かありそうだが。

「はいはい」

裏があると分かりつつも別に断る理由がないので了承しておく。

「もし嘘をついたらキスするからね」

「本当のことを言ったら?」

「舌を入れる方のキスをしてもらいます」

なんだこいつ。一切交渉じゃないが、いや、言ってる意味が分からん。今に始まったことじゃないが。何、オレは質問に正直に答えてそのうえこいつにディープキスをしろと? 何言ってるんだ本当に。

「はあ。まあいいや。で? 質問は?」

「もし、準決勝戦で勝っていて、吉井さんと坂本さんと決勝で当たってた時。タカは勝つ気ありましたか?」

「つまり?」

「もし、決勝戦まで行っていたとき、タカはワザと二人に負けるつもりだった。違いますか?」

オレはユリにキスをする。もちろん。あいつの望んだ方のだ。

「ああ。負けるつもりだったな」

ユリが酸欠になる寸前まで彼女の口内を蹂躪した後、呼吸が整うのを待つてから正直に答える。

「じゃあ、オレから質問だ。いつから気付いていた?」

「最初から……というのはさすがに嘘です。私が四回戦に勝って喜んでいたときに、タカが優勝はできないと考えているようでしたからね。それでです」

なるほどな。あの時に思考が読まれたというか分かってしまったわけか。

「ということ、今度は私から……」

「おい。そんな話はしてないぞ」

「まあ、いいじゃないですか」

じゃあ、最初の取り決めは何だったんだよ。そう思いながらユリの侵入を許すことにした。

「次です。今度。何処かのタイミングで一緒に出かけましょう」

「もはや質問ですらなくなつたな」

「……………嫌ならいいんです。彼女さんやバイトとかで忙しいことぐらい知ってます」

「……………はあ」

オレの弱点をあげると言われたら多分こいつだ。こいつには甘くなっている。あの時の自分とはまるで違うな。

「誰が嫌って言った。行ってもいい。だからそんな顔すんな」

「へへへ」

抱きしめてくるユリ。

別に出掛けるのはいい。今回の大会。もし、裏で学園長ババアが何も起こしてなくて普通の大会だったなら、オレが本気を出していれば優勝はそんなに難しいものじゃない。こいつは半分は姫路だろうが自分の目的があったからこそオレとこの大会に出場した。賞品の中にアレがあることを知って。なら、その埋め合わせじやないが出かけるくらいな人ともない。……………それに、こんな幕引きにしまったからな。

「約束。忘れないでね」

「アホか。お前が忘れない限り忘れねえよ」

「ならいいです。ふあああああ」

安心した様子で大きな欠伸を一つ。

「ユリ」

「ふあい？」

オレはユリを抱きしめ返す。

「お前だけは何があつても守ってみせるからな」

「おかしなタカです。そういえば、そうでした」

すると、ユリはキスをしてくる。

「ありがとうね。守ってくれて。お礼を言うの忘れてました」

「……………あれくらい当然のことだ」

「ふふっ。素直じゃないですね……」

そのまま静かになったユリ。寝息が聞こえ始めたことから寝たのだろう。やっぱり疲れていたんじゃないか。……というか、結局どかなかったし。

………考えても仕方がない。オレも寝るとするか。明日も早いしな。

清涼祭二日目と書いて責任者代理と読む

バカテスト 歴史

以下の問いに答えなさい。

『冠位十二階が制定されたのは西暦（ ）年である』

姫路瑞希の答え

『603』

神白崇彰の答え

『603』

教師のコメント

正解です。

坂本雄二の答え

『603』

教師のコメント

一体どうしたのですか？驚いたことに正解です。

吉井明久の答え

『603』

教師のコメント

君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください。

黒柳由梨乃の答え

『603』

教師のコメント

まさか貴女まで……明日は嵐とでも言うのですか？

☆☆☆

朝の目覚めは、

「く、苦しいいい……………っ！離せこのやろおおっ！」

ユリが思い切り首を締めるように抱きついているため呼吸困難での目覚めだった。

「……………えへへ……………」

「えへへじゃねえぞコラア……………」

しかも幸せそうならしない顔をしながらである。この野郎。さてはやばいやつだな。

「ふうー」

何とか逃れたオレ。やれやれ。こいつが暴走する前に朝飯を作るか。……既に暴走した後だが。

「たく……………久し振りにベットから蹴落とされなかつたな」

こいつと寝ると大抵朝オレは床で寝ている。理由は単純でこの女。あろうことかオレを蹴飛ばすのだ。蹴飛ばすという表現は不適切か。こいつがベッドの上で回転する

拍子にオレが邪魔で押されて落とされるだけなのだ。結論は出すまでもないがこいつが悪い。少なくともオレは悪くない。

なら、柵ありにしろつて？ 確か中学の時に一回やってみたが柵は破壊されてたぞ？ ほんと、やべえだろ。しかも朝起きて柵が壊れて驚いて叫んでたしな。マジでやべえだろ。

「完成つと……」

さて、起こすか。と、部屋に戻つてみると既にベッドの上で座つてるユリが、なんだ。自分一人でもようやく起きられるように……

「わあータカだあー」

……………どうやら、まだ目覚めてないようだ。

「だつこしてーだつこ」

本当に目覚めてないようだ。

「…………ツチ。仕方ねえな…………」

「わあーい」

抱きついてくるユリ。そう、こいつが望んでいたのは普通のだつこ。決してお姫様抱っこと呼ばれるものじゃない。そして、こいつは言ってることはガキのそれとは変わらんが、こいつは170cm越え。想像に難くないがその分、腕も長いし、足もそこそ

こ。つまりだ。がちりとホールドされてるのだ。手と足で。

「たく、離すなよ」

「もちろんです」

返事が軽い仕方がない。彼女を信じてそのまま階段を無事降りる。そして、

「よし。離せ」

洗面台の前で手を離すオレ。だが、一向にユリが離す気配はない。

「いや」

は？

「さっき、離すなってタカは言ったもん。だからずっとこのまま」

なるほど。これがユリじゃなくて別の女とか彼女だったら殴り飛ばしていたところだ。

「……………はあ」

離す気配がないのでオレはリビングで座ることにする。立つだけ体力の無駄だしな。やれやれ。なんとかしてなおらんものかねえ……

はむ

「……………お」

はむはむ

「……………おい」

はむはむ

「おい。人の耳に何してやがる」

「えへへ」

さてはこいつ。笑えば何でも許してもらええると思つてねえか？まあ、ユリだから許すが。他の女？シバキ倒すに決まつてんだろ。

「起きろいい加減」

「やだあ」

と頬をすりすりしてくるが、お前身体でかいんだからな……。はあ。まあいいけど。なんかもう。流れに身を委ねた方が楽だな。

☆☆☆

「さあ今日も頑張るぞー！」

「……そうだな」

「やれやれ朝からお疲れですか？こんなんじや今日持たないですよ
誰のせいだと思ってるんだ。」

「ふふん♪」

「というかテンション高いなあ……」

「はあ……帰りてえ」

「ほらほら行きますよ」

手を引つ張られるオレ。畜生。手を繋ぐんじやなかった。提案したのオレだけど。

とまあ、そんなこんなで店……我らがFクラス教室に到着する。

「うーっす」

「おはようございます。皆さん」

「おはよ。神白に由梨乃」

「おはようございます。二人とも」

「そつちも無事だったか。まあ崇彰がいるし、心配はしてなかったが」

「うむ。ワシらよりも崇彰一人の方が強いからのう」

「……………（ココココ）」

「そういえばサングラスは？カラコンもしてないみたいだし……」

そう。オレは今、目を隠していない。

「別に。お前らにバレた以上隠す意味ねえし。教師陣は少なくとも鉄人が知ってるから問題ないし」

知らないやつからしたら、高校デビューじゃないが清涼祭ではっちゃけた奴って思われるのは癪だが仕方ない。一々余計な人たちの目まで気にしてたら疲れるだけだ。

「てか朝早いな。特に明久」

「朝一番でテストを受けていたからね。ふわあ……」

なるほど。こりやあ寝かせた方がいいか？

「もう、そんなんで決勝戦は大丈夫なの？相手は三年生らしいじゃない」

「そうみたいだね。それも結構上位の人たちみたいだし」

ぱつと見頭悪そうなのに。まあ、人は外見で判断するなつていい例か。

「大丈夫だよ。三年生はその分テストも難しいからね。ハンデはないよ」

「そういうことじゃなくて、ウチはアンタたちの……特にアキの実力を心配しているんだけど……」

悲しい話だ。でも反論できる要素が見当たらないのもまた悲しい。

「そんな心配をしている暇があるなら喫茶店の準備でもしてくれ。ふわあ……」

「なんだか他人事ねえ。喫茶店の手伝いはしないの？」

「ゴメン。寝かせてもらえるかな？ここのところあまり寝てない上に、昨夜は徹夜だったから眠くて」

「そうだったんですか。それならゆっくり休んでください」

「そうじゃな。喫茶店の方はワシらに任せるといい」

「そうですよ。お二人の分までフォローしますから」

「……………（コクコク）」

友情を感じるなあ……いいね。こういうお互いを支え合う感じ。

「仕方ないわね。起きられそうになったら起こしてあげるけど？」

「ありがとう。それじゃ、十一時までに起きてこなかったら起こしてもらえます？」

「十一時？試合は一時からじゃなかった？」

「一番混み合うお昼時ぐらいは手伝うよ」

十一時……今が八時前だから三時間か。

「んじや、十一時には俺も起こしてくれ。屋上で寝ているから。ああ、崇彰」
「なんだ？」

「責任者代理は任せた」

「へいへい」

「ほわあ。じゃあ、行つてくるわ」

「それなら僕も屋上にいるからよろしくね」

「こうして出て行く二人。」

「やつぱり一緒に寝るんでしょうか……？」

「間違いないわ。きつと坂本の腕枕で……」

「な……！やつぱりあの二人ってそういう関係だったんですか？」

「どうして彼女たちはあの二人を同性愛者にしたいのだろうか？」

「そうそう。神白。昨日はありがとうね。お陰でウチも葉月も無事だったわ」

「私からも改めて、ありがとうございますね」

「気にすんな。さてと、責任者代理として職務を果たすとするか」

「なら私はその補佐に」

「はいはい。ひとまず女性陣プラス秀吉は着替えてこい。今日も昨日同様チャイナドレ

「ス姿で頼む」

「分かったわ」

「分かりました」

「はいです」

「ワシもかのう……」

それは諦める。と、各々着替えに行ったし。

「ムッツリーニ。オレたちは大至急、厨房の準備。姫路が帰ってくる前に終わらずぞ」

「……………了解」

最悪の料理人を厨房に入れる訳にはいかない。早く終わらせよう。

「ところで、警備体制は？」

「……………万全。武器所持済み」

「よし。問題があったら即対処。屋上に向かう人がいたら教えてくれ。オレが対応する」

「……………任せろ」

「あと、ちよつと見せてほしいものがある」

「こうして清涼祭二日目は幕開けするのだった。」

決勝戦と書いて成敗と読む

「さてと。行こうか雄二」

「そうだな。崇彰、俺たちは抜けるが大丈夫か？」

「誰に物言つてやがる。てか、行かねえとマズいだろ？」

こいつらは結局三十分くらいしか働いてない。まあ、そう手を回したのはオレたちだが。さすがに疲労困憊で決勝戦に行ってもらっても困る。冗談抜きで学校の存続がかかってるから。

「後で私たちも応援に行きますね」

「そうよ。しっかり見届けに行くからね」

「頑張ってくださいね」

「葉月も応援に行くです！」

と、女性陣。まあ、今のところ好調なものもこいつらのおかげでもある。決勝戦は見に行かせるか。

「……まで来たんじゃ。抜かるでないぞ？」

「……………優勝」

「わかつてる。試召戦争の時のようなへまはしないよ」

「やれやれ。耳が痛いな」

秀吉とムツツリーニが突き出した手に軽く拳をあてる二人。

「後は託したぞ。二人とも」

オレもこいつらに託す。決勝戦に干渉することはさすがに出来ないからな。

「うん。行ってくるよ」

「お前も警護は任せた」

オレの突き出した両手。右手に雄二、左手に明久がそれぞれ合わせる。

そして二人は教室を後にする。

「よし、女性陣、ムツツリーニ、秀吉。観客席に行つて来い」

「店の方は……?」

「気にすんな。どうせ決勝戦を見に行く人が多いから客はそうこない。来てもFクラスの男どもを使うから問題ない」

「あれ? タカは一緒に行かないのですか?」

「ちよつと用事があつてな。安心しろ。何かあつたらそつちに行く」

「そう?じゃあ、頼んだわよ。神白」

そうして出て行く面々。

「やして……」

オレはオレでやれることをするか。



『さて皆様。長らくお待ち致しました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

聞こえてくるアナウンスの声は今まで聞いた事のない声でした。なるほど……もしかするとプロを雇ったのかもしれないですね。

私たちは横並びで座っています。橋から土屋さん、木下さん、私、瑞希さん、葉月ちゃん、美波さんって感じです。それにしてもタカは何かしでかすつもりなのでしょうか？

『出場選手の入場です！二年Fクラス所属・吉井明久君と、同じくFクラス所属・坂本雄二君です！皆様拍手でお迎え下さい！』

お、二人が入場してきましたね。どこか緊張した様子です。

『なんと、決勝戦に進んだのは、二年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれないですね！』

いいこと言いますね。そうです。Fクラスは最下級ではないのです。

『そして対する選手は、三年Aクラス所属・夏川俊平君と、同じくAクラス所属・常村勇作君です！皆様、こちらもお拍手でお迎え下さい！』

コールを受けて吉井さんと坂本さんの前に姿を現したのは、昨日Aクラスで色々おいたをした常夏コンビさんです。

『出場選手が少ない三年生ですか、それでもきっちり決勝戦に食い込んできました。さてさて、最年長の意地を見せることができるでしょうか！』

一応拍手はしておきますが……むう。本来だったら私たちが立っていたかもしれないと思うと悔しいです。

『それではルールを簡単に説明します。試験召喚獣とはテストの点数に比例した——』

アナウンスでルール説明が入ります。

『ようセンパイ方。もうセコい小細工はネタ切れか?』

あれ? 何故かここまで坂本さんの声が聞こえます。何故でしょう?

『お前らが公衆の面前で恥をかかないように、という優しい配慮だったんだがな。Fクラス程度のオツムじゃあ理解できなかったか?』

『残念ながら、お前らの言葉はAクラス所属でも理解出来ないだろうよ。まずは日本語を覚えてくるんだな。サル山の坊主大将』

『て、テメエ、先輩に向かって……!』

ふと、隣を見ると木下さんの手には何かラジオみたいなのが。あ、あれから聞こえてるんですね。納得です。

『先輩。一つ聞きたいことがあります』

『あんだ?』

『教頭先生に協力している理由は何ですか?』

教頭先生? ……でもそもうちの学園に教頭先生なんて居ましたっけ?

『……そうかい。事情は理解してるってコトかい?』

『大体は。それでどうなんですか?』

『進学だよ。うまくやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。そうすりゃ受験勉強と

はおさらばだ』

『そうですか。そつちの——常村先輩も同じ理由ですか？』

『まあな』

『……そうですか』

うーん。よく分かりませんがきつと、タカも関わつてたことなんでしようね。

『本当は小細工なんて要らなかつたんだよな。Aクラスの俺たちとFクラスのお前らじゃ、そもそもその実力が違い過ぎる』

『そうか。それなのにわざわざご苦労なことだな。そんなに俺と明久が怖かつたのか？』

『ハッ！言つてろ！お前らの勝ち方なんて、相手の性格や弱味につけこんだ騙し討ちだろうが。俺たち相手じゃ何も出来ないだろ！』

『アンタらこそ。うちのクラスの崇彰と黒柳コンビを不戦敗させといてよく言えるな。そうだもんな。崇彰とアンタらじゃあそもそもその実力が違いすぎるもんなあ？』

『デメエ……！』

何か罵倒合戦ですね……。あと坂本さん。ちやつかり私の名前を省かないでください。私たちは二人で最強なのです。9割方はタカの力ですが1割くらい私の力もあるんです。

『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、どうぞ！』

気付けば説明が終わって、審判役の先生が対戦するペア同士の間立ちます。

「「「試獣^サ召喚^{モン}」」」

掛け声をあげて、各々が召喚獣を喚び出します。

常夏コンビさんの召喚獣の装備はオーソドックスな剣と鎧ですね。高得点者の召喚獣ということもあり、質はかなり良さそうな物に見えます。

『Aクラス 常村勇作&夏川俊平

日本史 209点&197点』

な、なんですとお!?見かけとは裏腹に私の何倍も点数が上です！これには驚きです！

『どうした？俺たちの点数見て腰が引けたか？』

『Fクラスじゃお目にかかれないような点数だからな。無理もないな』

常夏コンビさんがディスプレイを示して、吉井さんたちに自慢しています。

あれ？でも、あれって、瑞希さんやタカの半分以下ですよ？何で自慢してるんでしょう？Fクラスだともう少し上の点数が見られますよ？

『ホラ、観客の皆様に見せてみるよ。お前らの貧相な点数をよ』

『夏川。あまり苛めるなよ。どうせすぐに晒されるんだぜ?』
煽る先輩方。それに対し、吉井さんが答えます。

『……前に』

『あん?』

『前に、クラスの子が言っていた』

『なんだ? 晒し者にされた時の逃げ方でも教えてくれたのか?』

ギヤハハハ、と笑ってる坊主の方の先輩。

『好きな人の為なら頑張れる』って』

それって、瑞希さんが言っていたことですね。確か。

『ハア? コイツ何言ってるんだか』

『——僕も最近、心からそう思った』

『Fクラス 坂本雄二&吉井明久』

日本史 215点&166点』

「なっ!?!」

点数が表示されたディスプレイを見て、常夏コンビさんが驚愕の声をあげます。

すごいです。あの吉井さんがBクラス並の点数取ってます。むむ、これは私も頑張らないといけませんね……。

『アンタらは小細工無しの実力勝負でブツ倒してやる！』

それぞれの召喚獣が得物を構えます。

『明久。あそこまで俺と崇彰に付き合わせたんだ。ここで負けたら承知しねえぞ』

『わかっている。勉強教えてくれてありがとうね。二人ともそれなりに頭いいじゃん』

『お前に比べれば誰でもそうだがな。——行くぞっ』

坂本さんの召喚獣が最初に動きます。

『夏川！こっちは俺が引き受ける！』

対するのはモヒカンの方の先輩。

『それじゃ、僕の相手は先輩ですね』

『上等じゃねえか！多少ヤマが当たったくらいでいい気になるなよ！』

一方、坊主の方の先輩の召喚獣が剣を構えて吉井さんの召喚獣に突進します。動きは速いですが……

『先輩、取り乱し過ぎですよ？ただの突撃じゃ避けてくれと言ってるようなもんです』

吉井さんの召喚獣は半身を右にずらし、小さな動きで相手の身体を避けていました。

『つと、この……！』

そのまま背中を向けそうになった相手は振り向きざまに横薙ぎの一撃を見舞います。
『ふっ！』

吉井さんの召喚獣はその一撃を小さく屈んでかわし、一呼吸の間に三度木刀を振るっていました。

『くうっ！』

なんとか剣で防御した先輩。一旦仕切りなおすために大きく一歩下がります。

す、凄いです……さすが吉井さん。経験が違います。

『テメエ、試召戦争じゃ60点程度だったくせに……！』

ほへえ……相手の情報をしっかり集めてるんですね。

『今でもそんなもんですよ。この教科以外は、ね？』

『野郎……！最初からこの勝負だけに絞ってやがったな……！』

『その通り。よくわかりましたね、先輩。まあ絞っても崇彰みたいな点数はとれません
が』

『ツチ。400点オーバーがザラで500点を超えてくるとかしやれにならねえんだ
よ』

やっぱり、先輩方から見てもすごいんですね……。

『仕方ねえ。二年相手に大人げないが、経験の差ってやつを教えてやるよ！』

そう告げると、坊主先輩の召喚獣は大きく跳び退つて、吉井さんと坊主先輩本人からも距離を取ります。何でしょう？作戦ですかね？

『お前の知らない戦い方があるんだよ』

坊主先輩の召喚獣を見てみると、剣を腰ために構え、まるで力を溜めているような感じです。おっと？私たち二年生の知らない特殊能力でもあるのでしょうか？

『おおおおおっ！』

『いけっ！』

力を込める先輩。吉井さんは牽制しようと召喚獣を敵に向かって走らせます。

『そら、引つかかった』

と、坊主先輩のからかうような声が聞こえます。すると、

『く——そおっ！』

吉井さんがいきなり苦しそうな声を出します。え？何事ですか？

『これが経験の差つてやつだ』

経験の差つてそんなに便利な言葉でしたっけ？

そう思つてると、今度は坊主先輩の召喚獣が吉井さんの召喚獣に攻撃を仕掛けます。

『ぐうううっ！』

避けるのに失敗したのか脇腹を切り裂かれています。

『そういやお前、「観察処分者」なんだよな？こいつはさぞかし痛えだろうなあ』

おまけと言わんばかりに吉井さんの召喚獣の顎に拳が叩き込まれます。

そして、フィードバックされた痛みのせいか倒れ始める吉井さん。

「吉井君！」

「アキッ！」

『明久っ！てめえ根性みせろやつ！』

ダンッ！

吉井さんは思いつきり足を地面に叩きつけて踏み止まりました。

『よし。いけるな、相棒？』

『……当然っ！』

ほつとする瑞希さんと美波さん。凄いですね。あの二人は。

『悪あがきを！すぐに止めをくれてやるぜ！』

坊主先輩の召喚獣が駆けて吉井さんの召喚獣を攻撃をしようとします。

『——んのおおっ！』

吉井さんは召喚獣を動かして敵の脇をすり抜けます。そして、そのから空きの背中に

大きく蹴りを放ちます。威力はそこまでですが相手が体勢を崩しました。

『雄二っ！』

『おうっ！』

かけ声とともに坂本さんが自身の召喚獣をもう一方の敵であるモヒカン先輩の方に突っ込ませます。

『舐めんなっ！』

迎え撃つようにモヒカン先輩の召喚獣が剣を振り下ろします。対する坂本さんの召喚獣は防御も回避もしません。ただ一直線へと迫ります。

『もらったあ！』

振り下ろされた剣が坂本さんの召喚獣の首を両断する。その寸前、

ギインツ！

吉井さんの召喚獣が投げた木刀が当たり、敵の剣の軌道を変えました。

『ぐっ！しまっ——』

振り下ろされた剣が不発になりました。そうなった以上、坂本さんの召喚獣は絶好の攻撃ポジションにいることになります。

「吹き飛ばやあつ！」

坂本さんの召喚獣の拳が叩き込まれます。

坂本さんの声と会場の歓声が重なります。

『野郎！得物を手放すなんて上等じゃねえか！』

吉井さんの召喚獣には坊主先輩の召喚獣が迫っています。

『?!邪魔——！』

坊主先輩の召喚獣の動きが一瞬鈍ります。その原因は、坂本さんが吹き飛ばしたモヒカン先輩の召喚獣です。それが坊主先輩の視界を遮りました。

吉井さんはその隙を狙って召喚獣の前に出す。坊主先輩の召喚獣は剣を振り下ろしましたがタイミングがずれて攻撃を避けられました。

『チイツ！』

坊主先輩の召喚獣は空振りに終わった剣を戻し、再度吉井さんの召喚獣に攻撃を加えようとしています。

『くらえっ！』

が、吉井さんは頭突きをさせました。威力は無いに等しいですが、相手の動きを牽制させるには充分でした。

『明久！』

坂本さんの召喚獣はさっきの木刀を吉井さんの召喚獣に向かって蹴り飛ばします。

『待ってました!』

勢いよく転がる木刀をしつかりキャッチする吉井さんの召喚獣。

『くそおおっ! お前ら如きに三年の俺が——!』

『くたばれええっ!』

二人の召喚獣が同時に攻撃します。見ると吉井さんの召喚獣は左腕が切り落とされてしまいました。

『ま、お前にしては上出来だな。明久』

一方、坊主先輩の召喚獣の喉には木刀が突き刺さっていました。

『坂本・吉井ペアの勝利です!』

「いいいよっしやあああー!!」

拍手喝采。凄いです二人とも!

優勝おめでとうございます!

☆☆☆

『クソ……まさか失敗するとは……！ここまで計画が……！』

コンコン

『誰だ？』

「失礼しま—す」

オレはある一室に来ていた。

「ドーも。作戦失敗した黒幕の面拜みに来ましたあ。ねえ？竹原教頭」

まあ、教頭室だ。

「作戦失敗？君は一体何を言ってるのかね？」

「いやあ。デモンストレーションも腕輪が無事、暴走することなく終わってハッピーです。ね。ああ、アンタにとってはアンハッピーか」

「やれやれ。すまないが私はこれから予定が入っていてね」

「おいおい。アンタがこの後、予定がないことくらい把握済みだ。戯れ言ぬかしてんじゃねえよ」

オレは教頭室の扉を後ろ手で閉める。

「さてと、報復させてもらおうか」

「ま、待ちたまえ。一体私が君に何をしたと言うんだ」

「ああ？不良けしかけた黒幕野郎が何を言ってるんだよ」

「不良？一体何のこ——」

とぼけさせる前にある会話を流す。

ピッ

『不良さんたち？正直に言いやがれ。誰の差し金だ』

『た、竹原だ！ここの教頭をやっている奴だ！』

『ほう。で？内容は？』

『坂本、吉井、神白の三名の動きを封じること……特に神白を準決勝に出させるなつて話だった』

『それで女子たちを……ねえ』

『あ、ああ。動きさえ封じれば好きにやっていいつて……』

ピッ

「まあ、これ以上流す必要はねえだろう」

「で、デタラメだ！そんなことあるわけないだろ！」

やれやれ。やつぱり、偽物の証拠じゃ認めないか。ならまあ、

「これでも見な」

オレはあるものをばらまく。こっちは真正正銘の本物だ。

「これは……っ！」

「バツチリ写つてますねえ？これでも言い逃れするつもりですかあ？」

不良たちに金を渡しながら頼む教頭の姿。それを収めた写真に加え、

「それにこの人は他校の経営者……あらら？何話してるんでしようねえ？」

また別の写真。こっちは裏切つた証拠をとらえたものだ。

「……取引しよう」

「はあ？」

「君は何がほしい。金か？成績か？君が望むものなら何でも用意しよう。だから頼む。見逃してくれ」

「あはははははははははは」

オレは腹を抱えて大笑いする。そして、

「い・や・だ」

丁重に断らせていただく。

いやぁ実際に居るんだな。追い詰められたときにこういう台詞を吐く奴。

「おいおい。オレは言ったろ？報復しに来たって」

オレはこう見えて怒っている。

「オレはさ。きつちりとお返しした上に利子をつけてあげないと気が済まないタイプなんだよ」

オレが一步前に進むと教頭は一步下がる。

「勘違いすんなよ？別にオレが狙われたのも、明久や雄二が狙われたのもどうでもいい」

正直、そこはどうでもいい。問題は、

「女子たちを人質に取り、小学生を刃物で脅し、オレの幼馴染みに手を出そうとしたん

だ」

「そ、そんなの不良たちが勝手にやった——」

ダンツ！

「誰が口を開いていいと言った。勝手にやったことだあ？ぎけんなよ。テメエが頼まなきやそもそもこんな事態になつてねえんだよクソ野郎が。テメエの頭は都合よくできすぎだろ？あんなのに頼めばどうなるかぐらい想像付くだろうがこの無能。だから失敗してんだろが雑魚」

こいつが失敗している要因はこいつの策の甘さにある。こいつがもつと賢く追い詰めればよかつたのにこんな手でしか出来なかつた。その時点で負けてるんだよ。

「ああ、いいこと教えてやるよ。オレはオレ自身が手を出されようが怒らねえよ。鳩尾に拳を叩き込まれようが、蹴り飛ばされようが別にそんなことじゃ怒らねえ。だがな、ユリに手を出そうもんなら話は別だ。ユリを傷つけようとするやつは全員ぶちのめす。地獄？はつ、そんなの可愛く見えるようなものを味合わせてやるよ」

アイツだけは傷つけさせねえ。傷つけようもんなら命はないと思え。

「既に社会的にお前を殺し終えた。残るは精神と肉体。さすがに殺しはしない。壊すだ

けだ」

また一歩進むと向こうは後退する。

「さあ——」

——報復の時間だ。黒幕野郎。

終幕と書いて奔走と読む

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「お、終わった……」

「さすがに疲れたのう……」

「……………（コクコク）」

「ふう……」

「お疲れです……」

放送を聞き安堵するオレ。ユリがもたれかかっているが気にしない。とりあえず、喉渴いたし缶のドリンクを飲む。

明久たちの優勝ということで、怒涛の勢いでお客さんがやってきた。さすがにあの数は疲れる。

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろう？」

「ん？お義父さんが気になるのか？」

「そうか。流石、将来のことは考えているな」

「なっ!? べ、べつにそういうわけじゃなくて!」

「後夜祭の後で話をしに行くと言っておったのう。結論はその時じやな」

秀吉が返事をする。多分その辺は大丈夫だと思っけどな。

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

「ええっ!? どうして!?!」

着替えさせてやれよ。普通に考えて。

「どうして、つて言われても……恥ずかしいからに決まってるでしょ?」

「すいません。すぐ戻りますので」

「お前も行つてこい。ユリ」

「はあーい」

「待つて! 三人とも考え直すんだ! カムバアーツク!」

ちなみにだが葉月ちゃんはチャイナドレスを着たまま帰った。恐ろしいな……ユリも近いところはあるが。

「ふむ。ならばワシも——」

「させるかっ! せめて秀吉だけは着替えさせない!」

明久が秀吉の足にタツクルする。

「なっ!? 何をするのじゃ明久!」

「……………（フルフル）」

と、よく見るとムツツリーニも同じことしてた。お前ら絶対バカだろ。

「おい明久。遊んでないで学園長室に行くぞ」

明久とムツツリーニを呆れたような目で見てるのは疲れを感じさせない雄二。

「だな。さつさと行こうぜ。二人とも」

「学園長室じゃと？三人とも学園長に何か用でもあるのか？」

「ちよつとした取引の清算だ。喫茶店が忙しくて行けなかったからな。遅くなつたが今から行こうと思う」

仕方ねえが時間を空けるのもよろしくないしな。

「ならばその間にワシは着替えを」

「そうはいかない！秀吉も一緒に連れて行く！」

「……………（クイクイ）」

「あ、ムツツリーニも来る？」

「……………（コクコク）」

本当にどうしようもねえな。こいつら。

「困つたのう。雄二に崇彰よ。なんとか言つてやつてくれんか？」

「ん〜…………。ま、いいだろ。秀吉とムツツリーニも行こうぜ。明久を説得するのも面倒

だし」

「確かに。バカを説得するほど疲れるものはねえよな」

一人二人増えようが向こうは気にしないだろうし。

「やれやれ。雄二に崇彰まで……仕方ないのう。着替えは後回しじや」

「よし。ほら明久にムツツリーニ。足を放してやれ」

「うん」

「……………（コクリ）」

「やれやれ。ワシのこんな姿を見てもなんの足しにもならんじやろうに……………」

まあ、諦めろ。

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

明久と雄二はノックと挨拶をしながら学園長室の扉を開ける。

「お主ら、全く敬意を払っておらん気がするのじゃが……」

「そう？きちんとノックをして挨拶したけど？」

「普通は返事を待つだろ」

「その通りさね。それにアタシは前に返事を待つように言った筈だがねえ」

まあ、普通はだからババア相手ならどうでもいいと思うが。

「あ、学園長。優勝の報告に来ました」

「言われなくてもわかつているよ。アンタたちに賞状を渡したのは誰だと思ってるんだい」

どつちもどつちなものの言い方だな。

「それにしても、随分と仲間を引き連れてきたもんだねえ」

ムツツリーニと秀吉を見て咎めるように言い捨てる。

「コイツらもババアのせいで迷惑を被ったからな。元凶の顔くらい拝んでもばちはあたらなはずだ」

「てか、アンタのせいで迷惑を被ったやつはまだまだいるんだ。全員連れて乗り込まなかつただけありがたいと思え」

「……ふん、そうかい。そいつは悪かつたね」

つまらなそうに鼻を鳴らすババア。

「おい明久。まさかこんなババアに可愛さ求めてんじやねえのか？」

「いやいや！こんな醜悪ババアに可愛さ求めてどうするのさ！」

「そうだぞ。この妖怪ババアの全盛期は一世紀以上前に終わってるからな」
「アンタら言いたい放題だね……」

軽い談笑だ。真面目な話に入る前のな。

「それで、白金の腕輪は返却した方がいいですか？」

明久は持っている腕輪をババアに見せながら言う。今回の賞品である白金の腕輪は普通の腕輪と違い、召喚者自身が装備する物だったりする。

「いや、それは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」

「む？明久、不具合とはなんじゃ？」

「……………？」

「なんとなく予想通りだが……」

「あ、そつか。三人は聞いていないから知らなかったんだね。白金の腕輪はちよつと欠陥があつてね。得点の高い召喚者が使うと暴走してしまうんだ」

だから明久と雄二を……？ん？何かおかしくねえか？

「そうじゃつたのか。……む？ どうしたのじゃ二人とも？」

なんだ？何かが引つかかる……

（なんでアイツらは俺たちがババアと繋がっていると知っていたんだ……？）

（黒幕は一体、どうやってオレたちがババア側だと……？）

確かに黒幕とは最初入るときに会っている。でも、たったそれだけでこんなことはしねえだろ。確信を持っていたはず。確信……………盗撮か盗聴？まさか……………な。

「だから、教室の改修と交換条件で僕と雄二がこれをゲツトするって言う取引を学園長と——」

「明久！一回静かにしろ！」

「え？」

「ここでその話はマズい！」

オレと雄二が叫ぶ……………が。

「……………盗聴の気配」

「ツチ！」

「やられたか！」

オレと雄二が勢いよく学園長室のドアを開け放つ。あのヘアスタイル……………！

「あいつら……………！」

「追うぞ明久！崇彰！」

「ちよつ……………崇彰、雄二、どういうこと!?!」

「盗聴だ！向こうに加担してた連中は、この部屋に盗聴器を仕掛けていやがった！」

「なんだって!?!」

「今の一連の会話も聞かれていたはずだ。もしも録音なんてされていたら、相当マズいことになる！」

明久からの問いに二人で怒鳴りながら答えると、ようやく事態の重大さが飲み込めた明久は青褪めた顔をする。

「録音?!冗談じゃない!」

そうだ。そんなのが公開されたら今までの努力が全て水の泡になってしまう。竹原は完膚なきまでに潰した。だが、そんな事になったら学園の信用は失墜、学園の存続自体が怪しくなる。そうなれば姫路一人の問題じゃねえ。全員が転校になってしまう。クソが。最後の最後でやりやがったな!このままじゃ結局あいつらの思惑通りになっちまう!

「急げ!」

「わかった!秀吉とムツツリーニも協力して!」

「うむ!」

「……………(コクリ)」

五人揃って一緒に学園長室を飛び出すオレたち。

「雄二!崇彰!向こうは例の常夏コンビでしょ!」

「そうだ!ちらつと例の髪形が見えたから間違いない!」

「つてコトは二人組だよね！こっちは二人と三人に分かれよう！」

「いいやオレは一人がいい。二組より三組の方が効率はいはずだ！」

「お前なら大丈夫か！分かった！」

「ワシとムツツリーニは外を探す！」

確かに、家に帰ってコピーでもされたら面倒だ。まずは学校から逃がさないよう出口から潰すつてのはいい。

「……………明久」

「ん？」

走りながらムツツリーニが明久に何かを手渡した。

「ムツツリーニ愛用の双眼鏡？」

「……………予備」

予備どころか普通なら一個もいらないだろ。

「サンキュ、ムツツリーニ！」

「……………この学校は気に入っている」

オレたち五人。学園を守るといふ目的は同じでも理由が違う。まあ、目的さえ合っていれば協力できる。

「目標を見つけたら携帯に連絡を入れてくれ！」

「うむー！」

「オレも行ってくる！オレは一旦旧校舎に向かう！」

「分かった！僕らは新校舎だね！気をつけてね！」

三組が一齐に別れる。

さて、走りながら頭を使う。まず、奴らが今の間に噂として広めようとしている可能性は低い。店の云々はともかくこんなシャレにならねえこと普通は信じない。なら記録媒体をコピーして無差別配布か、何かしらの方法で流すかどっちか！まあいい。まずは1階からだ！

「あ、タカです」

流す……となると、放送が手っ取り早いか。ならば放送室が一番可能性が高い。いや、この程度なら明久でも分かる。おそらく放送室にはいないしあいづらが確認はする。

「おい。聞こえてないのですか？」

ならば一体……！クソ。どうすればいい？

「全く考えながら走ると怪我を」

「おいユリ！」

「ひゃ、ひゃい!？」

「お前高いところは好きか！」

「へ？まあ好きか嫌いかだと好きですよ？」

なら屋上だ。バカは高いところが好きつてのはどうにも本当だったらしい。

「あれ？今凄く失礼なことを思われている気がします？」

目的地が分かりや周りを気にする必要はねえ。一旦全速力で屋上だ。

「わわっ。速すぎて追いつけません……でも負けません！」

階段を二段飛ばしで上がり、たどり着いた屋上の扉を勢いよく蹴り破る。

「いねえ！外したか！」

だが屋上からなら外の様子も見える。一旦グラウンドの方を見るか！

「クソ！ムツツリーニから予備をもらうべきだったか……！」

もう一つくらいアイツなら持つてるだろ。なら外にいるムツツリーニたちに信号を

……！

「ツチ！屋上違いか！」

と、新校舎の屋上を見ると、常夏が見えた。クソツタレ。確か新校舎の屋上にも放送設備があるはず。なるほど。そっちか！

引き返して階段を何段も飛ばして降りていく。

「ツチ邪魔が多い！」

こういうときはパワーで突き進もうとすると遅くなる。だから敏捷性をフルに生かし、時には壁を蹴り、時には空中で何回転かしながら前へと進む。

「はあ……はあ……どうしましょう……私の幼なじみが人間やめてます……あ、前からでした」

何か後ろから聞き覚えのある声があるがスルーだ。

p r r r r !

と……ここで携帯電話が鳴る。

「もしもしー！」

『……………崇彰！』

「ムツツリーニか！」

『……………発見した！』

「こつちもだ！新校舎の屋上で間違いないな!？」

『……………間違いない』

「問題児コンビの方は！」

『……………グラウンドの隅。そっちは？』

「四階渡り廊下全力疾走中！」

『……………了解』

電話を切るオレ。ツチ。急がねえとマズいな！

そう思いながら階段を駆け上がり、扉を蹴破る。

「なっ……………」

「喰らえやこの野郎！」

持っていた空き缶をオーバーヘッドの要領で蹴りつける。

「うおっ!?危ねえなこの野郎！」

ツチ。ギリギリのところで避けやがった。だが手は離れている。今のうちに接近して

……………!

「うおい!なんかきてんぞお!」

「はあ!」

すると、花火玉のようなものがこつちに飛んでくるだど!?

ドオン! パラパラパラ

よし。とりあえず、近くに落ちていた石を放送器具にぶつけて、

p r r r r !

電話をかける。

『も、もしもし?』

「ユリ。お前どこにいる?」

『どこかって……新校舎の屋上に向かって』

プツツと切る。よし、

「じゃあ常夏コンビ!オレはこれで!」

屋上の扉を開けて出て行くオレ。

出て行く直前に見るとすでに二発目が飛んできている。命中すればいいが(普通に考えてよくない)万が一外されたらたまつたもんじゃねえ。学校存続云々よりもユリを連れて避難する方が優先に決まってるんだろ。

「た、タカ?えーつと……」

「説明してる余裕はねえ。とりあえず行くぞ」

見るからに疲れていたのでユリを背負って走る。

「ぜってえ離すなよ」

「もうなにかなんだか——」

ドオン！

「——な、何ですか!?!この音！」

「バカ。花火玉。屋上。投げる」

「あははくタカってばこんな時に冗談を」

「……………」

「…………え?じよ、冗談って言って下さいよ!?!」

「ユリ」

「な、何ですか?」

「オレが冗談でこんな必死にお前を背負って走ると思うか?」

「……………」

ドオン！

上の方から三発目の音がする。あいつら。学校にぶち当てねえだろうな？
「とりあえず外まで来れば……」

振り返ると、

ドオン！

校舎の一角が見事に崩れていた。

「……………」

「……………」

しばし無言になるオレたち。

『誰か助けてえっ！変態教師に犯されそうですーっ！』

『貴様よりによつてなんて悲鳴を上げるんだ！』

響くバカと鉄人の声。

「ねえタカ……」

「なんだ」

「ちよつと私。現実逃避していいですか？」

するなどはとてもじゃないが言えなかつた。

打ち上げと書いて酒は強いと読む

バカテスト 英語

頭の体操として一風変わった英語のクイズをどうぞ。

【①】と【②】に当てはまる語を答えて下さい。

『マザー（母）から【①】を取ったら【②】（他人）です』

姫路瑞希の答え

『マザー（母）から【M】を取ったら【other】（他人）です』

教師のコメント

その通りです。motherから「M」がなくなると他人という単語になります。こう言った関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

神白崇彰の答え

『マザー（母）から【LOVE】を取ったら【other】（他人）です』

教師のコメント

愛情は大切ですね。

土屋康太の答え

『マザー（母）から【M】を取ったら【S】（他人）です』

教師のコメント

土屋君のお母さんが『MS』でも『SM』でも、先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え

『マザー（母）から【お金】を取ったら【親子の縁を切られるの】（他人）です』

教師のコメント

英語関係ないじゃないですか。

黒柳由梨乃の答え

『マザー（母）から【ファザー】を取ったら【バツイチ】（他人）です』

教師のコメント

やめてあげてください。



「痛てて……。随分と殴られたよ……」

「くそつ、鉄人め。あの野郎は手加減を知らないのか」

オレたちが公園で打ち上げをしていると、顔の面積が倍ぐらいに晴れ上がった雄二と明久がやって来た。顔の面積が倍になってたのは捕まった時に鉄人に殴られまくったからだろう。

で、解放が早かったのはババアが一枚噛んでるだろうな。でないと校舎破壊をして停学も退学もなく嚴重注意で終わるはずがない。まあ、鉄人による嚴重注意だからお察しだが。

「む。やっと来たようじゃな」

「……………先に始めておいた」

「ああ、ゴメンゴメン。ちよつと鉄人がしつこくてさ」

てか、可哀想なくらい顔でかいなあ……………クスス。

「お主ら、もはや学園中で知らぬ者はおらんほどの有名人になってしまったのう」

「おめでとう。拍手を送るよ（パチパチ）」

「……………（コクコク）」

「……………コイツと同じ扱いだとは不本意だ」

「それは僕の台詞だよ……………」

コイツらの悪評はますます学園中に広まる事になった。まあ仕方ない。諦めろ問題児筆頭ども。

「あれだけのことをやっておいて、退学になるところか停学にすらならないんだもの。妙な噂が流れて当然でしょ？ウチだって気になるし」

「ん、ありがとう」

島田が雄二と明久にジュースの入ったコップを渡す。

「そういえば、お店の売り上げはどうだったの？」

と、ここで明久が聞いているが……。

「お前も実行委員だったろ」

「い、いやあ……僕はいろいろと忙しくてさ……」

「そうね。神白にも確認してもらって最終的にはこんな感じ」

島田が収支の書かれたノートを明久に見せる。

「ふむ、どれどれ……？」

明久の後ろから雄二が覗き込む。

「その額だと、机と椅子は苦しいだろうな。畳と卓袱台がせいぜい。ま、今よりマシだろ」

「だな。ま、二日間って考えりや上出来だ」

「う〜ん……。でもやっぱり出だしの妨害が痛かったよね」

喫茶店である以上、どんなに人気が出ようと客の回転に限界はある。あの出だしであつたり空白の時間を鑑みるならこれぐらいが限界だ。

「すみません。遅くなりました〜」

そこに後ろから姫路の声が聞こえてきた。

「あ、瑞希。どうだった？」

「はいっ！お父さんもわかってくれました！美波ちゃんの協力のおかげです！」
なるほど。転校は阻止できたということだ。こつちもこつちでセーフか。

「姫路さん、お疲れ様」

「あ、吉井君……」

さて、部外者は大人しくフェードアウトするか。

「タカ〜」

とここで（何故か）足取りがおぼつかなく顔が赤いユリがやってくる。

「ん？どうした？」

「どうもしてないれすよ〜」

……どうもしてなくないだろお前。

「あ〜ジュース飲む〜？」

「ん、じゃいただくか」

すると、何故かコップを差し出さずコップに入ったものをユリが口に含む。

オレがその行動に疑問を抱いていると、急にキスをしてくる。おい待て。まさか口移しで……！

「……………」

ん？この味はなんだ？ジュースというにはほのかな苦み……！

「えへへ〜おいしい〜？」

「おいお前。まさか酔ってねえか？」

「酔ってなーいれす」

ダメだ。完全に酔ってる。畜生。誰だ酒とジュース間違えたバカは。

「…………ツチ。帰るぞ」

周りを見ても一部の人間が酔っている。姫路に島田をはじめとした一部の人たち（主に明久）が被害を受けている。これ以上こいつがバカやらかす前に帰るが吉だ。

「ちなみにお前。何杯飲んだ」

「ほへえ〜？紙コップ一杯れす〜」

弱っ！こいつ酒弱すぎだろ！

ひとまずこいつのカバンとオレの鞆を回収して、

「しゅしゅめく！タカあく！」

「背中の上で暴れんな」

「ひどいこと言うのはこの口れすかあ？」

おんぶしているがぐいつと頬を引つ張られる。クソ。こいつ酒に酔うとめんどくせえ。てか。酒飲ませるとアウト。将来飲み会とか絶対行かせないように念押ししておこう……

で、帰ってきてとりあえずオレのベッドの上で横にする。途中であのテンションが嘘のように静かになり、耳を澄ませば穏やかな寝息が聞こえていた。

「最後の最後は酔っ払いの幼馴染みの介抱とか……」

オレって、今日何をした？普通の人は楽しい楽しい清涼祭なはずだよな？なのに、目覚めと共に死にかけ（主にユリのせい）、竹原教頭を抹殺し（安心して下さい。死んでません）学園存続のために常夏コンビを捜索するため奔走したり（一番疲れた自信がある）、花火玉が飛来する校舎からユリを背負っての脱出（字面から普通の学校ではあり得ない）、最後は打ち上げで盛大に酔った幼馴染みをお持ち帰り（流石に何かを起こす気はない）かあ……。

「……………清涼祭ってなんだっけ？」

清涼祭で他の出店を回ったり自分の店で働くなんていうありふれた出来事はそう起きず、それ以上の普通ならあり得ないことが起きすぎている。そもそも、なんで学園の存続とかそういう問題が裏で起きてるんだよ。バカだろ。絶対バカだろ。

「……はあ。にしても疲れたな」

安らかな寝顔を見せるユリ。

「でもま、守るべきものが守れた。それでいつか」

思わず頬が緩んでしまう。どうやら、相当安心してるらしい。全く、しまりがねえな。

「……というか……こいつとのデートかあ……」

タイミングはいい。別に作ろうと思えばいつでも作れる。問題は行き先だ。普段の買い物とかでもオレはいいがこいつが満足しない。

「まあ、なるようになるか」

小難しいことを考えるのはやめだ。純粹に楽しむ。それだけでいいじゃないか。

そう考え、オレは本を持ち、いつユリが目覚めてもいいようにベッドの傍らで座って、本を読み進めるのだった。

間話編

デートと書いてただでは終わらないと読む ①

黒柳妻夫のマル秘恋愛テクニク講座

「……おいユリ。なんだ？これ」

「えーつと、この台本によれば私たち夫婦が恋愛の秘訣を教えるコーナー……だつて」

「何故お前が中心かは置いといてなんだあのタイトル。嘘ばつかじゃないか」

「まあ『の』だけあつてるからいいじゃないですか」

「……そうだな。一文字合つてただけ成長だな（諦め）」

「では、ハガキの紹介に移ります」

「待て。ハガキが来てるのかよ」

「はいです。えーつと、『突然ですが、仲良し夫婦のお二人に相談です』……？私たちは

仲良しではありませんが夫婦じゃないですよ？」

「幼馴染みだな……つて今更かよ。遅いからな？」

「『私には婚約者がいるのですが、その人が周りの女の人の誘惑に負けて浮気をしないか心配です。どうしたら良いでしょうか？』」

「難しい話だな」（↑平然と浮気をしているクス）

「ですね」（↑彼女が居る居ない関係なしにベタつくバカ）

「オレたちにこの質問答えようがなくなえかねか？」

「ですよ。タカが浮気するのはもう慣れてます」

「よくお前が浮気相手と勘違いされるんだがな」

「うーん。でもどうしましょう。これに答えないと」

「答えないと？ 罰ゲームでもあるのか？」

「答えないとこの質問が坂本さんと霧島さんに行きますよ」

「……………」（↑それってやばくね？ っと思ってる）

「うーん。それに私たちの信用問題です。沽券に関わります」

「よしよし。沽券って言葉を覚えたんだな」

「わあーい」

「さてさて、どうしたものか……………」

「ピンポン！ あれですよタカ！ 逆転の発想です！」

「逆転の発想？」

「浮気を心配するからいけないんです。婚約者の浮気も寛容に受け止められる広い心を持ってばいいんです。ほら、私のように」

「珍しくいいこと言ったな」

「だからハガキをくれた『バカなお兄ちゃん大好き（十一歳）ちゃん！ 一ついいことを教えてあげます」

「待て待て。差出人が小学生だと？」

「この世には一夫多妻制という言葉があるのです」

「……………世も末か」

「ではまた次回お会いしましょう！ バイバーイ」

「……………え？ 次回があるのか？」

「コーナー名は変わるかもしれないですが」

☆☆☆

とある休日の朝。

カーテンの隙間から差し込む光と雀のさえずりが聞こえ目を覚ます。

「……………ああ」

目が覚めると床に転がっていた。ベッドの上ではユリが締まりのない顔で寝ている。

いつも通りの光景なので大して驚くことなく、オレはカーテンを開け、この部屋に目
いっばいの太陽光を入れる。

「ヤッ……………」

オレは先に降りて朝食の準備をする。別に料理をすることは苦ではない。苦だった
らこんな生活を送っていない。

朝は無難に行こうと思う。卵のいい感じに焼ける音とテレビから聞こえるニュース
をBGMに手際良く準備を進める。

「よしよし」

我ながらよい見た目だ。これはうまそうだ。朝食は大事。一日の始まりだからな。

「おきろー」

のんびりと寝ているこいつを起こす。すると……

「おはよー」

「はいはいおはよ。ほら行くぞ」

「はあーい」

目が半分くらいしか開いてない。そのため階段とかは注意しないと多分転げ落ちる。

「ねえータカー」

「なんだ？」

「おはよーの（ピーーーー）は？」

「……………」

こいつは寝ぼけてると本当に何を言いつ出すか分からない。朝っぱらから寝ぼけの美少女にこんなこと言われるなんて……………はあ。

「ねえよ」

「ええー」

「んなのより、今日はデートするんだろ？」

清涼祭翌日の放課後。ユリが『この日は空けていてくださいね。デートしましょ』と

言つて、その宣言の日が今日である。ちなみに、どこに行くかとかは知らない。

「おおーそうでした」

「だろ？だから……」

「お家デートつてやつですねぇ」

「……………」

待てやコラ。それは毎日やってるようなもんだろ。

「お前。昨日なんか調べてただろ」

「ほへえ？」

ダメだ。話にならねえ。目が覚めるまで待つか。

「あ、おはようです。タカ」

「おう。ようやくお目覚めか」

朝食が終わって食器を片付けて洗い物をしている最中に目が覚めるユリ。

「今日何の日か覚えてます?」

「デートだろ」

毎日のように言われりやいやでも覚えてる。

「そうなのです!」

「で?どこ行くんだ?」

「えーつとですね。これです」

そう言って見せてくるのは……。

「如月ハイランドのプレオープンチケット?よく手に入ったな」

あれは確か入手困難な代物なはずだ。

「えっへん。なんか学園長がくれました」

………大方、清涼祭の償いのつもりだろう。確かにオレは不良にゴコられ気絶するという実害を唯一受け（代わりにぶちのめしたが）黒幕である竹原教頭を（裏で）葬ったし、何かしらの謝礼はあつてしかるべきだ。

まあ、プレミアムの方ではないから、無理やり結婚とかはないだろう。そんなんはやりたくないからな。無理やりとか強制とか大嫌いだ。

「さあ、行きましょう！」

「バスとか電車は調べたのか？」

「ふふっ。私を誰だと思ってるんですか？」

お前だから心配なんだよ。

「しっかりとこの頭の中に『いんぷつと』されていますよ」

ダメだ。恐ろしいまでに信用ならねえ。

「へいへい。てか、さっさと着替えに行つてこい」

「はい」

と、家を出て隣の家に入っていくユリ。

「さてと……」

仕方ない。やるか。



ふふん。今日はタカとデートです！普段のお買い物という名のお出かけやお家デートっぽいのは違いちよつと遠出します。楽しみあまりここ最近は夜しか眠れませんでした。

「えへへ〜」

ついつい頬が緩んで締まりがなくなつてしまいます。いけないいけない。このままだと遊園地に行くはしやく子どもと思われまふ。高校生っぽいオトナのデートつてやつにするためにもちよつとお上品さを出してみましよう。

「行きますわよ。タカ」

「……………ぷぷっ」

私のお上品さ。一言目にして笑われました。

「たく。オトナっぽさ出さなくていいつての。本来のお前の方がいい」

「え？本来の私を一番愛してゐるつて？」

「……………」

タカが頭を抱えています。ですが、知りません。

「もう、そんなに言うならいつも通り行きますね」

「ああ…………」

何故か少し疲れが見え始めます。なんでしようね？タカも楽しみで眠れなかつたん

でしようか？

ちなみに、今日はなんとタカが腕を差し出して腕組みしてくれているのです！手を繋ぐだけで飽き足らずまさかそんなに……きつと、私と離れたくないんですね！もちろん私も離れたくありません！

「お前が迷子になると困るだけだ」

と口ではなんか言ってますがきつと照れ隠しです！そうです！あのタカがデレてるんです！

もう、素直に『お前とくつつきたいから』とか言ってくれたらいいのに。言わなくても分かってますよ？心が通ってますからね。

「で、どこの駅で降りるつもりだ？」

近くの駅に着きました。ふふん。下調べは完璧なのです。

「この駅で降りますね」

電車の路線図を指さして答えます。

「うん。不正解」

え？あれ？おかしいなあ……？

「はあ。こういうのはオレに任せとけ。ほら切符買って行くぞ」

「わわ、待ってください」

タカはさっそうと券売機のところを操作して大人二人分の切符を買います。そして、片方の切符を私に差し出します。

「……………むう」

「どうした？こどもの方を買えばよかったか？」

「違います！お金なら私も持ってきてるんですよ？」

「気にすんな。ドーせ、最近貯まってるだけで使つてないからな」

嘘です。使つてないなんてそんなのあるわけないじゃないですか。使う分以上に稼いでるだけでしょ。

そういうえば、たまると言えば……

「タカのこつちはすぐに溜まってよく使うのに……」

「待てやコラ。どこさして言つてんだ。後、こんなとこで堂々とそんなこと言うのはやめろ」

「あう……」

軽いチョップが肩に入ります。なんか、頭にやつてこれ以上バカになられたら困るから肩にやつてるそうです。大丈夫です。これ以上バカになつてもタカがなんとかしてくれます。というかそもそも、バカじゃありません。ほんのちよつと勉強に向いてないだけなんです。

電車の中でも私はタカから離れません。いやあ、電車って揺れるじゃないですか。ね？だからタカにしがみついていれば大丈夫なのです。つり革？もちろん届きますけどそれよりこっちの方がいいです。

「……ツチ。リア充が……爆ぜろよ」

『あんな銀髪の美少女で……ツチ。羨ましい』

『いいなあ……あんな格好いい彼氏が欲しいなあ……』

『けつ。こんなところで見せつけて何様のつもりだ』

なんかいろいろ聞こえてきますが、

「もしかして私たちって注目の的ってやつですか？」

「ああ。思い切りな」

（カラコンつけてなかったら今の比じゃないだろうな……）

ふむふむ。不思議です。電車にいるはずなのに教室フクラスに居る感じを彷彿させます。何故でしょう？なんというか……私たちに嫉妬とかそんな感じのが向いてる気がします。

「ふふん（どやあ）」

「……何でお前はどや顔なんだよ……」

「きつと私たちがお似合いのカップルに見えるんですね（どやあ）」

「あーそーだな」

ふん♪そんな評価をしてもらえるなんてもつつきたくなくなっちゃいます。
『『ツチ……!』』

その後、なんか嫉妬の炎が大きくなった気がします。が気にしません。

デートと書いてただでは終わらないと読む ②

「ここが如月ハイランド……！」

キラキラした目で目の前のアミューズメントパークを見るユリ。

電車とバスを乗り継いで二時間ほど。いつもより遠出にはなったもののこいつが喜んでるしいつか。………まあ、電車とバスの中ではこいつが凄いくっついてきて注目の的……というよりはあれだ。断頭台に居る死刑囚の気分だった。流石純粋な銀髪美少女。お前は注目を無意識に集める天才だよ。

「ねえね！早く行こうよ！」

グイグイつと腕を引つ張ってくるユリ。テンション高いなあ……。ま、いつか。

「でも、思ったよりすいてますね。もつと混んでると思いましたが」

ここでユリのちよつと常識はずれな発言が見て取れる。

「いいか？今回はオープンではなくあくまでプレオープン。限定的であり、プレオープンでは事前にチケットを手に入れないと入れない」

「ほうほう」

「で、プレオープンのチケットには当然限りがあるんだよ。知ってるか？このチケット

は、価値があるんだよ。もし、オークションなり出された日には結構な値段になるだろうな」

まあ、こういうチケットをオークションとかに出して儲けるつてのはタブーだろうが。

「話を戻すがプレオープンチケットに限りがある。つまり、ここに設定された期間に来られる人数は限られており、今日一日だけでないから客はある程度ばらせる。だからかなりすすいてるはずだ。アトラクションとかも何時間待ちつてのはなく、最大でも十分くらいだろうな」

ここに來ている客が一齐に同じアトラクションに行かなければだが、そんな仮定は意味がないだろう。

「タカつてやつぱり頭いいんですね……私に半分分けてほしいです」

「やらねえよ。勉強しろ」

「はい」

たく……うん？あれつて……

「あ、坂本さんと霧島さんですね」

「だな」

ん？そう言えば……ああ。まあいいか。あのことはどうせすぐ気付くだろうし。

似非外国人の受付を通った俺と翔子。クソ。明久やムツツリーニがこっちのスタツ

フで紛れ込んでいたって事は……

「最重要警戒人物は……アイツだな」

「……？」

芋づる式に姫路と秀吉、島田辺りもこの場にいると考えて大丈夫だ。だが、正直言つてあいつらはそこまで脅威ではない。問題は崇彰。アイツが参加していた場合は厄介だ。

先の清涼祭の大会であの男は本気を出せば全科目ムツツリーニの保健体育に近い点数を取れることが判明している。アイツは頭がいい。頭がいいだけなら姫路も該当するがアイツに関しては騙し討ち駆け引きなんかも得意中の得意。つまり、最大にして最悪の敵だ。

「うーっす。雄二、霧島」

「坂本さん。霧島さん。おはようございます」

「……おはよう。神白、黒柳」

……最大の敵が平然と目の前に現れた件について。

ヤバい。これは予想外……さてはこいつら、オレたちを仕掛けのあるアトラクションへと案内するつもりだな。

「奇遇ですね。二人もデートですか？」

「……うん」

一見するとこの二人は仕掛け人には見えない。ただの訪れたカッ^一ブル^客のようだ。だが、崇彰。お前は抜かったな。

「お前らもデートか？」

「はいです！」

崇彰。お前のボロを出せなくとも、黒柳に駆け引きで負けるとは思えん。

「チケツトはどうしたんだ？」

「学園長がくれたんです。お詫びだって言って……ほら！」

そこには普通のペアチケツト。俺らみたいなおかしなオプシヨンはついてない。流石は崇彰。筋が通っていて、しっかり証拠も提示してきたか。なるほど。黒柳にも最低限の仕込みはしているようだな。

「面白いやお前ら。明久たちが来ているのは知ってるか？」

「へ？吉井さん？……どうでしょうタカ！このままではマズいです！」

……ビンゴ。明久たちの存在がばれて黒柳が慌てるぞ。

「はあ？何がマズいんだよ」

ふつ、崇彰。お前のその完璧とも言えるポーカーフェイスはいつまで持つ？

「だって！吉井さんが葉月ちゃんとここにオトナのデートをしに来たんですよ！」

「……………はあ?」

俺と崇彰の声が重なる。

「ほ、ほら! 吉井さんが葉月ちゃんを誘おうとしてるって言ってたじゃないですか! どうどどうしましょう! 吉井さんがロリコンであることが……………」

「……………」

慌てる黒柳と固まる俺と崇彰。ヤバい。この返しは俺の想像の遙か斜め上を行った

……………

『ねえね、お姉さん。その話。フィーにも教えてくれませんか?』

すると、気付けば近くにキツネの着ぐるみ……………大きなリボンをつけ、中から人間の女性の声ができることからメスなんだろう。というか、この声はどう考えてもクラスメートの優等生にしか思えない。

やれやれ確認を——

「お前。姫路だろ。バイトか?」

——する前にドストレートに崇彰が言つてのけた。

『うえ?! どうして神白君と由梨乃ちゃんがここに……………じゃ、じゃなくて! ち、違います! 私——じゃなくてフィーは姫路なんて人じゃないよ? 見ての通りキツネの女の子だよ!』

こんな状況でも必死に取り繕おうとする姫路は真面目だと思う。

というか、さつきから何かがおかしい。黒柳の反応（あれは多分誤解が解けてない）はともかく、崇彰のするはずのない質問（アイツがあっち側なら、今の発言はありえない）に姫路の崇彰と黒柳がいたことに対する純粹な驚き。

これは、この二人はシロ濃厚だな。ただまあ、確認はしておくか。

「おい崇彰。お前明久から今日の事聞いてないか？」

「ん？ああ、何か『雄二&霧島さん結婚大作戦』を開催するから協力してほしいって言われたな。まあ、ユリとデートするから断ったけど」

あの野郎。ぶち殺す。

「もうタカに坂本さん！ダメじゃないですか！」

「なにが？」

「……フィーちゃんはキツネの女の子。いじめたら可哀想」

「フィーちゃんはフィーちゃんです！中に人が居るだなんてあり得ないですよ！」

……翔子の方はともかく、黒柳の発言には固まった。

「なあ、崇彰。まさか黒柳って……」

「言うな。夢が壊されてない純粹な子供だ。だから何も言うな」

崇彰が遠い目をする。……そうかあ。高校二年生になって、未だに夢を抱き続け

ているのかあ……。きつと、こいつは未だに『サンタが実在する』と思い込みこういう『フィーとか某有名な夢の国のネズミが実在する』と信じてるんだなあ……。泣けてきた。こいつはこいつで成長の方向を間違えてるんだらう。

「なあ崇彰」

「なんだよ」

「一発ぶん殴っていいか？」

「こんな夢の世界に住んでる純粋な少女が（ピーー）とか（ピーー）を崇彰と平然とヤツっているのはきつと、こいつの悪影響なんだらう。羨ましいとは言わん。とりあえず一発殴らせろ。」

「ねえね。フィーちゃんフィーちゃん」

『なんですか？お姉さん』

「おすすめのアトラクション教えて」

ナイス黒柳。俺の聞きたいことを怪しまれずによく聞いてくれた。崇彰を殴るのをやめるくらいいの働きた。

『フィーのおすすめはね。あそこに見えるお化け屋敷だよっ』

噴水の向こうに見える建物。確か廃病院を改造したってやつか。

「うっ……。私……。怖いのは苦手です……」

『だ、大丈夫ですよ。きつと楽しめるはずですよ』

「よし翔子。俺たちはお化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

フィーの相手は黒柳に任せて俺と翔子は歩き出そうとする。

『ままた待つて下さいっ! どうしておすすぬ以外のところに行くんですか?』

「どーせ、雄二と霧島を嵌めるための工作をしてるんだろ? バレバレだてっの」

何故だろう。これほど味方になって頼もしい奴は居ないと思う。お前は俺の救世主か?』

『そ、そんなことないですよっ!』

「諦めろ。もうばれた以上、雄二は自ら行こうとはしねえよ」

ちよつと言ひ回しは気になるが、何なんだお前は。最高の味方かよ。すまん。さつきは殴ろうとして。

『そこまでだ雄二と……崇彰!? ええっ!? 何で君がここに居るの!?!』

「その頭の悪そうな仕草……明久かっ!」

颯爽と登場して崇彰に疑問をぶつけたのは、雄ギツネの着ぐるみだった。

『失礼なっ! 僕——じゃなくてノインのどこが頭悪いつて言うんだ!』

「ふえええええん!」

するとすぐそばで誰かがガチ泣きする声が聞こえた。

「タカああああああ！あのキツネ頭部が前後逆で怖いですう……うえええええん！」
「『……………』」

崇彰にしがみついて泣きじやくる黒柳を見て固まる男性陣。おい。早く誰か現実を見せてやれよ。というか、どうしたらここまで純粹に育つんだよ。確かにあれを実在する生物だと思いい込んで子供からしたら恐怖以外の何でもないけどさ。

そんな中、翔子が黒柳の頭をなでながら慰める。

「……大丈夫。黒柳。ノイちゃんはどうですかから」

正直、その慰め方はどうかと思う。

『あ、明久君っ。頭が逆です！そのせいで由梨乃ちゃんと小さな子たちが明久君を見て泣き出しちゃってます！』

泣き出しているうちの一人が高校二年生という衝撃の事実。しかもクラスメートである。どうしようか。こいつらと赤の他人でいたい。何の関わりもない、学校が一緒なんてあり得ない純粹な赤の他人でいたい。

『うわっ、しまった！どうりで前が見えないと思った！』

『早く直さないと坂本君たちにバレちゃいます！』

そして、未だにごまかせると思っっているこの二人はつくづくお似合いのカップルだと思っ。

ちよつとすつきりしたがこの時俺は誓った。

黒柳を泣かせないようにしよう。

泣かせようものならあの男がブチギレる。あれは容赦とか一切感じない。着ぐるみのおかげでダメージは軽減されてるだろうが生身で受けたら……死ぬだろうな。なるほど。これが黒柳を傷つけたものの末路か。いや、まだ肉体的ダメージで済んでいる分マシか。……マシ……なのか？

デートと書いてただでは終わらないと読む ③

あの後、ノイン（明久）を半殺しにし、泣き止んだユリを連れて、メリーゴーランドやコーヒーカップに乗った。

そして昼食の時、オレたちはレストランにやって来た。（死にかけた）明久と姫路が言うにはここでイベントを行うからついでに食事をして行つてほしいと。一言言うなら逆だ。食事のついでにイベントだからな？

「ほへえ……なんかクイズ会場みたいですね」

丸テーブルがそこら中にあり、前方にはステージとテーブルが。

「いらつしやいませ」

「二名……秀吉？」

「二名様ですね。こちらの席へどうぞ」

何故か秀吉がボーイをやっていたがスルーしておこう。

とりあえず、姫路が言うにはメニューは決まってるそうなので注文の必要はなし。皆同じものが提供されるとのこと。で、お題は先払いだそうなのですでに払っておいた。豪華なメニューで期待していきくださいと言われたが……

「オードブルでございませす」

なるほど。コース料理か。普段ではお目にかかれない料理ばかりだな。

目の前にはナイフとフォークが並んでいるが特に動じてはいない。というわけで食べ始める。

「……………どうしましょう」

「なにがだ？」

しかし、ユリが固まって動かない。

「きれいな盛り付けで食べるのがもったいないとかそんな感じか？」

「……………どうやって食べればいいか分かりません……………」

「たく。コース料理の食器の使い方くらい……………あ、そこまで常識でもないか」

金持ちは知らんが普通の高校生なら知らなくても不思議ではないか。

「じゃあ、一つ一つ教えてやる」

ということで、オレは食事と並行してユリに食べ方を指導するのだった。

そんな感じでデザートも食べ終えた頃、それは唐突にやってきた。

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオーブイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます！》

会場に大きく響くアナウンス。

《なんと、本日ですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらっしやっっているのです！》

なるほど。これがイベントか。

《そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを企画させて頂きました！題して、『如月ハイランドウェディング体験』プレゼントクイズ〜！》

入り口を閉鎖する重々しい音が聞こえる。なるほどな。これで雄二の退路を断つた。おそらく明久が主導だな。

《本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事五問正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを体験して頂けると言う物です！もちろん、ご本人様の希望によってはそのまま入籍ということでも問題ありませんが》

最後のは大問題だろ。

《それでは、坂本雄二さん&翔子さん！前方のステージへとお進み下さい！》

司会が二人の席を示すと、レストランにいるオレたちを含めた観客が一斉に雄二たちへと目を向ける。あーあ。逃げ道が本当になくなったな。

「……ウエディング体験……頑張る……！」

「落ち着け翔子。そう言った物はだな、きちんと双方の合意の下に痛だだだっ！耳が千切れるっ！行く！行くから放してくれっ！」

霧島に耳を引つ張られながら壇上へと渋々と上がる雄二。

スタツフ誘導のもと、解答者席へと着席した。

《それでは「如月ハイランドウエディング体験」プレゼントクイズを始めます！》

解答方式は、雄二と霧島の上に大きなボタンとマイクが一つずつセットされている。

おそらく、それを押して口頭で解答するんだろうな。

さてさて、どんな問題を用意しているのやら。

《では、第一問!》

ボタンに手を伸ばす用意をし、間違える気満々な雄二の姿。なるほど。クイズに間違え続ければ体験をやらなくてすむというわけか。

《坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうかつ?》

「……どうしましょう。問題の意味が分かりません」

「安心しろ。オレも一切分からん」

——ピンポーン!

オレたちが頭の中にクエッションマークを浮かべていると霧島が押した。流石は学
年主席。オレとは格がちが……

《はいっ! 答えをどうぞぞつ!》

「……毎日が記念日」

……オレにはこの解答も意味が分からない。

「やめてくれ翔子! 恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ!」

《お見事！正解です！》

雄二は正解と言った司会を睨む。しかし、驚く表情を見せたことから……ああ、出来レースか。

《第二問！お二人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうか？》

それはクイズじゃない。質問である。

——ピンポン！

今度は雄二が素早くボタンを押し、マイクに口を寄せる。

《はいっ！坂本さん！答えをどうぞっ！》

「鯖の味噌煮！」

それは場所じゃない。料理である。

アイツ……間違えるために必死だなあ……。

《正解です！》

「なにいつ!？」

驚く雄二。オレも驚いているが。

《お二人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【鯖の味噌煮】で行わ

れる予定です!」

「ねえ、タカ。そんな別名初耳ですよ」

「安心しろ。あの司会者も初耳だ」

「こじつけもここまで来ると清々しいな。」

「待ていつ!絶対その別名はこの場で命名しただろ!強引にも程があるぞ!」

《第三問!お二人の出会いはどこでしようかつ?》

雄二の言葉は盛大に無視されて第三問に入る。今回はさつきみたいなのが答えだと流石に不正解になる。そのため、雄二が素早くボタンを押そうとする。だが……。

「……させない」

ブスツ

「ふおおおおつ!?!目が、目があつ!」

霧島が雄二に目潰しをした。雄二、合掌。

——ピンポーン!

《はい、翔子さん！解答をどうぞ！》

「……小学校」

《正解です！お二人は小学校の頃からの長い付き合いで今日の結婚にまで至るといふ、なんとも仲睦まじい幼馴染なのです！》

すげえ。今の雄二の姿を見て仲睦まじいと言える司会者がすげえ。

「むう。仲の良さでは負けてませんよ」

「そうだな」

多分勝負にならないだろう。

《では、第四問参ります！》

——ピンポン！

司会者が問題文を読み上げてようとしている最中に雄二がボタンを押した。もうむちやくちやだ。雄二の奴、とうとう問題を無視したな。

「——わかり」

《正解です！それでは最終問題です！》

で、司会者は雄二の回答を無視して正解にする。どっちもどっちである。

『ちよつとおかしくなくない？アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーセーだけがトクベツ扱いなワケ？』

いきなり不愉快な口調で言う女性の声が聞こえた。何故だろう。凄いむかつく声だ。

『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか——』

『ああっ!?ゴタゴタとうるせーんだよ!オレたちやオキヤクサマだぞコルア!』

オレたちもお客様だからな?うるせえよゴミ。

『アタシらもウエディング体験つてヤツ、やってみたいんだけど?』

『で、ですが——』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルア!オレたちもクイズに参加してやるつて言つて

んだボケがつ!』

『うんうんっ!じゃあ、こうしよーよ!アタシらがあの二人に問題出すから、答えられた

らあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちつてコトで!』

『そ、そんな——』

慌てるスタッフを無視し、ぱつと見チンピラとクソギヤルのカップルがズカズカと壇上上がり、設置してあるマイクの一つをひったくった。

なるほど。答えがある以上、ここで雄二はワザと外すつもりなんだろうな。オレたちにとっては不愉快極まりないが雄二にとっては救いの神なのだろう。

『じゃあ、問題だ』

雄二のことだ。どんな簡単な問題でも間違えるつもりだろう。さあて、どんな問題を

出す？

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！』

「……………」

「……………」

言葉を、失った。

『オラ、答えろよ。わかんねえのか？』

「ねえタカ。ヨーロッパなんて国ありましたっけ？」

「よしよし。その疑問を抱けたお前は正常だ」

「わぁーい」

ヨーロッパというのは国でなくあくまで州の名前。しかも正式にはヨーロッパ州であり『ヨーロッパ』という国は存在していない。存在していない国の首都はやはり存在していないのだ。

あのチンピラ。一体何を正解としているのか。むちやくちや気になる。

《……坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます。【如月ハイランドウェディング体験】をプレゼントいたします》

『おい待てよ！こいつら答えられなかっただろ!?オレたちの勝ちじゃねえかコルア!』

『マジありえない!?この司会バカなんじゃないの!?』

文字通りバカなカップルがぎやあぎやあ騒ぐ中ステージの幕が下りる。

まさか、明久やユリを超越するバカがいるなんて……。

「世界って広いなあ……」

「どうしたのですか？ 遠い目をして」

何でもない。世界の広さを改めて認識しただけだ。所詮は井の中の蛙大海を知らず

……か。